

長野遺跡群

元 善 町 遺 跡

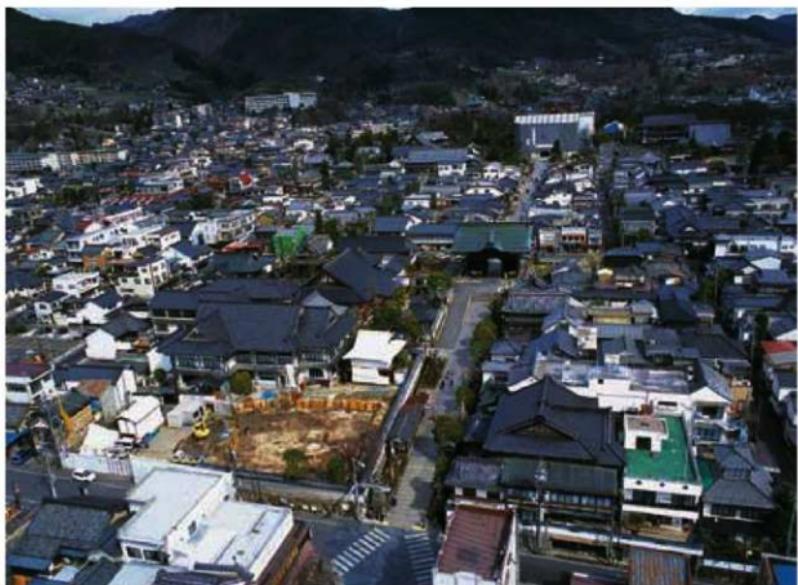
—善光寺大本願明照殿建設地点—
—善光寺仁王門東地點—

善光寺門前町跡(2)

—八幡屋磯五郎大門町店建設地点—

2008年3月

長野市教育委員会



元善町遺跡（大本願明照殿地点）調査区遠景



大本願明照殿地点 第1次遺構検出面 全景（北東より）



大本願明照殿地点 第2次遺構検出面 全景（北東より）



大本願明照殿地点 第3次遺構検出面 全景（北東より）



大本願明照殿地点 土層断面



大本願明照殿地点 瓦集中区（西より）



大本願明照殿地点 単弁六弁蓮華文軒丸瓦



仁王門東地点 調査区全景（南より）



出土軒丸瓦



出土軒丸・軒平瓦



不明土製品（婆像？）



写真 漆噴壁片

序

古来より信仰を集めてきた善光寺は、日本を代表する寺院であり、国宝の本堂や重要文化財の三門、経蔵など境内には貴重な歴史的建造物が多数残されています。古代において一地方寺院に過ぎなかった善光寺が、中世以降の淨土信仰や女人救済思想、鎌倉幕府の保護など様々な影響によって、広く知れ渡るようになり、室町時代には高野山と並んで東西を代表する一大靈地として発展したといわれています。現在、善光寺には年間600万人を超える参詣者が訪れており、日本全国はもとより海外からも多数の方が来訪されています。

本書で報告する元善町遺跡は、宝永4年に現在地に善光寺本堂が移築される以前、本堂（如来堂）が存在したとされる元善町の地下に埋蔵される遺跡であり、現在の善光寺境内域における初めての発掘調査となりました。調査は善光寺大本願明照殿の改築および住宅建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査でしたが、多量の古代瓦の出土や中世遺構などが確認できましたこともあり、連日の報道によって長野市内はもとより全国からも注目を集めました。調査成果は、古代瓦葺建物の存在や中世の大規模造成などを示しており、古代・中世の善光寺解明のための貴重な手掛かりになるものと期待されます。また、八幡屋礪五郎大門町店の店舗建設に伴う善光寺門前町跡の調査では、中世末の溝跡を確認しました。こちらも、戦国期の動乱に巻き込まれた善光寺門前町の様子が伺える貴重な資料となります。

ここに長野市の埋蔵文化財第121集として刊行いたします本書には、このたびの発掘調査によって得られた成果を詳しく掲載しております。その成果は連綿と織られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力、ならびに発掘調査に際して多大なご尽力を賜りました善光寺大本願、株式会社八幡屋礪五郎、山ノ井大樹氏および関係各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

長野市教育委員会
教育長 立岩睦秀

例　　言

1. 本書は、平成18・19年度に長野市大字長野字元善町・大門町内で実施された開発事業に伴って、長野遺跡群の各遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査報告書を、長野市の埋蔵文化財第121集として合冊したものである。

2. 本書で報告する元善町遺跡と善光寺門前町跡は、密接に関連する遺跡であるため、遺跡の地理的環境等の記載は統一して記載する。

3. 各遺跡の発掘調査は、各事業主体者と長野市による埋蔵文化財発掘調査委託契約に基づいて、長野市教育委員会（文化財課埋蔵文化財センター担当）が実施した。事業主体および起因事業は次のとおりである。

〔遺跡名（地点）〕	〔事業主体者〕	〔起因事業〕
元善町遺跡（善光寺大本願明照殿地点）	： 善光寺大本願	「明照殿改築工事」
元善町遺跡（仁王門東地点）	： 山ノ井大樹	「住宅建設工事」
善光寺門前町跡（八幡屋礪五郎大門町店地点）	： 株式会社八幡屋礪五郎	「店舗建設工事」

4. 各遺跡の調査地・発掘調査面積は次のとおりである。

〔遺跡名（地点）〕	〔調査地〕	〔調査面積〕
元善町遺跡（善光寺大本願明照殿地点）	： 長野市大字長野字元善町500	500m ²
元善町遺跡（仁王門東地点）	： 長野市大字長野字元善町468-1	60m ²
善光寺門前町跡（八幡屋礪五郎大門町店地点）	： 長野市大字長野字大門町82-3	30m ²

5. 本書の発掘調査平面図に示した座標は、平面直角座標系の第Ⅷ系座標値（日本測地系2000）であり、標高は日本水準原点に基づく。

6. 調査では、略記号としてSB（住居跡）、SD（溝跡）、SE（井戸跡）、SK（土坑）、SN（石組・敷石）、SP（小穴）、SR（遺物集中区）、SX（不明遺構）を用いた。

7. 本書の編集・執筆は長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターの宿野隆史、柴田洋孝が担当した。また出土金属製品の整理業務は山野井智子が、出土遺物の写真撮影は佐々木麻由子が担当した。

8. 出土陶器・土器のうち、大本願明照殿地点については株式会社アルカの西本正憲が観察表の作成等整理業務を実施している。

9. 調査によって得られた図面・遺物等の諸資料は、長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにて保管している。なお出土遺物には遺跡の注記記号として、元善町遺跡（善光寺大本願明照殿地点）は「NGMD」、元善町遺跡（仁王門東地点）は「NGMY」、善光寺門前町跡（八幡屋礪五郎大門町店地点）は「NGYI」と表記している。

目 次

序

例 言

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査日誌（抄）	3
第3節 調査体制	5
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 遺跡周辺の考古学的環境	7
第3節 歴史的環境	8
第Ⅲ章 調査成果	11
第1節 大本願明照殿地点の調査概要	11
第2節 仁王門東地点の調査概要	82
第3節 八幡屋礒五郎大門町店地点の調査概要	106
第Ⅳ章 自然科学分析（パリノ・サーヴェイ）	118
第Ⅴ章 結 語	122
附章 参考文献	127

挿 図 目 次

第1図	調査位置図	2
第2図	調査地周辺地形と遺跡	6
第3図	調査位置図	7
第4図	調査区南西隅部 断面模式図	11
第5図	大本願明照殿地点 調査区概念図	12
第6図	第1次遭構検出面 調査平面図	14
第7図	1次検出面遭構出土遺物	17
第8図	第1次面出土遺物	19
第9図	第2次遭構検出面 調査平面図	21
第10図	第2次面遭構出土遺物 (SD04・SD05・SD06・SE01・SK01)	25
第11図	第2次面遭構出土遺物 (SK02・SK03・SK04・SK07)	27
第12図	第2次面遭構出土遺物 (SK15・SK19・SK22・SK23・SK25)	29
第13図	第2次面遭構出土遺物 (SK25・SK28・SK29・SK31・SK33)	31
第14図	第2次面遭構出土遺物 (SK33・SK34・SK35・SK40・SK46)	33
第15図	第2次面遭構出土遺物(SK46)	35
第16図	第2次面遭構外 出土遺物	37
第17図	第3次面遭構検出面 調査平面図	39
第18図	第3次面遭構出土遺物 (SB02・SD02・SD03・SD07)	43
第19図	第3次面遭構出土遺物(SK38・SK41 ・SK44・SK45・SK47・SK49・SK51・SK55)	45
第20図	第3次面遭構外 出土遺物	47
第21図	第4次面遭構検出面 調査図	49
第22図	第4次面出土遺物(SKG0・SK61・SX01 ・瓦包含層・瓦集中区・遭構外)	53
第23図	大本願明照殿地点出土古代瓦 (軒丸瓦・道具瓦・文字瓦・丸瓦)	58
第24図	大本願明照殿地点出土古代瓦(丸瓦)	59
第25図	大本願明照殿地点出土古代瓦(丸瓦)	60
第26図	大本願明照殿地点出土古代瓦 (丸瓦・平瓦)	61
第27図	大本願明照殿地点出土古代瓦(平瓦)	62
第28図	大本願明照殿地点出土古代瓦(平瓦)	63
第29図	大本願明照殿地点出土古代瓦(平瓦)	64
第30図	大本願明照殿地点出土古代瓦(平瓦)	65
第31図	大本願明照殿地点出土古代瓦(平瓦)	66
第32図	大本願明照殿地点出土金属製品	71
第33図	大本願明照殿地点出土金属製品	72
第34図	大本願明照殿地点出土銭貨	75
第35図	大本願明照殿地点 出土石製品	77
第36図	仁王門東地点 第1次遭構検出面	84
第37図	仁王門東地点 第2次遭構検出面 (SK01・SK02・SK04・SK05・SK07・SK11 ・遭構外)	85
第38図	仁王門東地点 2次検出面盛土 出土遺物(SP01・SP04・SP05・遭構外 ・盛土2・盛土3・盛土4)	91
第39図	仁王門東地点出土古代瓦 (軒丸瓦・軒平瓦)	95
第40図	仁王門東地点出土古代瓦 (文字瓦・丸瓦)	96
第41図	仁王門東地点出土古代瓦(丸瓦)	97
第42図	仁王門東地点出土古代瓦(平瓦)	98
第43図	仁王門東地点出土古代瓦(平瓦)	99
第44図	仁王門東地点出土古代中世瓦(平瓦)	100
第45図	仁王門東地点 出土金属製品	104
第46図	八幡屋議五郎大門町店地点 遭構全体図	107
第47図	調査区南壁 土層断面図	108
第48図	八幡屋議五郎大門町店地点 遭構出土遺物	111
第49図	八幡屋議五郎大門町店地点 出土遺物	113
第50図	八幡屋議五郎大門町店地点 遭構出土遺物	115
第51図	八幡屋議五郎大門町店地点出土銭貨	116
第52図	湖東式軒丸瓦出土分布図	125
第53図	古代瓦出土遺跡分布図	126

第Ⅰ章 調査の経過

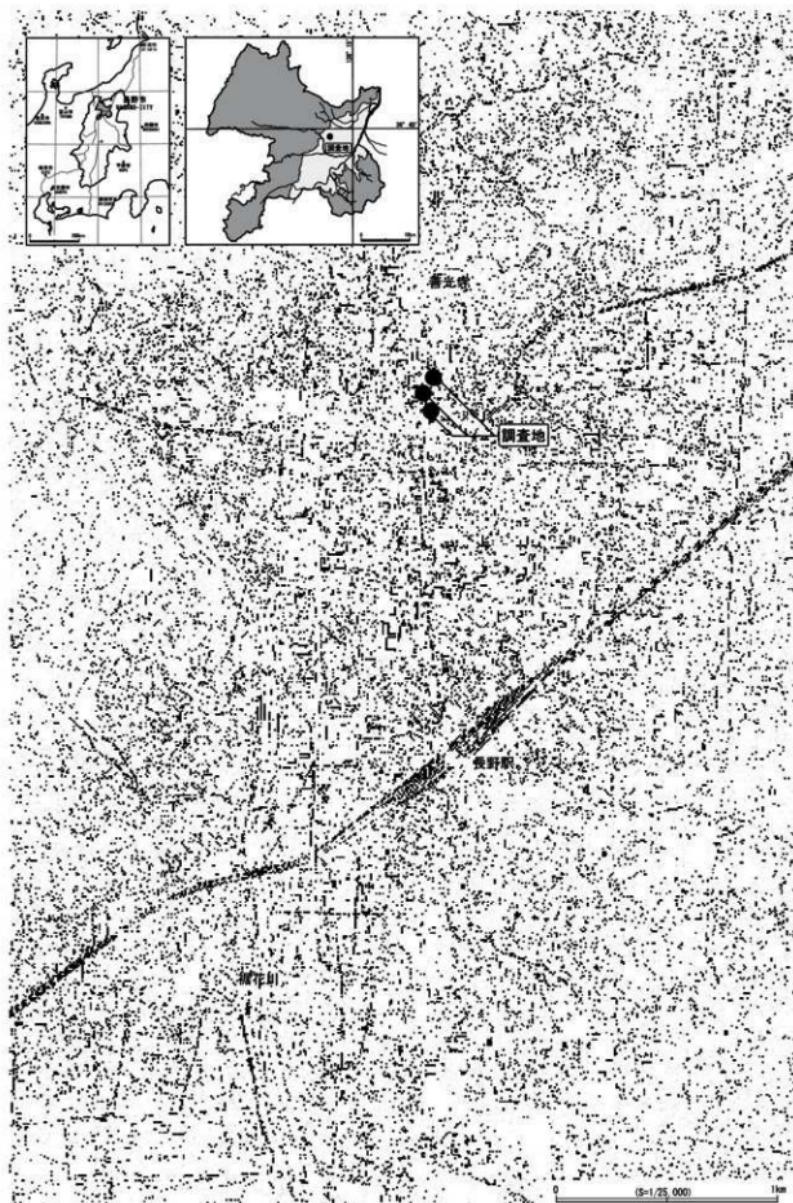
第1節 調査に至る経過

調査地は善光寺境内域の大字長野字元善町および大門町に位置する。周辺は善光寺を中心として宿坊や門前町など歴史的な町並みが広がっている。近年、善光寺・地区住民・市内のまちづくり団体・学識経験者・市民代表などによって構成される「善光寺周辺地域まちづくり協議会」が結成され、平成13年度には善光寺周辺地区街並み環境整備方針が策定された。当該地区内では、この方針における景観形成テーマに従い、具体的な街並み環境整備事業が進められている。また、善光寺と門前町は世界遺産登録を目指しており、重要伝統的建造物群保存地区選定のための調査を継続的に実施している。本調査報告の起因となった開発行為は、このような善光寺周辺のまちづくり推進に伴って実施された改築・新築工事であり、地中に埋蔵する文化財の保護についても協議が進められた。以下、各地点ごとに経過を述べる。

大本願明照殿地点 平成17年12月21日に善光寺大本願より、改築工事にともなう埋蔵文化財包蔵地の照会がなされ、開発行為区域が「長野遺跡群 元善町遺跡」の範囲内であり埋蔵文化財包蔵の可能性が極めて高い旨を回答した。その後、埋蔵文化財保存のための保護協議を重ね、平成19年1月16日に試掘調査を行い、複数面にわたる埋蔵文化財の包蔵を確認する。その結果、平成19年1月18日付で長野市と善光寺大本願との間に「埋蔵文化財発掘調査協定」を締結し、協定に基づく「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を平成18・19年度と年度ごとに契約締結し、発掘調査の実施に至った。調査期間は平成19年2月15日から4月5日までの50日間に渡って実施された。

仁王門東地点 平成19年4月9日に市民からの通報により仁王門東地点にて工事実施中の電話連絡を受け、当センターにて現地確認、事情聴取を行う。現地では既存建物解体工事が完了し、新規建物建設を予定していたため、平成19年4月26日に試掘調査を行い、複数面にわたる遺物包含層を確認する。その後、保護協議を重ねたが、新規建物が地下施設を伴う構造で計画されたことを受け、平成19年8月24日付けで山ノ井大樹氏と長野市との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、発掘調査の実施に至った。調査期間は平成19年9月25日から10月12日までの17日間に渡って実施された。

八幡屋礪五郎大門町店地点 平成19年4月24日に北野建設株式会社より、既存店舗の解体及び新築工事計画について照会がなされ、開発行為区域が「長野遺跡群善光寺門前町跡」の範囲内であり、埋蔵文化財包蔵の可能性が高い旨を回答した。平成19年5月23日に試掘調査を実施し、焼土層とともに多量の中世から近世の遺物を確認する。その後平成19年7月2日付で株式会社八幡屋礪五郎と長野市との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結し、発掘調査の実施に至った。調査期間は平成19年7月4日から7月17日までの14日間に渡って実施された。



第1図 調査地位置図

第2節 調査日誌（抄）

現地における発掘作業は、委託契約締結後に直ちに着手した。作業の経過は次のとおりである。

【大本願明照殿地点】

平成19年2月15日 重機による表土除去開始。

2月20日 作業員による遺構検出作業に着手。

2月22日 第1次遺構検出面の写真撮影。
第2次遺構検出の試掘実施。

2月26日 第1次遺構検出面の測量（委託）。

3月2日 第2次遺構検出面（北半）の完掘
及び写真撮影。

3月8日 第2次遺構検出面（南半）の完掘
及び写真撮影。

3月13日 第2次遺構検出面の測量（委託）。

3月22日 第3次遺構検出面の完掘および写
真撮影。

3月23日 第3次遺構検出面の測量（委託）。

3月31日 第4次遺構検出面の完掘および写
真撮影。

4月1日 瓦集中区の掘り下げを完了。

4月3日 第4遺構検出面の空中写真撮影及
び測量（委託）。

報道機関用の現地説明会開催。

4月4日 土層観察用畦から軒丸瓦出土。

現地における発掘調査作業を完
了。

4月中旬～埋蔵文化財センターにて整理作業
を実施。



表土除去



調査風景



遺構測量



現地説明会

【仁王門東地点】

- 平成19年9月25日 重機による表土除去開始。
9月26日 作業員による遺構検出開始。
9月28日 第1次遺構検出面の写真撮影及び測量。
9月29日 調査区南に石積みを検出。
10月3日 第2次遺構検出面の写真撮影。
巴文軒丸瓦が出土。
10月4日 第2次遺構検出面の測量(委託)。
10月9日 土層確認トレンチを設定・掘削。
10月11日 トレンチ完掘、写真撮影。
現地での作業員作業終了。
10月12日 調査区全体の遺構測量(委託)。
現地における発掘調査作業完了。
10月18日 報道機関に調査情報を提供。
11月上旬～埋蔵文化財センターにて整理作業を実施。



調査風景（仁王門東地点）



遺構測量（仁王門東地点）

【八幡屋穂五郎大門町店地点】

- 平成19年7月4日 重機による表土除去開始。
作業員による遺構検出開始。
7月5日 調査区西側にて石積を検出。
7月6日 第1次遺構検出面の写真撮影。
7月9日 第1次遺構検出面の測量(委託)。
7月12日 関係者対象の調査説明会開催。
7月13日 第2次遺構検出面の写真撮影。
現地での作業員作業終了。
7月16日 第2次遺構検出面の測量。
7月17日 機材撤収。
現地における発掘調査作業完了。
8月上旬～埋蔵文化財センターにて整理作業を実施。



調査風景（八幡屋穂五郎大門町店地点）



調査説明会（八幡屋穂五郎大門町地点）

第3節 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会教育長 立岩睦秀
総括管理者	文化財課長 北村真一郎（H18）・兩宮一雄（H19）
総括責任者	局主幹兼理藏文化財センター所長 矢口忠良（H18）・青木和明（H19）
（庶務担当）	係長 宮沢和雄 職員 吉村久江
（調査担当）	事務員 塚田容子（H18） 係長 青木和明（H18調査員） 主査 風間栄一・小林和子 主事 宿野隆史（調査員・編集） 専門員 遠藤恵実子・長瀬 出 山野井智子（調査員・編集） 石丸敦史（H18）・小出泰弘（H18） 森田利枝（H18調査員）・山岸千晃 小池勝典・柴田洋孝（調査員・編集） 向山純子（H19）・佐々木麻由子（H19）
整理調査員	青木善子・池田寛子・多羅沢美恵子・鳥羽徳子・中殿章子・武藤信子・矢口栄子
整理作業員	倉島敬子・小泉ひろ美・清水さゆり・関崎文子・富田景子・西尾千枝・三好明子・村松正子
陶磁器整理	株式会社アルカ
造構測量	株式会社写真測図研究所
X線撮影	長野県工業技術総合センター

報告調査および整理作業を通じて、下記の方々、関係機関より数多くの貴重なご指導・ご助力を賜った。（敬称略）

調査指導	近畿大学 教授 大脇 潔 信州大学 教授 牛山佳幸 同志社大学 准教授 鋤柄俊夫 愛荘町立歴史館 館長 林定信、学芸員 三井義勝 飯綱町立いいづな歴史ふれあい館 学芸員 小山丈夫 上田市立国分寺資料館 館長 倉澤正幸 長野市地方文化財保護審議会 委員 笹澤浩
調査協力者	長野市教育委員会文化財課 係長 飯島哲也、専門員 清水竜太 長野市立博物館 学芸員 降幡浩樹 同 分館茶臼山自然史館 学芸員 岩山幸司 松代文化施設等管理事務所 学芸員 原田和彦、松下愛

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

調査地は裾花川段丘と湯福川扇状地による複合地形の上に立地する。現在の裾花川は、近世に斬直しされているが、それ以前の流路は旭山北麓の里烏付近を扇頂に南東方向に広がっていたと想定される。元善町遺跡・善光寺門前町跡を含む長野遺跡群はこの裾花川の扇状地を望む河岸段丘上に位置し、また箱清水北西を扇頂とする湯福川の急傾斜扇状地として押し出された台地・丘陵地にあたる。砂・礫の堆積物を地盤とする水はけのよい沖積土壌と、日当たり良好な南下りの緩斜面という条件から、居住に適した環境であったと想定される。これまでの調査によって長野遺跡群内では縄文時代から古墳時代までの複数の竪穴住居跡を確認しており、調査地周辺地が善光寺造営以前からの集落域であったことが判明している。また現在の湯福川は善光寺本堂を迂回する流路となっているが、本堂が現在地に移された宝永4年（1707）までは寛慶寺と大勘進の間を流れていたと記されている。

善光寺造営後の遺構としては、善光寺門前町跡（竹風堂善光寺大門店地點）の発掘調査において、区画の痕跡とみられる中世の溝跡を確認しており、中世以降広範囲に渡って大規模な造成が進められたものと推測される。また、近世・近代になると門前町の繁栄とともに行政機関の建設など急速な市街化が進行したことにより、人為的な造成による地形の改変も進んだものと思われる。現在の善光寺本堂は、宝永4年（1707）に現在地に造営されたものであるが、それ以前の本堂は堂庭と称される仁王門より北側の平坦部（現仲見世）に位置したとされる。この堂庭の平坦部も人為的な造成により築かれた可能性が高く、善光寺の発展とともに善光寺および門前町の地形が大きく変化していったことが想像される。



第2図 調査地周辺地形と遺跡 (S=1/25,000)

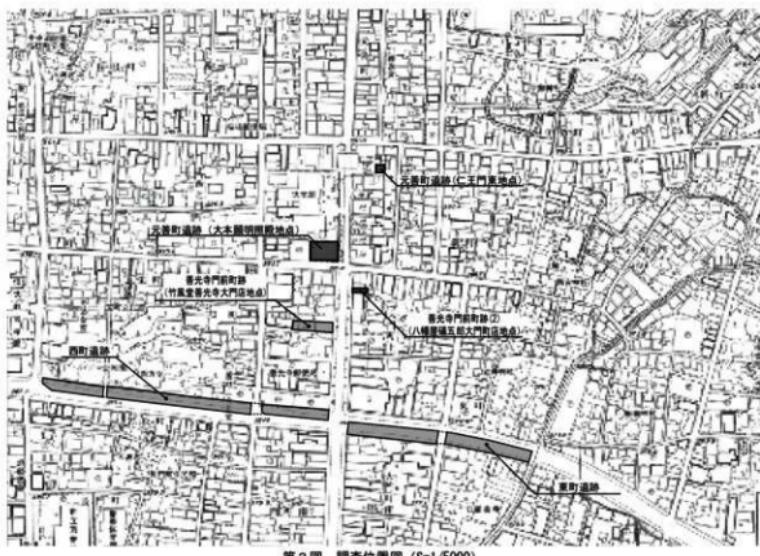
第2節 遺跡周辺の考古学的環境

調査地周辺では、平成7・8年度に国道406号線・市道県庁大門町線の道路拡幅にともなう発掘調査（西町遺跡・東町遺跡）を実施している。また、平成17年度には株式会社竹風堂善光寺大門店建設にともなう善光寺門前町跡の発掘調査を実施している。元善町遺跡および善光寺門前町跡に関する工事立会および試掘調査の件数は平成16年度以降13件に達しており、うち本件を含める4件において発掘調査を実施している（平成20年3月現在）。

西町遺跡 縄文時代から近世までの遺構を確認する。最も古い遺構・遺物は縄文時代中期前半（約5000年前）まで遡る。縄文時代から弥生時代の遺構は後代の改変により遺存状態が悪い。古墳時代後期には比較的大規模な集落が形成されたと思われる。中世の遺構は、善光寺参道（中央通り）に面する大門地区に集中する。13世紀から15世紀後半に相当する出土遺物とともに溝跡や土坑、半地下施設を確認している。

東町遺跡 弥生時代中期から近世に至る遺構を確認する。遺跡が扇状地の端部傾斜地に位置するため、弥生・古墳時代の遺構は、湯福川の氾濫堆積土によって地表下2m以上も埋没していた。堆積土下層の弥生・古墳時代の遺構は36軒の堅穴住居跡など良好な遺存状況で確認できたが、堆積土上層の中世・近世の遺構は土坑・小穴など僅かな遺構を確認するにとどまった。

善光寺門前町跡（竹風堂善光寺大門店地点） 古墳時代から近世の遺構を確認する。調査区中央部に東西に延びる溝跡を検出した。幅2.5mの溝跡は、調査区外まで続いている。覆土からは13世紀後半から14世紀代の製品が出土している。西町遺跡の溝跡とはほぼ同時期に造成されたものとみられ、広範囲にわたる門前町の区画造成が想定される。



第3図 調査位置図 (S=1/5000)

第3節 歴史的環境

(1) 善光寺の歴史概要

善光寺の創建と発展 信濃善光寺の創建について記された当時の確実な史料は確認されていない。そのため、寺の創設時期は境内から出土する古代瓦や本尊である阿弥陀如来像の様式などから推測されている。長野市若槻上野地区で行われた浅川扇状地遺跡群（牛立バイパスB・C・D地点）の発掘調査において、善光寺境内出土といわれる古代瓦と酷似した文様の軒丸瓦が9世紀後半の住居跡から出土したことにより、少なくともは同時期に元善町周辺に瓦葺き建物が存在した可能性が高まった。善光寺の名が文献上に現れる最初の例は、10世紀ごろに成立した仏教説話集『僧妙達蘇生注記』の中に記される「水内郡善光寺」であり、この頃はまだ地方の一寺院と認識されていたと思われる。善光寺の僧職である「善光寺別当」は、『後二条師通記』の永長元年（1096）の条に記載される。平安時代末期になると、中央の寺院が地方寺院の別当職を掌握する傾向が高まり、善光寺も有力寺院である寺門派の園城寺の末寺化が進められたことにより、その名前が貴族社会・仏教界で知られるようになったと考えられる。

善光寺縁起 善光寺の存在を広く宣伝する役割を果たしたものとしては、「善光寺縁起」と女人救済思想の存在がある。善光寺縁起は私撰史書の『扶桑略記』や『伊呂波字類抄』など複数に引用されている。縁起の内容は、善光寺本尊の由来を『日本書紀』の仏教公伝記事と結びつけ、日本で最古の仏像とするものであり、鎌倉時代以降その内容は次第に膨らんでいく。この縁起の内容は、阿弥陀信仰の高まりとともに、旧佛教系の寺院から排除されていた女性たちを積極的に受け入れて救済する思想が加わったことにより、広く全国に浸透していった。

鎌倉幕府と善光寺 善光寺は治承3年（1179）に火災によって消失するが、文治3年（1187）には、源頼朝が国内の御家人に再建を命じており、建久2年（1191）には主要伽藍が落成していることが『吾妻鏡』に記されている。その後、幕府の実権が執権北条氏に移ってからも善光寺に対する崇敬・保護政策は進められ、全国の武士層に善光寺信仰を普及させることになった。

戦乱と善光寺の復興 戦国期には甲斐の武田信玄と越後の上杉謙信による川中島の戦いの際に、武田氏が本尊やその他の寺宝を甲府に移している。その後、武田氏の滅亡、織田信長の死など、戦乱とともに善光寺本尊は躊躇々とし、慶長3年（1598）に農臣氏より40年振りに信濃に本尊が戻される。江戸時代になると徳川家康が善光寺に千石の寺領を与え、再興が進められた。中世から近世において、善光寺は火災によって幾度か焼失しており、宝永4年（1707）に境内地北側の現在地に本堂を移す。江戸時代末の弘化4年（1847）、明治24年（1891）の火災では仁王門や大本願などを焼失しており、門前町も大部分はこの火災後の再建である。



寛文の如来堂と門前町
〔信濃水内參神別神社遺跡之図〕長野市立博物館蔵

(2) 調査地の歴史概要

大本願明照殿地点 大本願は善光寺創建期から続くといわれる尼僧寺院であり、善光寺の本坊として、天台宗の大勣進とともに善光寺の運営をつとめる。大本願境内の南東隅に位置する明照殿は、大正3年（1914）に造営されたものであり、北に位置する寿光殿と連結している。建物は入母屋瓦葺屋根の木造2階建であり、1階には小間と108畳の広間があり、2階には「お物見」と呼ばれる参道に面した部屋があった。

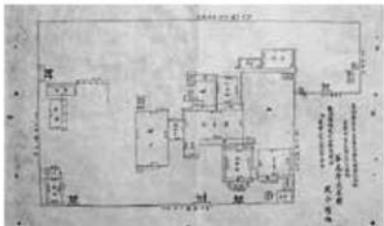
元禄以前の寛文如来堂を描いたとされる「善光寺境内見取図」では、大本願の南東隅に「諏方北向ノ社家」との記載がある。明治時代になると神仏分離政策により、善光寺内の社は撤去され、横沢町の八幡社などに合祀されたといわれる。明治初期の「善光寺大本願現今境内」には、大本願敷地南東隅に独立した「物見」が記されている。明治11年には、ほぼ同位置に長野電信分局が設置されており、「信濃国善光寺略絵図」（県立歴史館所蔵、明治24年）には、南に窓を有する2階建ての洋風建築が描かれている。

仁王門東地点 仁王門の東に位置し、近年までみなとや旅館が存在した場所にあたる。元禄以前の古境内絵図を写したとされる「信州善光寺懸境内古繪圖」では、大本願北東に接する階段は描かれるものの仁王門は記載されず、調査区周辺に地蔵堂、善導堂、法然堂と記されている。仁王門は、本堂移転後の宝暦2年（1752）に現在地に建立されており、現在の仁王門は明治24年の大火によって消失し、大正7年に再建されたものである。調査地点は現在、仁王門や仲見世とほぼ同レベルに造成されているが、調査区東端には南北に延びる石積があり、石積より東部は約15m低くなる。石積は明治期以降の築造であるが、旧境内城の造成の名残と考えることもできる。

八幡屋礒五郎大門町店地点 調査地は、大門町北部の表参道東側にあたり、八幡屋礒五郎既存店舗と藤屋旅館との間に位置する。大門町の名は善光寺境内南方位に存在した南大門（二天門）に由来すると考えられ、比較的早い段階で門前町が形成された地区といわれている。近世以降、盛んに定期市が開かれた大門町の表参道は大正12年に市区改正（大門の通りを5間から10間に拡幅する工事）を行っており、藤屋旅館も大正13年に新築されている。調査地は藤屋旅館の敷地内通路として利用されていた箇所であり、比較的近代の改変を受けていない。



「信州善光寺懸境内古繪圖」
(善光寺境内一件但附屬図トモ (明治4年～8年) (坤) : 長野県立歴史館蔵)



「善光寺大本願現今境内」
(善光寺境内一件但附屬図トモ (明治4年～8年) (坤) : 長野県立歴史館蔵)



「信濃国善光寺略絵図」(長野県立歴史館所蔵)

◎善光寺・門前町の歴史概要

西暦	和暦	善光寺・門前町に関する事象	出典	時代
9世紀後半		瓦葺きの建物が存在（善光寺前身寺か？）		
1179	治承 3	火災により善光寺焼失	「平家物語」・「吾妻鏡」	平安
1187	文治 3	源頼朝が信濃国目代等に善光寺再興を命じる	「吾妻鏡」	
1191	建久 2	善光寺再建落成	「吾妻鏡」	
1268	文永 5	善光寺で火災	「見聞私記」	鎌倉
1313	正和 2	善光寺で火災	「続史愚抄」	
1370	応安 3	火災により善光寺全焼	「花営三代記」	
1413	応永 20	金堂再建	「三井続燈記」	
1425	応永 32	善光寺で火災との噂が京で広まる	「看聞日記」	室町
1427	応永 34	善光寺で火災	「続史愚抄」	
1474	文明 6	火災により如来堂焼失	「尋尊大僧正記」	
1558	永禄 1	武田信玄が本尊を甲斐に移す	「王代記」	
1597	慶長 2	豊臣秀吉が甲斐善光寺如来を京都方広寺大仏殿に移す	「甲斐善光寺文書」	戦国
1598	慶長 3	本尊が信濃に戻される	「梵舜日記」	
1600	慶長 5	豊臣秀頼が如来堂を再建	「慶長日記」	
1601	慶長 6	徳川家康が善光寺に千石の領地を与える（大門町を含む）	「善光寺文書」	
1615	元和 1	落雷により本堂（如来堂）焼失、諸堂・寺中全焼	「本光国師日記」	
1642	寛永 19	仏堂が焼失	「善光寺本堂建立由来留書」	
1650	慶安 3	如来堂仏堂に入仏	「善光寺本堂建立由来留書」	
1666	寛文 6	仮本堂（寛文如来堂）を再建	「善光寺本堂建立由来留書」	
1688	元禄 1	東之門町から出火、横町等焼失	「善光寺史」	
1692	元禄 5	本堂の建設を計画（再建目的の出開帳を寺社奉行より認可）	「善光寺本堂再建回國勅化記」	
1700	元禄 13	火災により再建中の本堂・焼失	「善光寺本堂建立由来留書」	
1705	宝永 2	西之門町より出火、大本願・三寺中・東之門町等焼失	「長野史料」	
1707	宝永 4	本堂再建	「善光寺本堂建立由来留書」	江戸
1750	寛延 3	三門建立 堂庭の品物販売について、大門町から訴えあり	「善光寺別当伝略」 「長野市史考」	
1751	宝曆 1	西之門町より出火、大本願・町屋一帯 1500軒を焼失	「長野市史」	
1752	宝曆 2	仁王門建立	「善光寺別当伝略」	
1759	宝曆 9	経蔵落成	「善光寺別当伝略」	
1830	天保 1	宿坊と大門町が旅客の宿泊について争う	「大勅進文書」	
1847	弘化 4	善光寺地震により家屋 3000戸、仁王門・大本願等焼失	「弘化四年大地震御届之写」	
1849	嘉永 2	東之門町が条件付で宿屋営業を許可される	「長野市史考」	
1864	元治 1	仁王門再建	「善光寺取調書」	
1871	明治 4	上知令により善光寺領を中野県（のち長野県）に編入		
1891	明治 24	5.24 東之門町から出火、伊勢町・岩石町・元善町等焼失 6.2 上西之門より出火、仁王門・大本願・院坊・元善町等焼失		
1908	明治 41	本堂特別保護建造物に指定		近現代
1918	大正 7	仁王門再建		
1953	昭和 28	本堂が国宝に指定		
1965	昭和 40	三門・経蔵が重要文化財に指定		

第Ⅲ章 調査成果

第1節 大本願明照殿地点の調査概要

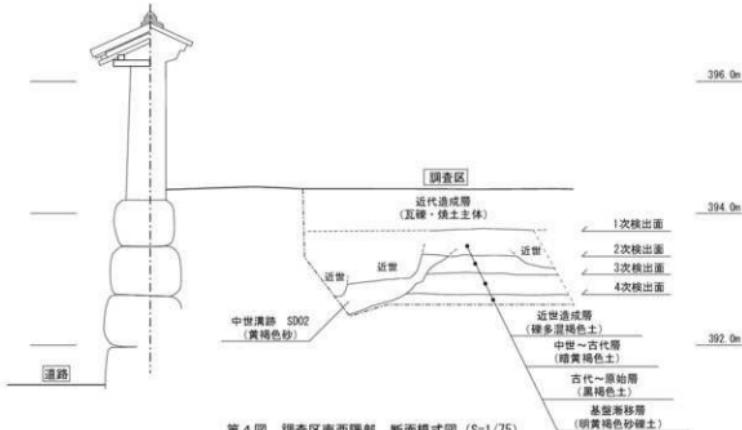
(1) 調査の方法

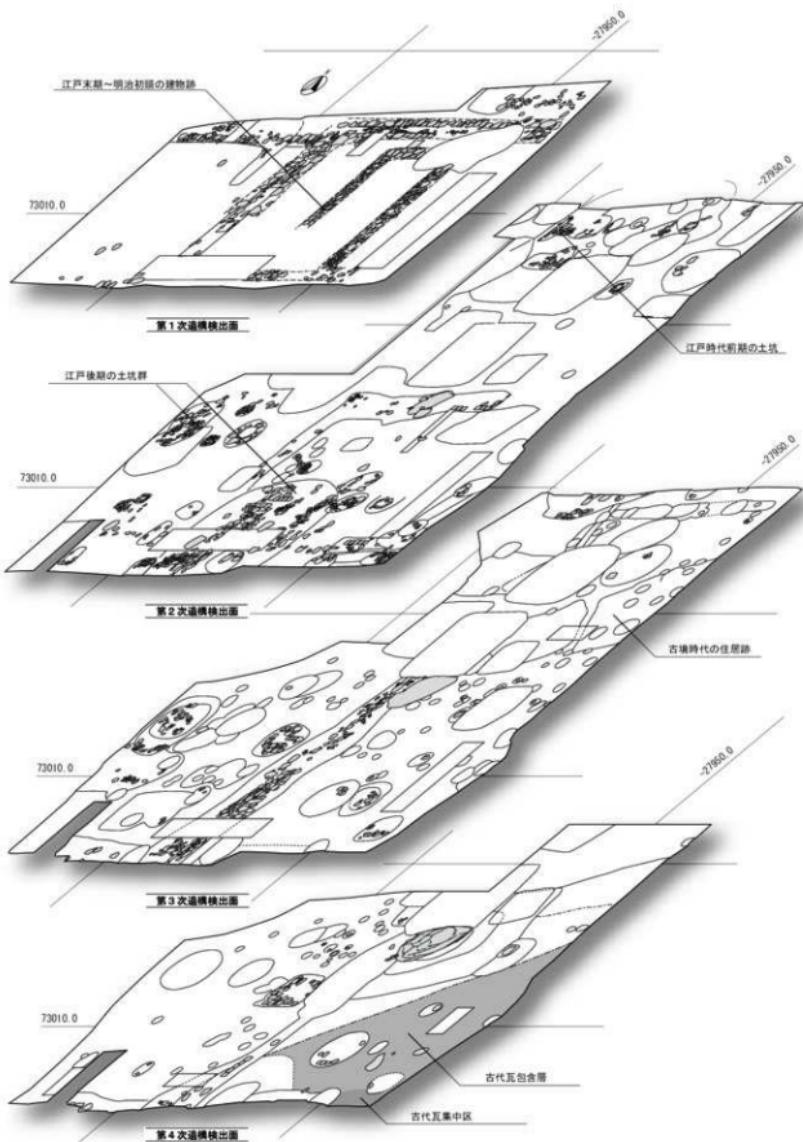
調査は、大本願明照殿改築に伴う地階建設部分約500m²を対象として、記録保存を行った。調査では掘削深が2mを超えるため、既存建物の解体後に掘削範囲外周に土留め矢板を設置して、調査を実施することとした。発掘調査においては、重層的に埋没する各時代の遺構をそれぞれ検出するため、表土層を除去した後に、堆積土層に応じて検出面を設定し、4次にわたる掘り下げと遺構確認を実施した。

(2) 基本層序

調査では、試掘調査成果および調査区南部の土層確認ベルトを基に、堆積状況に応じて検出面を設定した。地表下約60cmまでは、多量の焼土・炭化物とともに江戸時代末から明治時代の製品が含まれており、明治24年(1891)の火災後から大正3年(1914)明照殿造営までの近代造成と想定される。調査では、この近代造成土除去後を第1次面、中世～古代の堆積と想定される暗褐色土直上を第2次面、古代～原始の堆積と想定される黒褐色土直上を第3次面、遺物の包含されない明褐色砂礫土(基盤漸移層)直上を第4次面として遺構検出にあたった。なお、調査区南東隅は基盤漸移層が南東方向に落ち込んでおり、傾斜地に古代瓦片が集中して堆積している状況が確認されたため、傾斜地の古代瓦包含層を第4次遺構検出面の遺構として取り扱う。

また調査区は南東方向に緩く傾斜しており、旧来の自然地形はより大きな高低差があったと思われる。調査区北端部では393.3mにて基盤層が確認されるのに対し、調査区南端の基盤層(基盤漸移層)高は391.9mであり、1.4mの比高差が看取される。そのため、調査区北部では表土除去後が第2次遺構検出面となり、第3次遺構検出面は基盤層直上となった。





第5図 大本頬明照殿地点 調査区概念図

○長野遺跡群 元善町遺跡 遺構觀察表

遺構No	棟出遺構				備考	概要	重量(kg)	回数
	1	2	3	4				
S801	○	古墳時代後期	堅穴住居跡(北東側)			瓦・陶器部、金屬製品	0.67	
S802	○	古墳時代後期	堅穴住居跡(北東側)			土器(窓坏・甕)	0.78	第18回
S803	○	古墳時代	堅穴住居跡			陶器部	0.09	
S1001	○	江戸末~明治期	丁子の石踏道。内法幅30~40cm	雨落溝か		瓦・陶器部、金屬製品	3.94	第7・32回
S1002	○	中世(15~16C)	東西の清掃路(幅不明)			陶器部、土器	0.69	第18回
S1003	○	中世(15~16C)	東西の清掃路(幅不明)			土器	5.41	第18回
S1004	○	江戸初期	丁子の清掃路	S1001の掘り込み		陶器部、土器	3.53	第10回
S1005	○	江戸末~明治期	東西の清掃路			陶器部、金屬製品	2.43	第10~33回
S1006	○	江戸後期	東西の清掃路、地盤利用			陶器部	0.31	第10回
S1007	○	江戸期	南北の清掃路	建物地盤か		陶器部、土器	4.19	第18回
S1008	○	江戸期	南北の清掃路	井戸からの排水路か		陶器部、土器	0.01	
SE01	○	江戸後期	円形土坑(直徑約1.5m)	井戸跡(Ⅲ SK32)		陶器部、土器品、金屬製品	0.80	第10・32回
SK01	○	江戸後期	長方形土坑(北部測量区外)			陶器部	0.62	第10回
SK02	○	江戸末~明治期	円形土坑(直徑約2.7m)			瓦・陶器部、土器、金屬製品	0.42	第11~32回
SK03	○	江戸後期	不要地土坑			陶器部	2.18	第11回
SK04	○	江戸前期	形状不明、底面よりSK08・SK09検出			陶器部、石器品	1.09	第11回
SK05	○		円形土坑(直徑約1.4m)				0.05	
SK06	○		椭円形土坑(北東側: 2.1m × 0.9m)					
SK07	○	江戸中期	円形土坑(直徑約1.9m)		瓦・陶器部、土器	2.5	第11回	
SK08	○		椭円形土坑(西半部測量区外)				0.05	
SK09	○		長方形土坑(北半部測量区外)				0.04	
SK10	○		不整形				4.46	
SK11	○		椭円形土坑				0.1	
SK12	○		円形土坑(直徑約0.7m)				0.13	
SK13	○		不整形				0.13	
SK14	○		不要地。多量の礫(木輪輪荷台)				0.13	
SK15	○	江戸中期	東西南北各1.5m×1.5m	SK39と同一		陶器部、土器	0.92	第12回
SK16	○		円形土坑(直徑約1.5m)				0.03	
SK17	○		円形土坑(直徑約0.6m)				0.13	
SK18	○		椭円形土坑(東西側: 0.8m × 0.5m)				0.02	
SK19	○	江戸期	円形土坑(直徑約0.6m)		土器		0.06	第12回
SK20	○		椭円形土坑(約0.4m × 0.2m)				0.01	
SK21	○		円形土坑(直徑約0.4m)					
SK22	○	江戸末~明治期	円形土坑(直徑約1.0m)			陶器部、金屬製品	0.13	第12~33回
SK23	○		椭円形土坑(約1.6m × 1.1m)			陶器部、金屬製品	1.63	第12~33回
SK24	○	江戸後期	椭円形土坑(南手測量区外)				5.96	
SK25	○		円形土坑(直徑約1.6m)			陶器部、土器、金屬製品	6.56	第12~13~33回
SK26	○		円形土坑(直徑約0.6m)				0.01	
SK27	○		円形土坑(直徑約0.9m)				0.04	
SK28	○	江戸後期	椭円形土坑(約1.8m × 1.1m)			陶器部	1.46	第13回
SK29	○	江戸後期	長方形土坑(南北側: 2m × 1.1m)			瓦・陶器部	1.89	第13回
SK30	○		椭円形土坑(約1.2m × 0.9m)				0.32	
SK31	○	江戸中期	椭円形土坑(南北側: 1.4m × 0.7m)			陶器部、金屬製品	0.3	第13~32回
SK32	○		矢穴					
SK33	○	江戸後期	円形土坑(直徑約2.7m)			陶器部、金屬製品	10.6	第13~14~32~33回
SK34	○	江戸末~明治期	長方形土坑(南北側: 1.1m × 0.6m)			陶器部	0.05	第14回
SK35	○	明治期以降	長方形土坑(南手測量区外)			陶器部、金屬製品	0.1	第14~32回
SK36	○		円形土坑(直徑約0.9m)				0.03	
SK37	○		円形土坑(直徑約1.0m)				0.05	
SK38	○	江戸前期	円形土坑(直徑約2.5m)			陶器部、土器	2.51	第19回
SK39	○		矢穴				0.63	
SK40	○	江戸後期	方形土坑(約1.5m四方)			陶器部、金屬製品	3.17	第14~32~33回
SK41	○	江戸期	椭円形土坑(約2.0m × 1.6m)		土器		3.85	第19回
SK42	○		円形土坑(直徑約2.2m)				3.7	
SK43	○		不整形		土器		0.46	第19回
SK44	○	江戸前期	椭円形土坑(約1.4m × 1.0m)			陶器部	0.03	第19回
SK45	○	江戸前期	不整形、亂石: SK36			陶器部、土器、石器品、金屬製品	1.38	第19~32回
SK46	○		円形土坑(直徑約1.6m)	(Ⅲ SK33を含む)	瓦・陶器部、土器、金屬製品	15.71	第14~15~32~33回	
SK47	○	江戸期	円形土坑(直徑約2.0m)		土器、金屬製品	0.95	第19回	
SK48	○		不整形				0.36	
SK49	○	江戸期	椭円形土坑		土器		0.74	第19回
SK50	○		円形土坑(直徑約0.8m)				0.03	
SK51	○		椭円形土坑(約1.3 × 0.9m)		瓦		0.14	第19回
SK52	○		不整形				0.15	
SK53	○		円形土坑(直徑約0.9m)		複数の土坑か		0.31	
SK54	○		円形土坑(直徑約0.7m)				0.02	
SK55	○	江戸期	椭円形土坑(約1.4m × 1.0m)		土器		0.26	第19回
SK56	○		円形土坑(直徑約0.8m)				0.22	
SK57	○		椭円形土坑(約1.0m × 0.6m)				0.11	
SK58	○		方形土坑(約2.2m四方)				0.09	
SK59	○		形状不明					
SK60	○	古墳時代後期?	形状不明		巨石の倒り出し跡か	土器(窓坏)	0.17	第22回
SK61	○	江戸期	椭円形土坑			土器	0.18	第22回
SN01	○		石積み					
SN02	○	江戸後期	南北約4.6m 東西2m のL字の石列			瓦・陶器部、金屬製品	1.23	第7・8・33回
SN03	○		東西約5.5mの石列。幅約50cm			建物地盤か		
X001	○	古墳時代後期	方形土坑跡?			建物地盤か	0.43	第22回
瓦混合層	○		毎日瓦混合層			瓦・瓦定期・土器	98.97	第22・23~31回

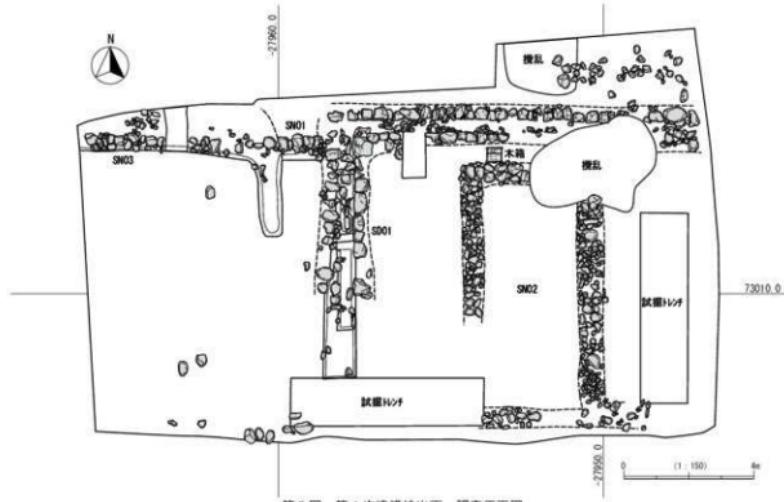
(3) 調査概要

調査においては、重層的に埋没する各時代の遺構をそれぞれに検出するため、表土層を除去した後に、堆積土層に応じて検出面を設定し、4次にわたって掘り下げと遺構確認を実施した。調査では古墳時代から近世の遺構を確認しているが、古代や中世に比定される遺構は少なく、大部分は江戸期の遺構である。また、江戸期の井戸跡や土坑などは、掘削深が大きいため数次面にわたって確認されている。以下、遺構検出面ごとの概要を記す。

○第1次遺構検出面

遺構の概要 1次面は、調査区南部のみで確認し、溝跡1箇所（SD01）と石列3箇所（SN01・SN02・SN03）を検出した。SD01は内法幅30~40cmの石組溝であり、L字状に検出された。SD01西部では、溝の底面下からも石積みが確認されている。SN01はSD01の北西隅から西に延びる石積みであり、SD01南壁石積みと同一ライン状に存在するが、切れ合ひ関係よりSD01より古い段階の石積みと思われる。SN02はSD01の南に近接する石列遺構であり、平面形は東西約3.6m（2間）、南北約7.2m（4間）の長方形を呈する。近代の搅乱によって定かではないが、東に延びる可能性もある。SN03はSN01とはほぼ同一ライン状に西に延びる東西約5.5mの石列であるが、SN01を掘り込んで築かれている。SN01は石積みだが、SN02およびSN03は溝状の掘り込みに石材を充填した建物基礎の根固めと想定される。SD01は建物に伴う雨落溝と判断される。

出土遺物 江戸時代中期から末期までの肥前系陶磁器を中心に、明治時代以降の瀬戸・美濃系磁器、京焼系・薩摩系陶器が出土している。SD01からは江戸時代末の磁器とともに墓灰軸が施釉された初期肥前系陶器が出土している。2次面にて検出するSD04は、石組溝（SD01）形成時の掘り込みであり、近世初期の製品が集中して出土していることから、江戸初期に石組溝が築造され、多少の改変を経ながらも幕末まで利用された状況が伺える。SN02・SN03は幕末から明治初頭の陶磁器が出土しており、明治11年に築かれた長野電信分局の建物基礎と想定される。SN01の機能は定かではないが、石組溝（SD01）西側の下部石積みと同時期の遺構と想定される。



第6図 第1次遺構検出面 調査平図



第1次遺構検出面 全景



SN01



SN02



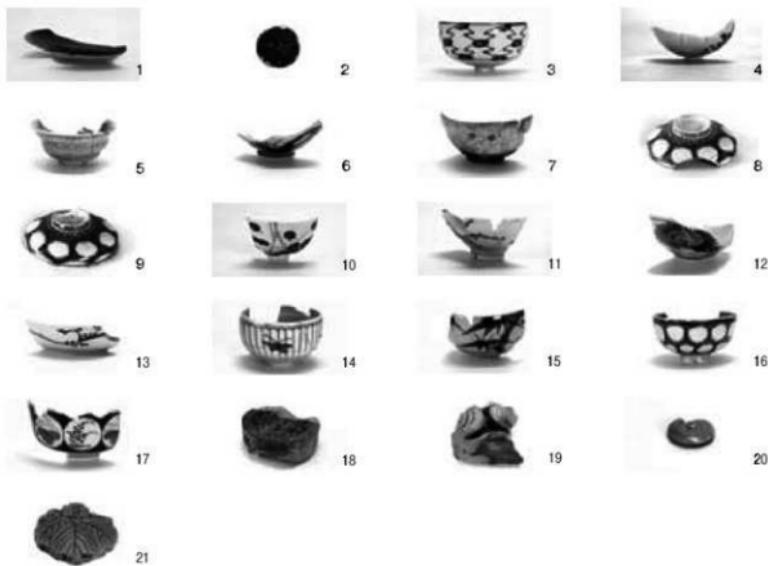
SN03



埋設木箱

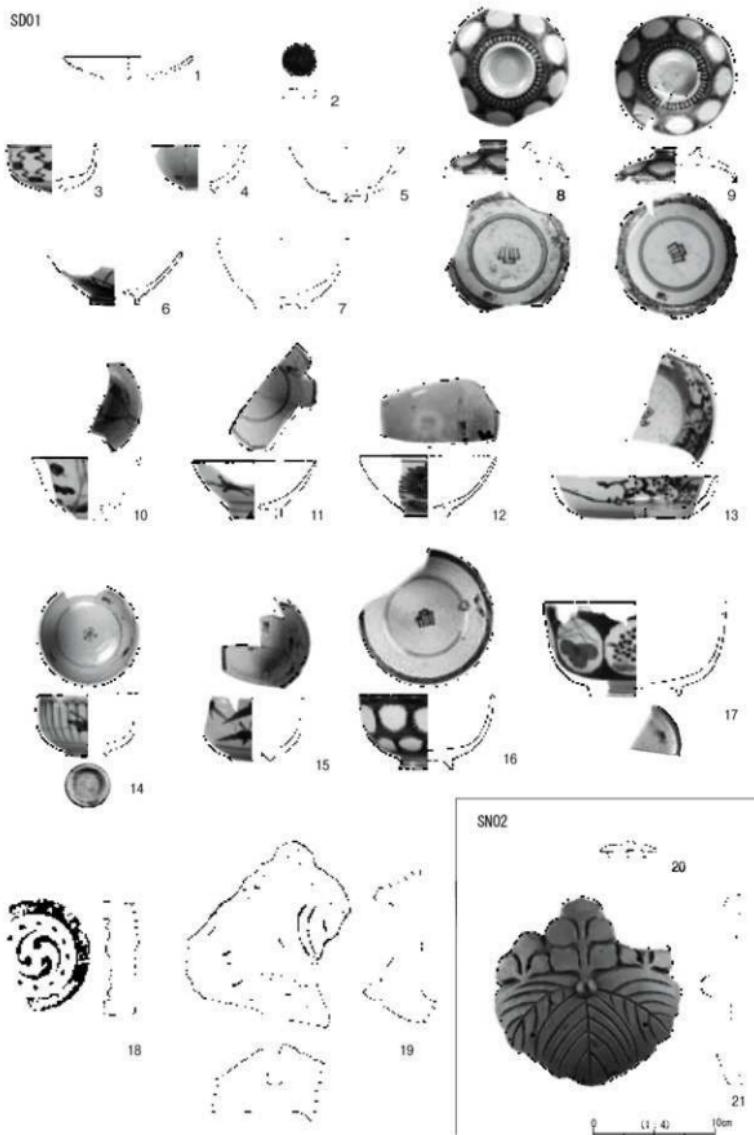


SD01



番号	通称 器名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形法	絵付・難易	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込み材種・特徴	高合材種・特徴	推定場所	推定年代	整理 No.	備考	
1	S001	陶器	灯明皿	平形	灰褐色	擦輪	鉄釉	—	1.8	3.9	口縁に施釉	施釉	施釉	施釉	高合	御戸・美濃系	151		
2	S001	陶器	円盤	円盤形	灰褐色	擦輪	鉄釉	2.6	0.7	—	施釉	施釉地に擦	施釉	施釉	高合	肥前系	1780～1960	154	脚片跡破片の加 工
3	S001	細器	仏壇器	丸形	白	擦輪	鉄釉	—	—	—	施釉	施釉	施釉	施釉	高合	肥前系	1780～1960	154	脚片跡破片の加 工
4	S001	陶器	小碗	半球形	白	擦輪	鉄釉	—	3.8	—	透かし・上 級	透かし・上 級	透かし・上 級	施釉	高合	御戸・美濃系	1690～1780	150	
5	S001	陶器	小碗	脚継形	灰白色	擦輪	鉄釉	9.3	4.1	3.2	草竹付茎	施釉	施釉	施釉	高合	御戸・美濃系	1800～1890	152	
6	S001	細器	中碗	平形	灰白色	擦輪	鉄釉	—	—	—	草花	施釉	施釉	施釉	高合	御戸・美濃系	1870～1960	139	口縁部欠損
7	S001	細器	碗	丸形	灰白色	擦輪	鉄釉	—	5.6	4.1	高台付茎	施釉	施釉	施釉	高合	御戸・美濃系	1610～1780	153	御戸系唐津編
8	S001	細器	中碗	丸形	白	擦輪	鉄釉	10.2	3	4.2	透輪文・瀬 井文	四方博文	四方博文	施釉	高合	御戸・美濃系	1690～1780	142	
9	S001	細器	中碗	丸形	白	擦輪	鉄釉	10.3	2.9	4.1	透輪文・瀬 井文	四方博文	四方博文	施釉	高合	御戸・美濃系	1690～1780	143	N0142と同一
10	S001	細器	小碗	透形	白	擦輪	鉄釉	—	5.1	—	鳥文	施釉	施釉	施釉	高合	御戸・美濃系	1620～1780	146	使用あり
11	S001	細器	小碗	丸形	白	擦輪	鉄釉	—	4.6	—	稻穗文	稻穀	稻穀	施釉	高合	御戸・美濃系	1670～1780	141	
12	S001	細器	中碗	平形	灰白色	擦輪	鉄釉	—	4.9	3.8	草花文	草花	草花	施釉	高合	御戸・美濃系	1670～1780	140	
13	S001	細器	瓶	丸輪花形	白	擦輪	鉄釉	—	3.5	—	唐草文	御樹文	五牙花文	施釉	高合	御戸・美濃系	1730～1810	144	
14	S001	細器	小碗	半球形	白	擦輪	鉄釉	—	8.5	5.2	3.6	櫛に透文	二重縁	高合	御戸内に塗 高合	御戸・美濃系	1780～1860	155	朱文字 使用あり
15	S001	半細器	小碗	半球形	从白色	擦輪	鉄釉	—	5.2	—	青持透文	二重縁	高合	高合	御戸内に塗 高合	御戸・美濃系	1860～1940	147	
16	S001	細器	中碗	丸形	白	擦輪	鉄釉	11.1	6.1	4.4	透輪文・瀬 井文	四方博文	四方博文	施釉	高合	御戸・美濃系	1690～1780	149	
17	S001	細器	蓋物外	押張形	白	擦輪	鉄釉	—	7.8	—	御葉文・秋 枝文	御葉文・秋 枝文	御葉文・秋 枝文	施釉	高合	御戸・美濃系	1780～1860	145	朱文字
20	S002	陶器	蓋	凸形	灰	擦輪	鉄釉	4.8	1.3	3.3	施釉	施釉	施釉	施釉	御戸・美濃系	1780～1860	160	整理の蓋	
22	S002	細器	瓶	梅花形	白	擦輪	鉄釉	—	4.3	8.8	口縁に鉄 錆	波文・高台	波の目凹形	施釉	高合	御戸・美濃系	1780～1860	158	朱文字 使用あり

番号	通称 器名	類別	種類	形状	胎土色・特徴	胎輪	断面 (mm)	横幅 (mm)	高さ (mm)	文様	推定年代	整理 No.	備考	
18	S001	丸	軒板瓦	灰	灰白	擦輪	9.3	—	2.1	—	—	江戸時代	—	
19	S001	丸	筒瓦	灰	擦輪	鉄釉	—	—	2.3	—	—	江戸時代	—	
21	S002	丸	筒瓦	灰	擦輪	鉄釉	15.4	15.0	1.8	—	—	江戸時代	—	



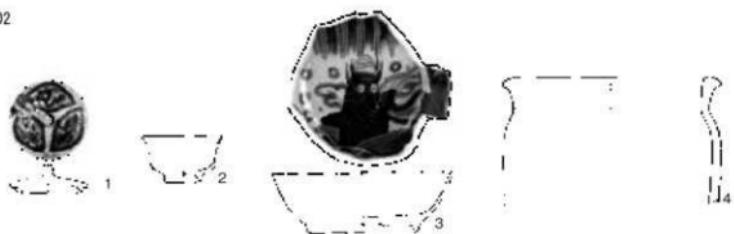
第7図 1次検出面造模出土遺物 (SD01・SN02)



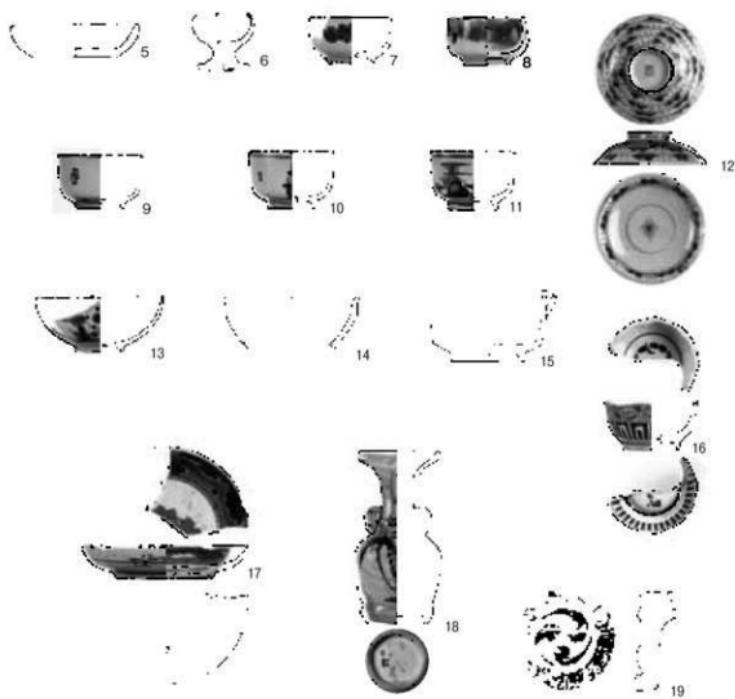
番号	遺物名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	給付・釉薬	口径(cm)	器高(cm)	外側文様・特徴	内側文様・特徴	更変文様・特徴	高台文様・特徴	推定年代	整理No	備考	
1	Nō02	陶器	盞	平形	白	輪轉	共頭・透明	6.5	2.3	5.4	—	—	波形見出し、輪轉	蓋設置部露胎	肥前系	1780～1860	156 底吹の盞。
2	Nō02	陶器	小碗	荷葉反形	黄灰色	輪轉	共頭・鉄起・輪轉	—	3.8	2.9	松文?	施釉	施釉	高台給付の み露胎	京焼系	1800～1860	出島窯か。
3	Nō02	陶器	碗	梅花形	白	輪轉・押摩	共頭・透明	—	4.3	8.8	口行に具	波文・高文	變の圓登見	高台・具文	肥前系	1780～1860	燒継あり
4	Nō02	陶器	盞	脚部縦条	白(斜子)	輪轉	鉄頭	—	—	—	施釉	施釉	—	—	松代焼系	1810～1860	銅部下欠損
5	板1	土器	丸子小鉢	丸形	暗茶	輪轉	共頭なし	—	2.4	—	—	—	—	中央に珠付 輪轉角切	在地系	不明	223
6	板1	陶器	盞	呑付たんこ形	白灰	輪轉・貼付	鉄頭	5.0	4.7	3.6	施釉下まで施	施釉	足立て(土)・圓錐形 面半円槽	面ロ・美濃	1700～1800	215	
7	板1	陶器	盞	蓋付小鉢	白	輪轉	共頭・透明	—	3.7	3.8	コシニカク 印刷模様文	口縁を斜め 施釉	高台給付の み露胎	肥前系	1690～1780	216	
8	板1	陶器	小碗	舟形	白	輪轉・押摩	鉄頭・透明	6.3	3.8	3.7	口行から脚 部押摩	施釉	高台給付の み露胎	不明	19c	221	
9	板1	陶器	小碗	腰張形	白(ガラ)瓦質	輪轉	共頭・透明	—	4.4	3.8	山水家紋文	施釉	高台給付の 面ロ	面ロ・美濃	1840～1870	219	
10	板1	陶器	小碗	腰張形	白灰	輪轉	共頭・透明	6.8	4.6	—	—	施釉	高台給付の 面ロ	面ロ・美濃	1840～1870	220	
11	板1	陶器	盞	腰張形	白灰	輪轉	共頭・透明	6.8	4.7	3.9	山水家紋文	施釉	高台給付の 面ロ	面ロ・美濃	1840～1870	218	
12	板1	陶器	小鉢蓋	端反形	白(ガラ)瓦質	輪轉	共頭・透明	9.4	2.7	3.7	樹木・網文	樹木内に花 文	高台給付の 面ロ	肥前系	1820～1860	222	
13	板1	陶器	盞	浅平球形	白	輪轉	共頭・透明	—	4.5	—	若松文・空	施釉	高台給付の 面ロ	面ロ	肥前系	1690～1780	213
14	板1	陶器	盞	天日形	灰褐色	輪轉	鉄頭	—	—	—	施釉	施釉	—	—	面ロ・美濃	1650～1700	311 肌部・高台欠 損。
15	板1	陶器	片口鉢	筒形	灰褐色	輪轉・貼付	鉄頭	—	5.8	—	施釉下まで施	施釉	淡く施釉	面ロ・美濃	1780～1860	312 口縁部大損	
16	板1	陶器	小鉢	梅花形	白	輪轉・押摩	共頭・透明	—	—	—	樹・鹿・井草文	—	—	肥前系	1780～1860	217 口縫部欠損	
17	板1	陶器	小鉢	丸形	白	輪轉	共頭・透明	—	2.6	—	唐草文	淡く施釉に加 え波文	高台給付の 面ロ	肥前系	1690～1780	214 波文化。	
18	板1	陶器	仏花鉢	瓶口形	白	輪轉・貼付	共頭・透明	—	14.1	5.1	草花文	口縁のみ施	高台給付の 面ロ	肥前系	1680～1740	310 後継あり	

番号	遺物名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	給付	底面	標高(cm)	厚さ(cm)	文様	推定年代	整理No	備考
19	板1	瓦	斜瓦瓦	黃褐色				82	—	1.5	巴文	不明	

SN02



遺構外



0 (1-4) 10cm

第8図 第1次面出土遺物 (SN02・遺構外)

○第2次遺構検出面

遺構の概要

主な遺構と概要 2次面では、4箇所の溝跡（SD）と36基の土坑（SK）、1箇所の井戸跡（SE）を確認した。調査区中央部のSD04は、1次面の石組溝（SD01）の形状と対応しており、SD01築造時の掘り込みと考えられる。調査区南東隅のSD05・SD06は東西方向の溝跡であり、SD06は五輪塔（地輪）を転用して並べている。調査区北部の土坑群からは多数の江戸初期の陶磁器、かわらけが出土しており、多くは江戸時代前期の遺構と考えられる。ただし、土坑の形状・位置関係などに規則性は看取されず、遺構の性格を推測することは難しい。また、調査区北東部の土坑（SK01・SK02・SK03）は江戸時代末から明治初頭の遺構と考えられる。調査区南部の土坑は、江戸時代中期から後期の所産と想定される。調査区南西部では井戸跡（SE01）を確認しており、出土遺物から江戸末期まで使用していたと推測される。

出土遺物の概要

調査区北東部の土坑（SK01～03） SK01からは松代焼系の秉燭（図10-25）が一点出土している。台付きのたんころ形で、瀬戸・美濃系の秉燭を手本とした製品と推定される。SK02からは瀬戸・美濃系磁器碗1点と、かわらけ2点が出土している。瀬戸・美濃系磁器碗は筒丸形で、江戸時代末期～明治時代初期の製品と見られる。SK03からは波佐見系のくらわんか碗1点と京・信楽系の色絵碗1点、他にかわらけ2点と土器鉢1点が出土している。

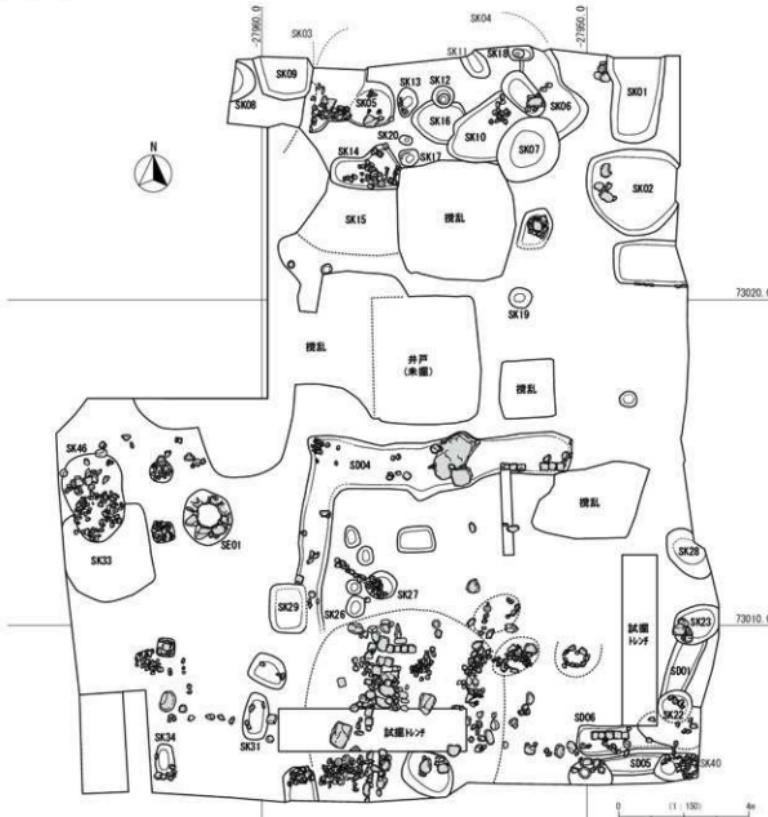
調査区北部土坑群（SK04～19） SK04からは近世初期の瀬戸・美濃系陶器碗2点と中世の広口長頸壺破片1点が出土している。瀬戸・美濃系陶器碗の内1点（図11-11）は、鉄繪地に長石釉が施釉されたいわゆる志野鐵部製品である。広口長頸壺破片（図11-12）は頸部の付根に凸帯があり、平安期に尾張地方で生産された製品と推定される。釉薬が表面に掛かっているが、二次被熱を受け全体に釉薬が発泡しており、意図的に施釉されたものか自然釉かは判別できない。SK07からは肥前系磁器・瀬戸美濃系陶器・かわらけが出土している。肥前系磁器は江戸時代中期に比定される浅半球形染付碗だが、下層から出土している瀬戸美濃系陶器碗（図11-17）は近世初期の志野製品とみられる。SK15からは肥前系陶器碗1点、瀬戸・美濃系陶器小皿1点、かわらけ1点が出土した。肥前系陶器碗（図12-3）は灰釉が施釉されているが、二次被熱を受けており、内外に一部炭化物が付着する。大橋編年Ⅰ期（1580～1610年代）に比定される製品と見られる。瀬戸・美濃系陶器小皿は緑味がかった灰釉が施釉され、見込みは露胎である。近世初期の大窯後期製品と見られる。SK19からは、かわらけの小皿1点が出土している。内外口縁部に煤付着が見られ、灯明具として使用されたものと考えられる。

調査区南部の土坑（SK22～35,40,46） SK22からは江戸時代末期に比定される肥前系磁器2点が出土している。1点は染付の繪皿で高台に「上人様」の朱墨があり、もう1点は色絵の鶴首瓶である。SK23からは大橋編年Ⅳ期（1690～1780年代）の肥前系染付磁器2点（丸形碗、繪皿）が出土している。SK25からは肥前系磁器染付繪皿1点・松代焼陶器植木鉢3点・備前系焼締皿1点・越前系陶器鳶口小壺1点・関西系磁器染付馬上蓋1点他に土器・土製品などが出土しており、概ね江戸時代後期に比定される。SK28からは江戸時代中期以降の肥前系染付磁器2点と波佐見系青磁仏花瓶1点が出土している。SK29からは漉器と灯明受皿計2点が出土した。灯明受皿は江戸時代中期以降の瀬戸・美濃製品である。SK31からは江戸時代中期頃の瀬戸・美濃系灰釉碗が出土している。SK32からは肥前系染付磁器繪皿と松代系陶器秉燭、ミニチュア宝塔土製品が出土している。SK33・SK46からは多量の陶磁器が出土しており、肥前系陶磁器と瀬戸・美濃系陶器が主である。肥前系陶器は擂鉢2点が出土しており、磁器は碗、皿、火入、灰吹などが見られる。瀬戸・美濃系陶器は碗、皿、仏飯器、三足香炉、蓋、片口鉢などが確認される。他に波佐見系くらわんか碗と京・信楽系色絵碗、土器・土製品が出土している。下層

から焰烙 3 点などが確認される。いずれも江戸時代中期から後期に比定される製品とみられる。SK34からは江戸時代末期に比定される肥前系の半球形碗 1 点が出土している。SK35からは明治以降の瀬戸・美濃系磁器陶片四方形小皿 1 点が出土。SK40からは江戸後期以降の京焼系製品とみられる軟質施釉陶器の緑釉竹筒形涼炉が出土した。他に江戸時代後期から末期ごろの瀬戸・美濃系染付磁器小碗が供出している。

溝跡 (SD04) 瀬戸・美濃系陶器が多く出土している。特筆すべきは、北列に近世初期の製品が集中しており、瀬戸・美濃系陶器では天目形碗 1 点 (図10-8)、灰釉小皿 2 点 (図10-2・3)、長石釉菊花形小皿 1 点 (図10-10) が確認され、いずれも大窯後期の製品とみられる。また、大橋幅年 1 期 (1580~1610年代) に比定される肥前系陶器の胴錐輪花形灰釉小皿 (図10-9) も 1 点確認される。

その他の遺構 (SD05・06) SD05からは江戸期の肥前系染付磁器小皿・小皿・陶器の擂鉢 3 点と明治時代以降の瀬戸・美濃系磁器 1 点が出土している。SD06からは肥前系京焼風陶器碗 1 点と京・信楽系色絵碗 1 点が出土している。



第9図 第2次遺構検出面 調査平面図



第2次造構棟出面（北半）



第2次造構棟出面（南半）



井戸跡
(SE01)



SK06・SK07・SK10



SK29



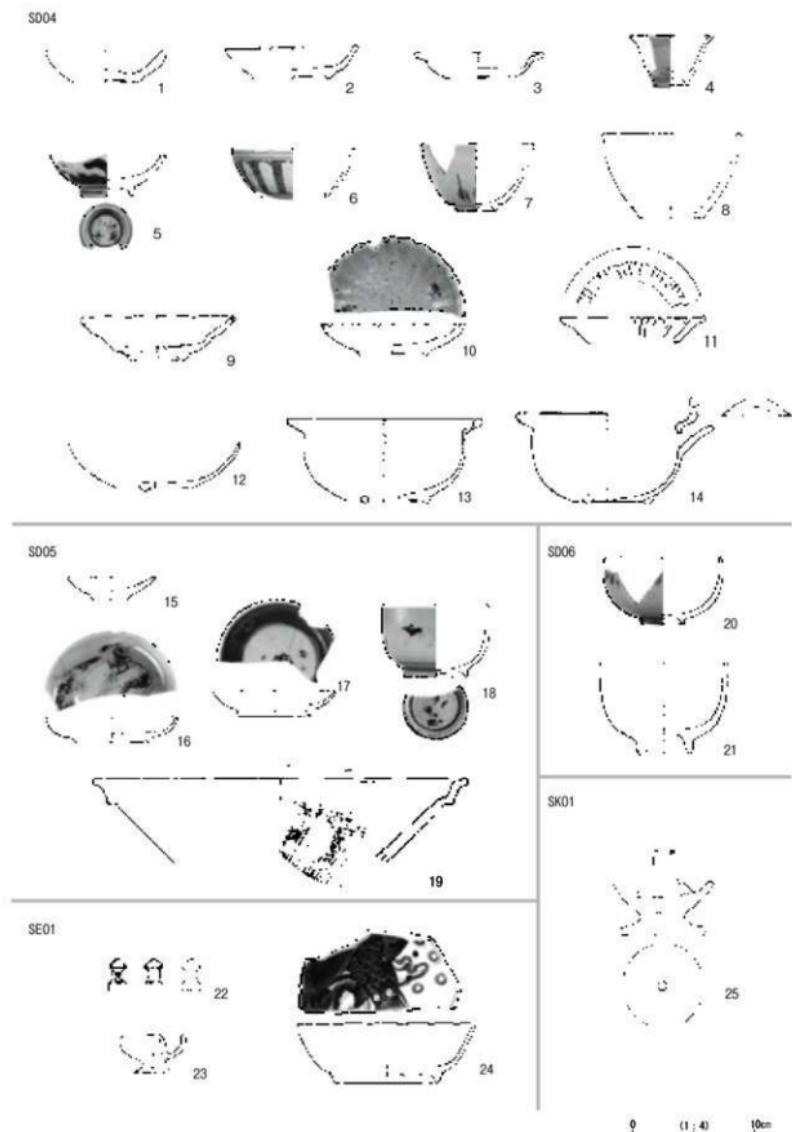
SD04



SD05・SD06



番号	通撰名	類別	器種	形状	胎色・特徴	成形	給付・輪番	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	外周文様・特徴	内面文様・特徴	見立文様・特徴	高台付・輪番	推定產地	推定年代	型番 No.	備考		
1	S004	土器	小豆	腰内折形	赤褐色	輪縮手切	なし	10.1	2.5	5.6	施釉ナデ、一部撥付着	施釉ナデ、一部撥付着	施釉ナデ、一部撥付着	施釉ナデ、施釉	回転舟切	不明	174			
2	S004	陶器	小豆	丸形	灰褐色	輪縮	灰釉	11.8	2.8	6.3	全面に施釉	施釉	施釉ナデ、施釉	施釉	施釉ナデ、施釉	瀬戸・美濃	1530～1570	169		
3	S004	陶器	小豆	折線形	灰白色	輪縮	灰釉	—	2	5.7	全面に施釉	施釉	施釉ナデ、施釉	施釉	施釉ナデ、施釉	瀬戸・中央	1570～1600	170		
4	S004	器物	猪口	鐘形	白灰	輪縮	呂頭・透明	—	4.1	3.8	草花文	施釉	施釉	施釉	施釉	肥前系	1690～1740	163		
5	S004	手鏡	鏡	丸形	白灰	輪縮	呂頭・透明	—	—	4.2	青花文・梅文	—	—	施釉	波佐見系	1680～1810	161	口縁部欠損		
6	S004	器物	小瓶	白	輪縮	呂頭・透明	9.9	—	—	—	透字柱文	二重蓋	—	—	—	肥前系	1780～1860	162	底部、高台欠損	
7	S004	陶器	小瓶	杉形	灰白色	輪縮	鉢形・灰釉	9.5	5.5	3.3	小枝文・高台付で施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	京・信楽系	1700～1770	166		
8	S004	陶器	中瓶	天目形	灰褐色	輪縮	灰釉	—	—	—	施釉	施釉	施釉	施釉	施釉	瀬戸・美濃系	1530～1600	172	底部、高台欠損	
9	S004	陶器	小瓶	瓣輪花形	灰	輪縮	出押し	—	3.5	4.8	鉢形・口縁に施釉	施釉	施釉・捺波	施釉	施釉	肥前系	1580～1610	173	古吉津皿	
10	S004	陶器	小豆	菊花形	灰白色	輪縮	リリ押	長石釉	—	27	5.9	全面に施釉	施釉・ヘラ跡	施釉	高台外にハリ跡あり	瀬戸・美濃	1580～1600	171		
11	S004	陶器	小豆	新緑ソサエ	灰	輪縮	ハラリ押	灰釉	—	—	施釉、二次熟成あり	菊文状縫	—	—	—	瀬戸・美濃	1570～1600	164	底部、高台欠損	
12	S004	陶器	土鍋	三足形	灰	輪縮	貼付	灰釉	—	—	6.2	腰下まで施釉	施釉	施釉	施釉	高台・小豆な	伊賀系?	19 c	165 口縁部欠損	
13	S004	陶器	土鍋	新緑ソサエ	灰褐色	輪縮	貼付	灰釉	—	6.7	6.1	腰下まで施釉	施釉	施釉	施釉	瀬戸・美濃系	1580～1600	167	把手部欠損	
14	S004	陶器	土鍋	新緑ソサエ	灰褐色	輪縮	貼付	灰釉	—	8.6	5.3	口付・把手付	施釉	施釉	施釉	高台・小豆な	瀬戸・美濃系	1580～1600	168	タマ足付き
15	S005	陶器	小豆	平舟	灰褐色	輪縮	磨石手切	灰釉	—	—	口縁に施釉	口縁のみ施釉	施釉	回転舟切	不明	不明	177			
16	S005	器物	小豆	丸形	白灰色	輪縮	呂頭・透明	上絆	—	1.9	6	青磁施釉	青磁施釉	青磁施釉	高台付付	瀬戸・美濃系	1870～1890	179		
17	S005	器物	小豆	丸形	白	輪縮	呂頭・透明	鉢形	—	2.1	6.1	横縫	鉢形に透光	高台付付	高台・輪縫	肥前系	1690～1760	176		
18	S005	器物	小瓶	櫛刷形	白	輪縮	呂頭・透明	鉢形	8.6	5.9	5.4	草花文	施釉	施釉	施釉	肥前系	1650～1690	175		
19	S005	陶器	酒器	二段口輪	朱褐色	輪縮	灰釉	—	—	—	口縁に施釉	口縁のみ施釉・下部施釉に目付	—	—	肥前系	1650～1690	178	口縁部破片		
20	S006	陶器	碗	半球形	灰	輪縮	灰釉・色絵(青・緑)	—	5.6	3.5	口縁部に色絵で半身像	施釉	施釉	施釉	施釉	京・信楽系	1780～1860	181		
21	S006	陶器	中瓶	腰張形	灰褐色	輪縮	灰釉	10.5	7.6	4.3	施釉	施釉	施釉	施釉	高台付付	肥前系	1650～1690	180		
22	S009	土製品	土器	安政期	灰褐色	型押	なし	1.5	—	1.5	腰中央に鳥居	塔芯欠損	塔芯欠損	塔芯	中央に孔	不明	近世	47		
23	S009	陶器	茶壺	唐壺	ころん	白粒子	輪縮	灰釉	—	3.1	3.1	全面に施釉	施釉	施釉	施釉	塔芯(上)・塔芯(内縁)	松代焼系	1810～1860	46	
24	S009	陶器	輪削	輪花形	白	輪縮	呂頭・透明	鉢形	—	4.8	8.7	口縁に虎斑、施釉	波文	波文	波文	波文	肥前系	1780～1860	45	燒綱あり
25	S009	陶器	茶壺	付たん	白粒子	輪縮	土灰釉	—	—	6.5	施釉	施釉	施釉	施釉	塔芯(上)・塔芯(内縁)	松代焼系	1810～1860	1		

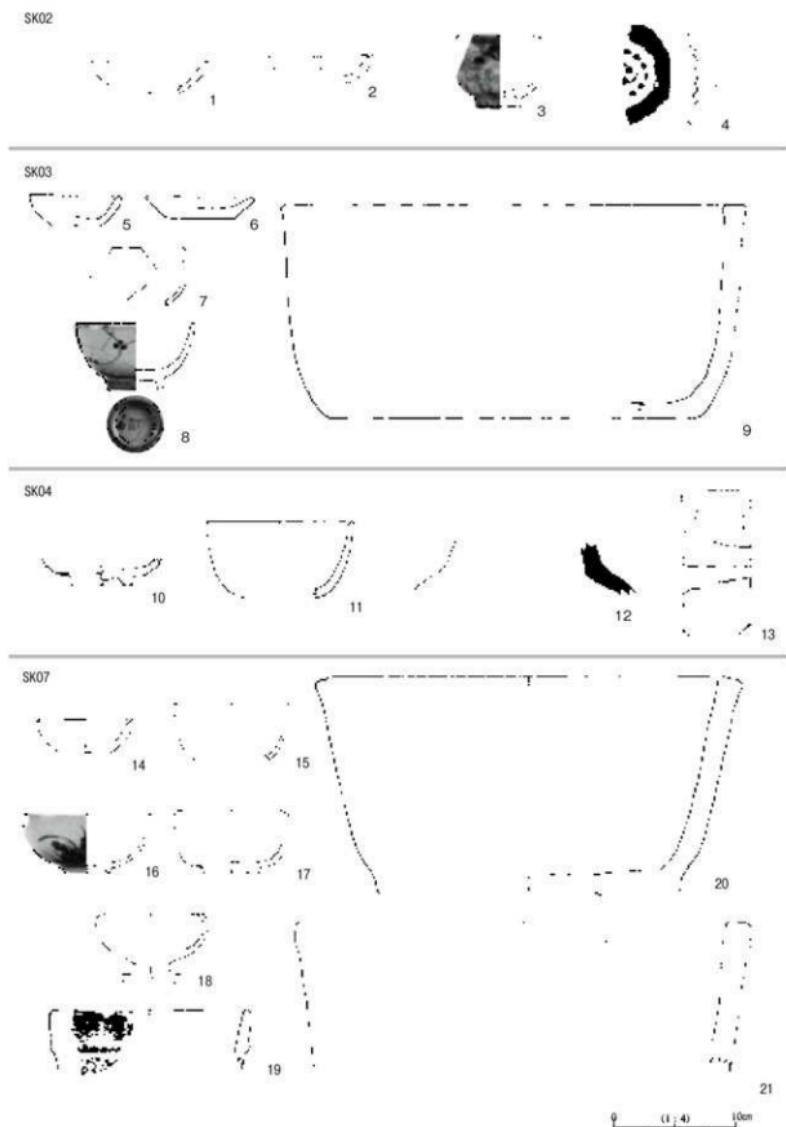


第10図 第2次面造横出土遺物 (SD04・SD05・SD06・SE01・SK01)



番号	通標名	種別	器種	形状	胎土色	成形	付・種類	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外因文様・特徴	内因文様・特徴	見込文様・特徴	高台骨付・特徴	推定产地	算定年代	整理No.	備考	
1	SK02	土器	かわら小皿	盤内折形	赤褐色	輪窓	なし	—	3.1	—	織縫ナデ痕	—	回転系切	在地系	不明	3			
2	SK02	土器	かわら小皿	盤内折形	赤褐色	輪窓	なし	—	2.3	—	織縫ナデ痕	—	回転系切	在地系	不明	4			
3	SK02	細器	中碗	舟丸形	白ガラス質	輪窓	凸弧・透明	—	5.8	—	素面	無文	高台骨付の 蓋口・美濃 八幡駒	—	1840~ 1870	2			
5	SK03	土器	かわら小皿	平底丸形	赤褐色	切	なし	7.4	2.6	4	織縫ナデ痕	—	織縫ナデ痕 ・骨付有	回転系切	在地系	不明	8		
6	SK03	土器	かわら小皿	平形	赤褐色	輪窓	なし	8.9	1.8	6	織縫ナデ痕	織縫ナデ痕	—	回転系切	在地系	不明	7		
7	SK03	陶器	小碗	半球形	黄灰色	輪窓	透明白(上 部)・灰(下 部)	—	—	—	素文	無文	—	—	京・信楽系	1780~ 1860	6	底部、高台欠損	
8	SK03	手造器	小碗	丸形	白灰	輪窓	—	9.6	5.4	42	青磁文・海	無文	無文	高台内に支 承	波佐見系	1750~ 1810	5		
9	SK03	土器	鉢	平底筒形	赤褐色	吉母・ 砂	なし	—	—	—	底部に削開	織縫ナデ痕	織縫ナデ痕	平底	在地系	近世	9		
10	SK04	陶器	碗	筒形	灰褐色	輪窓	鉄輪	—	5.1	—	—	—	施釉	削り出し高 台	瀬戸・美濃 系	1600~ 1670	11	口縁部欠損	
11	SK04	陶器	碗	筒形	灰褐色	輪窓	鉄輪・長石 斑	—	—	—	—	—	—	口縁下二重 輪	瀬戸・美濃 系	1610~ 1630	10	底部、高台欠損	
12	SK04	陶器	広口長 脚	新部凸面	暗褐色	輪窓	鉄輪・み 輪	灰釉	—	—	—	—	—	—	尾張系	11.5~ 12.5	12	二次被熱、脚部 のみ残存	
14	SK07	土器	かわら 小皿	盤内折形	赤褐色	輪窓	なし	—	2.5~ 3.1	4.5	織縫ナデ痕	織縫ナデ痕	回転系切	在地系	不明	16			
15	SK07	細器	碗	浅平球形	白	輪窓	凸弧・ 透明	—	—	—	舟子文	無文	—	—	肥前系	1700~ 1750	14	底部、高台欠損	
16	SK07	細器	中碗	浅平球形	白	輪窓	凸弧・ 透明	—	—	—	舟花文	無文	—	—	肥前系	1700~ 1750	13		
17	SK07	陶器	碗	筒形	灰褐色	輪窓	鉄輪	—	5.1	4.6	—	—	施釉	削り出し高 台	瀬戸・美濃 系	1580~ 1600	18		
18	SK07	陶器	茶漬	竹たんこ ころ形	灰褐色	輪窓・ 鉄輪	凸弧・ 鉄輪	—	5.8	4.5	—	—	立て欠損	斜板系切、 少少に孔	瀬戸・美濃 系	1700~ 1800	15	芯立て欠損	
19	SK07	土器	鉢	口縁凸面	暗褐色	輪窓・ 鉄輪	鉄輪	なし	—	—	—	—	—	—	不明	不明	19	口縁部のみ残存	
20	SK07	土器	鉢	足付き台 こころ形	水褐色・ 吉母・ 砂	輪窓・ 鉄輪	鉄輪・ 鉄輪	なし	—	—	横削り調整	織縫ナデ痕	織縫ナデ痕	脚部欠損	在地系	近世	17		
21	SK07	土器	鉢	台形	輪窓	なし	—	—	—	—	—	—	削り出欠陥	織縫ナデ痕	脚部欠損	在地系	近世		口縁部のみ残存

番号	通標名	種別	器種	形状	胎土色	特徴	基差	版幅(cm)	版幅(cm)	高さ(cm)	文様	持運	持運	持運	持運	持運	備考
4	SK02	瓦	軽肉瓦	灰白	—	—	8.1	—	1.7	—	—	—	—	—	—	—	不明
13	SK04	石製品	砾石	灰	—	—	5.7	0.9	—	—	—	—	—	—	—	不明	

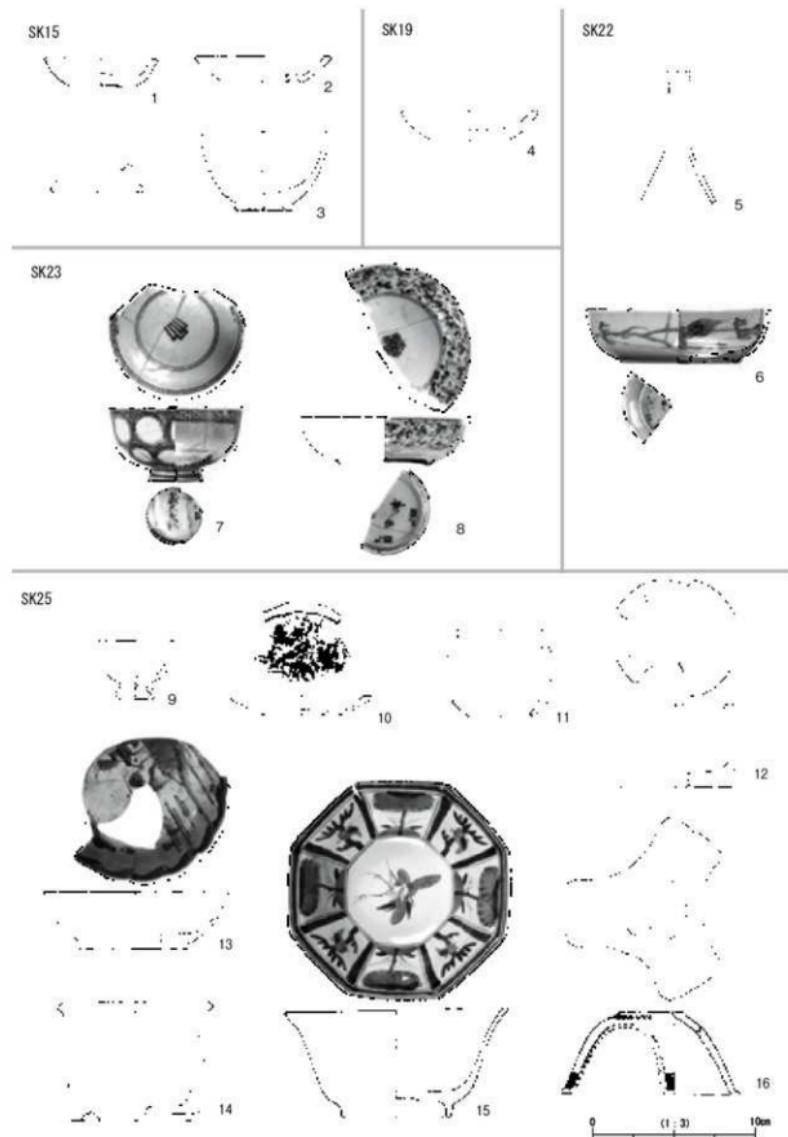


第111図 第2次面造構出土遺物 (SK02・SK03・SK04・SK07)



○出土遺物 観察表

番号	遺物名	性別	器形	胎土色	成形	給付・輪番	口径(cm)	高さ(cm)	外面文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定産地	推定年代	埋場No.	備考
1	SK15 土器	女	丸形	赤褐色 切	輪削	なし	9.2	2.5	5.3 銀縁ナデ板 黒縁、保付板	黒縁、保付板 黒縁、保付板	回転名切	在施系	不明	22		
2	SK15 土器	女	丸形	赤褐色 切	輪削	なし	—	2.5	— 銀縁ナデ板 黒縁	—	回転名切	在施系	近世	85	底部欠損	
3	SK15 陶器	男	丸形	灰褐色	輪削	—	6.3	4.6	割付ナデ板 黒縁	銀縁	削り出し三 月島台	肥前系	1580～ 1610	20	古伊津、二次貯 熱?	
4	SK19 土器	女	丸形	灰褐色 切	輪削	なし	—	2.6	6.3 銀縁ナデ板 黒縁、保付板 黒縁	銀縁ナデ板 黒縁、保付板	回転名切	在施系	不明	23		
5	SK22 陶器	女	丸形	白	輪削	透明白、上 部(小金)	—	—	—	口縁のみ施 白	—	—	肥前系	1780～ 1860	25	頭部以後横
6	SK22 陶器	女	丸形	白	輪削	凸縁、透明	—	4.1	— 火炎文	透明白文、火 炎文	透明白	肥前系	1780～ 1860	24	後継あり 朱文字・土人様	
7	SK23 陶器	中綱	丸形	白	輪削	凸縁、透明	11.1	6	4.6 雪輪文	四方博文	透明白内に圓 高台發付の 火炎文	肥前系	1690～ 1780	26	後継あり	
8	SK23 陶器	中綱	丸形	白	輪削	凸縁、透明	—	3.9	7.4 唐草文	唐草文	コニニガマ 印判五花文	高台發付移 付型、輪縁 内に「」・ 「」	肥前系	1690～ 1780	27	
9	SK25 陶器	小綱	馬上型	白	輪削	凸縁、透明	—	4.9	3.2 意匠に透視 文、透空文	輕幕文	施輪	高台輪面曲 線状	関西系	1820～ 1860	29	後継あり
10	SK25 陶器	小綱	香菸吹輪 花形	赤褐色	輪削	なし	—	1.7	4.6 銀縁ナデ板 輪花形	輪花形	菊葉堅葉文	唇筋形容	肥前系	19 c	32 天保融通窓御品 企	
11	SK25 土製品	ナムア 焼造	形	橙色	輪削 調整	なし	—	6.8	— 円形者と方 角者	ヘル、指押 捺付	—	—	在施系	近世	35	
12	SK25 陶器	小綱	虎口形	褐色	輪削	乳頭、自然	9.8	6.7	9.2 全面に施 輪、透自 然縁	輪	施輪	回転名切	越前系	18 c～ 1860	31	
13	SK25 陶器	輪質	輪花形	白	輪削	凸縁、透明	—	4.6	9.2 輪輪	透文繋き	山本文、家屋文 高台	肥前系	1780～ 1860	28	二次被熟あり	
14	SK25 陶器	植木形	玉網口輪 赤茶子	白褐色	輪削	白泥・銅錆	12.7	9.7	10.3 白化粧被施輪	中央、穴開 口	三方脚 白化粧	松代燒系	1810～ 1860	33		
15	SK25 陶器	跡	八角形	白	輪削	凸縁、透明	18.5	9.3	9 意仲吉文氣 輪	意仲吉文 輪	意仲吉圓 高台	肥前系	1780～ 1860	36	完品	
16	SK25 土製品	不明	三脚形	赤褐色	塑壓	なし	5.4	6.7	14.8 輪足圓面に 押捺し調整	透穴六周 底盤状凸縁	円形凹文	在施系	近世	37		

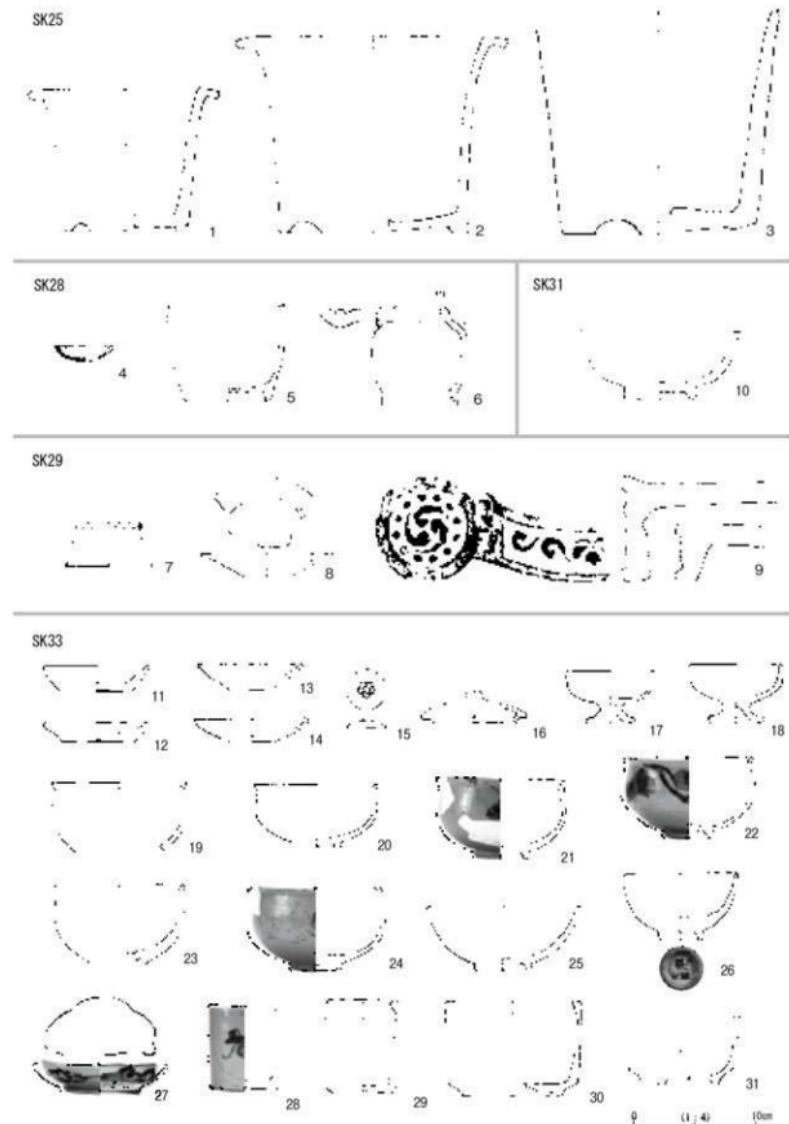


第12図 第2次面造構出土遺物 (SK15・SK19・SK22・SK23・SK25)



番号	通名	器種	形状	胎土色・特徴	成形	鉢径・高さ (cm)	底面	外側文様・内側文様	見出文様	高台文様	輪郭	推定产地	判定年代	整理番号	備考		
1	SK25	陶器	桶本鉢	折口平底形 暗茶色	削茶	15.7 11.3	10.1	虎足文(くま)のみ施 虎足文(くま)	虎足文(くま) 虎足文(くま)	高台・方唇 直腹	高台	松代後系統	18世紀～ 1860～	30			
2	SK26	陶器	桶本鉢	折口平底形 暗茶色、白粒子	削茶	22.3 16.5	15.2	虎足文(くま)のみ施 虎足文(くま)	虎足文(くま) 虎足文(くま)	高台・方唇 直腹	高台	松代後系統	18世紀～ 1860～	94			
3	SK27	土器	桶本鉢	折口平底形 暗茶色	削茶	—	なし	—	—	中央穴開き	直腹	在地系	近世	38			
4	SK28	器物	灰皿	扁平形 白	壓印模(白 模)	4.2 1.4	1.4	全体に扁 透明釉(白 模)	透明釉(白 模)	高台	高台	肥前系	17世紀～ 1780～	41			
5	SK29	器物	灰	器物底	白灰	—	—	白灰	白灰	高台	高台	肥前系付	17世紀～ 1780～	39	脚部上半破		
6	SK30	器物	灰花瓶	桶口形 白灰	削茶	—	—	—	—	高台	高台	波佐見系	17世紀～ 1780～	40	湖部より下・高 台内部欠損		
7	SK31	陶器	油滴器	折口平底形 暗茶色	削茶	—	—	—	—	高台	高台	伊賀名?	19世紀	42	下半部欠損		
8	SK32	陶器	油滴器	油滴形 灰白色	削茶	—	2.1	3.8	—	高台	高台	湖部	17世紀～ 1780～	43			
10	SK33	陶器	中碗	壓印形 灰白色	削茶	—	—	5.9	—	高台	高台	湖部	17世紀～ 1780～	44	口縁部欠損		
11	SK34	土器	手桶	压印形 赤褐色	削茶	—	2.6	5.8	—	高台	高台	在地系切	不明	75			
12	SK35	土器	手桶	手桶形 赤褐色	削茶	—	8.8	1.4	6.4	高台	高台	在地系	不明	70			
13	SK36	陶器	灯明器	平形 暗茶色	削茶	—	21	3.4	桶中手・施 桶中手・施	施	施	回転舟切	肥前系	1690～	56		
14	SK37	陶器	小瓶	器物底	油滴形 灰白色	削茶	9.6 2	2.1	—	—	—	在地系削り	湖口・美濃	17世紀～ 1780～	74		
15	SK38	土製品	土器	平形	壓印	—	0.9	3.2	表面に赤帯 赤帯	—	—	花がら状模 模	押押し	不明	近世	69	
16	SK39	陶器	灰皿	灰白色	削茶	8.7 2.5	8.5	6.8	器皿の底 器皿の底	施	施	湖口・美濃	1690～	64			
17	SK40	陶器	灰皿	灰白色	削茶	—	4.1	3.9	—	—	施	湖口・美濃	17世紀～ 1780～	63			
18	SK41	陶器	灰皿	灰白色	削茶	7.6 5	4.5	—	—	—	—	湖口・美濃	17世紀～ 1780～	62			
19	SK42	陶器	天目形	灰	削茶	—	—	—	—	施	施	湖口・美濃	17世紀～ 1780～	73	湖部・高台欠損		
20	SK43	陶器	小瓶	天目形	灰	削茶	—	5.4	4	施	施	削り出し高 台	湖口・美濃	17世紀～ 1780～	59		
21	SK44	陶器	天目形	灰	削茶	10.5 6.4	6.4	4.7	—	施	施	削り出し高 台	湖口・美濃	17世紀～ 1780～	72		
22	SK45	陶器	中西	天目形	灰	削茶	—	6.5	4.2	—	—	削り出し高 台	湖口・美濃	17世紀～ 1780～	57		
23	SK46	陶器	中碗	手揉形 灰白色	削茶	—	—	—	—	施	施	—	湖口・美濃	17世紀～ 1780～	60	湖部・高台欠損	
24	SK47	陶器	中碗	手揉形 灰白色	削茶	—	6.6	4.4	—	施	施	削り出し高 台	湖口・美濃	17世紀～ 1780～	58		
25	SK48	陶器	中碗	浅大形	灰	削茶	—	5.3	4.5	—	—	削り出し高 台	湖口・美濃	17世紀～ 1780～	61	御茶碗	
26	SK49	手組器	小瓶	丸形	灰白色	削茶	9.3 5.4	5.4	3.3	透文・施 透文・施	施	施	波佐見系	17世紀～ 18世紀	48		
27	SK50	手組器	小瓶	丸形	白	削茶	—	2.3	—	透文	—	—	高台内部に 施	肥前系	1690～	50	
28	SK51	器物	灰吹	筒形	白	削茶	—	6.9	5.8	透文	—	—	施	肥前系	17世紀～ 1780～	52	
29	SK52	器物	灰吹	筒形	灰白色	削茶	5.9 7.6	4.7	—	虎足文(くま) 虎足文(くま)	施	施	肥前系	17世紀～ 1780～	71		
30	SK53	器物	灰火	筒形	灰白色	削茶	10.9 7.8	8.3	—	—	—	—	肥前系	17世紀～ 1780～	53		
31	SK54	陶器	灰呑	筒形、二 灰呑	削茶	—	6.1	—	全周に施	虎足文(くま) 虎足文(くま)	施	施	肥前系	1690～	65		

番号	通名	器種	形状	胎土色・特徴	鉢径 (cm)	底面 (cm)	文様	透文年代	整理番号	備考
9	SK29	灰	斜口	白灰	8.5	—	—	—	—	—

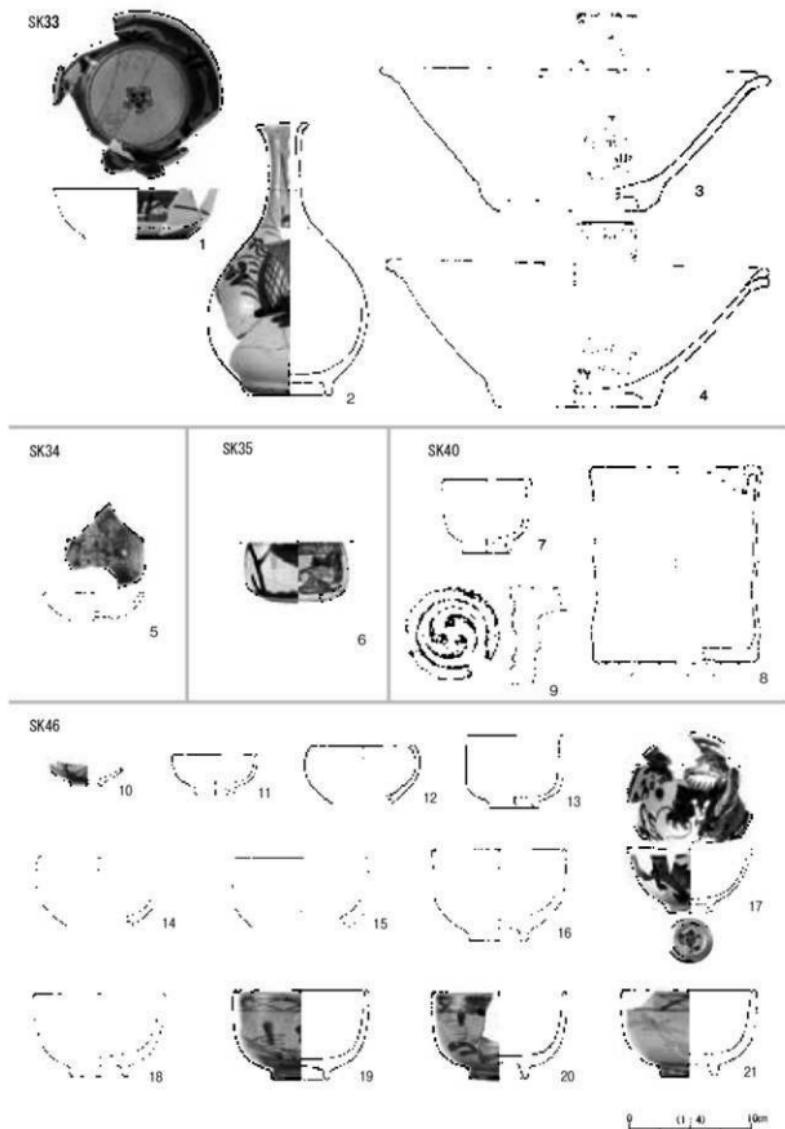


第13図 第2次面造模出土遺物 (SK25・SK28・SK29・SK31・SK33)



番号	遺物名	器種	形状	胎土色・特徴	成形	輪郭・輪裏	口径(cm)	底面積(cm²)	高さ(cm)	外表面種・特徴	見面文様・特徴	裏面文様・特徴	高台付・特徴	施釉	埋没代	埋没No.	備考		
1	SK33	鉢	丸形	灰褐色	壓縮	凸筋・透明釉	13.8	4.0	8.5	唐草文	草樹文	唐草内に草葉・青花文	側面凸筋	側面凸筋	肥前系	1780~1860	49		
2	SK33	鉢	中板	舟形	白	壓縮	凸筋・透明釉	21.9	4.2	7.3	花葉文	口縁のみ施釉	高台付の 内側施釉、移 付	高台付の 内側施釉、移 付	肥前系	1690~1780	51		
3	SK33	陶器	鉢	高台付舟 口	灰	叩き壓縮 繩子ナマ	鉢底	32.8	11.4	12.5	高台付近ま で施釉	施釉状掠り 目	施釉状掠り 目・内側に 施釉	全周に移付 の跡	肥前系	1750~1860	54		
4	SK33	陶器	鉢	高台付舟 口	赤褐色	叩き壓 繩子ナマ	鉢底	31.6	11.7	13.3	全面に施釉	施釉状掠り 目・内側に 施釉	高台付舟の 内側施釉	高台付舟の 内側施釉	肥前系	1750~1860	55		
5	SK34	鉢	半球形	白	無施	凸筋・透明	—	—	—	唐草文・草 文	四方博文	—	—	—	肥前系	1750~ 1860	76	底部、高台欠損	
6	SK35	低器	小皿	圓切四方	白ガラス質	型押し 繩子ナマ	透明釉(白 化)	—	2.3	3.8	施釉	花葉刷文	高台付舟の 内側施釉	高台付舟の 内側施釉	高台付舟の 内側施釉	肥前系	1870~ 1890	77	
7	SK40	鉢	小碗	舟丸形	白	無施	凸筋・透明	—	6.1	3.8	幅刷文	施釉	—	—	—	肥前系	1840~ 1870	86	
8	SK40	執事陶	盃	舟形	青灰色	ヘルメ ト	鉢底	14.1	17.1	—	全面に施 釉	五筋状突起	一部施釉	露筋・足付	京焼系	1750~ 1860	87	芭蕉道の座卓	
10	SK46	鉢	小碗	浅平球形	白	無施	凸筋・透明	—	—	25	菊花文・木 文	施釉	高台付舟の 内側施釉	高台付舟の 内側施釉	肥前系	1690~ 1780	101	口縁部欠損	
11	SK46	陶器	小碗	舟形	青白色	無施	凸筋	6.9	3.2	31	高台付舟近 ままで施釉	施釉	施釉	露筋出し高 台付	高台付舟の 内側施釉	芭羅・美濃 系	1780~ 1860	110	
12	SK46	陶器	茶漬	舟形たん ころぎ	水褐色	無施	鉢底	8.0~ 8.8	—	—	施釉	施釉	—	—	—	肥前系	1780~ 1860	107	底部、高台欠損
13	SK46	陶器	小碗	腰張形	灰褐色	無施	(激 化)	7.7	6.1	4.0	口縁部分のみ 施釉、内側部 に露筋、移付	施釉	施釉	高台付舟の 内側施釉	芭羅・美濃 系	1780~ 1860	109	芭茶碗	
14	SK46	鉢	小皿	輪花形	白	無施	凸筋・透明 型押し 繩子ナマ	—	2.3	—	唐草文	花唐草文	高台付舟の 内側施釉	—	肥前系	1690~ 1780	102		
14	SK46	陶器	中碗	丸形	紺灰	無施	白釉	—	—	—	施釉	—	—	—	萩焼系	18~ 19 c	119		
15	SK46	陶器	中碗	瘤反形	黄褐色	無施	凸筋	—	—	—	施釉	—	—	—	芭羅・美濃 系	1780~ 1860	117		
16	SK46	陶器	中碗	瘤反形	黄褐色	無施	鉢底・凸筋	11.0	7.5	4.7	鉢底・高台 付舟の内側施 釉	施釉	施釉	高台付舟・ 高台内露筋	芭羅・美濃 系	1780~ 1860	118		
17	SK46	鉢	中碗	丸形	白	無施	凸筋・透明	10.3	5.4	3.8	唐草文	雲龍文・火 文	高台内部に 露筋	肥前系	1700~ 1790	99			
18	SK46	半鉢	中碗	腰張形	灰	無施	鉢底・透明	—	6.8	4.7	柳木文	施釉	高台付舟の 内側施釉、移 付	高台付舟の 内側施釉、移 付	肥前系	1680~ 1810	103		
19	SK46	半鉢	中碗	腰張形	灰	無施	凸筋・透明	—	7.1	4.5	四方博文・ 柳木文	施釉	施釉	高台付舟の 内側施釉、移 付	高台付舟の 内側施釉、移 付	肥前系	1680~ 1810	104	
20	SK46	半鉢	中碗	腰張形	灰	無施	凸筋・透明	—	7.1	4.7	四方博文・ 柳木文	施釉	施釉	高台付舟の 内側施釉、移 付	高台付舟の 内側施釉、移 付	肥前系	1680~ 1810	105	
21	SK46	半鉢	中碗	腰張形	灰	無施	凸筋・透明	—	7.1	4.5	四方博文・ 柳木文	施釉	施釉	高台付舟の 内側施釉、移 付	高台付舟の 内側施釉、移 付	肥前系	1680~ 1810	106	

番号	遺物名	器種	形状	胎土色・特徴	施釉	底面積(cm²)	高さ(cm)	文様	埋没代	埋没No.	備考
9	SK40	瓦	軒瓦瓦	灰	—	8.2	—	2.2	—	—	—



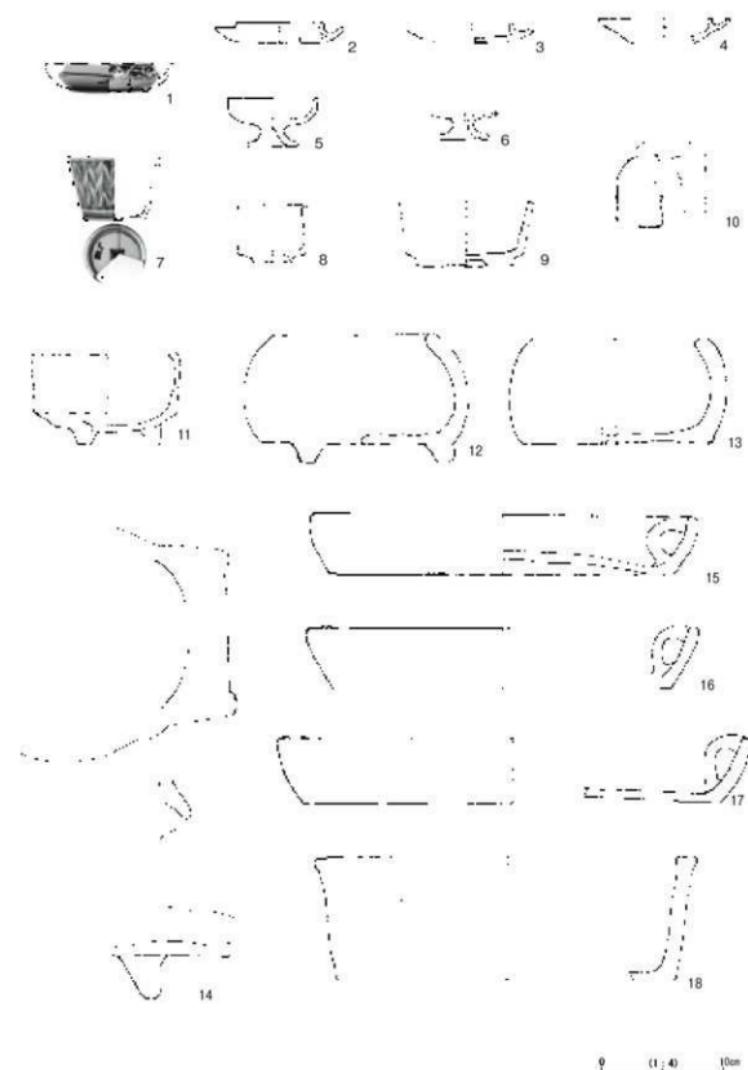
第14図 第2次面造構出土遺物 (SK33・SK34・SK35・SK40・SK46)



番号	遺物名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	成形法	給付・釉薬	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	外表面文様・特徴	内面文様・特徴	見当文様・特徴	高台文様・特徴	推定座地	算定年数	整理No.	備考	
1	SK46	器物	小皿	輪花形	白	織錦、引領、透明	—	2.3	—	唐草文	花口草文	織錦	高台付の み織錦	肥前系	1690 ~ 1780	102			
2	SK46	陶器	直口盤	油滴形	灰褐色	織錦	鉢袖	—	1.6	底部丸くま で施錦	施錦	施錦	施錦	油口・美濃 系	1750 ~ 1800	115			
3	SK46	陶器	直口盤	油滴形	灰白色	織錦	鉢袖	—	1.6	施錦	施錦	施錦	施錦	油口・美濃 系	1750 ~ 1800	116			
4	SK46	瓶	直口受	一	赤褐色	織錦	なし	—	—	織錦ナデ直 口受	—	—	—	肥前系	1780 ~ 1860	108	底部欠損		
5	SK46	陶器	仏腹器	台付丸形	黄褐色	織錦	灰袖	—	4.1	右付迄まで 施錦	施錦	施錦	施錦	油口・中央 丸	1700 ~ 1780	113			
6	SK46	陶器	仏腹器	台付丸形	黄褐色	織錦	灰袖	—	—	左付迄まで 施錦	施錦	施錦	施錦	油口・中央 丸	1700 ~ 1780	114	口縁部欠損		
7	SK46	器皿	窓口	筒形	白	織錦	鉢袖・透明 糊	7.5	5.4	4.9	矢羽文	施錦	施錦	施錦内に角 線	肥前系	1740 ~ 1780	100		
8	SK46	陶器	香炉	筒形	灰白色	織錦	灰袖	5.8	4.6	3.3	糊下まで施 織錦のみ施	施錦	施錦	施錦	油口・美濃 系	1680 ~ 1780	112		
9	SK46	器皿	火入	筒形	灰白色	織錦	—	—	8.1	高台付で施 錦	施錦	施錦	施錦	肥前系	1780 ~ 1860	98	口縁部欠損		
11	SK46	陶器	香炉	筒形、二 足付	灰褐色	織錦	鉢袖・長 脚	12.1	7.2	8.4	右袖に角 線のみ施	施錦・糊 付	施錦	施錦付	油口・美濃 系	1690 ~ 1780	111		
12	SK46	土器	植木鉢	三足丸形	赤褐色	織錦	糊付	なし	13.0	10.7	15.1	上部と下部 糊付	織錦ナデ直 中央孔開き	平底に足貼 付	在地系	近世	120		
13	SK46	土器	植木鉢	三足丸形	赤褐色	織錦	糊付	なし	14.5	—	15.6	上部と下部 糊付	織錦ナデ直 中央孔開き	平底に足貼 付	在地系	近世	121	足部欠損、擦 り切?	
14	SK46	土器	壺	足付き口 口形	赤褐色、 織錦	糊付	板付、 糊付	なし	—	—	糊付、口 上部に糊付 板付	全体に糊付 板付	糊付	平底に足貼 付	不明	近世	122	口部のみ糊 付、糊付用合 せ	
15	SK46	土器	壺	内耳形	赤褐色	織錦	糊付	なし	32.7	4.7	29.2	糊付	糊付ナデ付	糊付	平底・糊付 板付	不明	近世	127	完形品
16	SK46	土器	壺	内耳形	赤褐色	織錦	糊付	なし	—	5.2	—	糊付、糊付 板付	糊付ナデ 糊付	糊付	平底・糊付 板付	不明	近世	126	
17	SK46	土器	壺	内耳形	赤褐色	織錦	糊付	なし	33.1	5.7	28.0	糊付	糊付ナデ付	糊付	平底・糊付 板付	不明	近世	125	
18	SK46	土器	盆	蝶形	赤褐色、 織錦	糊付	糊付	なし	—	10.0	—	糊削り調整	糊付ナデ直	—	平底	不明	不明	124	

番号	遺物名	類別	器種	形状	胎土色・特徴	釉薬	液相 (cm)	情報 (cm)	厚さ (cm)	文様	推定年代	整理No.	備考
10	SK46	瓦	輪瓦	輪瓦	赤褐色	—	—	—	1.8	不明	不明	不明	

SK46

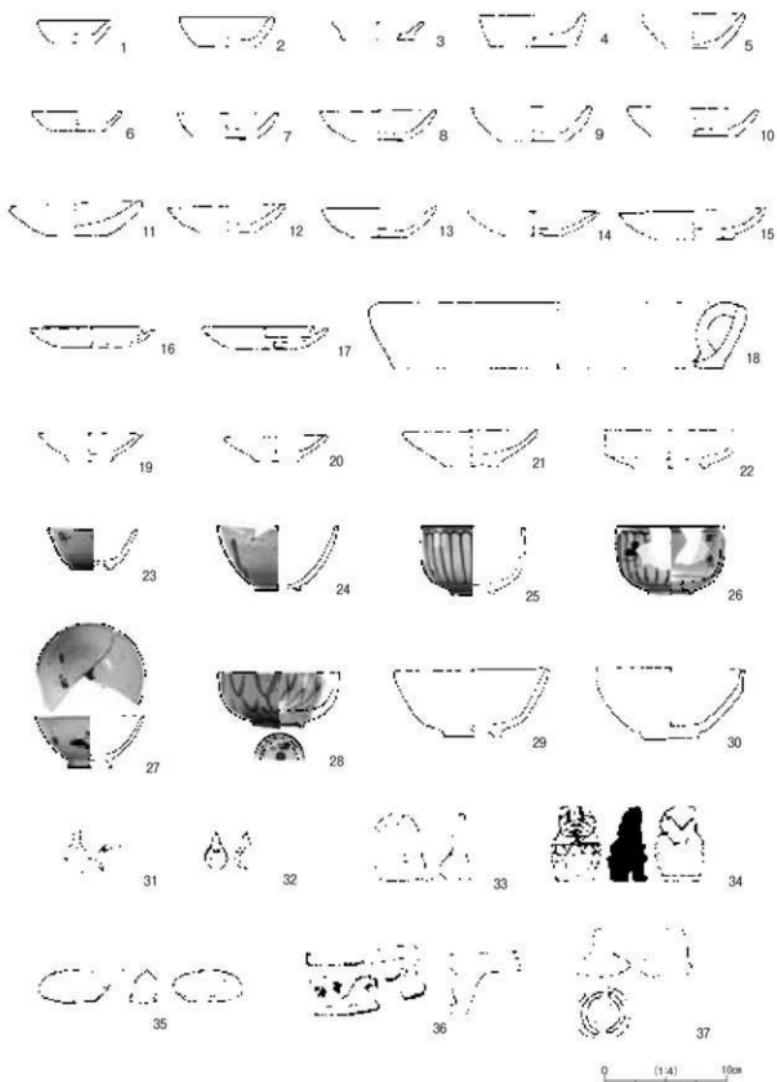


第15図 第2次面造構出土遺物 (SK46)



番号	種類	形態	形状	胎土色・特徴	寸法	断面寸法	内面文様・特徴	外見文様・特徴	産地	時代	説明	
1	碗	上口幅	丸形	赤褐色	—	1.9	3.8	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	円形底面	不明	267
2	碗	上口幅	丸形	灰褐色	—	2.3	4.6	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	254
3	碗	上口幅	楕円形	灰褐色	—	1.5	—	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	—	不明	225
4	碗	上口幅	丸形	灰褐色	—	2.6	—	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	253
5	碗	上口幅	丸形	灰褐色	8.3	2.9	4.1	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	232
6	碗	上口幅	丸形	灰褐色	—	1.5	4.5	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	234
7	碗	上口幅	丸形	灰褐色	7.9	2.1	—	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	231
8	碗	上口幅	丸形	灰褐色	9.4	2.5	4.6	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	229
9	碗	上口幅	楕円形	灰褐色	9.7	2.7	5.4	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	251
10	碗	上口幅	丸形	灰褐色	10.6	2.6	7.2	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	268
11	碗	上口幅	丸形	灰褐色	11.1	2.7	4.7	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	224
12	碗	上口幅	丸形	灰褐色	9.3	2.3	4.5	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	252
13	碗	上口幅	楕円形	灰褐色	9.3	2.5	4.5	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	233
14	碗	上口幅	丸形	灰褐色	—	2	4.8	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	236
15	碗	上口幅	丸形	灰褐色	12.4	2.4	6.7	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	229
16	碗	上口幅	丸形	灰褐色	10.3	1.8	—	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	263
17	碗	上口幅	楕円形	灰褐色	—	1.7	5.1	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	249
18	碗	上口幅	丸形	灰褐色	—	3.3	—	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	273
19	碗	小皿	平盤形	灰褐色	—	2.5	3.7	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	249
20	碗	小皿	平盤形	灰褐色	11.2	2.2	4.1	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	265
21	碗	小皿	平盤形	灰褐色	8.8	2.1	3.7	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	265
22	碗	小皿	平盤形	灰褐色	—	3.1	—	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	249
23	碗	小皿	楕円形	白ガラ	7.3	3.4	3.5	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	248
24	碗	小皿	平盤形	灰褐色	—	5.4	3.8	若松文	若松文	輪縁ナガボ	不明	264
25	碗	小皿	平盤形	灰褐色	—	5.3	3.7	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	242
26	碗	小皿	平盤形	白	輪縁ナガボ	—	—	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	228
27	碗	小皿	丸形	白	輪縁ナガボ	—	—	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	241
28	碗	小皿	楕円形	白ガラ	8.9	4.2	3.6	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	249
29	碗	中皿	圓形	灰褐色	—	4.8	3.7	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	239
30	碗	中皿	圓形	白灰	11.9	3.9	4.5	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	輪縁ナガボ	不明	227
31	土製品	土器	一	灰褐色	—	—	—	土器	土器	土器	不明	256
32	土製品	土器	一	灰褐色	—	—	—	土器	土器	土器	不明	257
33	土製品	人形	土器	灰褐色	—	—	—	土器	土器	土器	不明	257
34	土製品	人形	土器	灰褐色	—	—	—	土器	土器	土器	不明	257
35	土製品	人形	土器	灰褐色	—	—	—	土器	土器	土器	不明	256
36	土製品	人形	土器	灰褐色	—	—	—	土器	土器	土器	不明	257
37	土器	輪突形	円形	灰褐色	—	—	—	内側に火炎	内側に火炎	内側に火炎	不明	237

番号	種類	形態	形状	胎土色・特徴	寸法	断面寸法	内面文様	外見文様	産地	時代	説明	
26	碗	中皿	丸形	灰褐色	4.9	—	1.8	輪縁ナガボ(中央部)	輪縁ナガボ(中央部)	輪縁ナガボ(中央部)	不明	227



第16図 第2次面造横外 出土遺物

○第3次遺構検出面

遺構の概要

主な遺構概要 3次面では、古墳時代から江戸時代前期までの幅広い時期の遺構が確認された。主な遺構は、古墳時代の竪穴住居跡、中世の溝跡、近世の土坑などである。土坑は、江戸期前期に比定される遺構が主となり、一部に中世末と考えられる土坑も存在する。土坑内には掘立柱の据え石（礎石）と想定されるものや、多量の炭化物が混入するものを確認している。

古墳時代の遺構 古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡が2棟検出された。1号竪穴住居跡（SB01）は北西方向に主軸をとる長方形の住居跡であり、東半部は調査区外にかかる。床面は黄褐色粘土を貼り床とし、北壁にカマドを有する。出土遺物より古墳時代後期の所産と想定される。2号竪穴住居跡（SB02）は、1辺が3.6m内外の方形住居跡と思われるが、西半部が近代の搅乱によって改変されており、平面形は判然としない。北壁際に高环坏部2個体が完形で出土しており、古墳前期に属すると考えられる。

中世の遺構 調査区南西部に東西に延びる溝跡を確認した。溝跡南部は調査区外にかかるので、幅は不明である。近世以降の改変によって形状は判然としないが、南宋から明時代の輸入磁器が出土しており、中世後期の遺構と判断される。また、SK38など中世末の遺物を一定量包含する土坑もあるが、江戸時代初期の陶磁器も出土しており、明確な中世土坑は看取されない。

近世の遺構 3次面では、18基の土坑（2次面から続く土坑を除く）を確認した。検出された土坑は、出土遺物より江戸時代初期から前期に属する遺構と考えられる。SK43・SK47では、土坑内に多量の五輪塔が埋没しており、廢棄・転用されたものと思われる。

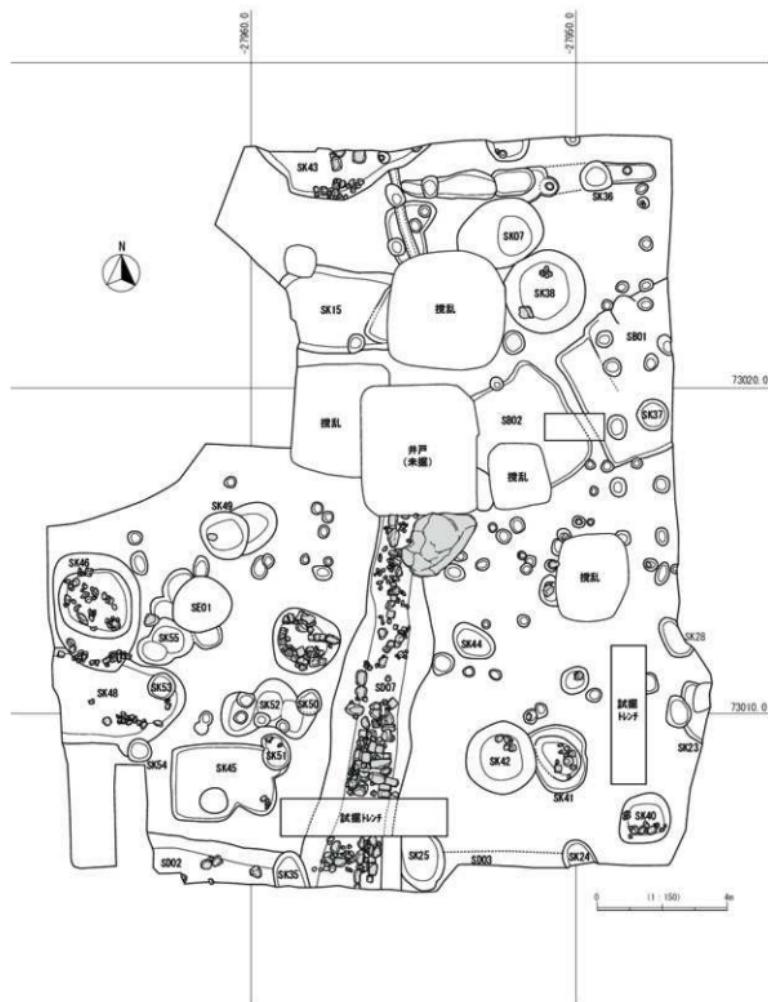
出土遺物の概要

古墳時代の遺物（SB01,02） 1号竪穴住居跡（SB01）からは土師器壊破片1点が出土。古墳時代後期の製品とみられる。2号竪穴住居跡（SB02）からは土師器壊破片1点と脚部が欠損した土師器高环2点が出土。古墳時代前期に比定される。

中世溝跡（SD02） 竜泉窯系青磁破片が2点と、かわらけ2点が出土している。竜泉窯系青磁破片のうち1点は蓮弁文碗の底部で、豊付が露胎であることから南宋から元時代にかけての製品（図18-6）と思われる。もう1点は鉢の底部で、高台豊付にも施釉され、高台内が釉剥ぎされる明時代の製品（図18-7）である。

中世～近世の土坑・溝跡（SK36～39,41～45,47～56,SD07） SK38からは瀬戸・美濃系陶器碗3点、肥前系陶器3点と古墳時代土師器1点が出土している。瀬戸・美濃系陶器碗は鉄軸の丸形碗（図19-5）と天目形碗（図19-2）、長石釉の筒形碗（図19-4）で、後者は志野茶碗に多く見られる歪みや歪みが殆ど見られない。初期の瀬戸黒茶碗に見られるような均整な形状をしていることから、桃山期の大窯後期に属する製品と推定される。肥前系陶器は大橋編年Ⅱ期（1600～1650年代）に比定される砂目積灰釉小皿（図19-1）と大橋編年Ⅲ期（1650～1690年代）に比定される異形灰釉碗、具須絵京焼風陶器碗の3点である。SK39・SK41からは、それぞれかわらけが1点ずつ出土している。SK43からは、かわらけ5点が出土している。内4点が口縁部を欠損している。煤付着などはいずれも見られない。SK44からは瀬戸・美濃系鉄軸丸形小皿1点の出土である。瀬戸窯連房式登窯第1段階（1610～17世紀後葉）の製品と見られる。SK45からは肥前系陶器2点が出土しており、大橋編年Ⅰ期（1580～1610年代）に比定される灰釉小皿と大橋編年Ⅱ～Ⅲ期（1650～1780年代）に比定される櫛描皿破片が確認される。他1点かわらけを含む。SK47からは、かわらけ5点が出土した。近世の製品とみられる。SK49からは、かわらけ2点が出土しており、1点は口縁部などに煤が付着していることから、灯明皿と考えられる。

SK55からは口縁直径が約8cmの小型のかわらけが出土している。SD07からは土器鍋破片2点とかわらけ3点が出土している。



第17図 第3次面造構築出面 調査平面図



第3次遺構検出面（北東より）



第3次遺構検出面南半（西より）



古墳時代の竪穴住居跡
(SB01)



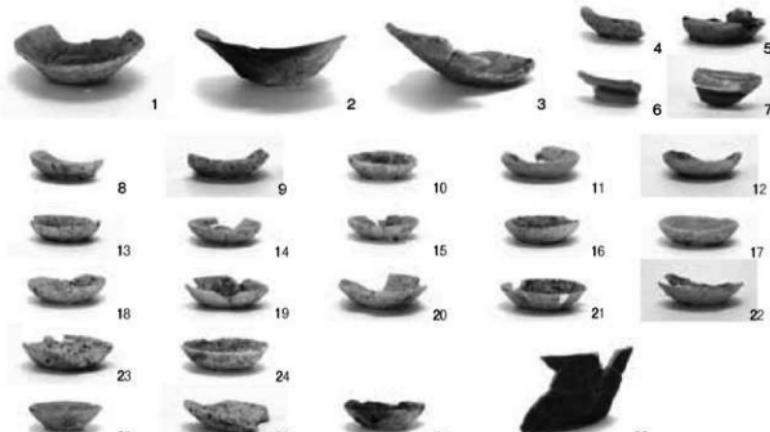
溝跡
(SD07)



SK41・SK42

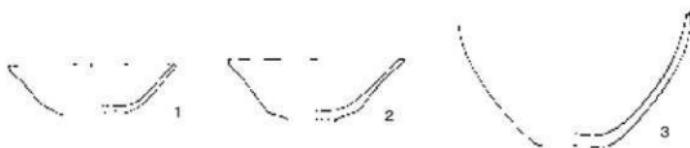


SK46



番号	遺物名	種別	基盤	形状	陶土色・特徴	成形法	断面	口径(cm)	最高(cm)	底径(cm)	外因文様・特徴	内因文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定年度	整理No	備考	
1	S82	土器	土師窯高丸	横折形	赤褐色土、薄手・砂利	輪投込み・削り	なし	13.8	—	—	縫合部に調査用 糊付	縫合部に調査用 糊付	出抜調整	—	在地系	6c~7c	210 脚部欠損	
2	S82	土器	土器	横折形及 灰褐色丸	赤褐色土、薄手・砂利	輪投込み・削り	なし	—	—	—	縫合部に調査用 糊付	縫合部に調査用 糊付	出抜調整	—	在地系	6c~7c	211 脚部欠損	
3	S82	土器	土器	一	灰褐色土、砂利	輪投込み・削り	なし	—	6.1	—	縫合部に調査用 糊付	縫合部に調査用 糊付	削り調整	—	在地系	6c~7c	209 脚部上半欠損	
4	S82	土器	丸形	赤褐色土	輪投込み・削り	なし	—	1.7	—	—	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	—	—	在地系	中唐?	188	
5	S82	土器	かわら け小皿	近台形底 粗灰色	赤褐色土	輪投込み・削り	なし	9.9	2.7	7.1	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	南ナデ跡、縫合部切 付着	—	在地系	不明	190	
6	S82	細器	網	一	灰	青磁釉	—	—	—	—	高台まで施釉	—	高台まで施釉	高台まで施釉	不明	187	南北朝代電葉 網	
7	S82	細器	鉢?	一	灰	輪縁	青磁釉	—	—	—	高台まで施釉	—	高台	—	在地系	12c~ 13c末	187 空身器	
8	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	8.5	2.1	5.1	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	191	
9	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	—	2	4.9	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	194 全体に匯状付 着物	
10	S83	土器	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	8.1	2.1	5.2	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	200 全体に匯状付 着物		
11	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	8	2.1	4.6	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	192	
12	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	8.1	2	4.8	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	193 全体に匯状付 着物	
13	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	8.4	2.2	5.5	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	198 全体に匯状付 着物	
14	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	8.1	1.9	4.3	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	205 全体に匯状付 着物	
15	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	8.2	2.1	4.7	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	199 全体に匯状付 着物	
16	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	8.3	2.1	4.9	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	202 全体に匯状付 着物	
17	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	8.5	2	5.5	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	203 全体に匯状付 着物	
18	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	8.6	2.1	4.9	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	208 全体に匯状付 着物	
19	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	11.3	2.6	5.9	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	206 全体に匯状付 着物	
20	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	11.3	2.8	5.8	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	196 一部に匯状付 着物	
21	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	11.6	2.9	5.9	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	206 全体に匯状付 着物	
22	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	11.2	3.1	6	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	195 全体に匯状付 着物	
23	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	12	3.1	6.3	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	207 全体に匯状付 着物	
24	S83	土器	かわら け小皿	丸形	粗灰色	輪縁ナデ直	なし	12.3	3.1	6.4	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	15c末 16c	197 全体に匯状付 着物	
25	S87	土器	かわら け小皿	近台形	赤褐色	輪縁	なし	6.6	1.9	3.2	口縁部に横溝 付	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	—	—	在地系	不明	184 全体に表面剥 落
26	S87	土器	かわら け小皿	平形	灰褐色	輪縁	なし	—	1.5	—	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	輪縁ナデ直	回転糸切	在地系	不明	185	
27	S87	土器	かわら け小皿	丸形	赤褐色	輪縁	なし	8.7	2.2	4.2	輪縁ナデ直 粗底付	輪縁ナデ直 粗底付	輪縁ナデ直 粗底付	回転糸切、縫合 付着	在地系	不明	186	
28	S87	土器	網	平底舟形	赤褐色 ・ナデ	輪縁	なし	—	—	—	縫合部に横溝 付	縫合部に横溝 付	縫合部調整	縫合付	板底	在地系	不明	182

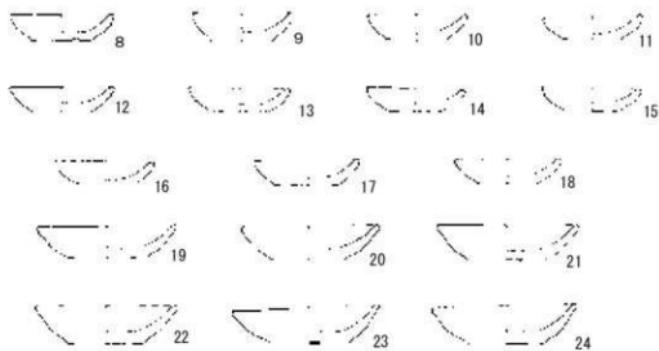
SB02



SD02



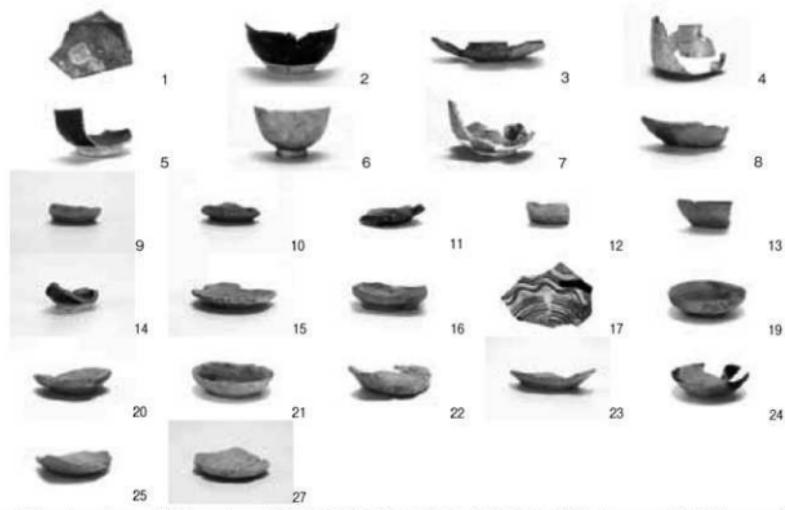
SD03



SD07



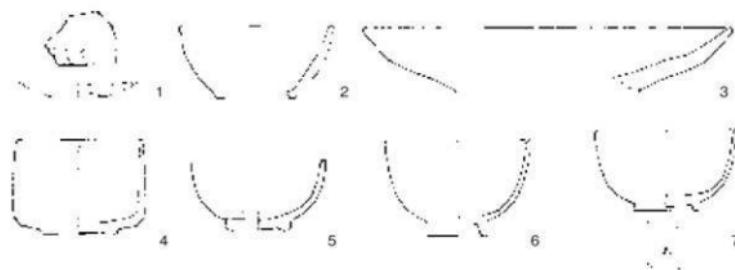
第18図 第3次面造構出土遺物 (SB02・SD02・SD03・SD07)



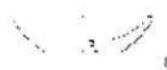
番号	構造名	判別	器種	形状	胎土色・特徴	成形	輪廓	口径 (cm)	底面 (cm)	外觀文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定場所	推定年代	整理No.	備考			
1	SK38	陶器	小皿	—	稍灰色	模壓	压輪	—	—	底部に波立み に施釉	—	施釉・砂目あ	高台付付口付 有	肥前系	1580～ 1650	78	古伊万里			
2	SK38	陶器	中碗	天目形	灰白色	模壓	压輪	—	—	腰下まで施釉	施釉	施釉	—	肥戸・美濃 系	1610～ 1650	82	筑窯・高台灰			
3	SK38	土器	土器	腰折形	暗茶	模壓	引	—	—	口縁部に横筋 をもつ	—	—	—	在地系	6.5～ 7cm	84	筑窯・高台灰			
4	SK38	陶器	中碗	舟形	稍灰色	模壓	長石釉	—	7.6	高台付付口付まで 施釉	施釉	施釉	高台まで施釉者 の少いもの	肥戸・美濃 系	1580～ 1650	83	古伊万里			
5	SK38	陶器	中碗	丸形	灰白色	模壓	压輪	—	—	4.9	高台付付口付まで 施釉	施釉	施釉	肥戸・美濃 系	1610～ 1670	81	口縁部欠損			
6	SK38	陶器	中碗	器形器	灰褐色	模壓	压輪	—	—	7.9	高台付付口付まで 施釉	施釉	施釉	肥戸・美濃 系	1610～ 1690	79	筑窯・高台灰			
7	SK38	陶器	中碗	腰張形	灰白色	模壓	引目・通 用形	—	—	6.5	引目施釉・高台 付付口付まで施釉	施釉	施釉	高台内部に削 印	肥前系	1650～ 1690	80	肥前系京風 陶器		
8	SK41	土器	かわら け小皿	丸形	小褐色	模壓	引	—	—	—	模壓ナデ底	模壓ナデ底	—	回転赤切	在地系	不明	88			
9	SK45	土器	かわら け小皿	—	黄灰色	模壓	引	—	—	—	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	在地系	不明	92	口縁部欠損		
10	SK42	土器	かわら け小皿	—	赤褐色	模壓	引	—	—	—	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	在地系	不明	91	口縁部欠損		
11	SK42	土器	かわら け小皿	—	暗茶	模壓	引	—	—	—	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	在地系	不明	90	口縁部欠損		
12	SK42	土器	かわら け小皿	—	黄灰色	模壓	引	—	—	—	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	在地系	不明	93	口縁部欠損		
13	SK42	土器	かわら け小皿	丸形	赤褐色	模壓	引	—	—	—	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	在地系	不明	89	—		
14	SK44	陶器	小皿	丸形	灰褐色	模壓	压輪	—	—	2.8	腰下まで施釉	施釉	施釉	削り出し高台 有	肥戸・美濃 系	1650～ 1690	94	口縁部欠損		
15	SK45	土器	かわら け小皿	—	稍灰色	模壓	引	—	—	4.5	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	在地系	不明	97	口縁部欠損		
16	SK45	陶器	碗	—	稍灰色	模壓	压輪	—	—	4.9	高台付付口付まで 施釉	施釉	施釉	高台付付口付 有	肥前系	1580～ 1610	95	口縁部欠損		
17	SK45	陶器	—	暗茶	模壓	引	—	—	—	4.7	高台付付口付まで 施釉	施釉	施釉	削り出し高台 有	肥前系	1650～ 1670	96	口縁部欠損		
19	SK47	土器	かわら け小皿	腰内折形	稍灰色	模壓	引	—	—	8.5	24.4	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	回転赤切	在地系	不明	128		
20	SK47	土器	かわら け小皿	高台状底	灰褐色	模壓	引	—	—	—	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	在地系	不明	132	—		
21	SK47	土器	かわら け小皿	腰内折形	灰褐色	模壓	引	—	—	10.6	25.6	4.4	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	回転赤切	在地系	不明	129	
22	SK47	土器	かわら け小皿	腰反形	灰褐色	模壓	引	—	—	3.1	6.5	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	在地系	不明	130	—	
23	SK47	土器	かわら け小皿	直口形	灰褐色	模壓	引	—	—	—	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	回転赤切	在地系	不明	131	—	
24	SK49	土器	かわら け小皿	丸形	灰褐色	模壓	引	—	—	—	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	回転赤切	在地系	不明	133	打明細小	
25	SK49	土器	かわら け小皿	丸形	灰褐色	模壓	引	—	—	—	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	回転赤切	在地系	不明	134	—	
27	SK55	土器	かわら け小皿	浅丸形	灰褐色	模壓	引	—	—	7.9	13.5.2	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	模壓ナデ底	回転赤切	在地系	不明	135	—

番号	構造名	判別	種類	形状	胎土色・特徴	輪廓	幅幅 (cm)	厚さ (cm)	文様	推定年代	整理No.	備考
18	SK45	石鍋	碗	—	—	—	26	3.0	—	不明	—	—
26	SK51	瓦	軒瓦	—	灰	—	8.0	—	巴文	不明	—	—

SK38



SK41



SK43



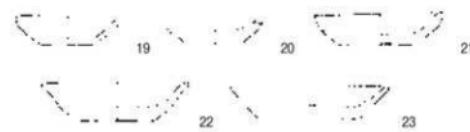
SK44



SK45



SK47



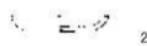
SK49



SK51

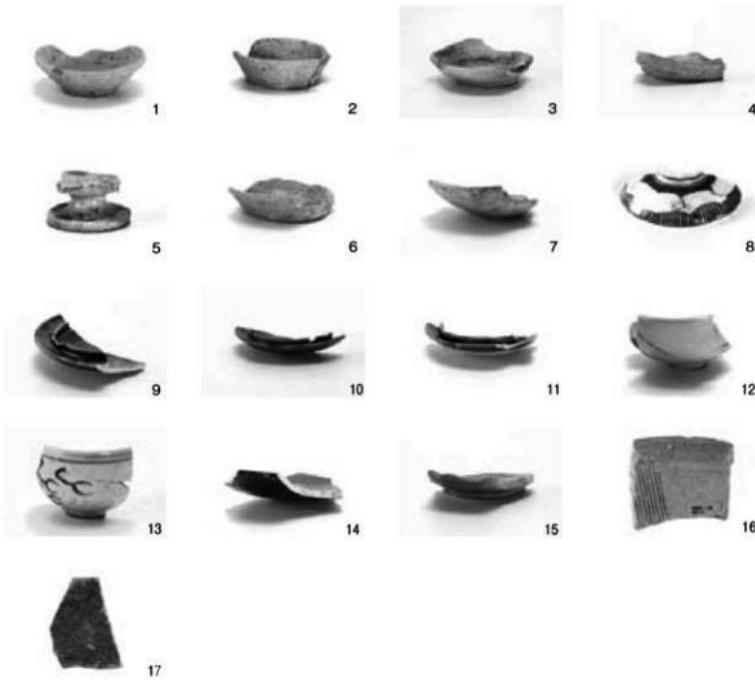


SK55



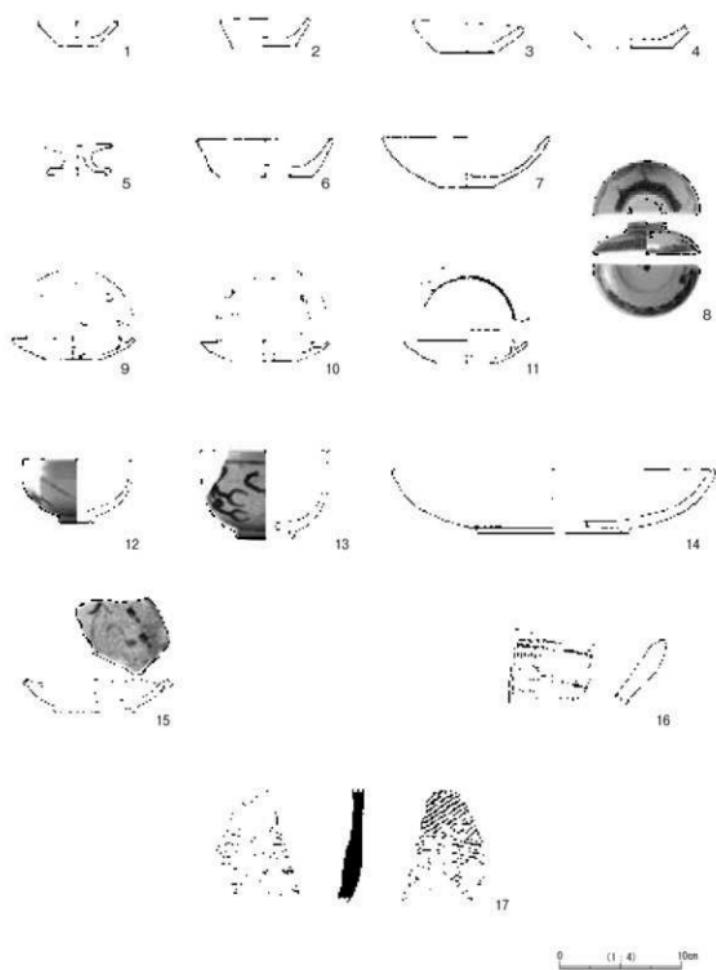
0 (1:4) 10cm

第19図 第3次面退模出土遺物
(SK38・SK41・SK43・SK44・SK45・SK47・SK49・SK51・SK55)



○出土遺物 観察表

番号	遺物名	類別	器種	形状	主な色 目	成形	釉面	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	外文様 有無	内文様 有無	見込文様 有無	高台文様 有無	推定產地	時代 層位	整理 No.	備考
1	検出面	土器	かわらけ 盤小皿	丸形	碧灰褐色	織錦捺 壓切	なし	6.5	1.9	—	織錦ナデ直	織錦ナデ直	回転捺切	在地系	不明	283		
2	検出面	土器	かわらけ 盤小皿	楕形	碧色	織錦捺 壓切	なし	7.3	2.2	5.2	織錦ナデ直	織錦ナデ直	回転捺切	在地系	不明	290		
3	検出面	土器	かわらけ 盤小皿	丸形	碧灰白色	織錦捺 壓切	なし	8.8	2.7	5.5	織錦ナデ直	織錦ナデ直	回転捺切	在地系	不明	289		
4	検出面	陶器	不明	平底形	碧灰白色	織錦捺 壓切	鉄輪	—	—	—	—	—	—	—	廻口・美濃 底丸?	不明	287	底部破片
5	トレン	陶器	仏龕器	台形及 圓形	黃灰色	織錦	灰釉	—	4.7	台付近まで 施釉	—	—	—	施釉	廻口・中央 部?	1700 ~ 1730	309	碗部欠損
6	検出面	土器	かわらけ 盤	楕形	碧灰褐色	織錦捺 壓切	なし	—	3	7.4	織錦ナデ直	織錦ナデ直	回転捺切	在地系	不明	281		
7	検出面	土器	かわらけ 盤	丸形	碧灰褐色	織錦捺 壓切	なし	—	4.1	4.3	織錦ナデ直	織錦ナデ直	巴状隆起	回転捺切	在地系	中世	282	
8	検出面	磁器	中輪蓋	丸形	白	織錦	乳頭・透明 釉	—	26	—	—	—	—	—	登付輪胎	廻口・美濃 1800 ~ 1870	291	
9	検出面	陶器	灯明受皿	油滴形	灰白色	織錦	鉄輪	—	2	4.9	口縁に施釉	施釉	施釉	施釉	平底	廻口・美濃 1800 ~ 1870	275	
10	検出面	陶器	灯明受皿	油滴形	灰	織錦	鉄輪	—	1.7	—	全面に施釉	施釉	施釉	施釉	廻口・美濃 1800 ~ 1870	277		
11	検出面	陶器	灯明受皿	油滴形	灰白色	織錦	鉄輪	—	19	4.8	口縁に施釉	施釉	施釉	施釉	廻口・美濃 1800 ~ 1870	276		
12	検出面	陶器	小瓶	半球形	灰	織錦	透明釉・上 鉄輪	—	5.1	2.8	高台付近ま で施釉・色 鉄	施釉	施釉	施釉	露胎・開口 京・信濃系	1780 ~ 1860	279	
13	検出面	半磁器	瓶	碧灰褐色	碧灰褐色	有頭・透明 釉	—	7.1	—	—	火炎文?	施釉	施釉	高台付近の 施釉	波佐見系 1680 ~ 1740	288		
14	検出面	陶器	大瓶	平丸形	碧灰白色	織錦	鉄輪	—	5.1	—	全面に施釉	施釉	施釉	下ノナ酒器系	廻口・美濃 1600 ~ 1670	285		
15	検出面	陶器	小瓶	流線形	灰	織錦	引領・灰釉	—	2.6	—	全面に施釉	施釉	施釉	施釉	登付輪胎	廻口・美濃 1700 ~ 1770	278	
16	検出面	玻瓈	滑鉢	—	碧色	織錦	—	—	—	—	横ナデ調整 開口を防ぐ 鉄輪	—	—	—	越前系	16 ~ 286	口縁部破片	
17	検出面	磁器	甌?	—	碧灰色	織錦	—	—	—	—	各種試叩印 及凹状印	—	—	—	在地系	7.5 ~ 10.5	284	脚部破片



第20図 第3次面造模外 出土遺物

○第4次遺構検出面

遺構の概要

主な遺構と概要 4次面では、近世残存遺構のほかに中世以前に所属する遺構はまばらであり、住居跡や溝跡や小穴などが散見される程度である。竪穴住居跡（SB03）は、3次面で確認されたSB02の下層にあたり、古墳時代前期の住居跡と思われる。床面は平坦であるものの、柱穴等の痕跡は未確認である。調査区中央部には基盤層に伴う巨石が出土しており、巨石を取り囲むような溝跡（SX01）、巨石を掘り出そうとした土坑（SK60）を確認した。溝跡・土坑からは古墳時代の須恵器・土師器が出土しており、溝跡は、巨石を意識した特殊な周溝の可能性もある。近世残存遺構では、SD07最下層において五輪塔（地輪）の列石を確認した。SK47は、五輪塔と板碑などの部材平坦部を敷き詰めた状況が看取され、地下室の敷石遺構と想定される。

瓦包含層と瓦集中区 調査区南東隅部へ落ち込む自然地形上には、多量の布目瓦片を包含する土層が確認された。この瓦包含層の南東隅部では、特に瓦片が積み重なる瓦集中区を確認した。調査区の土層断面から、瓦集中区は中世溝跡（SD02）の直下に位置し、壁土と思われる焼土粒を多数混合している暗褐色土に包含されている。ただし、同層の厚さは2cm程度と薄く、あたかも地表面に敷き詰められたかのような状況をみせる。瓦破片の重なり合いが少ないため、散乱廃棄された状況と推測される。また瓦包含層は、人為的な堆積か自然堆積かは判断つかないが、共伴する遺物から平安末から中世初頭に堆積した土層と考えられる。

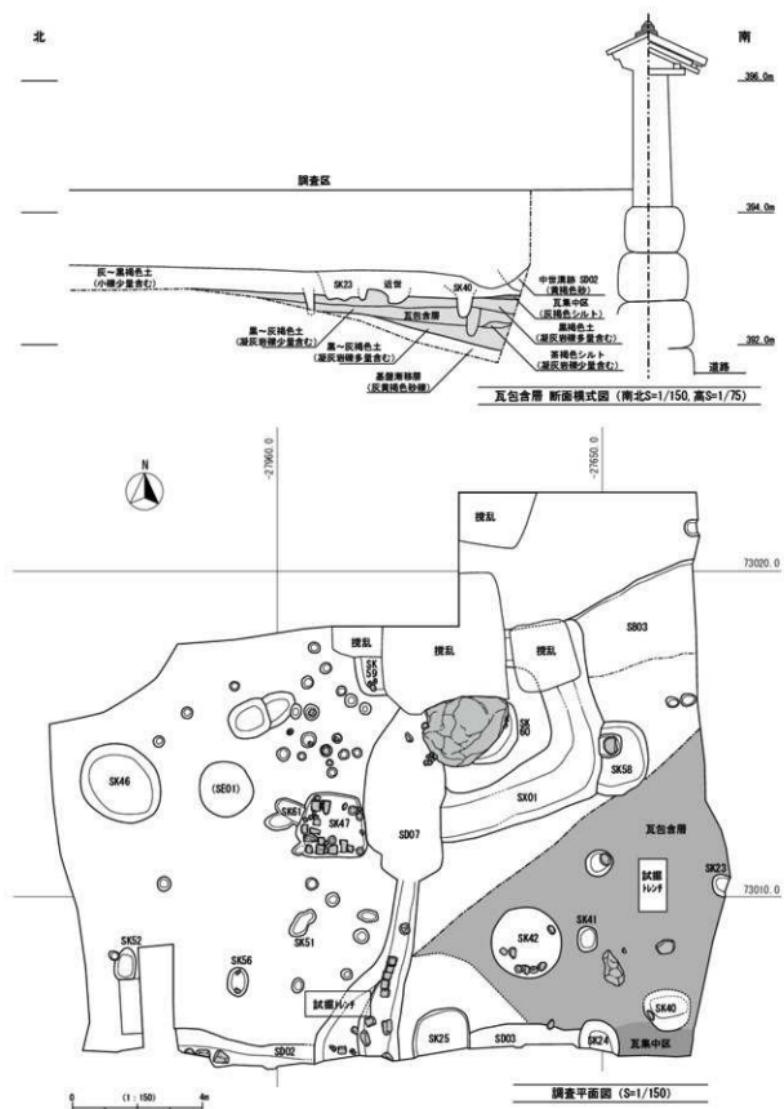
出土遺物の概要

古墳～古代の遺物 SK60からは、古墳時代の土師器高環の脚部が出土した。SX01からは、古墳時代の須恵器壺蓋が出土している。瓦包含層からは、土師器と須恵器の破片が出土している。いずれも残存率が低く、小破片であるため全体の形状が復元できるものはない。須恵器の甕と思われる胴部破片が数点あり、外面には条線状叩き目痕が、内面には同心円状叩き目が残る。

中世～近世の遺物 SD03からは、かわらけが多量に出土している。大小のサイズがあり、大きいものは口径11cm前後で、小さいものは口径8cm前後に集中する。全体的に煤付着などの使用痕は無く、表面に斑状に锖色の付着物が付くものが多い。かわらけの規格性から中世後期の所産と推定される。SK61からは、かわらけ2点が出土している。

古代瓦の概要 瓦包含層および瓦集中区からは、多量の布目瓦片が出土している。瓦包含層からは、軒丸瓦が3点出土しているが、軒平瓦は出土していない。出土した軒丸瓦の瓦当文様は、單弁六弁蓮華文、單弁（素弁）蓮華文であり、1点は瓦当文様不明であった。單弁六弁蓮華文軒丸瓦は、外区に珠文が施されており、瓦当部半分は欠損するものの、直径は16～17cmと推定される。文様構成は、近江（現滋賀県）の琵琶湖東岸（湖東地域）に集中して出土する「湖東式軒丸瓦（※）」に酷似する。單弁（素弁）蓮華文軒丸瓦は、瓦当部の約8割を欠損しており、文様はさだかではない。また、出土した多数の瓦片には繩目・並行叩き目・格子目の3種類の叩き具痕が残されている（出土瓦の傾向等詳細については「（4）出土瓦の傾向」（P.54～）にて記述）。

※湖東式軒瓦…近江湖東地域で出土する湖東式瓦は、共伴する須恵器等から7世紀後半から8世紀初頭に生産されたと考えられており、湖東地域に渡来系氏族を移住させたといわれていること、文様の系譜が畿内では確認できることなどから、渡来系氏族の寺院に葺かれた瓦と想定されている。近年、美濃・尾張・越前においても数点の湖東式軒瓦が出土しており、近江から地方に波及したものと考えられている。



第21図 第4次過横検出面 調査図



第4次造構棟出面



瓦集中区



中世溝跡
(SD02)



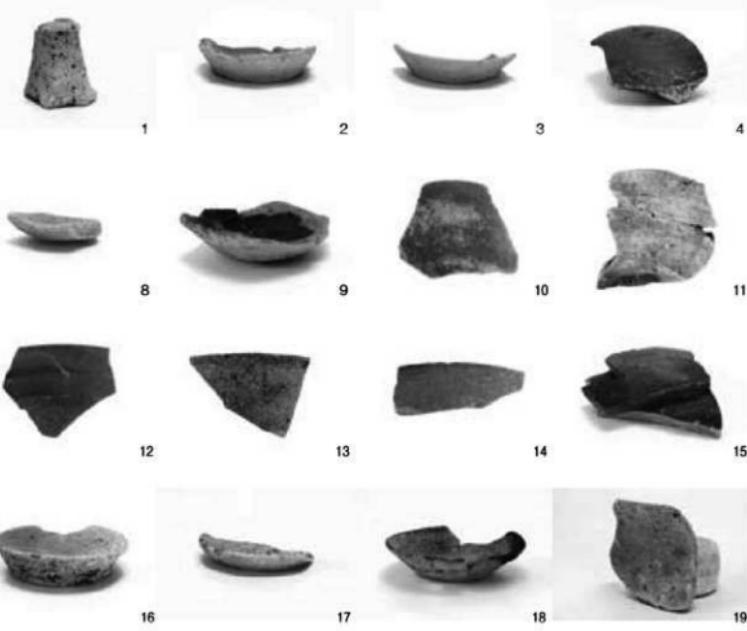
SX01



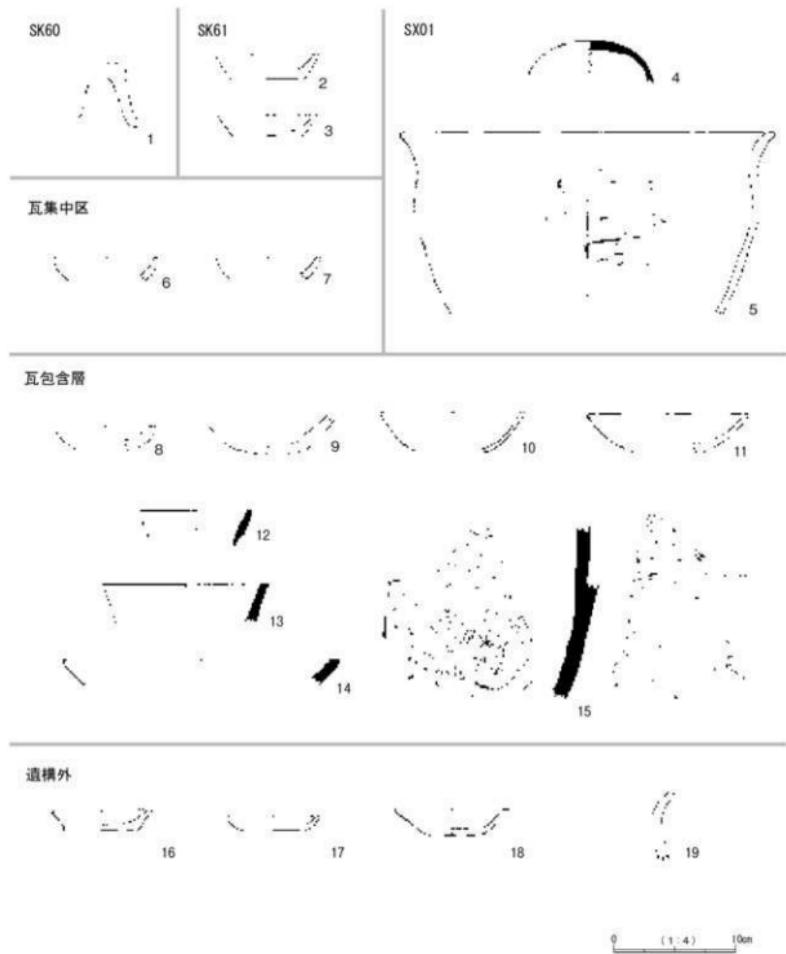
瓦包含層土層断面



軒丸瓦出土状況



番号	遺構名	類別	器種	形状	施土色・特徴	成形	輪郭	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	外文様・特徴	内面文様・特徴	見込文様・特徴	高台文様・特徴	推定年代	測量地	備考	
1	S800	土器	土師器	丸	灰褐色・砂	輪錐	なし	—	—	—	表面削耗	踏状孔	被削	被削	在地系	6c~7c	136 高台の环状 砾片	
2	S801	土器	かわらけ	逆台形	赤褐色	輪錐系切	なし	—	23	6.2	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	指ナデ跡	回転系切	在地系	不明	137	
3	S802	土器	かわらけ	逆台形	灰褐色	輪錐系切	なし	—	19	—	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	指ナデ跡	回転系切	在地系	不明	138	
4	S803	土器	壺蓋	丸底形	暗灰色	輪錐	一部自然 輪	—	—	—	碎片上部に 自然輪	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	回転削り	在地系	6c~7c	212 口縁部欠損	
5	S804	土器	壺	—	—	輪錐・ナ	なし	30.0	—	—	タテハナ	ヨコナゲ	—	—	在地系	6c~7c		
6	瓦集中	土器	小皿	—	—	ロクロ	なし	8.4	—	—	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	—	—	在地系	不明		
7	瓦集中	土器	小皿	—	—	ロクロ	なし	8.4	—	—	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	—	—	在地系	不明		
8	混合層	土器	かわらけ	丸形	橙灰色	輪錐系切	なし	—	19	—	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	—	—	回転系切	在地系	不明	296
9	混合層	土器	土師器	丸底形	灰褐色	手びねり 削り	なし	—	—	横ヘラ削り	内里・削き 調整	内里・削き 込み段があり	ヘラ削り	在地系	6c~7c	303		
10	混合層	土器	土師器	丸形	赤褐色	輪錐	なし	—	—	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	—	—	在地系	8c~10c	302 口縁部破片		
11	混合層	土器	かわらけ	丸形	灰褐色	輪錐系切	なし	—	29	—	輪錐ナデ痕	筋目・ 忍足往着	全体に環付 着	回転系切	在地系	不明	295	
12	混合層	頸忠器	不明	—	暗灰色	輪錐	なし	—	—	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	—	—	在地系	5c~10c	294 口縁部破片		
13	混合層	頸忠器	壺?	溜尻形	暗灰色	輪錐・ ナ	なし	—	—	横ナデ調整	横ナデ調整	—	—	在地系	5c~10c	297 口縁部破片		
14	混合層	頸忠器	不明	—	暗灰色	輪錐	なし	—	—	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	—	—	在地系	5c~10c	298 口縁部破片		
15	混合層	頸忠器	壺?	—	暗灰色	輪錐・ ナ	なし	—	—	垂直状明弓	同心円状明 弓	—	—	在地系	7c~10c	300 壁足破片二 付着		
16	検4	土器	かわらけ	逆台形	橙灰色	輪錐系切	なし	8.2	2	6.1	輪錐ナデ痕	横ナデ調整	ナデ	回転系切・ ヘラ削り	在地系	中世?	306	
17	検4	土器	かわらけ	平丸形	透灰白	輪錐系切	なし	—	12	5.2	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	輪錐ナデ痕	回転系切	在地系	不明	307	
18	検4	土器	かわらけ	逆台形	暗色	輪錐系切	なし	9.4	23	4.5	—	—	ナデ	回転系切	在地系	不明	308 油煙状の煙 付着	
19	検4	土器	土師器	—	橙灰色	輪錐・ ナ	なし	—	—	横ナデ調整	表面剥落	—	—	在地系	7c~10c	305 口縁部破片		



第22図 第4次面出土遺物
(SK60・SK61・SX01・瓦包含層・瓦集中区・遺構外)

(4) 出土瓦の概要

本調査区から出土した古代瓦は、総点数1723点・総重量163.61kgで、4次面の瓦集中区・包含層からは1210点・114.4kgの瓦が出土した。主な種別は、軒丸瓦・道具瓦・文字瓦・丸瓦・平瓦である。なお、小破片のもので分類できなかったものに関しては、全て不明瓦として扱った。凹面凸面の調整・特徴など詳細については観察表を、拓本の配置図は模式図を参照のこと。以下、種別ごとに概要を述べていく。

古代瓦出土量

	総点数	総重量 (kg)	丸瓦	重量 (kg)	平瓦	重量 (kg)	不明瓦	重量 (kg)
1 ~ 3次面	513	49.21	207	17.91	206	27.5	100	3.8
4次面	1210	114.4	295	32.46	568	76.32	347	5.62
計	1723	163.61	502	50.37	774	103.82	447	9.42
%	100.0%	100.0%	29.1%	30.8%	44.9%	63.5%	25.9%	5.8%

軒丸瓦（第23図1～4）

軒丸瓦は、丸瓦の広端部に文様（古代における基本的な文様は蓮華文）が施された円形の粘土板を接合させたもので、軒先にのみ飾られる。

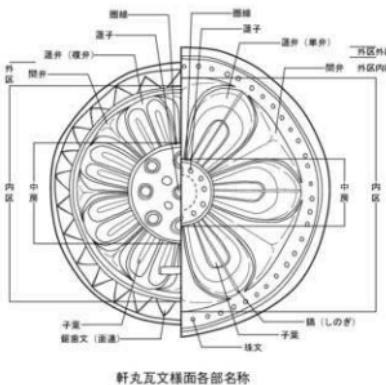
本調査区からは4点の軒丸瓦が出土している。1は、単弁六弁蓮華文軒丸瓦で、出土した軒丸瓦の中で最も遺存状態が良好である。内区は、中房と蓮弁・間弁が圓線によって区切られ、中房は突出しない。中房内は一部欠損しているが、中央には大きな蓮子が配されていたとみられ、その周囲に小さい蓮子を配している。周囲の蓮子は、蓮弁の中央と間弁の延長線上に規則的に配されているとみられ、中房の蓮子数は1+12と考えられる。単弁の蓮弁を6枚配していたとみられ、蓮弁内には子葉を持ち、弁の中軸

には稜線（鎧）がある。蓮弁の間にある間弁はばち状を呈し、中房にまで達する。蓮弁の断面形状は、子葉は突出し、弁端は丸みを帯びて立ち上がる。

内区と外区の間には境界を作るような圓線は存在せず、外区内縁には小さな珠文を巡らすが、その配置は規則的ではない。また、瓦当の半分が欠損し、残存している文様面にも破損がみられるため珠文の正確な数は不明であるが、50以上は配されていたとみられる。外区の内縁と外縁の間には1条の圓線が巡る。圓線の外側である外縁は、明確な立ち上がりを見せる周縁を持たず、平縁である。瓦当裏面には丸瓦の剥離痕があり、やや厚めに付けられた接合用の粘土が残っている。剥離痕を見る限りでは丸瓦自体はやや薄手であったように思われる。

1は、長野県内では確認されていない新出の文様を持つ軒丸瓦で、その特徴から湖東式軒丸瓦の文様であると判明した。湖東式の詳細・関連性については別章にて記述する。

2は、複弁蓮華文軒丸瓦で、4次面の瓦包含層からではなく3次面SD07下層から出土したものである。瓦当の大半を欠損しているが、文様面の遺存状態は良い。内区は中房を欠損しており、蓮子数や配置などは不明であるが、複弁の蓮弁が2組と間弁が確認できる。間弁はばち状を呈し、複弁と接合している。文様は全体的にシャープさを欠いているように思われ、範傷とみられる箇所もある。外区には凸（面逆）鋸歯文が確認できる。また、



軒丸瓦文様面各部名称

圓線とみられる凸線が存在しているが、断面形状は鋸歯文軒から立ち上がりがそのまま内区の蓮弁に向かって緩やかに傾斜しているため、凸線自体が明瞭であるという印象は受けない。全体的な文様構成は、從来善光寺境内出土と伝えられる軒丸瓦や、幸礼バイパス地点から出土した軒丸瓦（いわゆる善光寺瓦）と酷似している。

3は、單弁（素弁）蓮華文軒丸瓦とみられるが、遺存度は極めて低く、全体的な文様構成を窺い知ることはできない。わずかに残存している文様面からは、子葉を持たない簡素化された蓮弁と、直線的に伸びる間弁が確認でき、外区に装飾的な文様がないことがわかる。これまでにも單弁（素弁）の蓮華文軒丸瓦が確認されているが、それとは異なるもので、1に続く新出の軒丸瓦の可能性がある。

4は、文様面を欠損している軒丸瓦である。しかし、この軒丸瓦の最大の特徴は、明確な段を持つ周縁を有している点である。現在まで確認されていた善光寺境内出土軒丸瓦（複弁・單弁蓮華文）や、本調査区から出土した軒丸瓦には、有段の縁を持つ個体はない。つまり、この有段の縁をもつ軒丸瓦は、今までの軒丸瓦の造りとは異なる系統に属するとみられるのである。また、わずかに残る文様面には、線鋸歯とみられる文様帶も存在しており、裏面には丸瓦の剥離痕もみられる。4も、1・3に続く新出の軒丸瓦の可能性がある。

道具瓦（第23図5）

道具瓦は、屋根の各箇所に合わせて造った瓦を指し、その形状は多岐にわたる（鬼瓦・鷲尾など）。5は用途も形状も不明な道具瓦である。道具瓦であるという根拠として、底面とみられる部分に布目痕が確認できるからである。古代においては、瓦を製作する際に布を使って模骨や成形台からはずしやすいようにしており、道具瓦の製作もそれに順ずる。よって、布目痕を有している5は、何らかの瓦製品であることがわかる。断面形状はやや傾いたI字状を呈しており、調整の粗さから内溝している方が内側であると考えられる。

文字瓦（第23図6～8）

文字瓦は、丸瓦・平瓦などの凹・凸面のいずれかにへラ状の工具で文字（人名・郡名・文章など）や記号を刻みつけたものである。県内の文字瓦資料としては、信濃国分寺跡出土の文字瓦が挙げられるのみで、北信地域では初の出土であるとみられる。また、確認された文字類は、3点とも平瓦の凹面に刻まれていた。

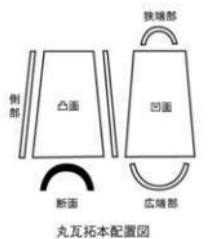
6は、接合した結果、最も遺存度が高く文字も大きく確認された。「咸（カン・ことごとく・みな）」という字に似ているが、現時点では判読が難しく確証は得られていない。また、その周縁にも文字らしき刻みが確認でき、文章であった可能性も指摘できる。7は、拓本の配置上、文字が逆さまになっているが、反転すると「七」と刻まれているように入れる。また、上部に薄く刻みのようなものがあり、元々は一文字の「毛」もしくは二字で「十七」とも考えられる。8は、遺存度が低く文字の全体像を掴むことはできないが、順序をもって刻みを入れているのがわかる。

丸瓦（第23図9～26図24）

出土した丸瓦の総点数は502点・50.37kgで、4次面瓦集中区・包含層から出土したのは295点・32.46kgである。

9は、狭端部と両側部が残存しており、遺存度は良い。凹面には、粘土板を粘土塊から切り離す際の糸切り痕が確認できる。また、凹面から見たときの右側部には、粘土板を模骨に巻きつけた際の、粘土の綴じ目が残っている。

10・12は、凸面に共通の調整が施されている。丸瓦は、凸面を上（外側）にして屋根に葺くため、凸面の叩き具の整形痕が残っていると、その凹凸に雨水が溜まり、そこから破損を起こしやすい。また、整形痕が残っていると見た目上汚く見えてしまうなどの理由から、凸面にはナデやケズリの調整を加え、叩き具の痕跡を消してしまうのであ



る。10・12に戻るが、この2点の凸面には、平行に走る粘土の低い隆起がみられる。他の丸瓦はきれいに調整されていることからすると、この2点に施されている調整は、板状の工具ではなくハケに近いものと考えられる。全体量からすると、この調整を施された丸瓦は少ない。凸面の整形・調整に関してだが、18は縄叩き具による整形痕が全く消されることなく残っており、22にみられるように平行叩き具による整形痕も確認できる。

15・16・17の3点の凹面には、布の綴じ目が残る。20は、小破片でその全体を窺うことはできないが、残存している側面は特徴的である。他の丸瓦は側面が平らに調整されているのに、20はケズリによって平らな面が存在せず、鋭角になってしまっている。出土した丸瓦の中でも、この調整技法は20のみである。

24は縦わずか9.6cmしかない丸瓦である。明らかに通常の丸瓦を加工したものであるが、胎土や焼成具合、全体的にいぶしたような感じを受けることから、古代の瓦というより中世に近い所産、もしくは中世以降と考えられる。

丸瓦分類表

	総点数	縄叩き具	格子目叩き具	平行叩き具	ナデ	不明
1～3次面	207	41	0	8	152	6
4次面	295	81	0	7	202	5
計	502	122	0 %	15	354	11
%	100.0%	24.3%	0 %	3.0%	70.5%	2.2%

平瓦（第26図25～第31図73）

出土した平瓦の総点数は774点・103.82kgで、4次面瓦集中区・包含層から出土したのは568点・76.32kgである。

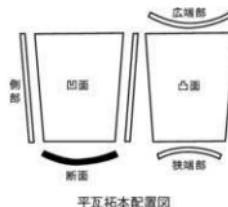
25～49は、凸面の整形痕が縄叩き具によるものである。4次面瓦集中区・包含層から出土した平瓦のうち、縄叩き具によるものは616点で、約80%を占める。また桶巻き造りと一枚造りの割合は5：2で、桶巻き造りによるものが多い。25～42は桶巻き造りで、43～49が一枚造りによるものである。

25は、粘土板を切り離した際の糸切り痕が凹・凸両面に残っている。29・33は、凸面の側部付近にヘラ状の工具で刻まれた直線が確認できる。これは、桶巻き造りの平瓦にみられるもので、円筒形の粘土板を4分割する際の基準分割線であるとみられる。30は、凹面に粘土の切れ目のようなものが端部と平行に走っている。また、破損部分にも同様の粘土の切れ目が確認できることから、この平瓦は粘土板によるものではなく、粘土組を模骨に積み上げて造ったもので、粘土の切れ目は輪積み痕であるとみられる。32・36は、凹面に布の綴じ目が残っている。37は明瞭な模骨痕が残っている。

40は特殊な平瓦で、広端部を斜めに切り落としている。これは建物の屋根構造が寄棟・入母屋・方形造りのみに存在する平瓦である。これらの屋根構造の場合、傾斜面を四面（入母屋の場合は六面）必要とするため、棟が斜めに下る部分では必然的に葺く瓦も斜めでなければならない。そのため、通常の瓦の隅を切り落として棟の形状に合わせ、隙間なく屋根に瓦を葺けるようにしたものである。これらの瓦を「隅切り瓦」と呼んでいる。

41・42には粘土板の綴じ目が確認でき、42は凹面の合わせ目部分に指ナデを加えている。45・47・49は、凹面の糸切り痕が明瞭で、布目痕がほとんど確認できない。48の凹面は、指ナデによって布目痕が消えている。

50～57は、凸面の整形痕が格子目叩き具によるものである。4次面瓦集中区・包含層から出土した平瓦のうち、格子目叩き具によるものは36点で、約5%を占める。小破片が多く、桶巻き造りと一枚造りとの区別が付きにくく



いものが多いが、確認できたものでの割合は4：1で、桶巻き造りによるものが多い。50～55は桶巻き造りで、56・57が一枚造りによるものである。

50は、糸切り痕や指ナデが確認できる。51は凸面の整形痕がナデによって全体的に潰れてしまっている。53は還元焰焼成によるもので、硬質である。また、指の押圧によって整形痕が潰れ、所々に指紋が確認できる。55は、凹面に粘土の貼付が確認でき、指頭圧痕も残っている。破損による補強とみられる。格子目叩き具の整形を受けた平瓦は、凸面に重複して叩きが加えられており、正確な格子の大きさや幅、叩き具自体の大きさなどの判別が非常に困難である。なお、51と54は3次面出土資料である。

58～71は、凸面の整形痕が平行叩き具によるものである。4次面瓦集中区・包含層から出土した平瓦のうち、平行叩き具によるものは76点で、約10%を占める。また、桶巻き造りと一枚造りの割合は3：4で、一枚造りによるものが多いが、ほぼ同数である。58～63は桶巻き造りで、64～71が一枚造りによるものである。

58は、端部や側部の調整が確で、側部はケズリが斜めに切り込み、側部に凹凸が生じている。60は、2次面出土資料である。全丸瓦・平瓦中最も厚い造りで、異様な印象を受けるが、凹面の模骨痕や凸面の調整などはほかのものと変わらない。61は、凸面の叩き具痕に一つの特徴がみられる。重複して叩かれているが、よく見ると平行の刻みの凸部分に粘土の割れ口（範傷）が確認できる。67の平行叩き具は、やや細めで小振りな印象を受ける。

68～71までは、一枚造りの大きな特徴を示す瓦で、各々が端部や側部に布目痕を有している。これは、平瓦の作り方の違いによるもので、一枚造りが成形の段階ですべて側部や端部が存在している点がそれにつながる。桶巻き造りでは、凸面の整形・調整を終えた段階で模骨と布を取り外し、円筒を4分割する。そこで、初めて桶巻き造りの平瓦に側部が生まれる。まれに、側部の調整時に布目が付着することがあると思われるが、68～71は全て布目痕が凹面から続く一連のものであるため、その可能性は除去される。よって、これらの平瓦は、成形の段階で端部や側部が存在し、その時点で布目が付着する可能性のある一枚造りであると言える。

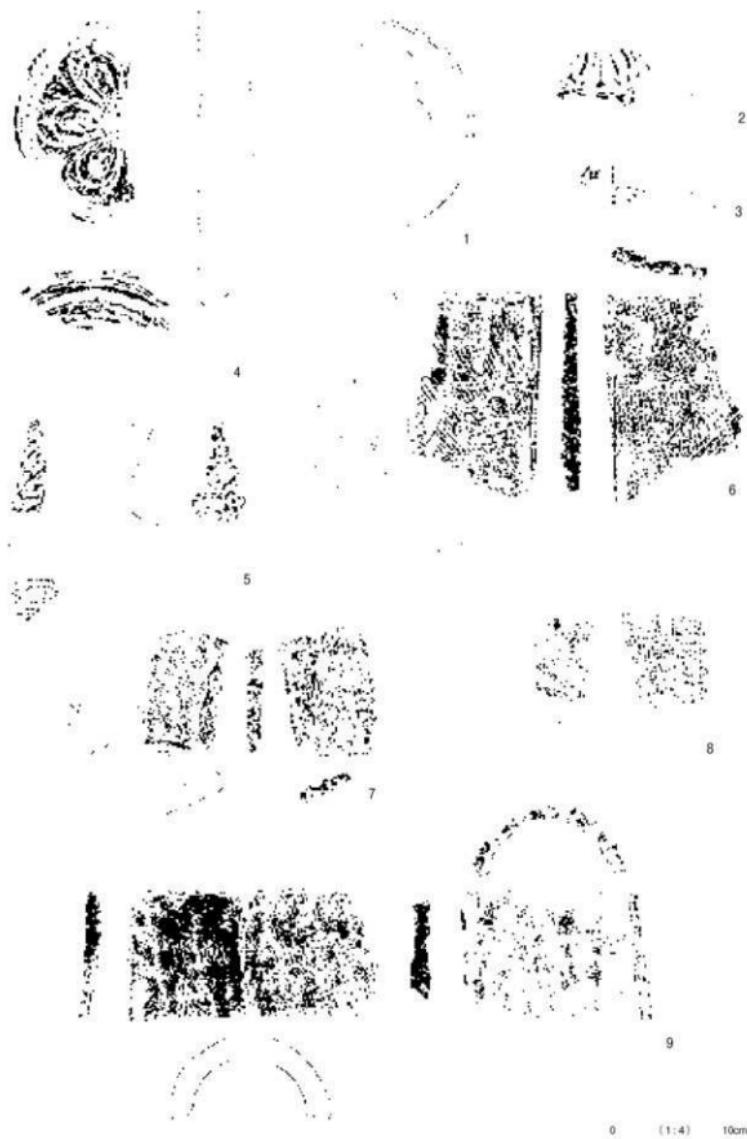
72・73は、凸面の整形痕がナデによって消滅している平瓦である。4次面瓦集中区・包含層から出土した平瓦のうち、凸面の整形痕が消されているものは30点で、約4%を占める。基本的に、平瓦は丸瓦とは反対に、凸面を下（屋根側）に向けて葺くため、整形痕をそのままにしておくものが大半であるが、一部においてはこのような技法も使用されていたようである。72は模骨痕を有するが、73はみられない。

平瓦分類表

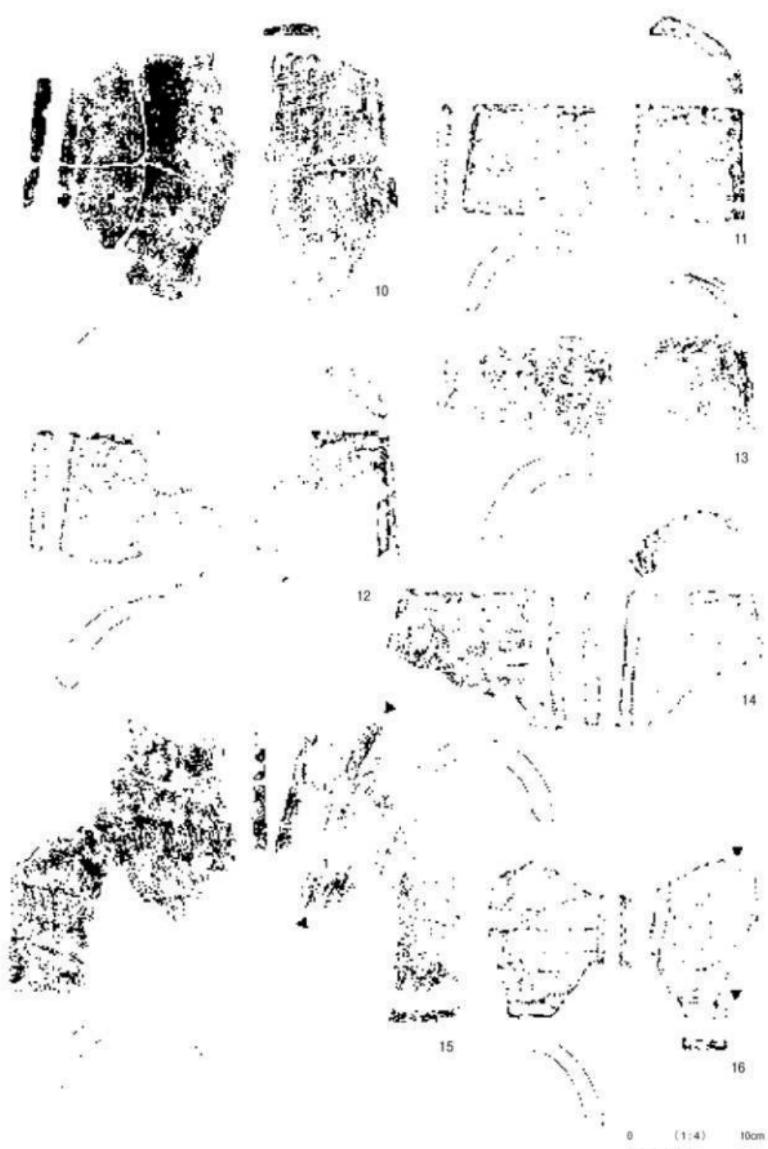
	総点数	繩叩き具			格子目叩き具			平行叩き具			ナデ			不明
		桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	
1～3次面	206	89	45	26	9	0	9	12	5	8	0	0	3	0
4次面	568	228	65	163	7	2	9	13	23	15	12	1	14	16
計	774	317	110	189	16	2	18	25	28	23	12	1	17	16
		616			36			76			30			16
%	100.0%	79.6%			4.7%			9.8%			39%			2%

※1 図中の▲は、布の縫じ目がある箇所を示したものである。

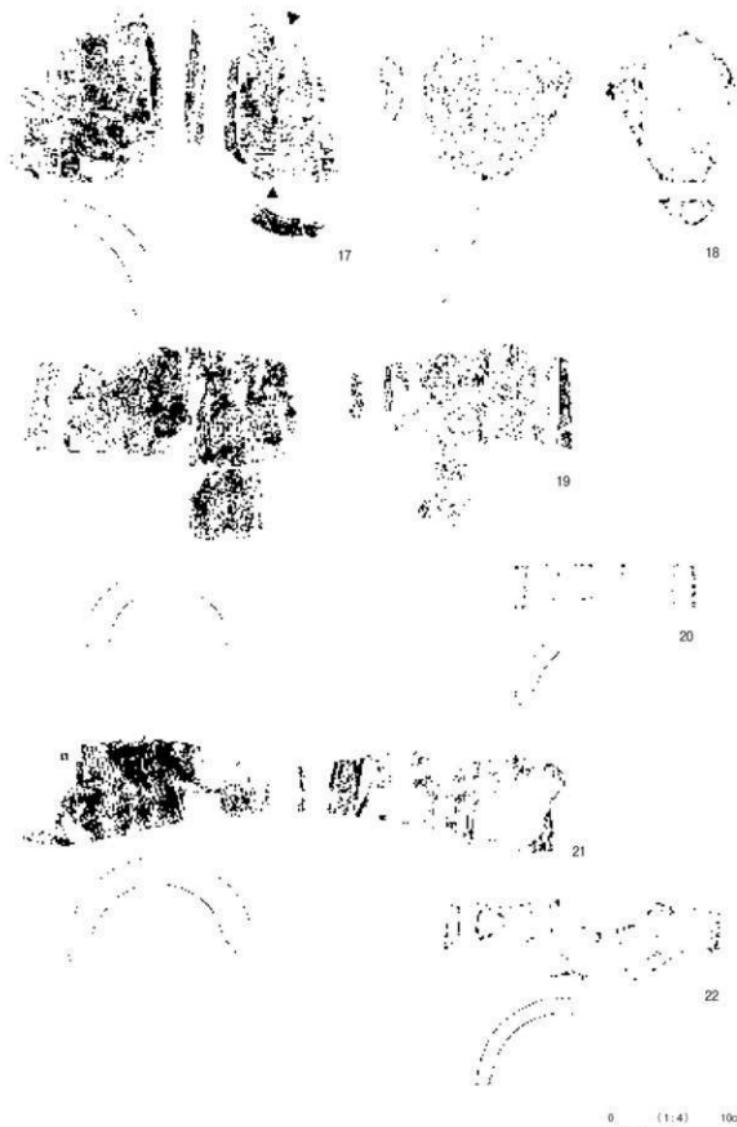
※2 掲載した古代瓦のほとんどは、4次面瓦集中区・包含層出土のものである。4次面以外（1～3次面）から出土した古代瓦に関しては、遺物観察表の特徴欄に出土土地点を示している。



第23図 大本願明照殿地点出土古代瓦（軒丸瓦・道具瓦・文字瓦・丸瓦）



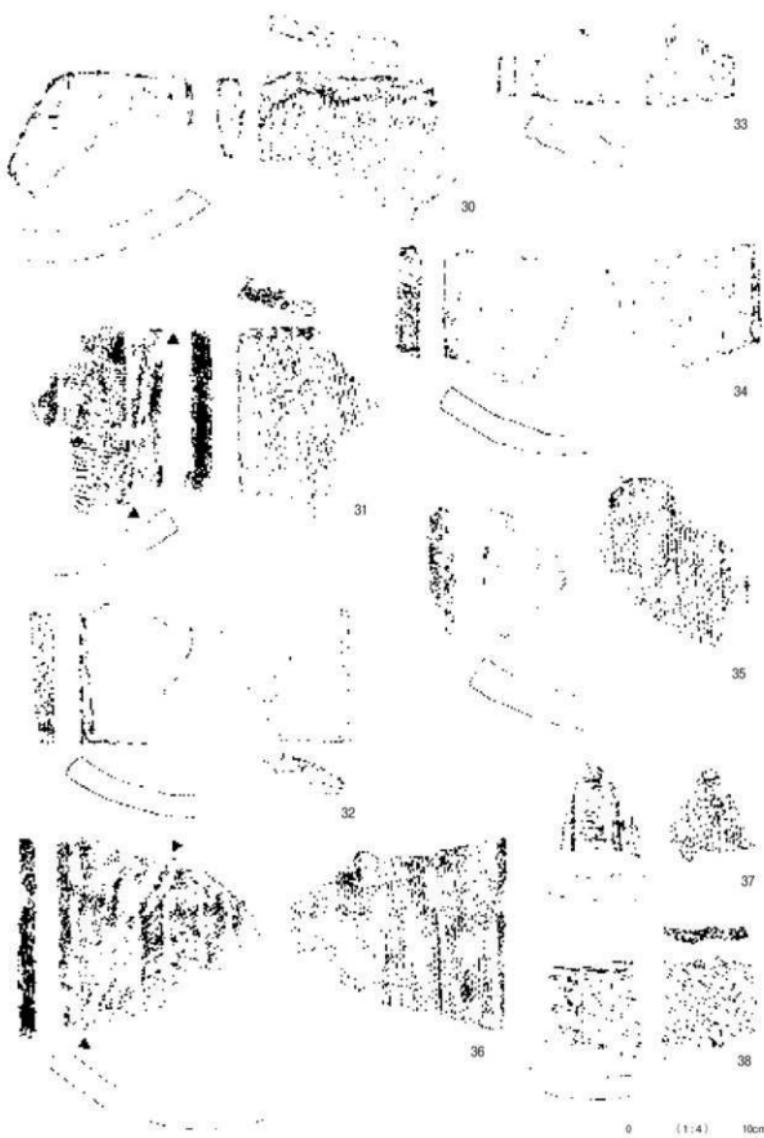
第24図 大本願明照殿地点出土古代瓦（丸瓦）



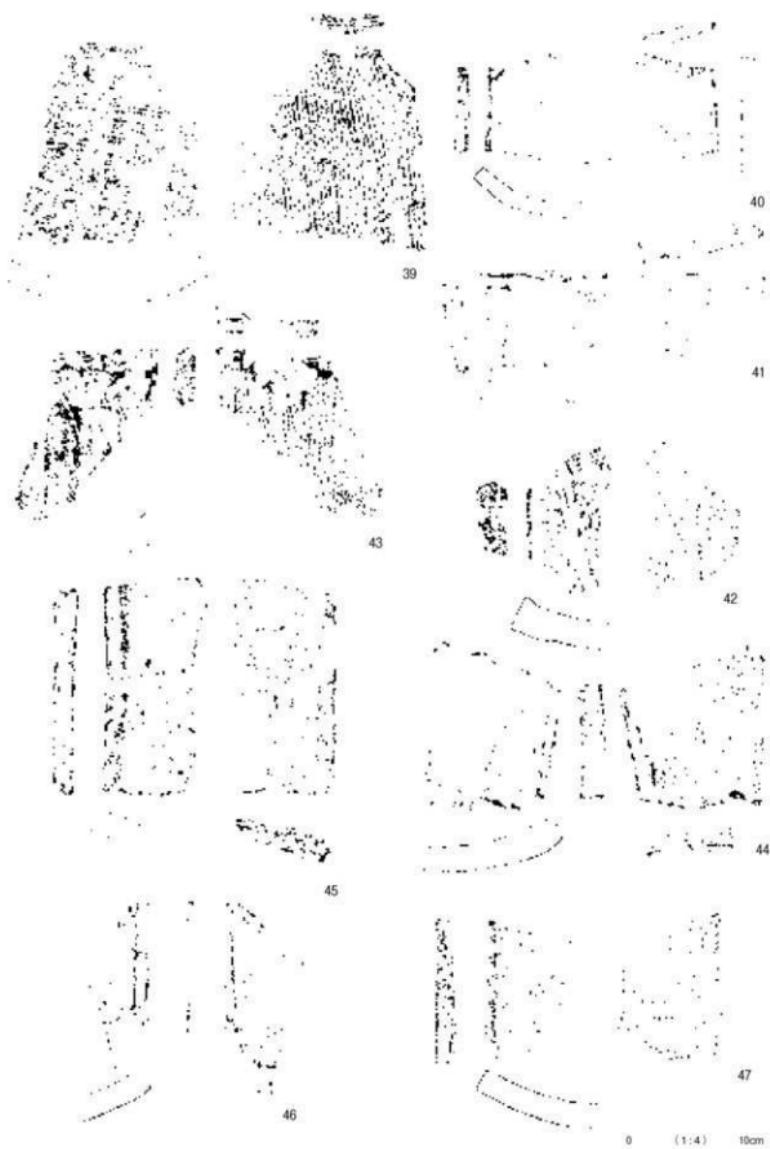
第25図 大本願明照殿地点出土古代瓦（九瓦）



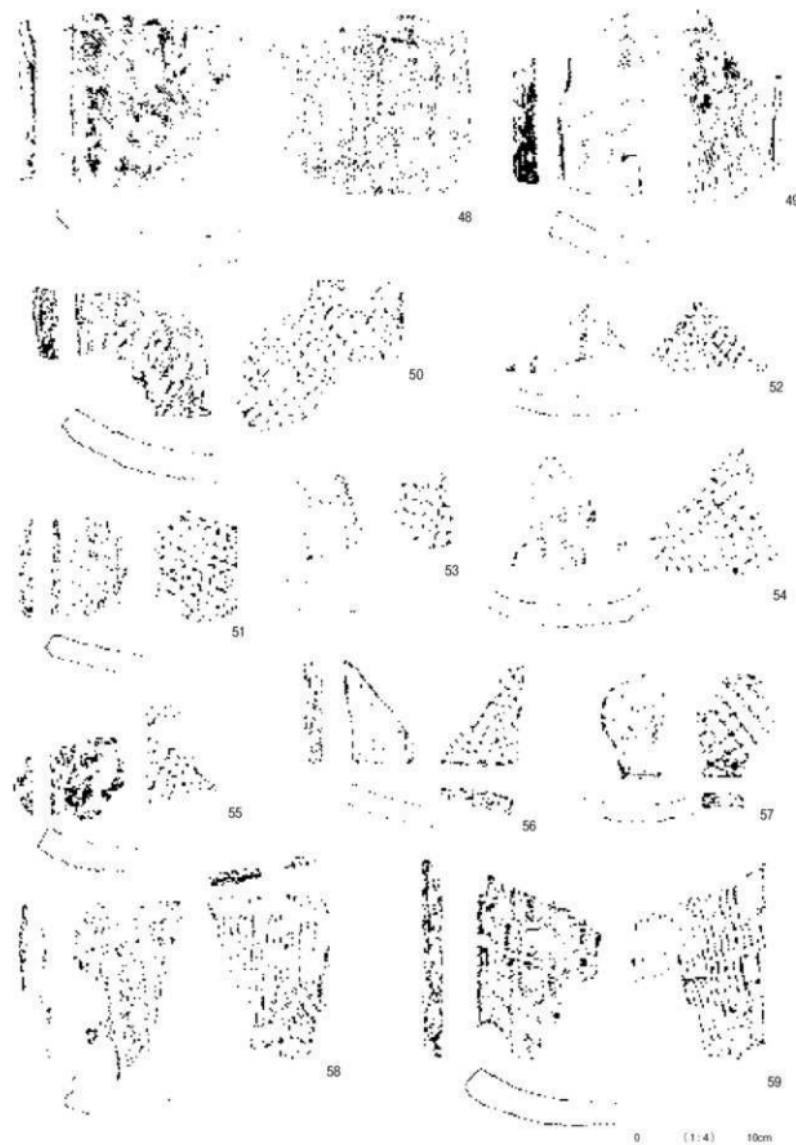
第26図 大本願明照殿地点出土古代瓦（丸瓦・平瓦）



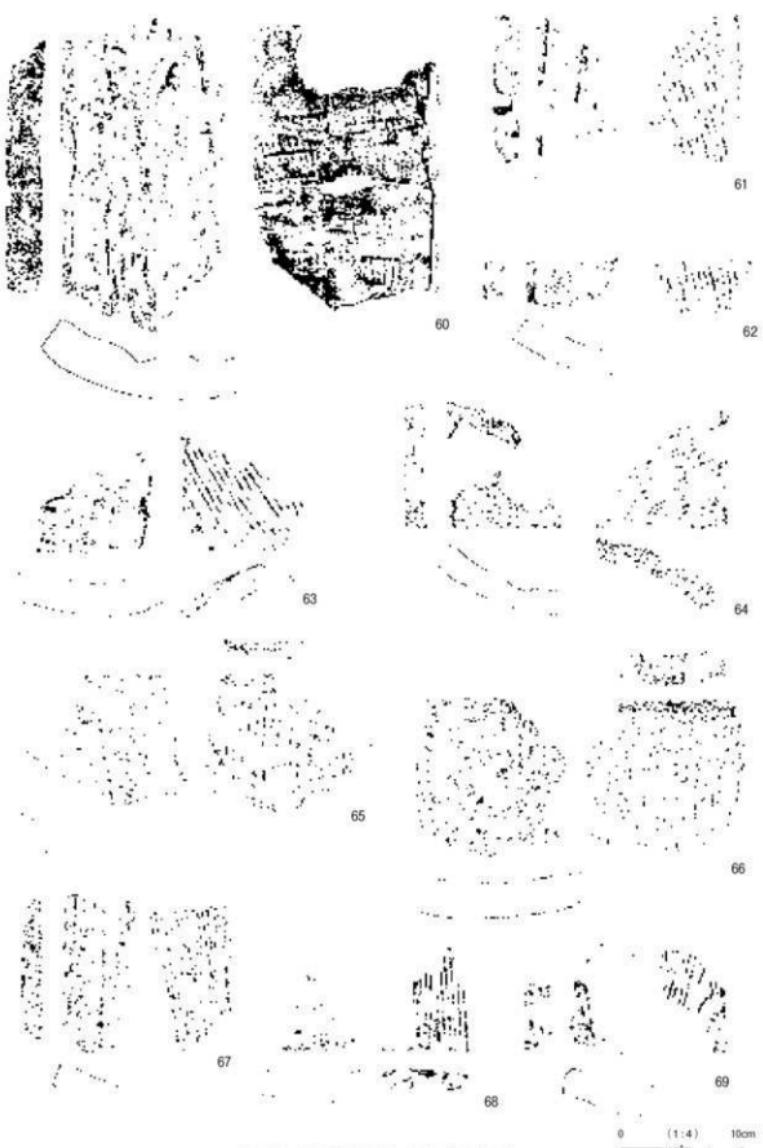
第27図 大本願明照殿地点出土古代瓦（平瓦）



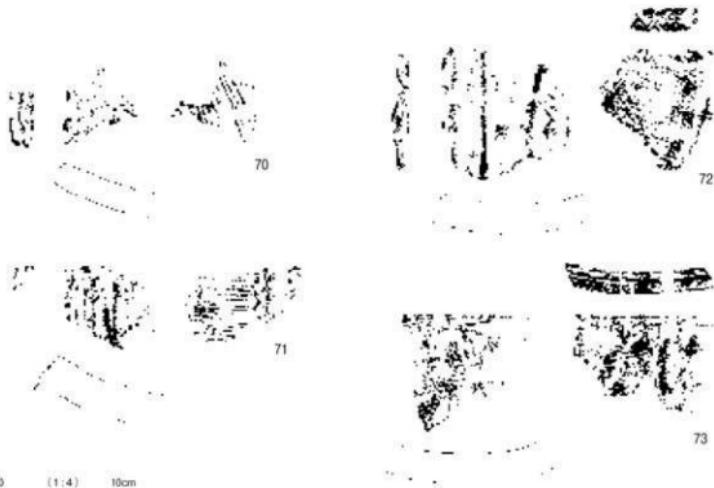
第28図 大本願明照殿地点出土古代瓦（平瓦）



第29図 大本願明照殿地点出土古代瓦（平瓦）



第30図 大本願明照殿地点出土古代瓦（平瓦）

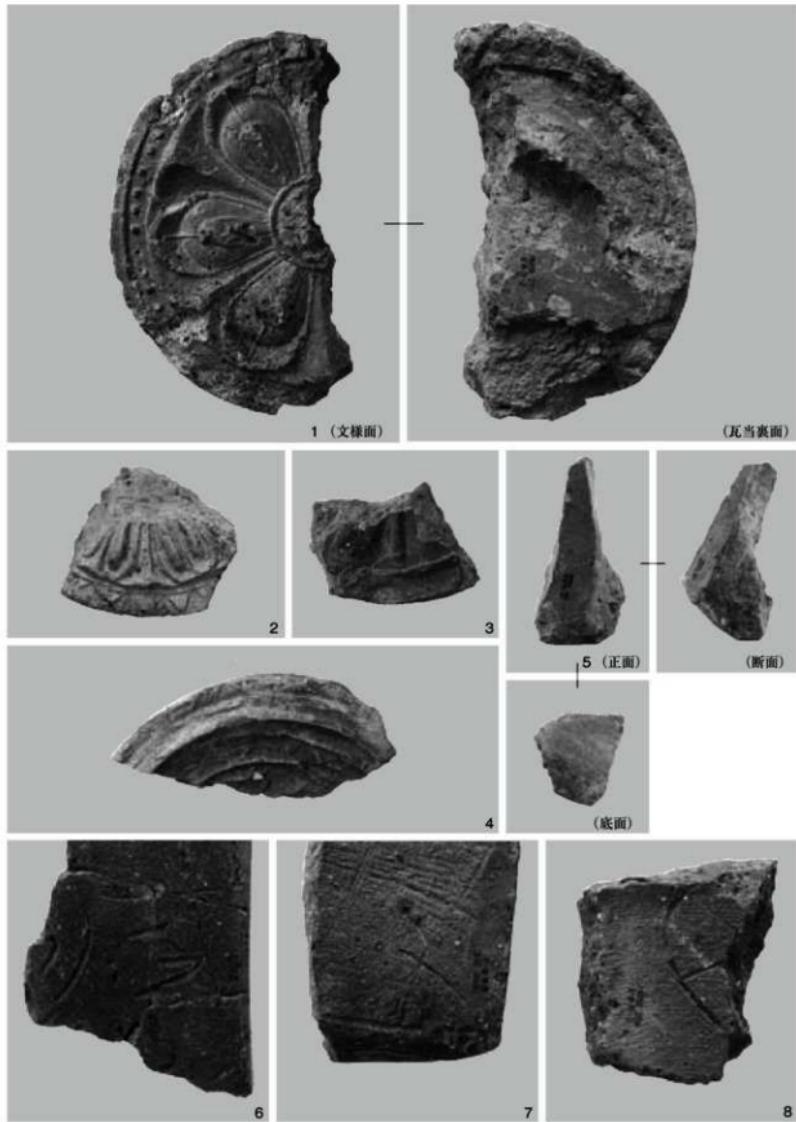


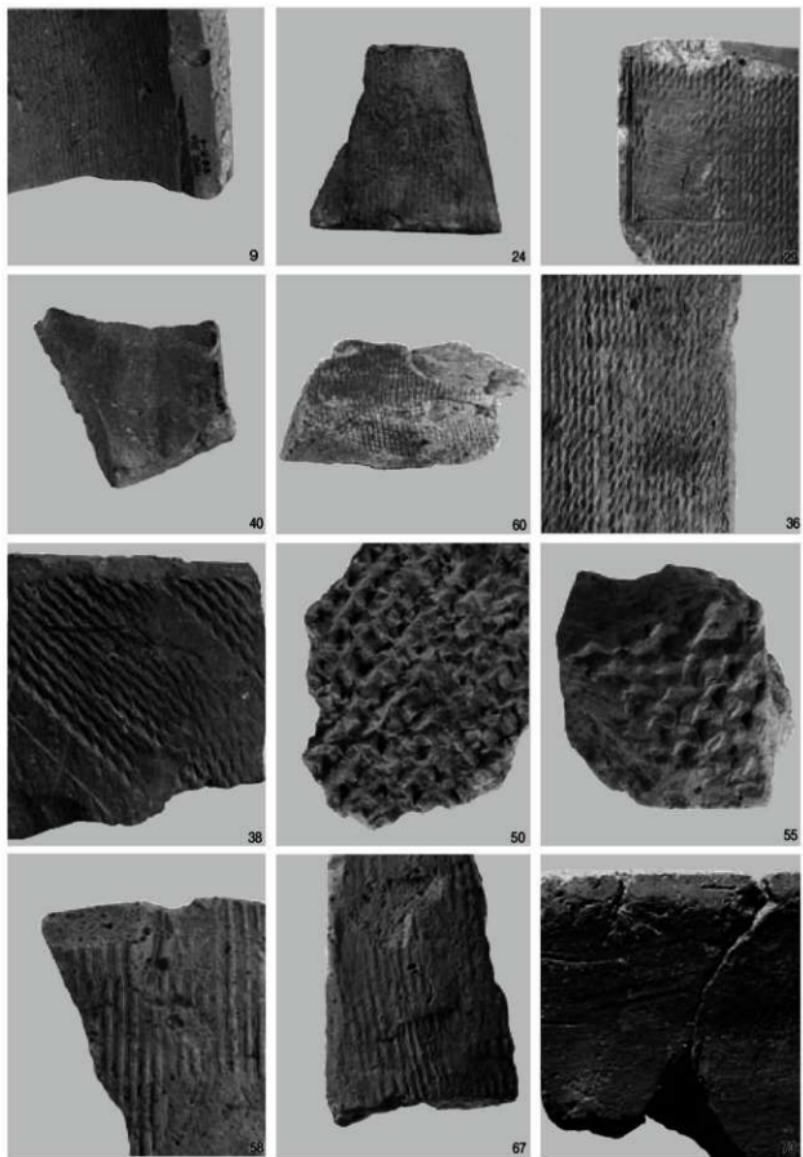
第31図 大本願明照殿地点出土古代瓦（平瓦）

図面 No.	種別	法量 (cm)		色調	焼成	特徴
		基定値	厚さ (現存部)			
1	軒丸瓦	17.7	4.0~4.3	25Y R 6 / 1 黄灰	良	單脊六脊蓮華文（画面式軒丸瓦）、瀬元焼、側部はケズリ調整、新出の軒丸瓦
2	軒丸瓦	16.2	1.8~2.4	7.5Y R 8 / 6 浅黄褐	良	複脊蓮華文・范跡あり？・側部はケズリ調整、瓦当表面はナゲ調整・3次面S D07出土
3	軒丸瓦	17.4	2.2	10Y R 5 / 4 赤褐	やや良	單脊（素引）蓮華文？・側部はケズリ調整、瓦当表面はナゲ調整、新出の軒丸瓦？
4	軒丸瓦	20.0	1.5~1.9	10Y R 8 / 6 黄褐	やや良	文様不明・有段の縁をもつ・側部はケズリ調整、新出の軒丸瓦？
図面 No.	種別	法量 (cm)		色調	焼成	特徴
5	追丸瓦	18~21	10.6	7.5Y R 4 / 1 黄	良	用途不明の追丸瓦、底面に布目焼・調整はナゲ・瀬元焼

図面 No.	種別	厚さ (cm)	色調		焼成	門面	凸面	側部 現部 調整回数 (タスク)	特徴
			現存部	側部					
6	平瓦	1.9	25Y R 5 / 1 黄灰	やや不良	布目焼・ヘラ描き文字	繩叩き→ヨコナデ	3	3	文字瓦「成（？）」・瀬元焼
7	平瓦	1.8	N 3 / 破瓦	良	布目焼・系切痕・ヘラ描き文字	繩叩き・布目焼	3	3	文字瓦「七（十七？）毛（？）」・瀬元焼
8	平瓦	1.8	10Y R 6 / 2 黄黄褐	良	布目焼・ヘラ描き文字	繩叩き	破損	破損	文字瓦「（不明）」・瀬元焼？
9	丸瓦	1.8	25Y R 6 / 2 黄黃	やや良	布目焼・赤切痕・粘土織じ目	繩叩き→ヨコナデ	3	1	瀬元焼？
10	丸瓦	1.6	7.5Y R 8 / 6 浅黄褐	やや不良	布目焼	ヨコナデ（ハケ？）	3	1	
11	丸瓦	1.5	N 4 / 黄	良	布目焼・赤切痕	繩叩き→ヨコナデ	3	3	瀬元焼・硬質
12	丸瓦	1.9	5 Y R 6 / 8 棕	良	布目焼・赤切痕	ヨコナデ（ハケ？）	3~4	3~4	
13	丸瓦	2.0	N 3 / 破瓦	良	布目焼	ヨコナデ	3	2	瀬元焼・硬質
14	丸瓦	1.8	10Y R 3 / 1 黑褐	良	布目焼	繩叩き→ヨコナデ・指圧痕	3	1	
15	丸瓦	1.6	25Y R 6 / 6 棕	やや良	布目焼・布織じ目	繩叩き→ヨコナデ	2	破損	
16	丸瓦	1.5	7.5Y R 6 / 6 棕	良	布目焼・赤切痕・布織じ目	ヨコナデ	3	2	
17	丸瓦	1.9	N 5 / 黄	良	布目焼・赤切痕・赤織じ目	繩叩き→ヨコナデ・指圧痕	3	1	瀬元焼・硬質
18	丸瓦	2.2	25Y R 6 / 2 黄黃	良	布目焼	繩叩き	2~3	1	
19	丸瓦	1.9	25Y R 4 / 2 黑赤	良	布目焼	繩叩き→ヨコナデ	3	破損	側部に一部布目焼有
20	丸瓦	1.3	S B 2 / 1 黑黑	良	布目焼・赤切痕	ヨコナデ	2	破損	瀬元焼・硬質

21	丸瓦	2.3	7.5YR 8 / 4 浅黄橙	良	布目瓶	繩叩き→ヨコナデ	2	破損	
22	丸瓦	1.1	5 YR 5 / 8 明赤褐	やや良	布目瓶+ナデ?	希切瓶	平行叩き	1~2	破損
23	丸瓦	21~27	5 YR 7 / 6 棕	良	布目瓶	繩叩き→ヨコナデ	3	破損	
24	丸瓦	1.3	N 4 / 灰	良	布目瓶、压痕	平行叩き (ハケ?)	4~5	1	還元焰? 過丸瓦? いぶし?
25	平瓦	2.1	7.5YR 7 / 3にぶい橙	良	布目瓶、希切瓶	繩叩き・希切瓶	3	4	
26	平瓦	2.9	N 4 / 灰	良	布目瓶、横骨瓶?	繩叩き	2	3	還元焰
27	平瓦	2.7	5 YR 6 / 6 棕	良	布目瓶、横骨瓶、希切瓶	繩叩き	1	3	
28	平瓦	2.3	N 6 / 灰	良	布目瓶、横骨瓶?・希切瓶、布縫じ目	繩叩き・希切瓶	1~2	2~3	還元焰
29	平瓦	1.8	2.5Y 6 / 2 黄灰	良	布目瓶、希切瓶	繩叩き・分割瓶、希切瓶	1~2	2	分割系準繩を凸面に刻む。還元焰?
30	平瓦	2.5	5 YR 5 / 8 明赤褐	良	布目瓶、輪槽瓶	繩叩き	3	3	粘土耕植巻き作り
31	平瓦	2.1	7.5YR 7 / 6 棕	良	布目瓶、横骨瓶、希切瓶、布縫じ目	繩叩き	3	2	
32	平瓦	1.8	2.5Y R 5 / 8 明赤褐	良	布目瓶、横骨瓶、希切瓶、ナデ?	繩叩き	3	2	
33	平瓦	2.3	10Y R 4 / 3にぶい黄橙	良	布目瓶、横骨瓶	繩叩き・分割瓶	2~3	破損	分割系準繩を凸面に刻む
34	平瓦	2.1	N 2 / 黑	良	布目瓶、横骨瓶	繩叩き	3	破損	還元焰?
35	平瓦	2.7	7.5YR 8 / 1 底白	良	布目瓶、横骨瓶	繩叩き	1~2	破損	還元焰?
36	平瓦	2.0	10Y R 8 / 4 浅黄橙	やや良	布目瓶、横骨瓶、希切瓶、布縫じ目	繩叩き	3	破損	
37	平瓦	2.2	2.5Y R 4 / 8 小褐	良	布目瓶、横骨瓶	繩叩き	破損	破損	二次焼熱?
38	平瓦	1.8	10BG 3 / 1 希青灰	良	布目瓶、横骨瓶、希切瓶	繩叩き	破損	3	還元焰
39	平瓦	1.8~2.0	10Y R 6 / 1 暗灰	やや良	布目瓶、横骨瓶、希切瓶	繩叩き・筋紋?	破損	2	還元焰
40	平瓦	1.3	N 3 / 希灰	良	布目瓶、横骨瓶、希切瓶	繩叩き	2~3	1	隅切瓦、還元焰
41	平瓦	2.2	N 4 / 灰	良	布目瓶、横骨瓶、粘土縫じ目	繩叩き	3	3	還元焰
42	平瓦	2.9	2.5GY 6 / 1 オリーブ灰	良	布目瓶、希切瓶、ナデ?	繩叩き・押抜瓶	1~2	破損	還元焰? 破損面に粘土の纏日
43	平瓦	2.2	5 Y 5 / 1 灰	良	布目瓶、希切瓶、頭頭瓶	繩叩き	3	3	還元焰
44	平瓦	2.2	10Y R 5 / 2 希青灰	やや良	布目瓶、希切瓶	繩叩き	3	1~2	
45	平瓦	2.2	2.5Y R 6 / 8 棕	良	布目瓶、希切瓶、指頭瓶	繩叩き・希切瓶	3	2	
46	平瓦	1.9	2.5Y R 5 / 8 明赤褐	良	布目瓶、希切瓶	繩叩き	3	2?	
47	平瓦	2.0	10Y R 6 / 2 希青灰	やや良	布目瓶、希切瓶	繩叩き	3	破損	還元焰?
48	平瓦	2.4	10Y R 6 / 4にぶい橙	やや良	布目瓶、希切瓶、ナデ?	繩叩き	3~4	破損	
49	平瓦	1.9	N 4 / 灰	良	布目瓶、希切瓶	繩叩き	3	破損	還元焰
50	平瓦	2.4	7.5Y R 6 / 6 棕	やや良	布目瓶、横骨瓶?・希切瓶	格子目叩き	3	破損	
51	平瓦	1.7	10Y R 6 / 2 底黄褐	良	布目瓶、横骨瓶	格子目叩き→ナデ?	3	破損	3次焼出面出土・還元焰?
52	平瓦	1.7	7.5Y R 5 / 6 明褐	やや良	布目瓶、横骨瓶	格子目叩き	2	破損	
53	平瓦	2.3	N 4 / 灰	良	布目瓶、横骨瓶	格子目叩き→ナデ?・指紋有	破損	破損	還元焰
54	平瓦	1.9	7.5Y R 7 / 3にぶい橙	やや良	布目瓶、横骨瓶	格子目叩き	破損	破損	3次焼出面出土
55	平瓦	2.2	7.5Y R 7 / 4にぶい橙	良	布目瓶、粘土縫り付け	格子目叩き	2~3	2~3	破損補強?
56	平瓦	1.6	7.5Y R 6 / 6 棕	やや不良	布目瓶、希切瓶?	格子目叩き	2	1	
57	平瓦	1.5	7.5Y R 6 / 6 棕	良	布目瓶	格子目叩き	破損	3	
58	平瓦	2.5	10Y R 7 / 3にぶい黄橙	やや不良	布目瓶、横骨瓶	平行叩き	3	3	端部に切れ込み状のケズリ
59	平瓦	2.1	7.5Y R 7 / 6 棕	やや不良	布目瓶、横骨瓶、希切瓶	平行叩き	3~4	破損	
60	平瓦	3.6	7.5Y R 6 / 2 底灰	良	布目瓶、横骨瓶	平行叩き→ヨコナデ (ハケ?)	3	破損	分厚い・還元焰? 2次焼出面出土
61	平瓦	2.5	5 Y R 7 / 8 棕	良	布目瓶、横骨瓶	平行叩き	3	破損	范傷?
62	平瓦	2.3	10Y R 6 / 2 底黄褐	良	布目瓶、横骨瓶	平行叩き	2	破損	還元焰?
63	平瓦	2.8	10Y R 7 / 4にぶい黄橙	良	布目瓶、横骨瓶?	平行叩き	破損	2	
64	平瓦	2.0	7.5Y R 8 / 4 浅黄橙	良	布目瓶、希切瓶	平行叩き→ナデ (?)	3	1	
65	平瓦	2.2	10Y R 7 / 3にぶい黄橙	良	布目瓶、希切瓶	平行叩き	破損	2	
66	平瓦	3.0	10Y R 4 / 1 暗灰	不良	布目瓶、希切瓶、ハケナデ?	平行叩き	破損	3	二次焼熱?
67	平瓦	2.4	7.5Y R 7 / 6 棕	良	布目瓶	平行叩き	3	破損	細い平行筋みの叩き具
68	平瓦	2.3	5 Y 7 / 1 底白	やや不良	布目瓶	平行叩き	破損	1~2	端部に布目瓶
69	平瓦	2.3	2.5Y 8 / 3 浅黄	不良	布目瓶	平行叩き・指頭瓶	1~2	破損	端部に布目瓶
70	平瓦	2.0	2.5Y 8 / 3 深黄	やや良	布目瓶	平行叩き	1	破損	端部に布目瓶
71	平瓦	2.8	N 4 / 灰	良	布目瓶、ナデ?	平行叩き・布目瓶	破損	破損	端部に凸面に布目瓶・還元焰
72	平瓦	2.3	10Y R 7 / 4にぶい橙	やや良	布目瓶、横骨瓶	ヨコナデ	2~3	2~3	叩き不明
73	平瓦	2.4	5 Y 4 / 1 灰	やや良	布目瓶	ヨコナデ	破損	3	叩き不明





(5) 金属製品

金属製品の概要 大本願明照殿地点からは、271点の金属製品が出土している。出土金属製品は、錢貨が最も多く124点、続いて鉄釘101点、キセルが13点となっているが、銭貨は遺存状態が悪く、判別不能の製品が多数を占める。ここでは比較的遺存状態の良好な金属製品を抽出して報告する。金属製品の多數は江戸期の土坑および第1・2次の遺構検出面にて出土しており、大多数が江戸期所産のものと想定される。土坑ではSK33およびSK46から鉄釘・煙管・鉄製接合具など多数の金属製品が出土しているが、これらの土坑では陶磁器も多量に出土しており、江戸時代後期に多量の製品を廃棄した遺構と想定される。

鉄製品の概要 鉄製品としては、多数の釘のほか、鉄鎌や短刀・包丁・接合具などが出土している。釘は全長3.6~15.3cmの様々な長さのものが出土している。釘や接合具などの製品は、木製品に付随するものと推測されるが、廃棄・埋没後に木部が腐食し、金属製品のみ残存したものと考えられる。

銅製品の概要 銅製品は、煙管・銅鏡・手鏡・飾り金具などを確認している。煙管は雁首・吸口が各数点出土しているが、木部は残存しない。雁首部に「本大佛」や花文の線刻が施される製品が出土している(第33図-43,44)。エックス線透過撮影により、手鏡に五弁の花文が装飾されていることを確認できた(第33図-54)。

出土銭貨の概要 銭名が判明できた銭貨57枚のうち、約4割が江戸時代の寛永通寶であった。中世の古銭は北宋銭の景德元寶・祥符元寶・天禧通寶・皇宋通寶・元豐通寶・紹聖元寶・明銭の洪武通寶・永樂通寶が出土している。また、煙管の雁首を潰した雁首銭2枚も出土している。

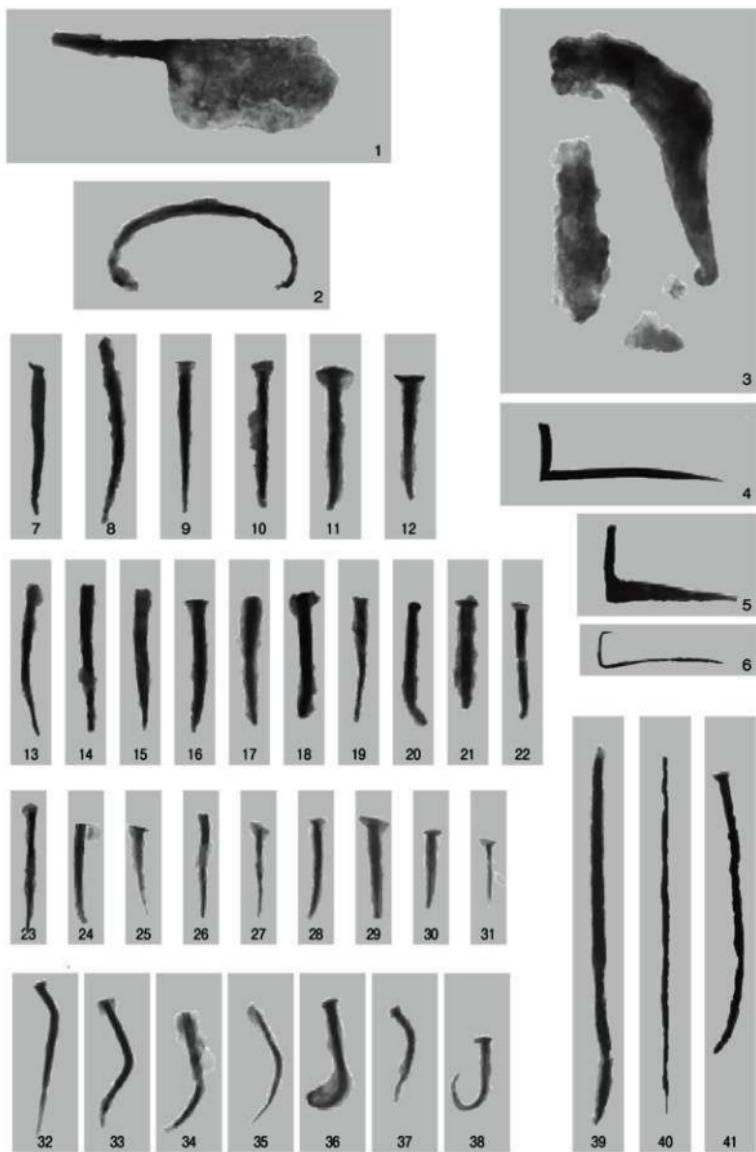
◎大本願明照殿地点 出土金属製品(第32図)

No.	遺物名	出土遺構	材質	遺量 (mm)		重量 (g)	整理 No.	備考
				全長	最大幅			
1	釘	SK40	鐵	147.0	3.0	46.0	46.04-47	
2	把手	SK40	鐵	9.0	7.0	40.0	22.14-257	
3	鉄鍵片	SK01	鐵	145.0	7.0	30.0	105.70-103	
4	複合具	1次検出面	鐵	90.0	9.0	28.0	16.26-3	
5	複合具	SK46	鐵	70.0	3.0	40.0	16.65-254	
6	複合具	SK46	鐵	55.0	3.0	5.0	3.25-250	
7	鉄釘	3次検出面	鐵	85.0	18.0	22.0	2.07-39	
8	鉄釘	SK35	鐵	93.0	8.0	11.0	19.27-227	
9	鉄釘	SK33	鐵	85.0	10.0	15.0	10.40-179	
10	鉄釘	SK40	鐵	73.0	8.0	10.0	30-36	
11	鉄釘	2次検出面	鐵	70.0	12.0	21.0	16.96-217	
12	鉄釘	SK46	鐵	60.0	7.0	16.0	8.69-243	
13	鉄釘	SK46	鐵	76.0	1.0	7.5	2.15-241	
14	鉄釘	SK46	鐵	72.0	4.0	8.5	9.39-91	
15	鉄釘	SK40	鐵	70.0	8.0	6.8	52-52	
16	鉄釘	SK33	鐵	66.0	14.0	8.9	8.96-32	
17	鉄釘	3次検出面	鐵	65.0	12.0	11.0	20.20-209	
18	鉄釘	SK46	鐵	63.0	15.0	15.4	9.44-30	
19	鉄釘	SK45	鐵	61.0	8.0	8.1	2.19-238	
20	鉄釘	SK46	鐵	60.0	14.0	9.0	9.04-78	
21	鉄釘	SK33	鐵	55.0	13.0	10.6	1.30-30	
22	鉄釘	2次検出面	鐵	58.0	10.0	5.1	2.8-28	
23	鉄釘	SK33	鐵	55.0	5.0	4.8	3.82-182	
24	鉄釘	SE01	鐵	50.0	6.0	5.3	3.30-30	
25	鉄釘	SE01	鐵	48.0	1.0	3.1	2.19-24	
26	鉄釘	SK46	鐵	50.0	6.0	4.3	4.82-82	
27	鉄釘	SK46	鐵	50.0	14.0	2.9	8.65-65	
28	鉄釘	SK47	鐵	53.0	8.0	6.0	6.00-87	
29	鉄釘	SK33	鐵	52.0	7.0	11.0	8.58-184	
30	鉄釘	2次検出面	鐵	39.0	6.0	10.0	4.03-218	
31	鉄釘	SK46	鐵	36.0	1.0	1.3	2.24-244	
32	鉄釘	SK40	鐵	9.0	7.0	9.4	2.51-51	
33	鉄釘	SK46	鐵	65.0	5.0	14.0	7.78-240	
34	鉄釘	3次検出面	鐵	62.0	15.0	9.6	2.08-208	
35	鉄釘	SK46	鐵	60.0	12.0	4.5	4.82-81	
36	鉄釘	2次検出面	鐵	55.0	9.0	25.0	15.52-222	
37	鉄釘	SK33	鐵	50.0	11.0	4.2	3.35-35	
38	鉄釘	SK02	鐵	40.0	11.0	4.0	4.06-107	
39	鉄釘	SK31	鐵	148.0	6.0	19.0	2.92-214	
40	鉄釘	2次検出面	鐵	153.0	10.0	20.6	4.20-220	
41	鉄釘	2次検出面	鐵	1.2	11.0	16.45	1.27-127	

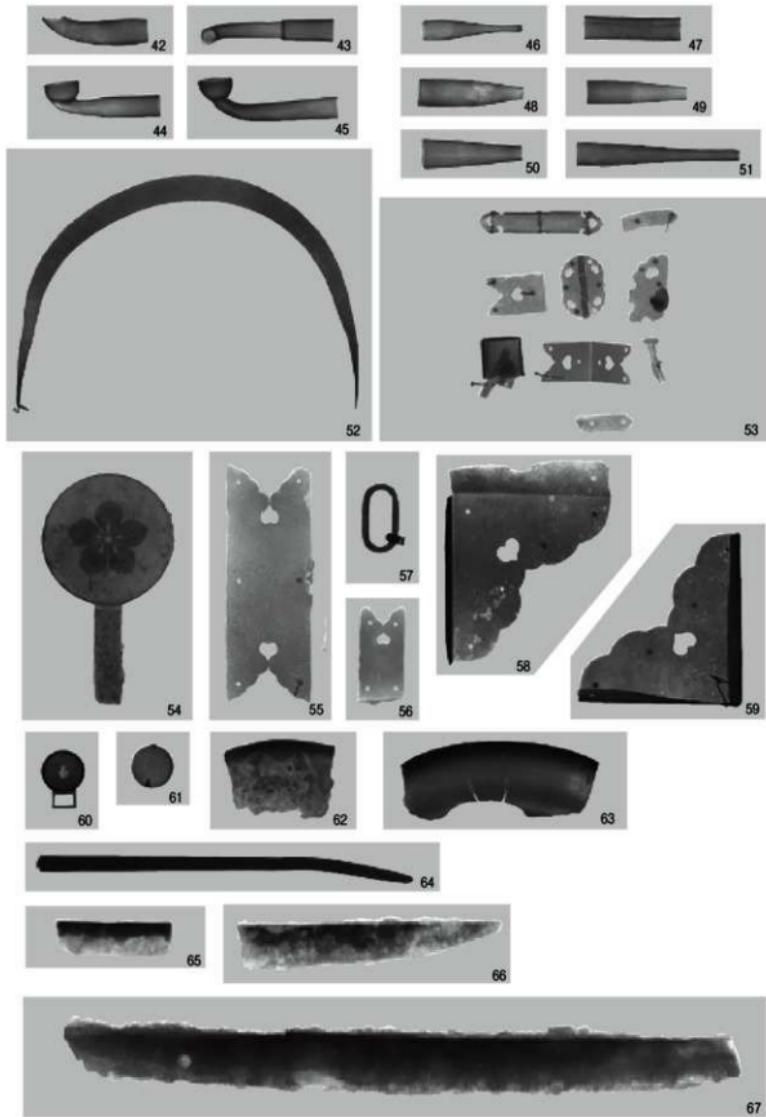
◎大本願明照殿地点 出土金属製品(第33図)

No.	遺物名	出土遺構	材質	遺量 (mm)		重量 (g)	整理 No.	備考
				全長	最大幅			
42	煙管 雁首	SN02	銅	43.0	0.5	10.5	569	100
43	煙管 雁首	SK46	銅	60.0	7.0	11.0	871	75 「木大株」 雁 頭あり 花文の 燐 刷
44	煙管 雁首	SK46	銅	50.0	0.7	13.5	563	146 あり
45	煙管 雁首	SK46	銅	65.0	10.0	10.0	1048	246
46	煙管 吸口	SD01	銅	41.5	0.5	9.8	272	104
47	銅管	2次検出面	銅	40.0	1.5	10.0	1058	126 (煙管一部)
48	煙管 吸口	SK33	銅	43.0	11.5	-	376	189
49	煙管 吸口	SK33	銅	45.0	10.0	-	421	188
50	煙管 吸口	SK46	銅	41.0	0.5	12.0	529	145
51	煙管 吸口	SK46	銅	60.0	0.5	10.0	700	74
52	鉄製 手鏡	SD05	銅	140.0	2.0	11.0	3366	135
53	舞り金具1片	SK25	銅	41.0	0.5	18.0	2982	144
54	手鏡	SK45	銅	95.0	3.0	55.0	3268	236
55	舞り金具	3次検出面	銅	97.0	0.5	35.0	1673	204
56	舞り金具	3次検出面	銅	44.0	0.5	21.0	486	205
57	舞り金具	3次検出面	銅	28.5	1.5	3.0	279	206
58	舞り金具	3次検出面	銅	70.0	0.5	15.0	27.13	203
59	舞り金具	3次検出面	銅	70.0	0.5	16.0	36.19	202
60	舞り金具	SK40	銅	28.5	5.0	13.0	376	60
61	舞り金具か	SK33	銅	12.0	1.0	-	183	191
62	銅鑲瓦	4次検出面	銅	47.0	1.5	30.0	1067	270
63	銅鑲瓦 片	SK23	銅	82.0	3.0	35.0	1825	61
64	不明銅製品	SK40	銅	155.0	3.0	7.0	19.17	57
65	不明品小刀か	SK46	銅	50.0	4.0	15.0	9.68	253
66	銀製 司刀片	SK23	銅	121.0	5.0	21.0	26.09	114
67	短刀	2次検出面	銅	275.0	1.0	27.0	216.73	115

※第32・33・34図はエックス線透過写真



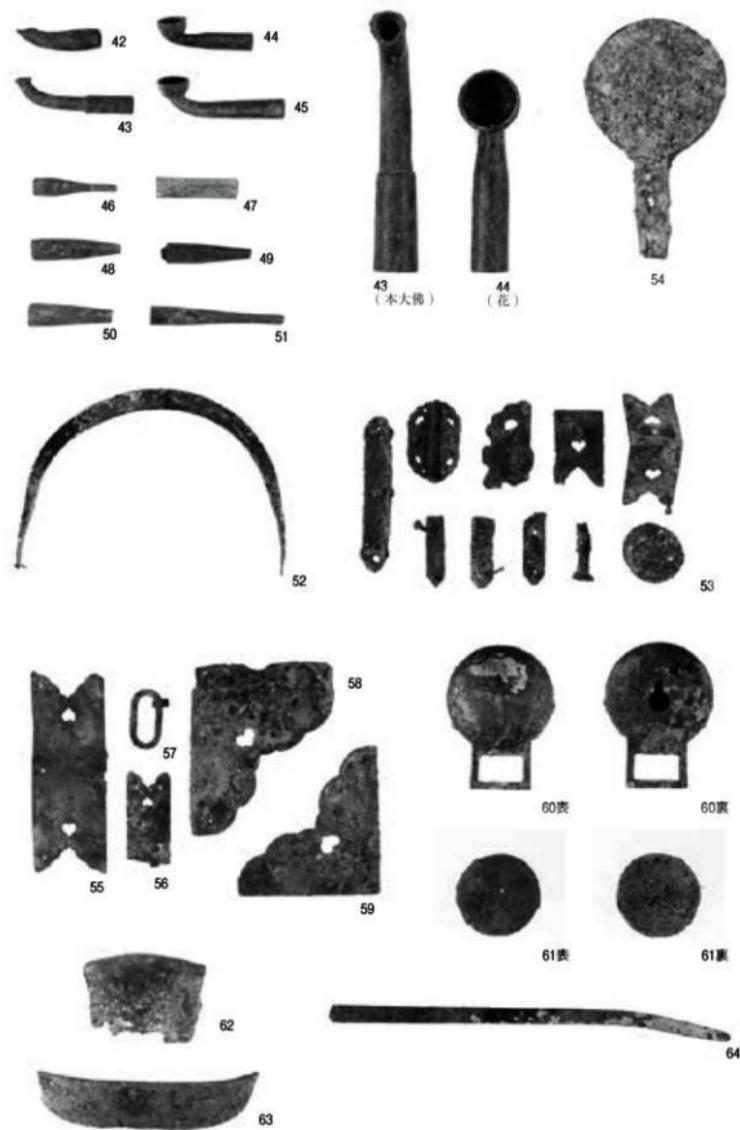
第32図 大本願明照殿地点出土金属製品 (S 与1/2)



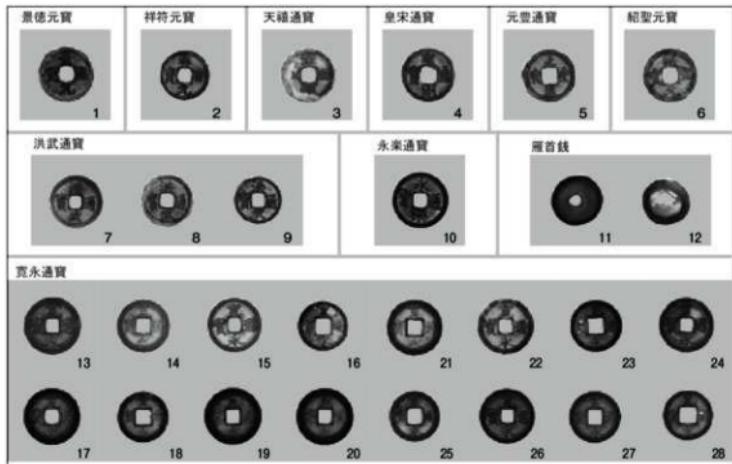
第33図 大本顕明照殿地点出土金属製品 (S ≒ 1/2)



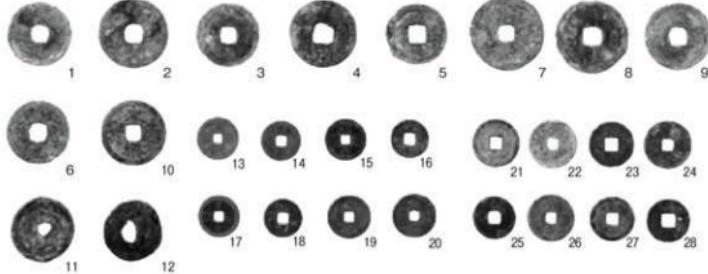
大本願明照殿地点 出土金属製品



大本願明照殿地点 出土金属製品



第34図 大本願明照殿地点出土銭貨 (S=1/2)



○大本願明照殿地点 出土銭貨

遺物 No.	遺物名	材質	出土 位置	法量 (mm) 直徑 最大厚	重量 (g)	鑄造 年	西暦	備考
1	銅錢「景德元寶」	銅	S004	24.0	1.0	292	北宋 景德 元年	1004
2	銅錢「祥符元寶」	銅	S001	22.0	1.3	251	北宋 大中祥 符元年	1008
3	銅錢「天禧通寶」	銅	S004	24.0	1.0	230	北宋 天禧 通寶	1017~
4	銅錢「皇宋通寶」(真)	銅	S004	24.0	1.0	230	北宋 皇宋 通寶	1029
5	銅錢「元豐通寶」(真)	銅	S004	23.0	0.5	288	北宋 元豐 通寶	1078
6	銅錢「祐聖元寶」(真)	銅	S021	24.0	1.0	322	北宋 祐聖 元年	1094
7	銅錢「洪武通寶」	銅	出函	23.5	1.0	386	明 洪武 元年	1368
8	銅錢「洪武通寶」	銅	S004	23.0	1.5	305	明 洪武 元年	1368
9	銅錢「洪武通寶」	銅	S004	25.0	1.0	194	明 洪武 元年	1368
10	銅錢「永樂通寶」	銅?	3次檢 出函	25.0	1.0	283	日本 天正 15年	1587
11	雁首銭	銅	2次檢 出函	22.5	2.5	455		
12	雁首銭	銅	S005	21.0	1.5	243		
13	銅錢「寛永通寶」	銅	2次檢 出函	25.0	1.5	359	日本 元禄 2年	1656 香谷銭 萩原銭(草 元禄水)
14	銅錢「寛永通寶」	銅	2次檢 出函	23.0	1.0	309	日本 元禄 3年	1700 萩原銭(草 元禄水)

遺物 No.	遺物名	材質	出土 位置	法量 (mm) 直徑 最大厚	重量 (g)	鑄造 年	西暦	備考
15	銅錢「寛永通寶」	銅	S004	24.0	1.0	281	日本 寛永 12年	1655 水口我
16	銅錢「寛永通寶」	銅	S046	22.0	0.7	178	日本 寛永 元年	1741 鈴鹿無背 (-二之面)
17	銅錢「寛永通寶」	銅	S046	25.0	1.3	409	日本 寛永 12年	1728 大阪難波銭
18	銅錢「寛永通寶」	銅	S001	22.0	1.0	195	日本 寛永 8年	1739 呉永 (古田島)
19	銅錢「寛永通寶」	銅	2次檢 出函	25.0	1.0	305	日本 寛永 8年	1668 島屋文
20	銅錢「寛永通寶」	銅	2次檢 出函	25.0	1.0	372	日本 寛永 8年	1668 島屋文
21	銅錢「寛永通寶」	銅	S013	25.0	1.0	213	日本	
22	銅錢「寛永通寶」	銅	2次檢 出函	25.0	1.5	281	日本	
23	銅錢「寛永通寶」	銅	S005	23.0	1.0	254	日本	
24	銅錢「寛永通寶」	銅	S046	24.0	1.0	331	日本	
25	銅錢「寛永通寶」	銅	S023	22.0	1.0	177	日本	
26	銅錢「寛永通寶」	銅	2次檢 出函	24.0	1.5	335	日本	
27	銅錢「寛永通寶」	銅	S045	22.5	1.0	281	日本	
28	銅錢「寛永通寶」	銅	S040	22.0	0.5	192	日本	

(6) 石製品

出土石製品の概要 大本願明照殿地点からは、五輪塔・宝篋印塔・板碑など373点の石製品が出土している。そのうち8割以上(318点)は五輪塔であり、宝篋印塔25点、石臼13点、板碑11点、不明6点となっている。五輪塔は仏教のいう宇宙を構成する要素として空・風・火・水・地の五輪を現した石造物であり、古代末から中世まで供養塔として造立された。宝篋印塔は相輪・笠・塔身・基礎・基壇からなる石造物であり、五輪塔に比べ直線的な塔形である。石製品の多数は中世の信仰対象物であるが、本調査区では全て江戸期の上坑や溝跡などから出土しており、廃棄もしくは建築資材として転用されたものと考えられる。五輪塔・宝篋印塔の刻銘は地輪および基礎に造塔趣旨・造立年月日を記すものが数点出土している。

石製品の石材 出土した石製品の石材は95%以上が安山岩である。僅かに裾花凝灰岩製の石製品も15点程確認されたが、全て五輪塔である。宝篋印塔は、製造において細かい加工や記銘を行うため、同じ安山岩でも比較的良質のものを選定している傾向がある。安山岩は現在でも西長野郷路山、若槻磐山などに露頭しているが、中世段階での石材産出地は不明である。

板碑の概要 板碑は、頂部を三角形に成形した板状の一枚石の正面に、信仰対象や造塔趣旨・造立年月日などを刻んだ石塔である。形状は側面・背面を平らに成形し、正面を長方形に一段彫り窪める在地型のものが多数だが、1点のみ頭部に二条線を刻み、基部にホゾを有する板碑が出土している(図34-14)。造立年が解読不能であるが、在地型の初期形状の可能性もあり、今後の課題としたい。また石造物の造立趣旨としては、「逆修」(生前に自分の死後のために供養をしておくこと)や、同忌供養の「十三年忌」と記されたものが確認されている。

●石造物名称

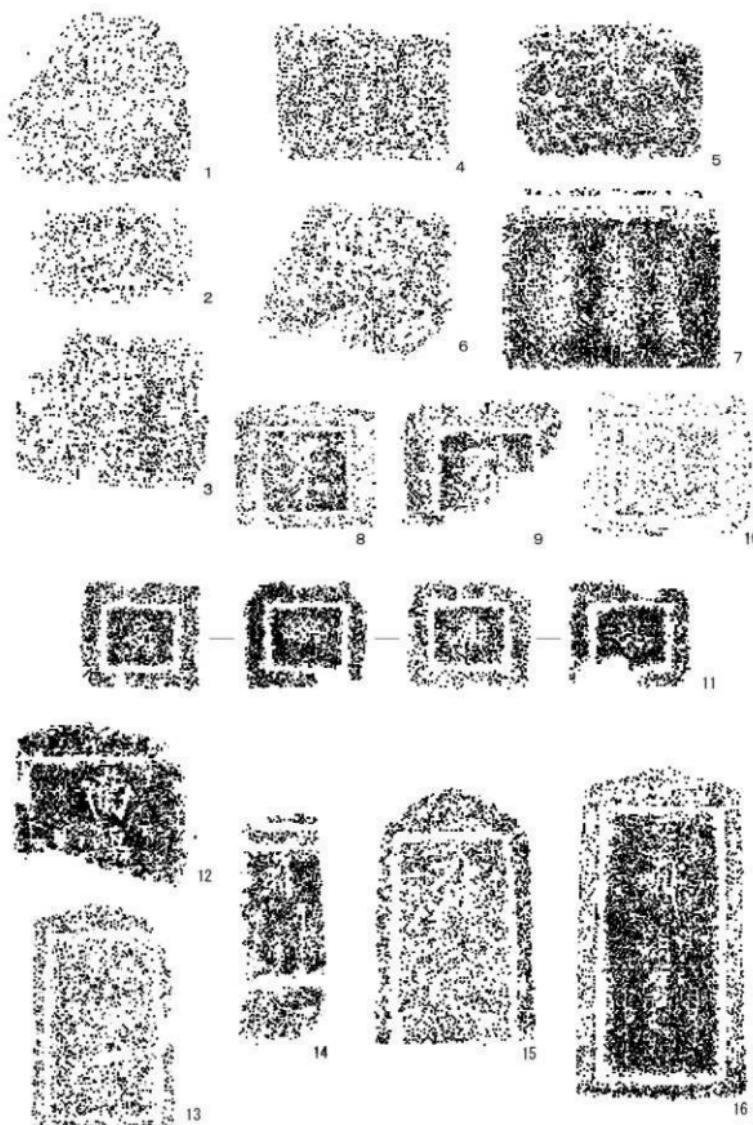


五輪塔

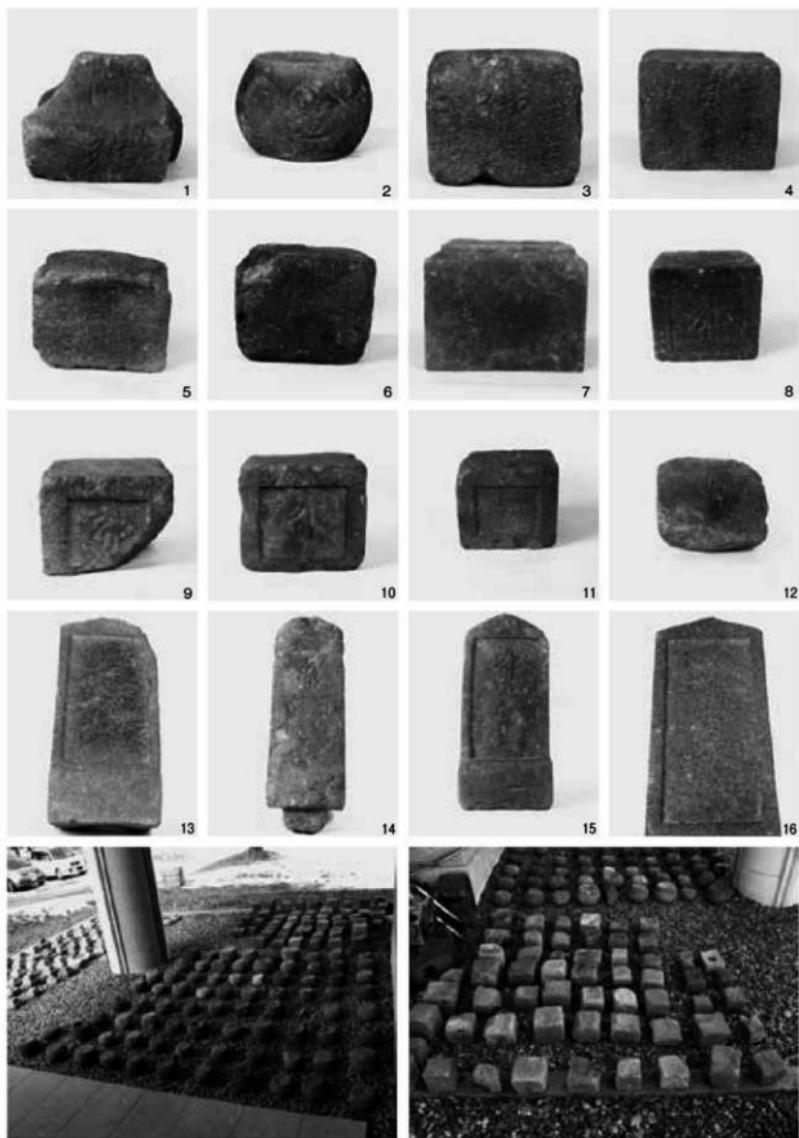


宝篋印塔

番号	石造物内容 種別	部位	石材			計
			安山岩 (青目)	安山岩 (赤目)	凝灰岩	
五輪塔 (318)	空輪		32	10	2	44
	火輪		63	24	3	90
	水輪		56	19	5	80
	地輪		71	27	5	103
	火水輪		1			1
宝篋印塔 (25)	相輪		7	1		8
	笠		4			4
	塔身		8			8
	基壇		5			5
	板碑		10	1		11
石臼			10	3		13
			5	1		6
			272	86	15	373



第34図 大本願明照殿地点 出土石製品 (S=1/6)



出土した五輪塔（水輪）

出土した五輪塔（地輪）・宝篋印塔（塔身・基礎）

○出土石製品 観察表

番号	石製品内容		寸法 (cm)	備考
	種別	部位・形状		
1	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 15.0 15.0 12.5	
2	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 16.0 13.0 12.0	
3	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 16.0 14.0 13.0	
4	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 16.5 0.30 0.30 一部欠損	
5	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 17.0 13.5 12.0	
6	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 17.0 14.0 12.0	
7	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 17.0 12.5 11.0	
8	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 17.0 13.5 12.0	
9	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 17.5 13.5 13.5	
10	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 17.5 0.45 0.30 一部欠損	
11	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 17.5 15.0 14.5	
12	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 17.5 14.5 12.0	
13	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 18.0 16.0 14.0	
14	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 18.0 16.0 15.0	
15	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 18.5 0.50 0.40 一部欠損	
16	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 18.5 13.5 12.0	
17	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 19.0 16.0 14.0	
18	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 19.0 18.5 17.0	
19	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 19.5 15.5 13.0	
20	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 19.5 16.0 15.5	
21	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 19.5 17.5 16.0	
22	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 20.0 17.5 15.5	
23	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 20.0 15.5 13.5	
24	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 20.0 16.5 14.5	
25	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 21.0 16.0 13.5	
26	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 21.0 17.0 15.0	
27	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 21.0 17.0 16.0	
28	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 21.0 14.5 (13.5) 一部欠損	
29	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 21.0 15.0 (13.5) 一部欠損	
30	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 21.0 0.20 0.30 一部欠損	
31	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 22.0 17.5 16.5	
32	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 22.0 (0.65) (15.0) 一部欠損	
33	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 22.5 16.5 15.5	
34	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 22.5 0.85 (14.5) 一部欠損	
35	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 23.5 17.5 17.0	
36	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 25.5 0.25 0.20 一部欠損	
37	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 0.55 0.20 (0.30) 一部欠損	
38	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) (0.6) 0.50 15.5 一部欠損	
39	五輪塔	火輪	櫛花凝灰岩系 0.65 0.10 (0.5) 一部欠損	
40	五輪塔	火輪	櫛花凝灰岩系 0.65 0.45 0.30 一部欠損	
41	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 0.70 0.60 0.40 一部欠損	
42	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 0.85 0.50 (14.0) 一部欠損	
43	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 0.85 0.45 13.0 一部欠損	
44	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 0.85 0.55 15.5 一部欠損	
45	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 9.0 8.0 18.5	
46	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 9.2 7.6 17.0	
47	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 9.5 9.0 17.5	
48	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 9.7 9.5 22.0 密み有り	
49	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 10.0 7.5 17.2 密み有り	
50	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 10.2 8.0 19.8	
51	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 10.5 9.5 22.0	
52	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 10.5 8.5 20.0	
53	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 10.5 11.5 21.0	
54	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 10.7 8.8 21.0	
55	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.0 7.0 19.0 一部欠損	
56	五輪塔	火輪	安山岩 (赤目) 11.0 9.0 20.5	
57	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.0 6.0 17.7 一部欠損	
58	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.2 8.5 19.5 一部欠損	
59	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.2 9.2 21.0	
60	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.2 9.5 23.0	
61	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.3 10.0 21.8	
62	五輪塔	火輪	櫛花凝灰岩系 11.5 9.5 22.3	
63	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.7 9.5 23.0	
64	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.7 8.0 19.0	
65	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.7 9.5 19.0	
66	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.8 11.5 12.5	
67	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.8 10.0 20.0 密み有り	
68	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.8 10.5 21.3	
69	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.0 10.5 23.5 一部欠損	
70	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 11.8 9.7 19.5	
71	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.0 9.2 22.5	
72	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.0 10.0 22.8	
73	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.2 10.0 22.8	
74	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.2 8.5 20.0	
75	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.2 12.0 24.7	
76	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.3 9.3 20.5	
77	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.3 10.2 22.8	
78	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.5 11.3 22.5	
79	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.5 8.8 20.5	
80	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.5 11.0 22.5	
81	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.5 10.0 22.0	
82	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.5 10.5 25.0	
83	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.5 10.0 22.5	
84	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.5 11.0 22.5	
85	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 12.8 11.3 21.8	
86	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.0 11.5 24.5	
87	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.0 (15.0) 25.0 一部欠損	
88	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.2 (8.0) 20.5 一部欠損	
89	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.3 10.0 21.0	
90	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.3 10.5 26.0	
91	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.5 10.0 22.0	
92	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.5 9.8 25.0	
93	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.5 8.8 22.5	
94	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.5 9.5 21.5	
95	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.7 10.5 25.0	
96	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.7 10.5 21.8	
97	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.7 10.3 26.0	
98	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 13.8 10.0 22.5	
99	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 14.0 9.0 23.0 一部欠損	
100	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 14.0 11.0 23.5	
101	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 14.0 7.8 23.3	
102	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 14.2 9.8 25.8	
103	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 14.5 10.8 24.5	
104	五輪塔	火輪	櫛花凝灰岩系 14.5 8.50 26.0 一部欠損	
105	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 14.5 10.0 23.2	
106	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 14.5 10.5 (15.0) 一部欠損	
107	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 14.5 12.0 28.0	
108	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 14.8 10.5 21.0	
109	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 14.8 11.0 26.0	
110	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 15.0 10.0 24.5	
111	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 15.0 10.5 22.5	
112	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 15.3 11.5 22.5	
113	五輪塔	火輪	櫛花凝灰岩系 15.3 9.5 21.5	
114	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 15.5 11.0 24.0	
115	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 15.5 11.0 25.5	
116	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 15.5 10.0 26.5	
117	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 15.5 8.5 23.0	
118	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 16.0 11.0 26.0 磨耗	
119	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 16.3 12.5 25.5	
120	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 16.5 11.0 25.5	
121	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 16.5 11.5 24.2	
122	五輪塔	火輪	安山岩 (青目) 16.5 10.0 24.5	

番号	石製品内容		石材	寸法(cm)			備考	番号	石製品内容		石材	寸法(cm)			備考
	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2			種別	部位		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
123	五輪塔	火輪	安山岩(青目)	16.6	11.5	27.5		184	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	15.8	14.5	22.5	
124	五輪塔	火輪	安山岩(青目)	16.8	11.5	26.5		185	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	15.8	16.3	21.8	
125	五輪塔	火輪	安山岩(青目)	17.0	12.5	28.0	僅み有り	186	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.0	15.5	22.5	
126	五輪塔	火輪	安山岩(青目)	17.5	11.0	25.8		187	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.0	15.8	22.0	僅み有り
127	五輪塔	火輪	安山岩(赤目)	17.8	11.0	21.5		188	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.2	15.7	25.1	
128	五輪塔	火輪	安山岩(青目)	18.5	10.0	25.0	墨書「阿」	189	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.3	15.8	23.7	
129	五輪塔	火輪	安山岩(青目)	19.3	12.5	28.0		190	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.5	13.0	24.8	
130	五輪塔	火輪	安山岩(青目)	20.0	11.0	30.0		191	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	16.5	16.0	23.6	
131	五輪塔	火輪	安山岩(青目)	20.3	13.0	28.2		192	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.5	24.5	17.3	
132	五輪塔	火輪	安山岩(赤目)	22.0	10.0	23.0		193	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.6	12.4	21.5	僅み有り
133	五輪塔	火輪	安山岩(赤目)	24.0	13.2	30.5		194	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.6	14.0	22.5	
134	五輪塔	火水輪	安山岩(青目)	火16.8	8.0	(18.0)	火水輪同一個体	195	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.7	19.0	24.9	
135	五輪塔	火水輪	安山岩(青目)	火16.0	13.5	14.0		196	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	16.7	17.0	24.5	
136	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	10.5	14.6	22.0		197	五輪塔	水輪	鶴花崗岩系	16.8	13.0	21.0	
137	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	10.5	13.6	16.9		198	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.8	15.0	24.8	
138	五輪塔	水輪	鶴花崗岩系	11.0	9.6	19.5		199	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	16.8	19.0	26.5	僅み有り
139	五輪塔	水輪	安山岩(茶目)	11.3	11.5	18.6		200	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	17.2	15.5	21.3	
140	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	11.4	12.5	22.3		201	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	17.3	15.5	23.0	
141	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	11.8	15.5	21.7		202	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	17.3	15.0	22.5	
142	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	11.8	12.0	19.4	被熱有り	203	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	17.6	14.0	21.5	
143	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	12.0	12.5	16.3		204	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	18.1	13.0	23.2	
144	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	12.0	12.5	19.4		205	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	18.2	14.5	21.8	
145	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	12.0	14.0	19.5		206	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	18.2	12.8	19.5	
146	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	12.0	14.7	22.6	僅み有り	207	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	18.2	19.0	26.0	僅み有り
147	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	12.1	14.4	18.8		208	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	18.5	(18.3)	(30.0) 部欠損	
148	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	12.3	15.9	19.0		209	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	19.2	16.5	26.2	
149	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	12.3	16.5	21.5		210	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	19.8	18.0	30.0	僅み有り
150	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	12.3	11.0	19.5		211	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	19.8	22.0	28.3	
151	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	12.4	11.5	21.0		212	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	20.3	17.7	26.8	
152	五輪塔	水輪	鶴花崗岩系	12.5	14.0	19.8		213	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	21.5	21.4	30.0	
153	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	12.5	15.0	21.0		214	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	16.5	6.0	(11.0) 僅み有り	
154	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	12.6	9.5	20.3		215	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	8.0	23.5	23.0	
155	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	12.8	13.5	19.5		216	五輪塔	地輪	鶴花崗岩系	9.0	30.0	31.0 基礎?	
156	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	12.8	11.0	19.0		217	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	9.5	21.5	19.0	
157	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	13.0	14.8	21.0		218	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	10.0	27.5	26.5	
158	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	13.2	14.8	20.0		219	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	10.5	14.0	14.0	
159	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	13.4	18.0	21.2		220	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	10.5	21.0	21.0	
160	五輪塔	水輪	鶴花崗岩系	13.4	13.5	19.0		221	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	10.5	15.0	(17.0) 部欠損	
161	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	13.4	15.0	20.0	僅み有り	222	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	11.0	14.0	13.0	
162	五輪塔	水輪	鶴花崗岩系	13.6	12.0	19.5		223	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	11.0	16.0	16.5 被熱?	
163	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	13.6	15.5	22.6		224	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	11.0	29.5	29.0 基礎?	
164	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	13.6	12.5	18.0		225	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	11.0	30.5	30.5 僅み有り	
165	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	13.6	17.0	20.8		226	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	11.5	26.0	25.5	
166	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	14.0	12.4	19.8		227	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	12.0	17.5	17.0	
167	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	14.2	14.5	21.2		228	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	12.3	18.5	19.5	
168	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	14.2	10.0	20.5	僅み有り	229	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	12.5	19.5	20.5	
169	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	14.2	16.5	21.0		230	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	12.5	32.5	32.5 基礎?	
170	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	14.2	13.6	23.0		231	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	13.0	15.5	14.0	
171	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	14.4	17.0	23.5	僅み有り	232	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	13.0	17.5	17.5	
172	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	14.5	18.0	23.2		233	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	13.0	22.0	(13.0) 僅み有り 29.5 と複合	
173	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	14.5	14.0	16.4		234	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	13.0	19.0	19.0	
174	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	14.6	14.0	22.8		235	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	13.0	15.0	17.0	
175	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	14.6	18.4	24.0		236	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	13.5	19.0	19.0	
176	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	14.8	12.6	22.5		237	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	13.5	18.0	18.0 墓碑有り	
177	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	14.8	14.5	23.7		238	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	13.5	20.0	19.0	
178	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	14.8	18.3	22.8		239	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	14.0	20.0	20.0	
179	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	15.0	15.5	23.8		240	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	14.0	19.0	18.5	
180	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	15.0	13.7	22.7		241	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	14.0	18.0	16.5	
181	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	15.6	14.0	22.2		242	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	14.0	17.5	15.0	
182	五輪塔	水輪	安山岩(赤目)	15.6	14.6	18.1		243	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	14.0	25.5	21.0	
183	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	15.7	13.6	23.0		244	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	14.0	19.5	18.5	

番号	石製品内容		石材	寸法 (cm)			備考
	種別	部位・形状		タテ	ヨコ1	ヨコ2	
245	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	140	190	17.0	
246	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	140	230	22.5	
247	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	140	190	19.0	
248	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	145	21.0	30.0	
249	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	145	18.5	18.0	
250	五輪塔	地輪	鶴花崗灰岩系	145	18.5	19.5	
251	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	145	22.0	21.0	
252	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	150	190	19.0	
253	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	150	16.5	16.0	
254	五輪塔	地輪	鶴花崗灰岩系	150	20.0	30.0	
255	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	150	20.5	20.0	墨書き有り
256	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	150	19.0	18.0	
257	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	150	20.5	30.5	
258	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	150	19.0	19.0	
259	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	150	17.0	17.5	
260	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	150	16.0	18.5	
261	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	150	19.3	20.0	
262	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	150	24.0	23.5	被熱
263	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	150	20.5	20.5	
264	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	150	19.0	19.0	
265	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	150	21.0	23.0	
266	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	150	21.0	30.0	
267	五輪塔	地輪	鶴花崗灰岩系	152	24.0	24.7	被熱、渾み有り
268	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	155	19.0	19.0	
269	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	155	19.3	19.5	
270	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	155	22.0	21.5	
271	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	155	21.0	21.0	被熱
272	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	160	16.5	16.0	
273	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	160	24.0	24.0	
274	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	160	22.0	21.5	記録有り
275	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	160	20.5	21.0	
276	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	160	34.5	25.5	
277	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	160	20.5	21.0	
278	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	160	20.0	19.5	被熱?
279	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	160	20.0	21.0	
280	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	165	18.5	19.5	
281	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	165	20.0	21.0	
282	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	165	21.0	20.5	
283	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	165	20.0	20.5	
284	五輪塔	地輪	鶴花崗灰岩系	165	19.5	17.0	
285	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	170	23.0	23.0	被熱
286	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	170	20.5	20.5	墨書き有り
287	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	170	21.0	21.5	
288	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	170	22.0	22.0	墨書き有り
289	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	170	21.0	20.5	
290	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	170	23.5	21.5	一部欠損
291	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	170	26.5	25.5	
292	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	180	20.5	20.5	
293	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	180	23.0	23.0	
294	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	185	22.0	20.0	
295	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	185	22.0	21.5	
296	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	190	23.0	23.0	
297	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	190	21.0	20.5	
298	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	190	26.5	27.0	
299	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	190	24.0	24.0	記録有り
300	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	190	25.0	25.0	
301	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	190	21.0	22.5	
302	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	190	22.5	21.0	
303	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	205	24.0	24.0	
304	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	210	25.0	24.0	
305	五輪塔	地輪	安山岩(赤目)	210	27.0	27.0	
306	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	23.0	30.7	31.3	
307	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	13.0	17.0	15.0	一部欠損
308	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	13.0	17.0	16.0	被熱、一部欠損
309	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	13.0	15.0	17.0	一部欠損
310	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	14.5	19.5	13.5	一部欠損
311	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	14.5	14.5	21.5	20.0と混合
312	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	14.5	18.0	20.0	一部欠損
313	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	16.5	21.5	21.0	一部欠損
314	宝鏡印塔	相輪	安山岩(青目)	9.5	10.0		一部欠損
315	宝鏡印塔	相輪	安山岩(青目)	11.5	6.0		一部欠損
316	宝鏡印塔	相輪	安山岩(青目)	13.0	14.0		一部欠損
317	宝鏡印塔	相輪	安山岩(青目)	13.5	9.0		一部欠損
318	宝鏡印塔	相輪	安山岩(青目)	15.5	10.5		一部欠損
319	宝鏡印塔	相輪	安山岩(青目)	18.0	16.5		被熱、一部欠損
320	宝鏡印塔	相輪	安山岩(青目)	25.0	15.0		
321	宝鏡印塔	塔身	安山岩(赤目)	24.5	11.0		
322	宝鏡印塔	傘	安山岩(青目)	19.2	12.5	25.5	孔有り
323	宝鏡印塔	傘	安山岩(青目)	19.5	12.0	27.0	孔有り
324	宝鏡印塔	傘	安山岩(青目)	20.5	6.5	27.0	孔有り
325	宝鏡印塔	傘	安山岩(青目)	22.3	10.3	26.3	孔有り
326	宝鏡印塔	塔身	安山岩(青目)	13.5	15.0	15.0	
327	宝鏡印塔	塔身	安山岩(青目)	15.0	16.0	16.0	
328	宝鏡印塔	塔身	安山岩(青目)	15.0	16.0	16.0	梵字
329	宝鏡印塔	塔身	安山岩(青目)	18.0	20.5	20.0	梵字
330	宝鏡印塔	基礎	安山岩(青目)	15.0	20.5	20.0	
331	宝鏡印塔	基礎	安山岩(青目)	19.0	26.0	22.5	孔有り、一部欠損
332	宝鏡印塔	基礎	安山岩(青目)	19.0	25.0	25.0	
333	宝鏡印塔	基礎	安山岩(青目)	19.0	27.0	27.0	記録有り
334	宝鏡印塔	基礎	安山岩(青目)	25.0	23.0	23.0	
335	石臼		安山岩(青目)	7.0	11.0		一部欠損
336	石臼		安山岩(青目)	8.0	12.0		一部欠損
337	石臼		安山岩(青目)	9.0	29.0		
338	石臼		安山岩(青目)	10.0	13.0		一部欠損
339	石臼		安山岩(青目)	10.0	12.0		一部欠損
340	石臼		安山岩(青目)	10.5	16.0		一部欠損
341	石臼		安山岩(青目)	11.0	34.0		
342	石臼		安山岩(青目)	11.0	31.0		
343	石臼		安山岩(青目)	11.0	32.0		
344	石臼		安山岩(青目)	12.0	35.0		
345	石臼		安山岩(青目)	13.0	34.0		
346	石臼		安山岩(赤目)	15.0	16.0	16.0	一部欠損
347	石臼		安山岩(青目)	16.0	34.0		
348	板碑		安山岩(青目)	25.0	30.0	18.0	記録有り、一部欠損
349	板碑		安山岩(青目)	25.0	23.0	14.0	記録有り、一部欠損
350	板碑		安山岩(青目)	21.0	15.5	7.0	記録有り
351	板碑		安山岩(青目)	38.5	18.5	10.5	記録有り
352	板碑		安山岩(青目)	39.0	18.0	9.0	記録有り
353	板碑		安山岩(青目)	43.0	22.0	17.0	記録有り
354	不明		安山岩(青目)	9.0	27.0	18.5	孔有り(基礎?)
355	不明		安山岩(青目)	15.0	15.0		一部欠損
356	不明		安山岩(青目)				不明
357	不明		安山岩(青目)				不明
358	不明		安山岩(青目)				不明
359	不明		安山岩(青目)				不明

*1 寸法の()は現存部分のみの寸法を示す。

*2 寸法の「タテ」は高さを、「ヨコ1」「ヨコ2」は幅を示す。

*3 五輪塔 (空輪輪: 空輪輪最大径)、火輪 (上部辺: 下部辺)、

木輪 (上部辺: 最大径)、地輪 (底部辺: 横部辺)。

*4 宝鏡印塔 (相輪: 相輪辺; 傘輪: 傘輪辺; 基礎: 基礎辺; 横部辺: 横部辺)。

*5 板碑 (頭部辺: 頭部辺; 背部辺: 背部辺)。

第2節 仁王門東地点の調査概要

(1) 調査の方法

調査は、個人住宅建設に伴う地階建設部分約60m²を対象として、記録保存のための遺構確認を行った。発掘調査においては、重層的に埋没する各時代の遺構をそれぞれ検出するため、近代造成土層を除去した後に、堆積土層に応じて検出面を設定し、2次にわたる掘り下げと遺構確認を実施した。また、適宜調査坑（トレンチ）を設定し、土層の堆積状況や石積状況の確認につとめた。

(2) 基本層序

現地表下60～100cmは、近現代の造成によって改変されているが、それより下層は江戸期以前の堆積土層を確認することができる。堆積土層からは大きく3段階の盛土を確認できる（第35図）。盛土1上からは、江戸期の土坑が複数検出されており、中世末から近世の造成と想定される。なお、調査区東部の石積1は、現在も露出しており裏盛土包含の出土遺物から明治期以降の築造と判断される。盛土2は、調査区南部にて検出された石積2に伴う盛土造成であり、盛土上面にて礎石状遺構や土坑などを確認しており、出土遺物から中世の造成と想定される。盛土3は、多量の炭化物・焼土を含む土層であり、石積3にて土留がなされている。盛土3に包含される遺物は、盛土2の包含遺物とほぼ同時期に比定されるため、一連の造成と想定される。盛土3および石積3の下部は固く締まった粘性土（盛土4）で整地されており、その下層には植物遺存体を含む自然堆積土が検出された。

(3) 調査概要

調査地は現仁王門東にあたり、古代から近世にかけての造成跡を確認することができた。中でも、調査区南部にて検出された石積および礎石上遺構は、中世善光寺に関連する遺構であり、当時をうかがい知る貴重な資料となつた。以下にその概要を示す。

第1次遺構検出面は、近現代造成土層を除去し、盛土1上面にて遺構検出を行った。S N01は幅50cm内外の石列であり、L字状を呈する。南東部に径2m程の集石部があり、一連の遺構と想定される。遺構北部は五輪塔を転用して敷き詰めている状況が確認されるが、南部は小砾が集中しているのみであり判然としない。土蔵等の建物基礎と推定される。S D01はS N01の西側に並行して走る溝跡であり、雨落ち等建物に関連する遺構と想定される。その他数箇所の土坑を検出したが、用途は不明である。

第2次遺構検出面では、2石の礎石状遺構と焼土集中区、その他複数の土坑、小穴を確認した。2石の礎石状遺構は東西に並んでおり南に面を有するが、柱跡等は確認できない。その他の土坑や小穴からは礎石状遺構や石積みとの関連性は伺えず、具体的な建物跡等を推測することは難しい。調査区北側で検出された焼土集中区は、多量の焼土・炭化物を含む火災後の整地層であり、南に傾斜して堆積している。調査区中央部のトレンチにより、石積3まで連続して堆積している状況が確認された。

調査区南西部で検出された石積2は、幅50～80cmの石材を並べたものであり、造成に伴う盛土の土留めの役割を果たしたものと想定される。盛土に含まれる遺物が10～14世紀の所産と想定されることから、ほぼ同様の時期の造成跡と推定される。調査区外の西側には延長するものと考えられるが、東側については近代石積の影響により不明である。石積の並びは、調査区東側の現在の敷地剤とほぼ一致しており、中世段階での造成が現在に踏襲されている可能性もある。また、3トレンチ・4トレンチにて確認した石積3も、焼土・炭化物を多量に含む土層（盛土3）の土留めの役割を想定されるが、盛土2により埋没していること、また盛土2と盛土3の出土遺

物において明確な時期差が見られることなどから石積2とはほぼ同時期に造成されたものと推測される。ただし、中世期に度重なる火災によって幾度の造成・改変が行われた可能性もあり、短期間のうちに実施された別の造成の可能性も推察される。

(4) 出土遺物概要

本調査区では、2次に渡って遺構検出を行ったが、土器・陶磁器の多くは1次検出面および江戸期の土坑から出土したものであり、18世紀末以降の江戸後期から明治初期の所産である。ただし、多量の焼土・炭化物を含む盛土3からは多量の瓦・壁土・土製品とあわせて古代から中世所産の土器・陶磁器が数点出土している。出土遺物は小片であるが、遺存状態の比較的良好なものを可能な限り図化することとした。

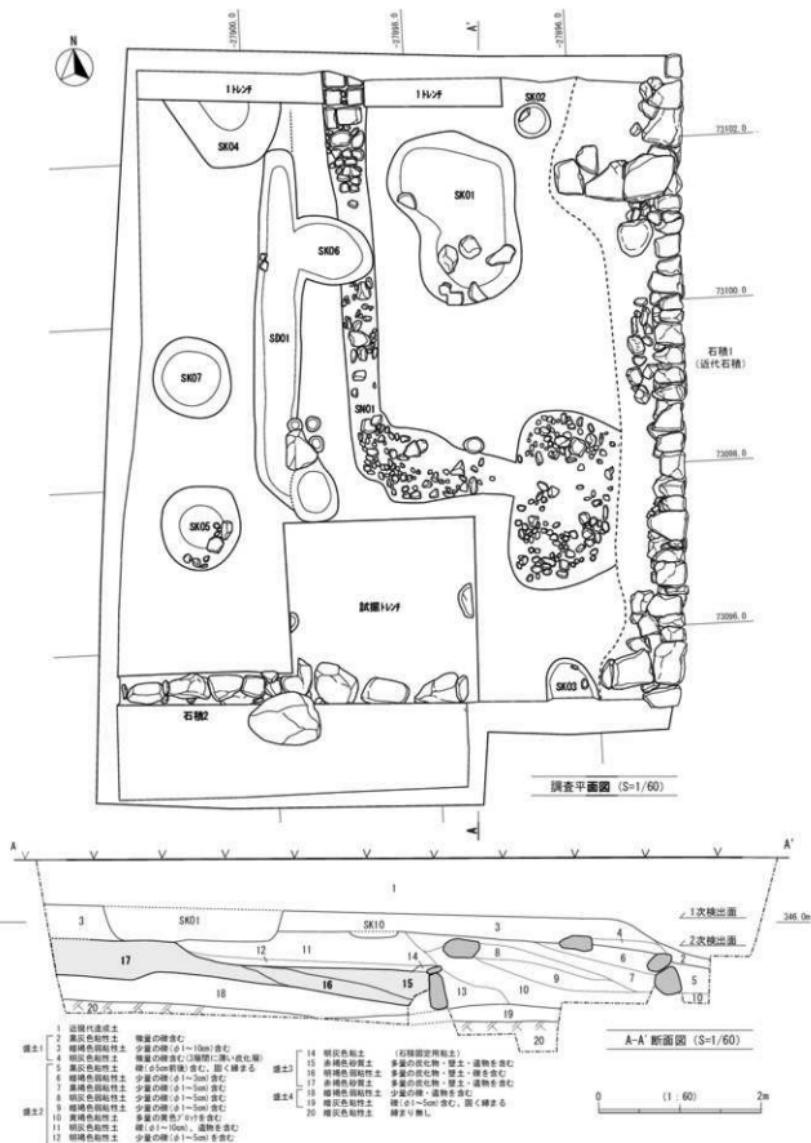
第1次遺構検出面および土坑から出土した陶磁器は、肥前系染付が多数を占める。器種は小皿・小碗・猪口などが出土しており、蛇の目凹型高台の小皿や、広東形碗、外面青磁内面染付の小碗が数点含まれる。出土した肥前系磁器の多數は18世紀後半以降の所産と想定される。

盛土2・3・4は、一部古墳時代の高坏や須恵器蓋坏が混入しているものの、10~14世紀の所産と想定される土器質の坏・碗、灰釉陶器が複数出土している。盛土2・3・4内において中世後期以降の遺物が確認されないことから、中世前期での盛土造成と推察される。また、盛土3からは表面を赤色塗布された多量の土製品破片が出土している。土製品胎土には多量のスガが混入しており、塑像の可能性もあるが、外面の文様からはかなり大型の製品と想定されるが、全体像は不確かである。同層に含まれる多量の瓦や壁土などは、被災した建物跡と想定されるため、同建物に関連する製品と考えられるが、現時点ではいつの時期のどの建物にあたるかを特定することは困難である。今後の課題としたい。

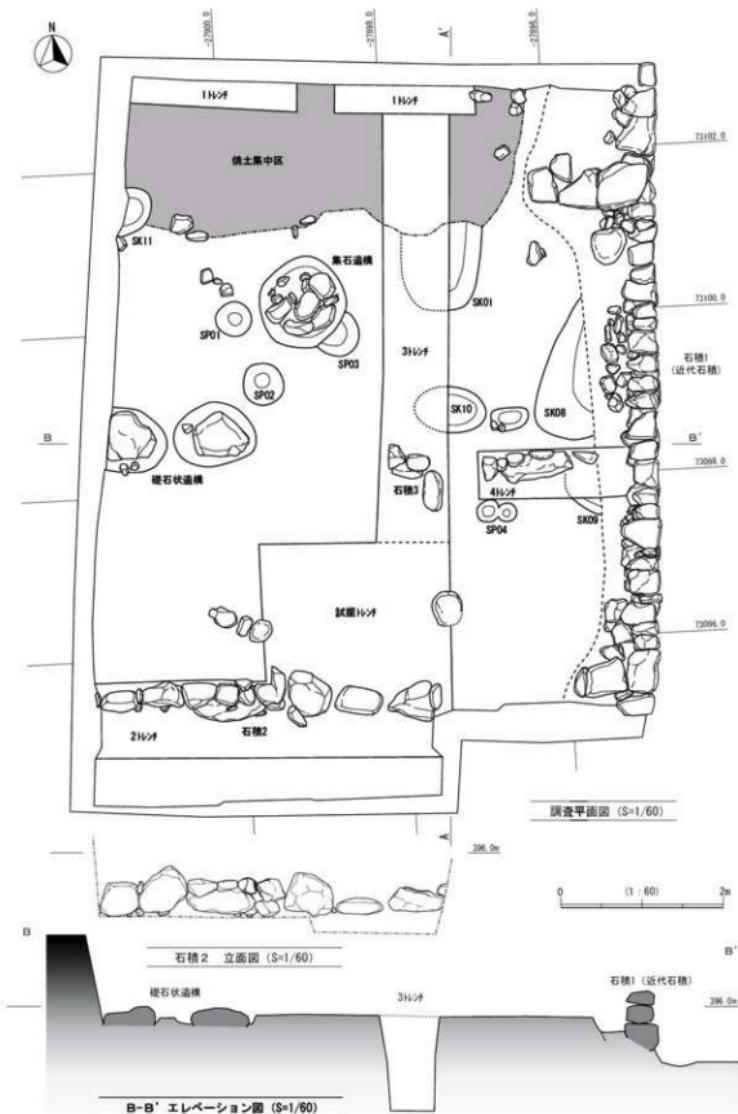
(5) 調査成果

本調査地点では、中世初期に造成されたと考えられる盛土と石積、礎石状遺構が確認された。盛土内からは、多量の炭化物や瓦、壁土、土製品などが出土している。出土した炭化物は、自然科学分析によりヒノキ科ヒノキ属のサワラであることが判明した。サワラは、樹葺の板材として江戸期までの北信地方で一般的に利用されていたことが知られており、現在桧皮葺きの善光寺本堂も江戸期は樹葺であったとされる（三門は平成の修理工により樹葺となる）。また針葉樹は、建物の構造材としても広く利用されることから、これらの多量の炭化材は、検出された造成以前に、調査地周辺に存在した建物の構造材であり、火災によって焼失したことがうかがえる。また、炭化材の放射性炭素年代測定では、出土遺物の推定年代とほぼ同時期の11~12世紀という結果が示されている（自然科学分析の詳細については「第IV章自然科学分析」(P.120~)にて記載)。このことから、古代末から中世前期において、火災後に整地・造成を行い、また新たな建物基礎を据え直した様子が浮かび上がる。

古代末から中世前期の善光寺では、治承3年(1179)、および文永5年(1268)に焼失したと記載される。火災後の再建に関する詳細は不明であるため、今回の火災層がこの両者のどちらにあたるのかは特定できないが、鎌倉期の善光寺再建に伴う貴重な遺構であることは間違いない。検出された造成の時期や範囲、また建物の規模や配置など、課題は山積しているが、中世善光寺における一つの手掛かりととらえたい。



第35図 仁王門東地点 第1次透構検出面



第36図 仁王門東地点 第2次遺構出面



第1次遣構検出面全景



第2次遣構検出面全景



石横2検出状況



礫石状造構



3 トレンチ



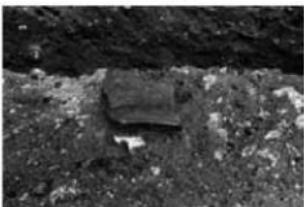
4 トレンチ



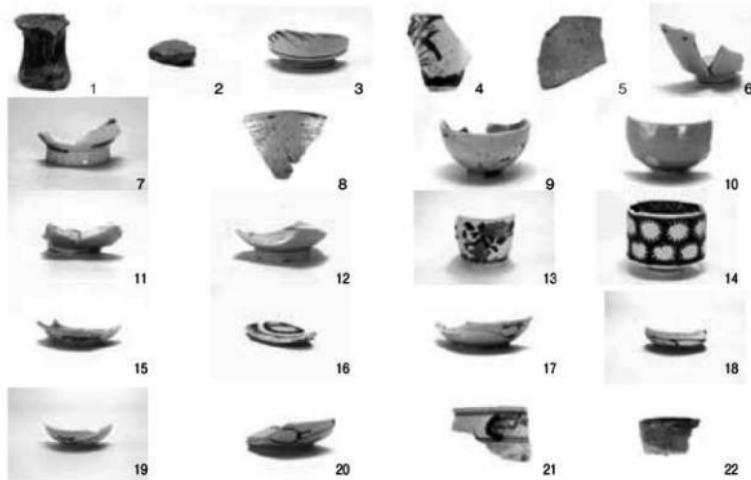
集石造構



石積前巨石

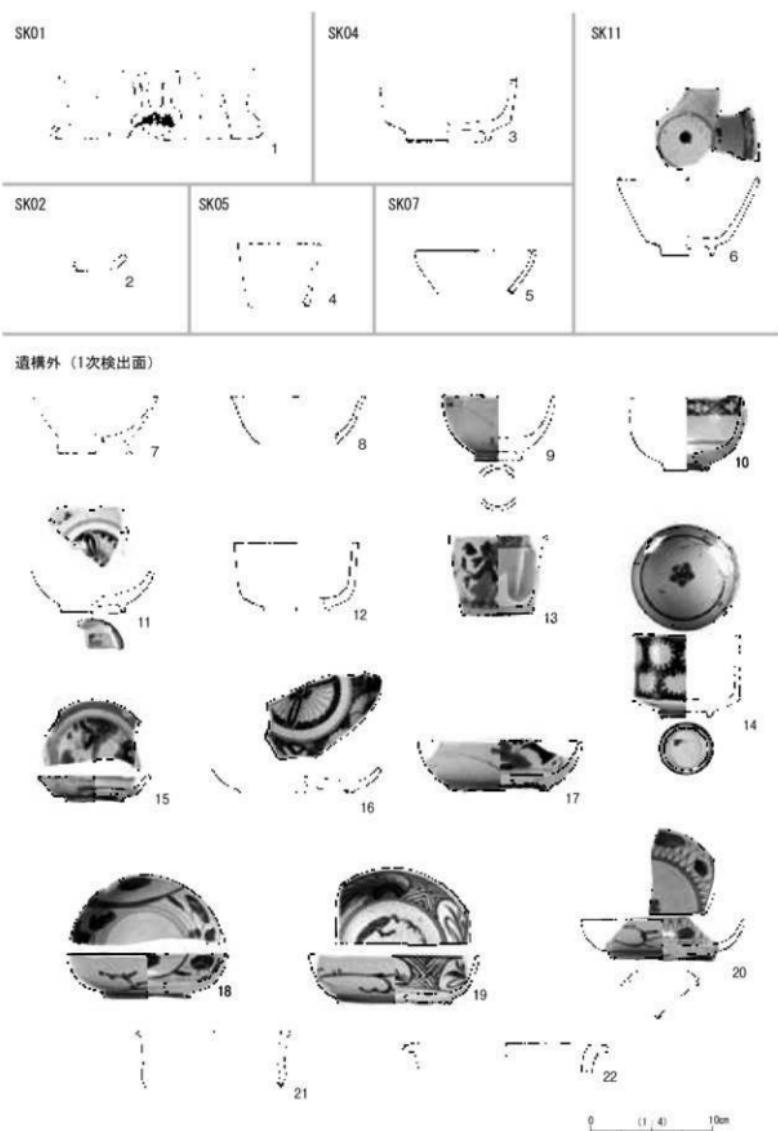


軒平瓦出土状況

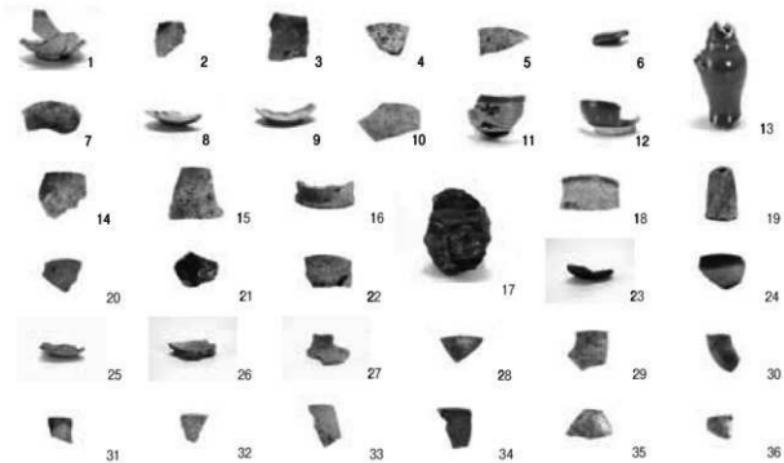


番号	遺物名	種別	基盤	形状	底土色・ 特徴	成形	施釉	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	外腹文様・ 特徴	内腹文様・ 特徴	裏込文様・ 特徴	焼定年代	備考
2	S.K.02	土器	小鉢	平丸鉢	暗褐色	—	無	—	—	—	ナデ	ナデ	—	—	古墳系 不明
3	S.K.04	磁器	火入	筒形	灰白色	無	乳頭・透明釉	—	—	6.9	草文	—	—	晩付器物	肥前系 1780~ 1860
4	S.K.05	磁器	瓶口	筒形	灰白色	無	乳頭・透明釉	6.6	—	—	草文	四方彌	—	—	肥前系 1860
5	S.K.07	土器	瓶	一	青褐色	無	乳頭・透明釉	なし	9.8	—	—	無	ナデ	—	不明 不明
6	S.K.11	磁器	中瓶	筒形	灰褐色	無	乳頭・透明釉 青斑	11.5	6.3	4.4	吉田彌	四方彌	草文	晩付器物	肥前系 1860
7	I.次根出直	磁器	中瓶	束頬瓶	灰白色	無	乳頭・透明釉	—	—	6.2	山水文?	—	—	晩付器物	肥前系 1820
8	I.次根出直	陶器	小瓶	束頬瓶	灰白色	無	乳頭	11.0	—	—	旋	旋	—	—	瀬戸系直系 1820
9	I.次根出直	磁器	小瓶	丸形	灰色	無	乳頭・透明釉	9.4	5.1	3.8	草文	—	—	晩付器物、 記号	肥前系 1780~ 1860
10	I.次根出直	磁器	小瓶	丸形	暗灰色	無	乳頭・透明釉 青斑	9.0	5.0	3.7	音頭	四方彌	—	晩付器物付着	肥前系 1860
11	I.次根出直	磁器	小瓶	丸形	暗灰色	無	乳頭・透明釉 青斑	—	—	5.2	音頭	—	三方彌杏文	晩付器物	肥前系 1860
12	I.次根出直	磁器	小瓶	丸形	灰白色	無	乳頭・透明釉 青斑	—	—	4.4	音頭	—	五弁花	晩付器物、 記述	肥前系 1860
13	I.次根出直	磁器	瓶口	筒形	灰白色	無	乳頭・透明釉	8.0	6.5	5.8	草文	四方彌	五弁花	紀の日高台	肥前系 1780~ 1860
14	I.次根出直	磁器	小瓶	筒形	灰白色	無	乳頭・透明釉	8.8	6.9	4.2	雪文	四方彌	五弁花	—	肥前系 1690~ 1790
15	I.次根出直	磁器	小瓶	筒形	灰白色	無	乳頭・透明釉	9.4	2.1	4.7	虫文?	山水文	—	—	肥前系 不明 無
16	I.次根出直	磁器	丸形	灰白色	無	乳頭・透明釉	—	—	9.2	—	—	三方彌杏文	台・漏斗	肥前系 1860	
17	I.次根出直	磁器	丸形	暗灰色	無	乳頭・透明釉	13.6	4.0	8.0	音文	花文	—	晩付器物付着	肥前系 1860	
18	I.次根出直	磁器	丸形	灰色	無	無	乳頭・透明釉	13.0	3.5	7.0	音文	梅花文	—	晩付器物	肥前系 1860
19	I.次根出直	磁器	丸形	暗灰色	無	無	乳頭・透明釉	13.7	2.9	9.0	音文	草文	梅花文	紀の日高台	肥前系 1860
20	I.次根出直	磁器	丸形	暗灰色	無	乳頭・透明釉	13.4	3.2	8.4	音文	湖白文・梅 文	五弁花	晩付器物	肥前系 1860	
21	I.次根出直	磁器	香炉	折沿口鉢	灰白色	無	乳頭・透明釉・ 上付	12.6	—	—	上給付花文	格子文	—	—	肥前系 1780~ 1860
22	I.次根出直	土器	香炉	折沿口鉢	褐色	無	乳頭・(瓦質)	16.8	—	—	正帶文	—	—	不明	不明

番号	遺物名	種別	形状	底土色・ 特徴	施釉	高さ (cm)	幅さ (cm)	文様	焼定年代	備考
1	S.K.01	土質品	土塗解剖	黒褐色	なし	—	4.8	4.8	前奈都中央に之条の瓦質。押注溝口、孔有	不明

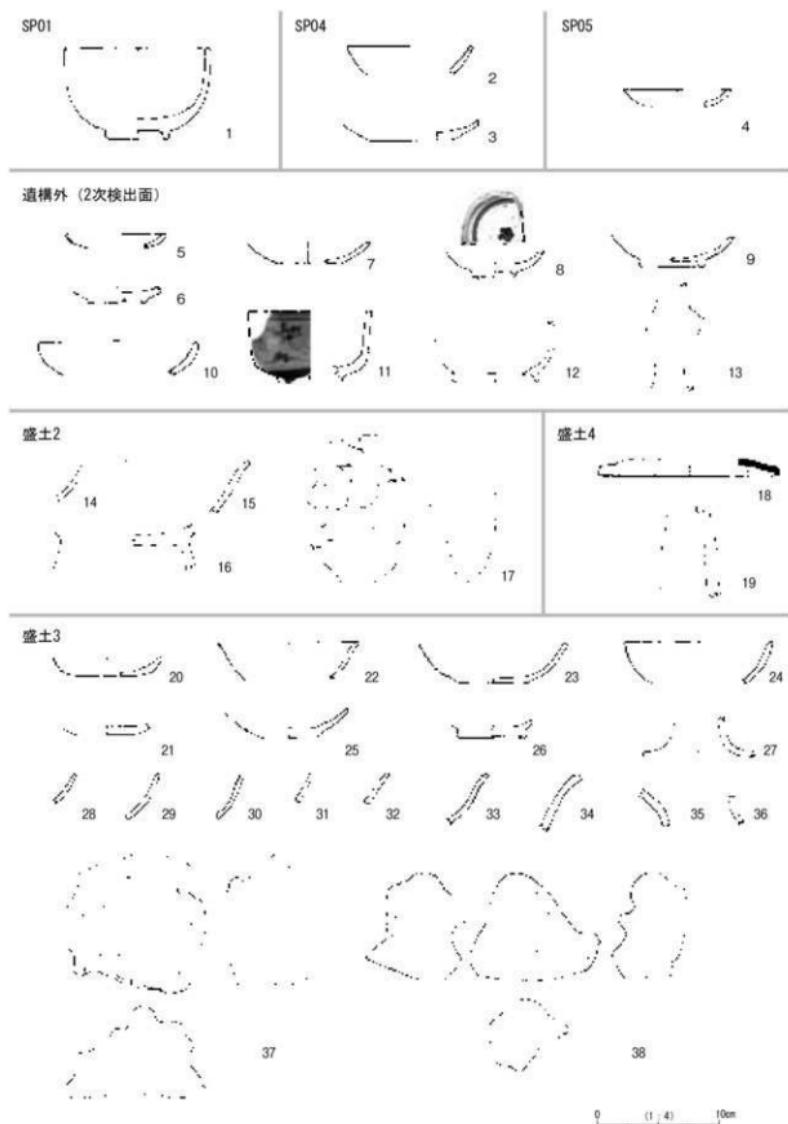


第37図 仁王門東地点 1次検出面出土遺物
(SK01・SK02・SK04・SK05・SK07・SK11・遺構外)



番号	遺物名	類別	基盤	形状	胎土色・特徴	成形	輪郭	口径 (cm)	高さ (cm)	外周文様・特徴	内面文様・特徴	見込み文様・特徴	裏台文様・特徴	推定產地	推定年代	備考	
1	S-P1	縦唇	中碗	丸形	胎焼	須口・透明釉	鉢形	12.0	7.4	5.0	平文	—	帶打継形	既往見名	17C末~18C	—	
2	S-P04	玉器	小瓶	—	褐色	胎焼	なし	5.0	—	—	—	—	—	在地名	17C末~18C	U縦唇形	
3	S-P17	玉器	小瓶	—	灰褐色	胎焼小切	なし	—	6.8	—	—	—	—	斜削未切	在地名	8C~10C	既往片
4	S-P05	玉器	小瓶	漏斗形	褐色	胎焼	なし	8.4	—	—	ナデ	ナデ	—	在地名	不明	U縦唇形	
5	2次横出頭	玉器	小瓶	—	褐色	胎焼	なし	8.2	—	—	ナデ	ナデ	—	在地名	不明	U縦唇形	
6	2次横出頭	玉器	—	—	褐色	胎焼	なし	—	—	4.4	—	—	—	斜削ハラ 削り	在地名	不明	既往片
7	2次横出頭	玉器	—	—	灰白色	胎焼	なし	—	—	5.4	—	—	—	斜削ハラ 削り	在地名	不明	既往片
8	2次横出頭	縦唇	小瓶	丸形	灰白色	胎焼	須口・透明釉	—	—	16	草花文	—	—	既往片	17C末~18C	既往片	
9	2次横出頭	縦唇	中碗	丸形	褐色	胎焼	斜削	—	—	5.4	須口まで落す	落削	トランジ点 付着	既往片	17C末~18C	既往片	
10	2次横出頭	玉器	中瓶	丸形	褐色	胎焼	なし	13.0	—	—	—	—	—	在地名	不明	U縦唇形	
11	2次横出頭	縦唇	中碗	丸形	褐色	須口・透明釉	鉢形	10.0	—	—	—	—	—	既往名	17C末~18C	既往片	
12	2次横出頭	阿寺	中瓶	—	褐色	胎焼	鉢形	—	7.2	—	—	—	—	既往名	19C中葉	既往片	
13	2次横出頭	海螺	花口器	瓶子形	灰白色	胎焼	鉢形	—	—	—	—	—	—	既往名	19C中葉	既往片	
14	透上2	玉器	环	—	灰褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	在地名	不明	U縦唇形	
15	透上2	玉器	高环	漏斗形	褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	在地名	不明	U縦唇形	
16	透上2	玉器	高环	漏斗形	灰褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	在地名	19C~13C	—	
17	透上4	縦唇	环盖	从白色	胎焼	なし	—	—	14.8	—	—	—	—	在地名	9C~10C	—	
18	透上4	縦唇	环盖	从白色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	—	在地名	9C~10C	—	
19	透上4	縦唇	环盖	青褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	—	在地名	4C~5C	剥折高耳	
20	透上3	玉器	小瓶	漏斗形	灰褐色	胎焼	なし	8.8	1.5	4.4	—	—	—	在地名	12C~14C	—	
21	透上3	玉器	环	灰褐色	胎焼	なし	—	—	4.8	—	—	—	—	在地名	10C~13C	2次剥熱	
22	透上3	玉器	环	漏斗形	灰褐色	胎焼	なし	11.4	—	—	—	—	—	在地名	10C~13C	U縦唇形	
23	透上3	玉器	环	灰褐色	胎焼	なし	—	12.2	3.2	5.7	—	—	—	在地名	10C~13C	—	
24	透上3	玉器	瓶	丸形	黑褐色	胎焼	なし	—	12.0	—	—	—	—	在地名	11C~13C	U縦唇形	
25	透上3	玉器	环	褐色	胎焼	なし	—	—	4.6	—	—	—	—	在地名	10C~13C	既往片	
26	透上3	玉器	—	灰褐色	胎焼	なし	—	—	5.7	—	—	—	—	在地名	11C~13C	既往片	
27	透上3	玉器	高环	褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	—	在地名	9C~7C	—	
28	透上3	玉器	高环	灰褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	—	在地名	不明	—	
29	透上3	玉器	高环	灰褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	—	在地名	不明	—	
30	透上3	玉器	高环	漏斗形	褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	在地名	不明	—	
31	透上3	玉器	高环	漏斗形	灰褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	在地名	不明	—	
32	透上3	玉器	高环	？	褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	—	在地名	不明	—	
33	透上3	玉器	高环	？	漏斗形	褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	在地名	不明	—	
34	透上3	玉器	高环	？	漏斗形	褐色	胎焼	なし	—	—	—	—	—	在地名	不明	—	
35	透上3	陶器	甕	白下部	胎焼	灰褐色	—	—	—	—	—	—	—	既往名	12C~14C	—	
36	透上3	陶器	甕	（甕）白下部	胎焼	灰褐色	—	—	—	—	—	—	—	既往名	12C~14C	—	

番号	遺物名	類別	理別	形状	胎土色・特徴	輪郭等	直径 (cm)	幅幅 (cm)	厚さ (cm)	—	文様・特徴	—	推定年代	備考
37	透上3	玉器	像形?	不明	黒褐色	—	—	—	—	—	—	—	—	不明
38	透上3	玉器	像形?	不明	褐色	丸形	—	—	—	—	—	—	—	不明
39	透上3	玉器	像形?	不明	褐色	丸形	—	—	—	—	—	—	—	—



第38図 仁王門東地點 2次検出面・盛土 出土遺物
(SP01・SP04・SP05・遺構外・盛土2・盛土3・盛土4)

(6) 出土瓦の概要

本調査区から出土した古代瓦は、総点数501点・総重量67.56kgで、2次面もしくは2次面造成盛土内からは452点・57.78kgの瓦が出土した。主な種別は、軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦・丸瓦・平瓦である。なお、小破片のもので分類できなかったものに関しては、全て不明瓦として扱うこととする。また、凹面凸面の調整・特徴など詳細については観察表を参考にしていただきたい。以下、種別ごとに概要を述べていく。(軒丸瓦の各部名称、丸瓦・平瓦の拓本配置はP.54~57を参照。)

古代瓦出土量

	総点数	総重量 (kg)	丸瓦	重量 (kg)	平瓦	重量 (kg)
1次面	49	9.78	18	1.72	31	8.06
2次面	452	57.78	195	21.78	257	36
計	501	67.56	213	23.5	288	44.06
%	100.0%	100.0%	42.5%	34.8%	57.5%	65.2%

軒丸瓦（第39図1～4）

本調査区は、大本願明照殿地点に比べると調査面積は小さいが、出土した文様瓦は軒丸・軒平共に多岐にわたる。

1は、単弁もしくは複弁の蓮華文である。瓦当部の大半が欠損しており、蓮弁の遺存度も低いことから単弁か複弁かははっきりしない。蓮弁には子葉がなく、簡素な造りである。また、蓮弁の弁先は丸みを帯びず、ヘラのような形状になっている。外区には線鋸齒文とみられる文様帶が存在し、さらに外側には圓線と素文の周縁も存在している。外区と内区の間に圓線ではなく、蓮弁と線鋸齒文が繋がっている。今まで確認されている善光寺境内出土とされる軒丸瓦の中には、線鋸齒文の縁を持つ軒丸瓦は存在しているが、1とは文様構成が異なり、新出の軒丸瓦の可能性がある。

2・3は、巴文軒丸瓦である。2は、文様が起伏に富み、力強い印象を受ける。巴の断面形状は台形で、瓦当の直径は18cmを超える大きさである。巴は右巴で、中心が繋がっている。尾部は伸びず、隣の巴の中頃で終息している。外区の珠文は直径1.5cmと大きく、突出している。裏面には丸瓦との接合痕が残る。3は、小降りな軒丸瓦で、巴は左巴である。文様は全体的に潰れていて迫力に欠ける。巴の尾部は長く伸び、圓線を描くようになっているが、隣の巴の尾部には接続しない。また、裏面には丸瓦との接合痕が残っており、丸瓦自体も小振りなものを使用していたことが分かる。

今までにも善光寺、あるいは近隣から巴文軒丸瓦が出土したという報告はあるが、その出土地点が不鮮明であり、正確な発掘調査によって巴文軒丸瓦が出土したのは初めてである。

4は、軒丸瓦であるが、文様のほとんどが欠損し、丸瓦との接合面がむき出しになっている。しかし、この剥離のおかげで、瓦当部と丸瓦との接合方法として、丸瓦の端部に刻みを入れていることが判明した。また、残存しているわずかな文様面には、凸（面透）鋸齒文と低い周縁が確認でき、善光寺境内出土と伝えられる軒丸瓦や、牛込バイパス地点から出土した軒丸瓦の複弁蓮華文に酷似していることが判明した。

軒平瓦（第39図5～7）

出土した軒平瓦は、3点共に別の文様である。

5は、三重弧文軒平瓦である。非常に簡素な造りで、平瓦の狹端部に顎を取り付けず、端部にそのまま工具で

弧文を押し曳いている。額を取り付けていないため、凸面の格子目叩き具痕が全面的に残り、弧文の下端に若干の凹凸がみられる。

類例として、仁王門を下った大門町に所在する、同じ長野遺跡群西町遺跡からも三重弧文軒平瓦が出土している。西町遺跡出土の重弧文軒平瓦も額を持たない簡素なもので、5と同様の造りであることから、同時期に製作されたものの可能性が考えられる。この他に、北信地域では、千曲市屋代遺跡群兩宮庵寺・須坂市左願寺庵寺からも重弧文軒平瓦が出土している。

6は、連珠文軒平瓦で、1次面表土除去中に出土したものである。平瓦と瓦当部の半分は欠損している。文様は一段盛り上がった内区の中に、直径1.4cmの珠文を配しており、全部で8つ存在していたものと思われる。また、裏面には平瓦と文様面を接合・調整した際の工具痕もみられる。

7は、均整唐草文軒平瓦である。平瓦が一部欠損しているが、瓦当部は遺存しており、全体的にやや小振りな造りである。文様は、中心に5・6枚の花弁を持った花頭形の飾りを置き、その左右に唐草を展開している。唐草はつながり、上下に子葉を持つ。その先には中心飾りと同様の花頭形の文様が付き、その後唐草は上方向に巻き込みながら終息する。平瓦にみられる凹面の布目痕、凸面の繩叩き具による整形痕など、製作技術は古代瓦の技術を有している点がみられる。

文字瓦（第40図8）

出土した文字瓦は1点のみである。文字は、平瓦の凹面に刻まれており、「十」もしくは記号とも考えられるが、周囲に別の文字が存在していないため、断定はできない。本調査地点から出土した文字瓦は、大本願明照殿地点出土の文字瓦に統いて、新たに確認された資料となった。

丸瓦（第40図9～第41図19）

出土した丸瓦の総点数は213点・23.5kgで、2次面もしくは2次面造成盛土内からは195点・21.78kgが出土している。

9・10は、有段式（玉縁式）丸瓦の破片である。9は玉縁部と丸瓦の一部が残存し、10は玉縁部のみである。出土した丸瓦の中でも明確に有段式であるといえるのは、この2点のみである。通常、古代の丸瓦には2つの種類が存在している。1つは9・10で挙げた有段式、もう1つは丸瓦の狭端部に玉縁を持たない無段式（行基式）である。11は、完形の丸瓦（無段式）で、出土は1次面調査区北壁石敷き構造の直下である。凸面は釉がかかったように光沢があり、凹面には布の縫じ目が斜めに入っているのが確認できる。12の凹面にも布の縫じ目がみられる。14は11と同様に、凸面にやや光沢がある。15は、凹面に糸切り痕が確認できる。17は、凸面の調整が細かく、縦方向のヘラナデが残っている。

丸瓦分類表

	総点数	繩叩き具	格子目叩き具	平行叩き具	ナデ	不明
1次面	18	0	0	0	18	0
2次面	195	7	0	4	180	4
計	213	7	0	4	198	4
%	100.0%	33%	0%	1.9%	93.0%	1.9%

平瓦（第42図20～第44図38）

出土した平瓦の総点数は288点・44.06kgで、2次面もしくは2次面造成盛土内からは257点・36kgが出土して

いる。

20~30は、凸面の整形痕が繩叩き具によるものである。総点数288点のうち、繩叩き具によるものは223点で、約77%を占める。20~23・26は桶巻き造りによるもので、24・25・27~30は一枚造りによるものである。

20・21は、凹面に明瞭な模骨痕が確認できる。23は、凹面に布の縫じ目が確認でき、狭端部と縫じ目の交点には強い指頭圧痕が残る。24の凹面には突起物がみられるが、炭などを含んでいた点から、土が発着してしまったものと思われる。26は一番遺存度が高い平瓦であるが、1次面出土である。28は、凹面の布目痕が側部付近を除いて横方向のナデによって消されている。29・30は特徴的で、凹面にハケのような工具で調整を加えているのである。前述したように、ナデによって布目痕を消す例はあったが、ハケによって凹面に調整を加える例は今回初めて確認された。31は、凹面に布の端のラインが横に走っており、ラインの上部では布目痕が確認できない。

32・33は凸面の整形痕が格子目叩き具によるもの、34・35は整形痕をナデ消している平瓦である。総点数288点のうち、格子目叩き具によるものは47点・約16%、ナデによるものは13点・約5%を占める。大本願明照殿地點では二番目に多く確認されていた平行叩き具によるものは、わずか4点・約1%余りとその数を減らしている。

36~38は古代の瓦ではなく、中世以降の瓦であると思われる。凹面に布目痕はなく、みな偏平である。ただ、凸面には整形痕が残っており、36は「×（菱形？）」字状叩き具、37・38は「米」字状の叩き具によるものである。

平瓦分類表

総点数	繩叩き具			格子目叩き具			平行叩き具			ナデ			不明	
	桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明	桶巻き	一枚	不明		
1次面	31	7	5	11	0	2	2	0	0	0	0	0	3	1
2次面	257	34	64	102	14	8	21	1	0	3	2	3	5	0
計		41	69	113	14	10	23	1	0	3	2	3	8	1
%	100.0%	77.4%			16.3%			1.4%			4.5%			0.3%

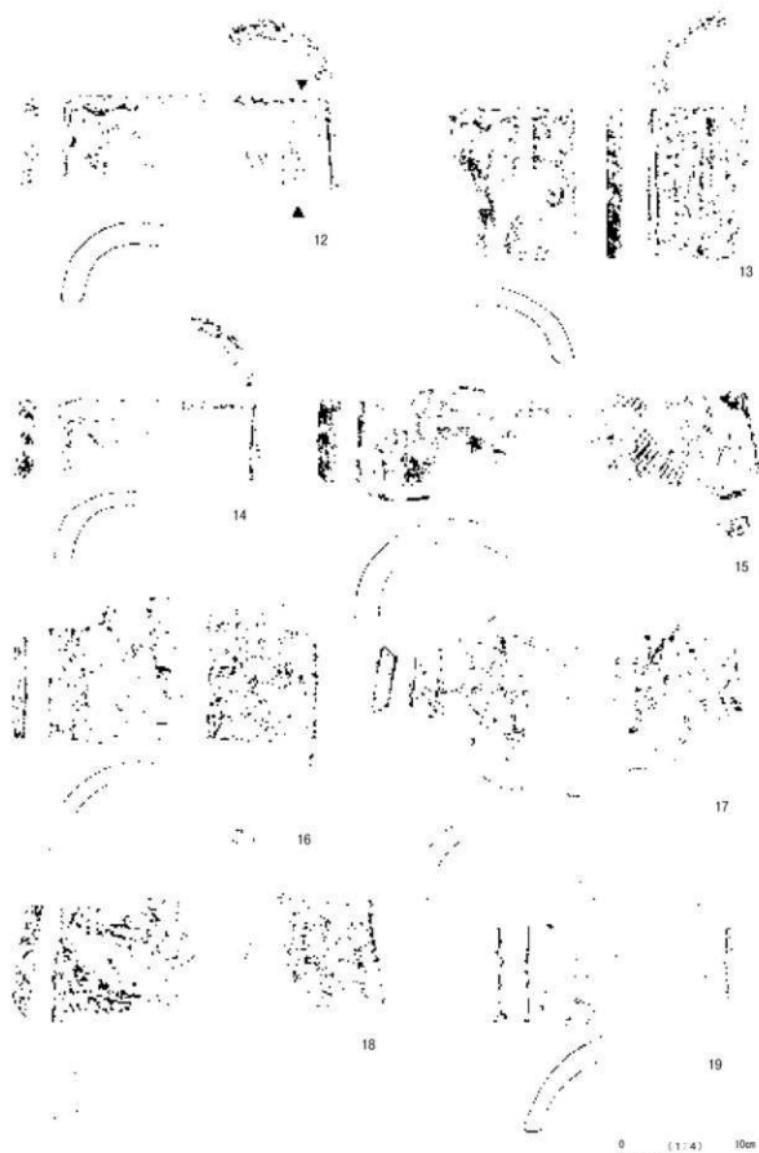
※1 掲載した古代瓦のほとんどは、2次面・2次面造成盛土内から出土したものである。1次面から出土した古代瓦に関しては、遺物観察表の特徴欄に出土地点を示している。



第39図 仁王門東地点出土古代瓦（軒丸瓦・軒平瓦）



第40図 仁王門東地点出土古代瓦（文字瓦・丸瓦）



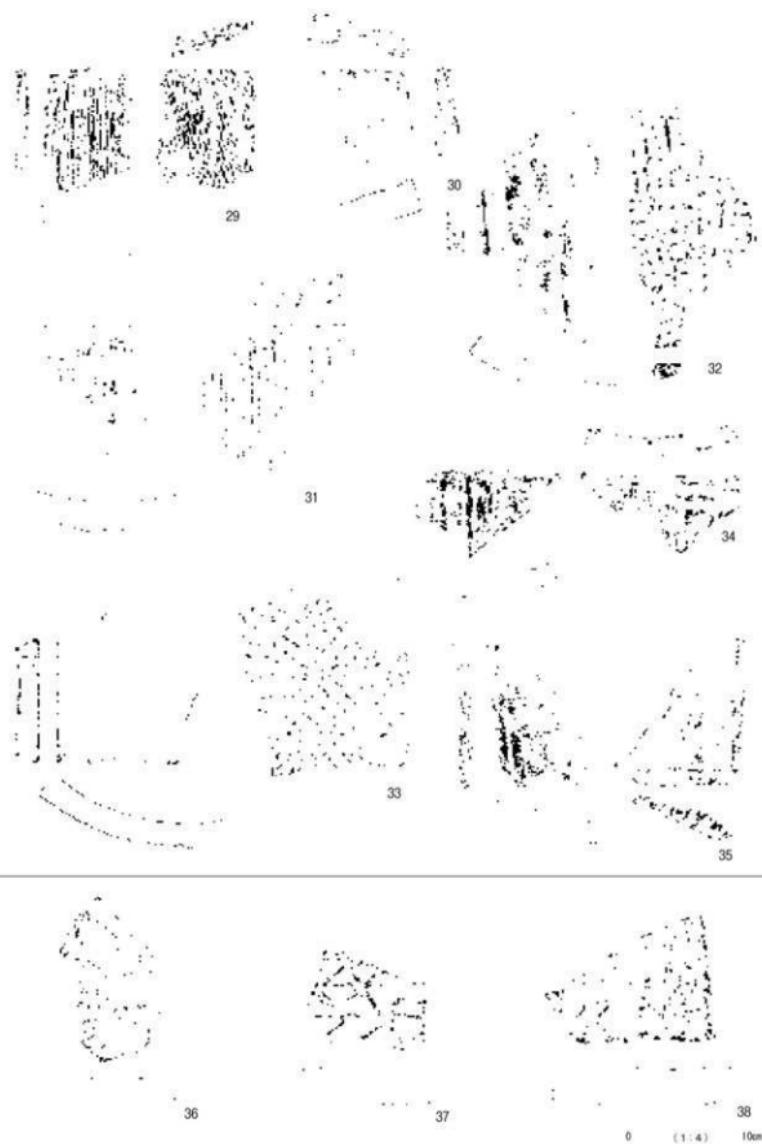
第41図 仁王門東地点出土古代瓦（丸瓦）



第42図 仁王門東地点出土古代瓦（平瓦）



第43図 仁王門東地点出土古代瓦（平瓦）



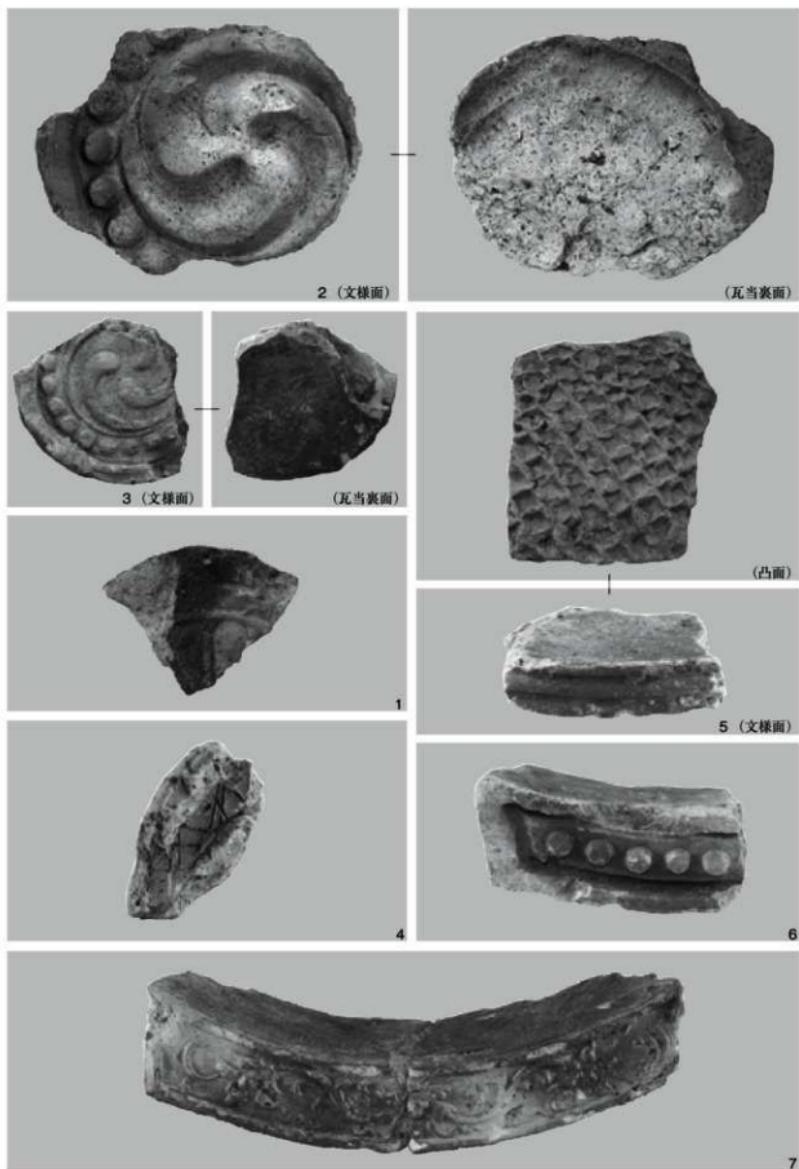
第44図 仁王門東地点出土古代・中世瓦（平瓦）

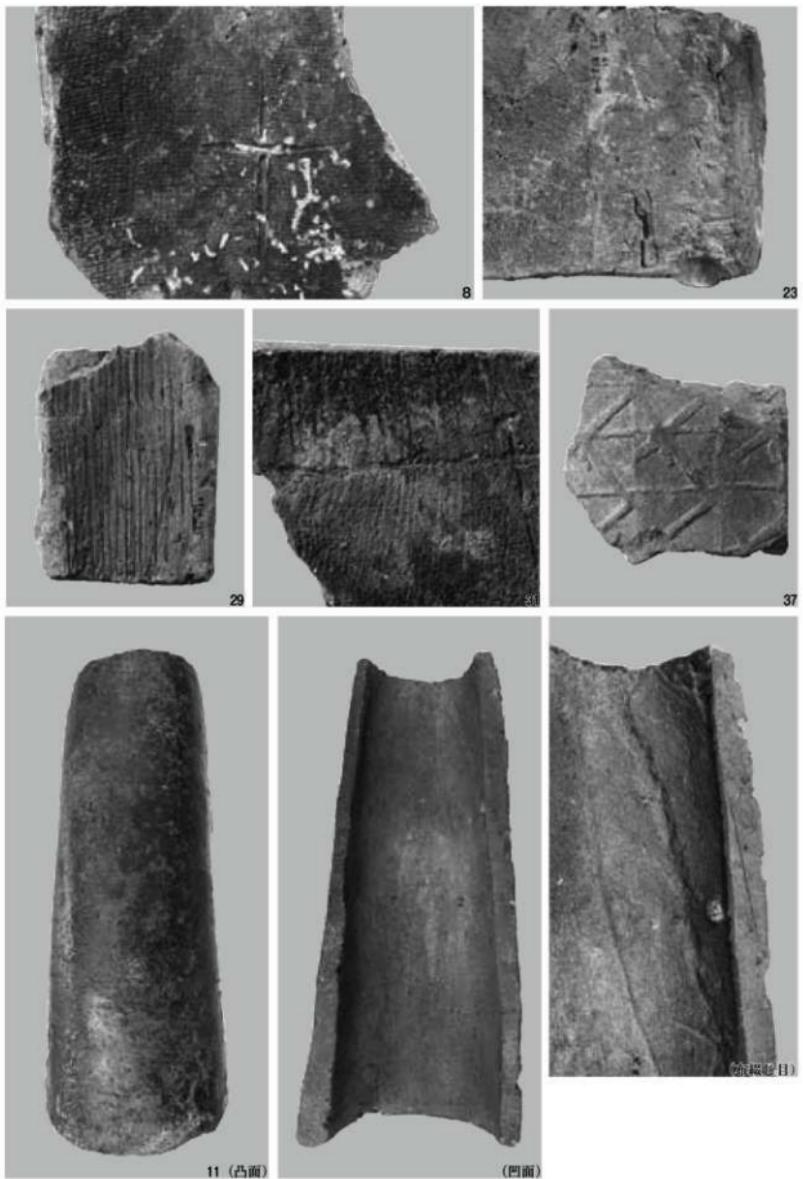
出土瓦観察表

測面 No.	種別	法縦 (cm)		色調	焼成	特徴
		基定径	厚さ(瓦当部)			
1 新丸瓦	16.0	22~	5 YR 6 / 6 稲	良		草芽 or 蔵舟進華文・瓦当表面剥離・二次焼熱?
2 新丸瓦	18.9	2.7	10 YR 7 / 3 にぶい黄褐	やや不良	巴文(右巴)・中心部がつながる・文様面は突出する・瓦当表面はナグ調整	
3 新丸瓦	11.0~11.5	1.7~2.0	10 YR 6 / 1 植灰	やや不良	巴文(左巴)・文様の突起は低い・瓦当表面は板(ハラ?)ナグ調整	
4 新丸瓦	16.0前後		破損	7.5 YR 6 / 6 稲	やや良	古断文がわざかに残る・丸瓦の端部に刻み

測面 No.	種別	法縦 (cm)		色調	焼成	特徴
		瓦当面幅	厚さ(平瓦)			
5 新平瓦	2.0	2.0	2.5 YR 6 / 2 黄灰	良		三重弧文・平瓦凸面: 热子目叩き・平瓦凹面: 布目板と赤切痕あり
6 新平瓦	3.3	2.5	N 3 / 植灰	良		道珠文・段階・平瓦部凹面にテナナデ・1次焼成面出土
7 新平瓦	3.3	3.5	N 4 / 黄	やや不良		均整草文・平瓦部が一部欠損・低・段階・傾部はケズリ調整

測面 No.	種別	厚さ (cm)	色調		焼成	門面	凸面	傾部	端部	溝型凹部(ケズリ)	特徴
			瓦当面幅	厚さ(平瓦)							
8 平瓦	2.0	5 YR 5 / 1 黄	やや不良	布目板・ベラ書き文字	繩叩き・微紋	破損	1				文字瓦「十」もしくは記号?
9 丸瓦	1.6	7.5 YR 5 / 4 にぶい黄褐	やや良	布目板	ヨコナデ	1	1				有段式
10 丸瓦	1.6	N 6 / 黄	良	布目板	ヨコナデ	1	1				有段式(玉緑部のみ)
11 丸瓦	1.3~2.0	7.5 R 2 / 1 本黒	良	布目板・赤切痕・布縫じ目	ヨコナデ・微紋	3	狭1:広3				完形(無段式:行某式)・遮元焰
12 丸瓦	1.8	N 3 / 植灰	良	布目板・繩縫じ目	ヨコナデ	3	3				遮元焰
13 丸瓦	1.5	7.5 YR 7 / 8 黄褐	良	布目板	ヨコナデ	3	2				遮元焰
14 丸瓦	1.6	N 4 / 黄	良	布目板	ヨコナデ	2	2				遮元焰
15 丸瓦	1.9	5 YR 5 / 1 植灰	やや良	布目板・赤切痕	ヨコナデ	3	2				
16 丸瓦	1.3	5 YR 7 / 6 稲	やや良	布目板	ヨコナデ	2	1				
17 丸瓦	1.4	10 YR 5 / 1 植灰	やや不良	布目板	タテハケ?	2					破損
18 丸瓦	1.2	N 6 / 黄	良	布目板	ヨコナデ	3					遮元焰
19 丸瓦	1.3	10 YR 7 / 1 黄白	良	布目板	ヨコナデ→タチナデ?	4					遮元焰?
20 平瓦	1.7	10 YR 6 / 1 黄白	やや良	布目板・横骨筋	繩叩き	3	2				
21 平瓦	2.0	7.5 YR 4 / 1 植灰	良	布目板・横骨筋	繩叩き	3	3				
22 平瓦	3.2	10 YR 7 / 2 にぶい黄褐	やや不良	布目板	繩叩き	3	2				凹面に土着?
23 平瓦	1.5	2.5 YR 4 / 1 植灰	やや良	布目板・布縫じ目・斜面筋	繩叩き	3	2				二次焼熱?
24 平瓦	2.8	5 YR 6 / 6 稲	良	布目板	繩叩き	2	1				斜面に指紋・傾部はシャープに欠ける
25 平瓦	2.7	5 B 3 / 1 期青灰	良	布目板	繩叩き	2	2				遮元焰
26 平瓦	2.3	10 YR 5 / 1 植灰	良	布目板	繩叩き・微紋・布目板	2	1				1次焼SK05出土
27 平瓦	2.3	2.5 YR 4 / 3 にぶい赤褐	やや良	布目板・赤切痕	繩叩き・微紋・布目板	2	2				
28 平瓦	1.9	5 YR 4 / 6 明褐	やや不良	布目板→ヨコナデ	繩叩き・赤切痕	2	1				凹面の布目板をナグ消す・二次焼熱?
29 平瓦	1.6	N 4 / 黄	良	布目板→タチハケ?	繩叩き	3	1				遮元焰?
30 平瓦	2.5	2.5 YR 4 / 6 赤褐	やや不良	布目板→タチハケ?	調離(一部繩叩き残る)	2?	1				
31 平瓦	2.5	N 3 / 植灰	やや不良	布目板	繩叩き	3					
32 平瓦	1.6	10 YR 7 / 2 にぶい黄褐	やや良	布目板	格子目叩き	3	1?				叩き不明?
33 平瓦	2.1	10 YR 7 / 3 にぶい黄褐	やや良	布目板	格子目叩き	3					
34 平瓦	1.6	10 YR 8 / 3 浅黄	良	布目板・横骨筋	ヨコナデ	破損	3				
35 平瓦	1.8	7.5 YR 8 / 4 浅黄褐	良	布目板	ヨコナデ	3	3				叩き不明?
36 平瓦	2.3	10 YR 7 / 3 にぶい黄褐	良	布目板? タチナデ	「×(菱形)?」字状叩き	破損					中世瓦・1次石槽1出土
37 平瓦	2.6	7.5 YR 5 / 1 植灰	良	ナダ?	「米」字状叩き	1					中世瓦・1次鉢沿面
38 平瓦	2.9	5 YR 5 / 2 黄褐	不良	不明	「米」字状叩き	1	2				中世瓦・2次焼熱?・1次石槽1出土



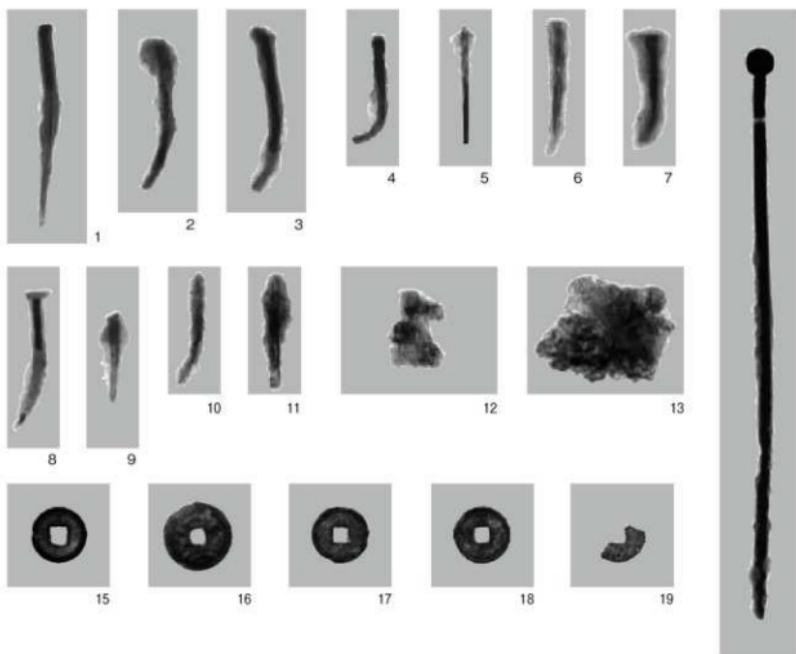


(7) その他遺物

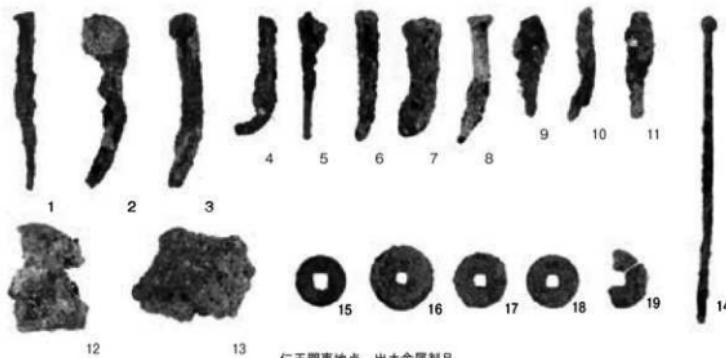
金属製品 本調査地点では、19点の金属製品を確認している。多数は石積1内部および1次検出面から出土したものであり、江戸期以降の製品と考えられる。内容は鉄釘が最も多く11点、銅錢が5点、火箸が1点、不明金属製品が2点である。鉄釘は全長4～8.5cmのものが出土しており、火箸の全長は23.5cmを測る。2点の不明金属製品は、焼土・炭化物を多量に含む盛土3より出土しており、被熱により溶解しているため、本来の形状は定かではない。

壁土・土製品 炭化物を多量に含む盛土3からは、漆喰を伴う壁土片が多数出土している。漆喰は土壁表面に2～5mmの厚さで残存しており、表面には硬化・無数のヒビ割れが生じていることから、被熱の影響を受けたものと想定される。同層からは、表面に赤色塗布された大型の造形物と思われる土製品が出土している。土壁と土製品の胎土には、藁スサが多量に含まれており、判別が困難である。土製品は塑像の可能性もあるが、形状が不明であるため、ここでは不明土製品とする。

石製品 本調査地点からは五輪塔の空風輪3点、火輪2点、水輪2点、地輪1点と宝篋印塔の相輪1点の計9点の石製品が出土している。石製品は、全て第1次遺構検出面上の近代造成土から出土しており、江戸期以降に廃棄もしくは転用された石材と思われる。記銘・墨書等の記載は確認されないため、ここでは観察表のみの報告とする。



第45図 仁王門東地点 出土金属製品 (S号1/2)



仁王門東地点 出土金属製品



仁王門東地点 出土漆喰壁片

仁王門東地点 出土土製品

○仁王門東地点 出土金属製品

通物 No.	遺物名	材質	出土位置 (全高 (高さ))	法量 (mm)				備考
				最大厚	最大幅	重量 (g)	整理 No.	
1	鉄釘	鉄	石積 I	85.0	10.0	10.0	11.10	16
2	鉄釘	鉄	石積 I	65.0	10.0	15.0	12.56	17
3	鉄釘	鉄	石積 I	70.0	13.0		13.22	4
4	鉄釘	鉄	石積 I	50.0	7.0	7.0	5.93	18
5	鉄釘	鉄	2次後出面	49.0	11.0		2.91	15
6	鉄釘	鉄	S K01	55.0	8.0		6.00	2
7	鉄釘	鉄	2次後出面	50.0	12.0		16.08	14
8	鉄釘	鉄	T r 1	64.0	7.0	6.0	7.07	8
9	鉄釘	鉄	石積 I	40.0	8.0		3.92	5
10	鉄釘	鉄	石積 I	48.0	6.0	7.0	4.56	19
11	鉄釘	鉄	S K01	50.0	7.0		6.95	3
12	不明金属	銅	盛土 3 (下層)	60.0	37.0	50.0	11.29	20
13	不明金属	銅	T r 1	5.0	5.0	5.0	51.44	6
14	火箸	鉄	1次後出面	235.0	14.0		97.96	1
15	鋼鏡「丸口寶」	銅	石積 I	23.0	1.0		2.86	9
16	鋼鏡 (不明)	銅	1次後出面	28.0	0.7		5.60	10
17	鋼鏡 (不明)	銅	1次後出面	24.0	1.5		3.02	11
18	鋼鏡 (不明)	銅	1次後出面	23.0	1.5		2.31	12
19	銅鏡片	銅	1次後出面	22.0	2.5		3.35	13

○石製品観察表

番号	石製品内容 種別・形狀	石材	寸法 (mm)			備考
			タテ	ヨコ 1	ヨコ 2	
1	五輪塔	空風輪	安山岩(青目)	18.0	14.5	13.5
2	五輪塔	空風輪	安山岩(赤目)	22.0	17.0	16.0
3	五輪塔	空風輪	安山岩(青目)	21.0	18.0	15.5
4	五輪塔	火輪	安山岩(青目)	17.5	10.5	22.5
5	五輪塔	火輪	安山岩(青目)	11.5	9.0	21.0
6	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	11.0	23.0	18.5
7	五輪塔	水輪	安山岩(青目)	11.0	19.5	15.5
8	五輪塔	地輪	安山岩(青目)	16.0	21.0	21.0
9	宝鏡印跡	相輪	安山岩(青目)	(23.5)	10.0	一部欠損

* 1 寸法の () は保存部分のみの長さを示す。
* 2 寸法の「タテ」は製品の高さを示し、「ヨコ 1」・「ヨコ 2」は部位ごとに異なる。

以下に各部位 (ヨコ 1・ヨコ 2) の記述。

・五輪塔 (空風輪: 空輪最大径)・火輪 (火輪: 上部径: 最大径), 地輪 (前部径: 下部径)
・宝鏡印跡 (相輪: 中央部径: 底部径)

第3節 八幡屋磯五郎大門町店地点の調査概要

(1) 調査の方法

調査は、八幡屋磯五郎大門町店建設に伴う増築部分約30m²を対象として、記録保存のための遺構確認を行った。発掘調査では、重層的に埋没する各時代の遺構をそれぞれ検出するため、近代造成土層を除去した後に、堆積土層に応じて検出面を設定し、2次にわたる掘り下げと遺構確認を実施した。また、調査区南壁沿いに堆積土層確認のためのトレンチ（1トレンチ）および石積確認のためのトレンチ（2トレンチ）を設定した。

(2) 基本層序

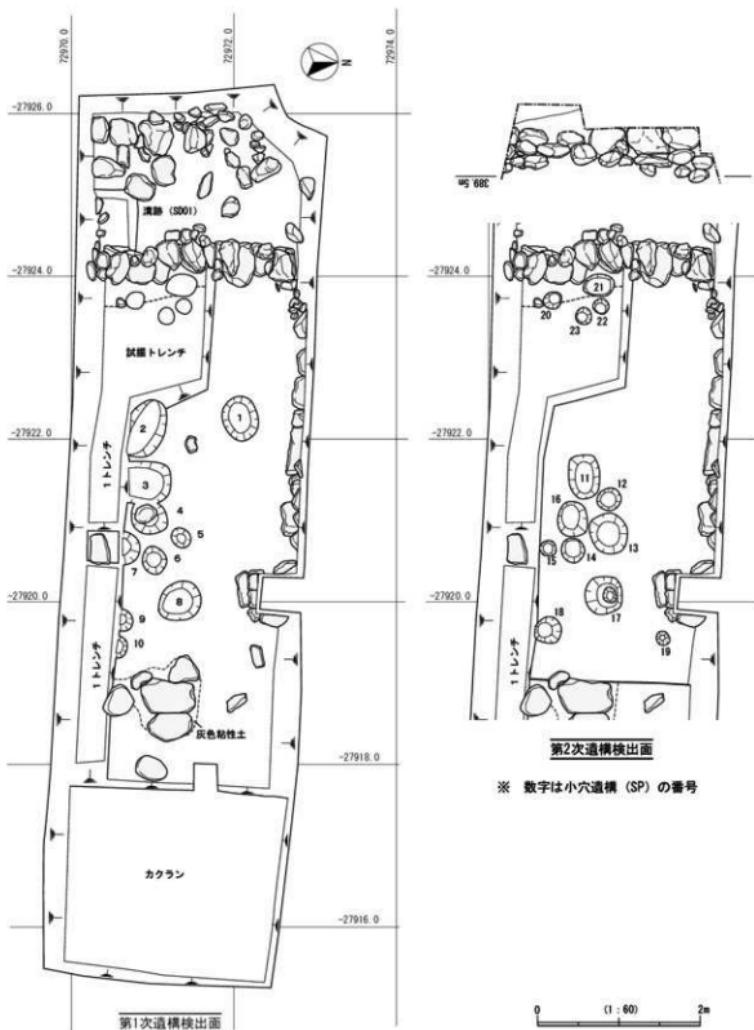
試掘調査結果および表土除去状況から、調査区東側は近代造成によって改変されていることが判明した。よって、善光寺参道に面する西側を中心に調査することとした。調査区の表土直下は、近代造成によって30~60cmほど改変されているものの、その下層からは比較的良好に遺構が遺存している。1トレンチで確認された土層は、近代造成を除く堆積土層を大きく6段階に区分して考えることができる（第47図）。

第Ⅰ段階は、遺物を含まない砂礫層であり、自然堆積と考えられる。第Ⅱ段階は、砂礫層を人為的に掘り込んで、石積みを形成している。第Ⅲ段階は石積み西側の溝堆積土であり、泥炭や砂層の堆積状況から水路跡と推定される。第Ⅳ段階は第Ⅱ段階上に人為的に造成されており、多量の炭化物を包含する土層上に整地層を有する。第Ⅴ段階は、溝が埋没した後の掘り込み及び造成と考えられる。第Ⅵ段階は、第Ⅴ段階後の掘り込みである。第Ⅲ段階・第Ⅳ段階は時期が前後する可能性もある。調査では、第Ⅳ段階上を1次検出面、第Ⅱ段階上を2次検出面としている。遺物は、炭化物を含む整地層及び溝跡より古代から中世末の遺物が出土しているが、大多数は中世後期の製品と考えられる。

(3) 調査概要

本調査区では、調査区西際の溝跡（SD01）と、複数の小穴（SP）を確認した。溝跡の東法面には石積みが築かれているが、西法面は後の改変により定かではない。幅2m以上の溝であった可能性がある。検出された石積みは径20~40cmの石材にて2~4段程度積み上げられている。上部に比較的小振りの石材を用いており、第Ⅳ段階の整地時に積み直しを行った可能性もある。小穴は第1次検出面で10箇所、第2次検出面で9箇所、試掘トレンチ内に4箇所の計23箇所を確認した。ただし、小穴は比較的近接した区域に集中しており、平面形を推測するには困難である。また、SP1上に土器集中区（SR01）が確認された。

出土遺物のうち多数が土器小皿（かわらけ）である。比較的遺存状況が良好であり、完形品が多数出土している。土器小皿は全て輪轉成形であり、比較的小さな口径8cm前後の製品とやや大きめ11cm前後の製品、15cmを超える製品の3種類の傾向が認められる。溝跡（SD01）からは、土器小皿以外に灰釉陶器や珠洲焼のすり鉢が出土しているが、いずれも小片である。調査区全体では2次に渡って遺構検出を行っており、検出面にて出土した遺物も溝跡出土遺物とはほぼ同時期の傾向を示す。1次遺構検出面にて出土した灰釉小皿は、大窯後期の様相を示しており、16世紀後半の所産と想定される。また中国龍泉窯系の青磁は、蓮弁文が崩れており、14世紀から15世紀に比定される。本調査区では、肥前系染付など江戸期所産の遺物が出土しておらず、時期を想定できる陶磁器は中世後半の様相を示していることから、中世末に埋没し、近世以降改変がなされなかつた場所と考えられる。調査区西端で確認された南北に延びる溝跡も同様に中世後期の比較的短期間に形成され埋没した遺構と想定される。出土した多量の土器小皿の意味は不明だが、調査区西側の溝跡および溝跡周辺に集中する傾向を示す。



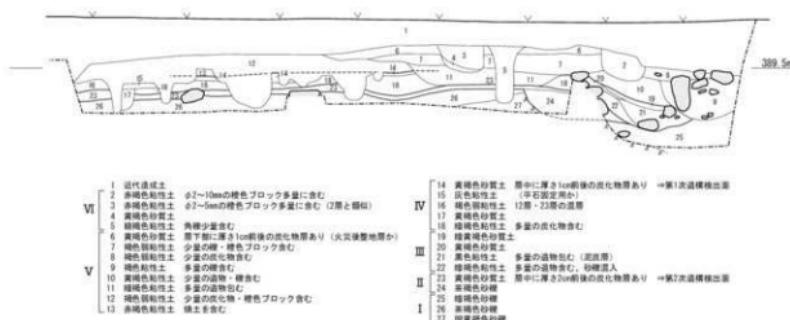
第46図 八幡屋礎五郎大門町店地点 造構全体図 (S=1/60)



調査区全景（1次面）



調査区全景（2次面）



第47図 調査区南壁 土層断面図 (S=1/60)



石積



溝跡土層断面

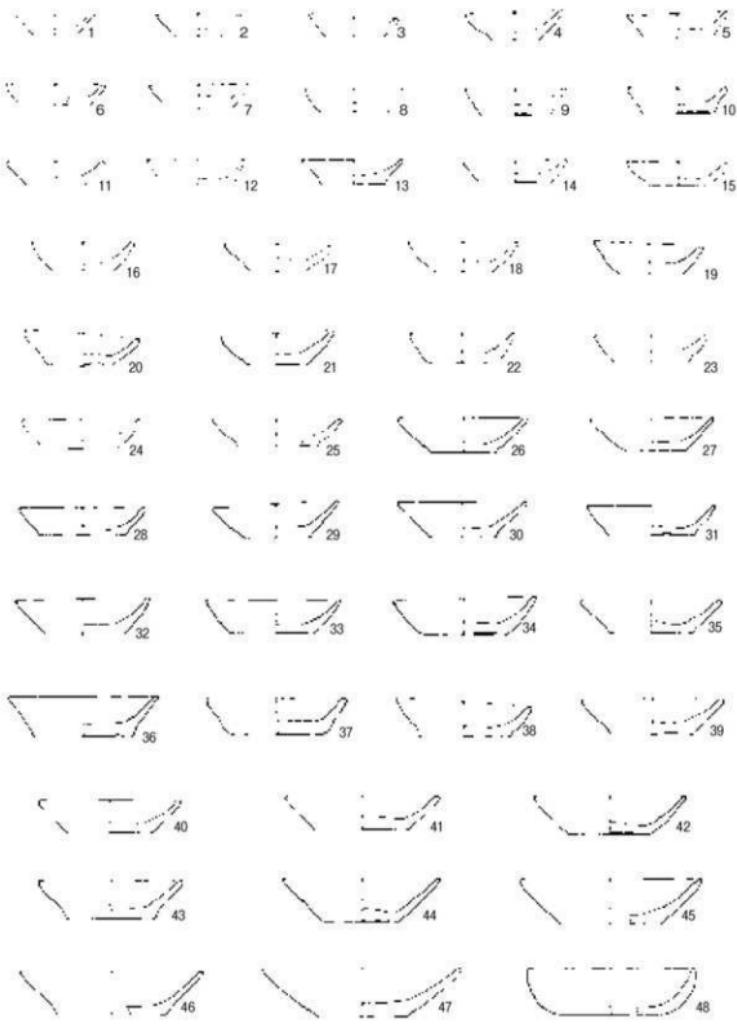


土器集中区
(SR01)



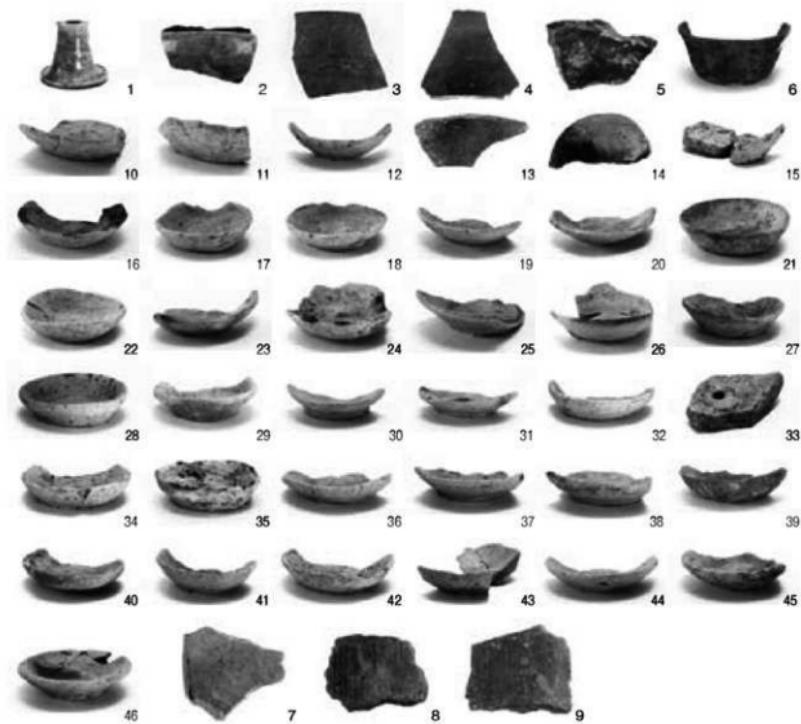
番号	遺構名	識別	器種	形状	土色	成形	口径 (cm)	底面 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	基部 (cm)	時代	指定理由
1	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	6.4	17	3.6	回転未切			
2	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	7.0	18	3.8	回転未切			
3	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	7.2	17	4.8	回転未切			
4	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	8.0	23	4.1	回転未切			
5	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.2	19	5.7	回転未切			
6	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.1	17	5.9	回転未切			
7	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.1	19	5.6	回転未切			
8	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	8.1	20	5.5	回転未切			
9	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.1	21	5.7	回転未切			
10	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.1	21	6.0	回転未切			
11	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.0	19	4.6	回転未切			
12	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.0	21	5.8	回転未切			
13	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.3	20	5.4	回転未切			
14	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	8.5	19	5.5	回転未切			
15	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	8.2	20	5.0	回転未切			
16	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	8.3	24	5.1	回転未切			
17	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.6	24	5.9	回転未切			
18	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	9.0	24	4.9	回転未切			
19	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.9	25	5.2	回転未切			
20	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	9.4	26	5.5	回転未切			
21	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	9.2	26	4.8	回転未切			
22	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.6	24	5.9	回転未切			
23	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	8.2	22	4.2	回転未切	片		
24	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	9.6	24	5.9	回転未切			

番号	遺構名	識別	器種	形状	土色	成形	口径 (cm)	底面 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	基部 (cm)	時代	指定理由
25	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	10.2	22	6.6	回転未切			
26	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	10.6	28	5.3	回転未切			
27	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	10.2	24	4.1	回転未切			
28	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	10.2	23	7.2	回転未切			
29	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	10.2	28	3.2	回転未切			
30	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	10.3	29	5.4	回転未切			
31	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	10.6	25	7.2	回転未切			
32	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	10.9	29	6.4	回転未切			
33	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	11.0	27	6.8	回転未切			
34	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	11.7	28	7.0	回転未切			
35	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	11.5	27	6.7	回転未切			
36	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	12.2	34	8.1	回転未切			
37	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	11.5	30	7.5	回転未切		一部破損	
38	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	11.1	28	7.5	回転未切			
39	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	11.6	29	6.8	回転未切			
40	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	11.6	27	6.7	回転未切			
41	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	12.6	28	7.5	回転未切			
42	SD001	上部	小器	丸形	褐色	輪噛ナフ	12.5	21	6.6	回転未切			
43	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	11.8	31	7.2	回転未切			
44	SD001	上部	小器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	12.8	35	6.0	回転未切			
45	SD001	上部	中器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	13.0	37	8.1	回転未切			
46	SD001	上部	中器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	15.0	35	8.5	回転未切			
47	SD001	上部	中器	逆台形	褐色	輪噛ナフ	16.4	49	7.3	回転未切			
48	SD001	上部	中器	丸形	褐色	輪噛ナフ	13.7	28	8.0	回転未切			



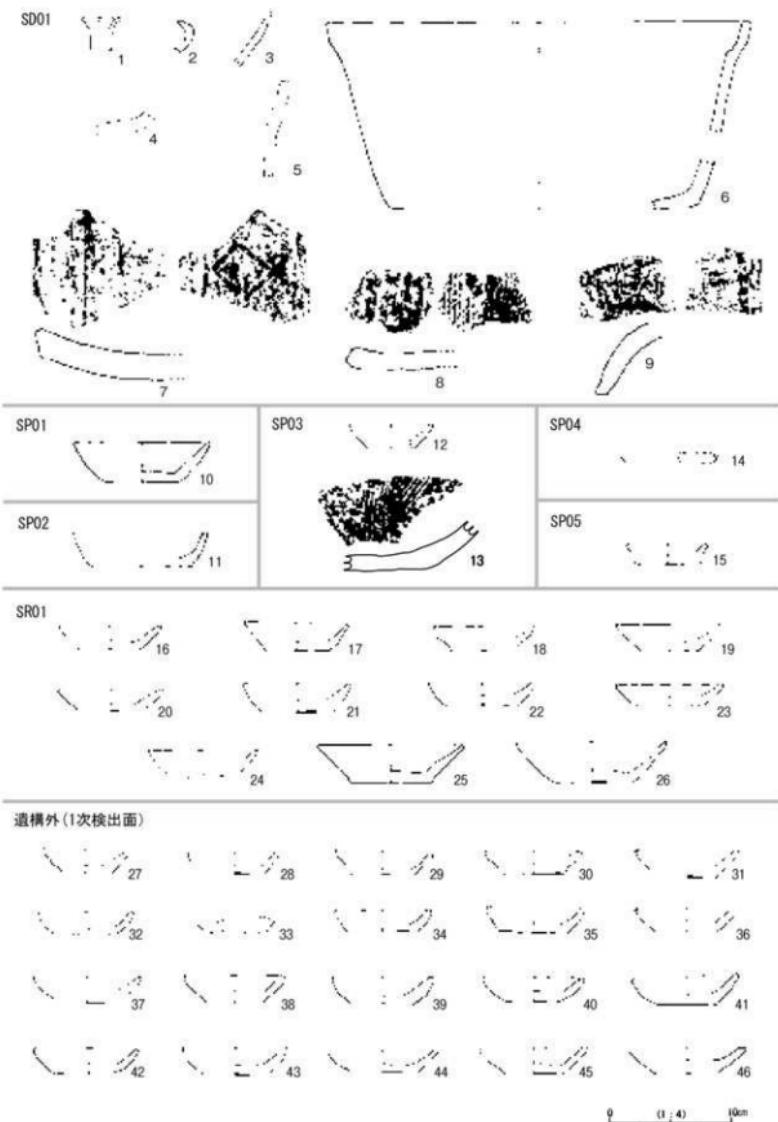
0 (1/4) 10m

第48図 八幡屋穂五郎大門町店地点 遺構出土遺物 (SD01)

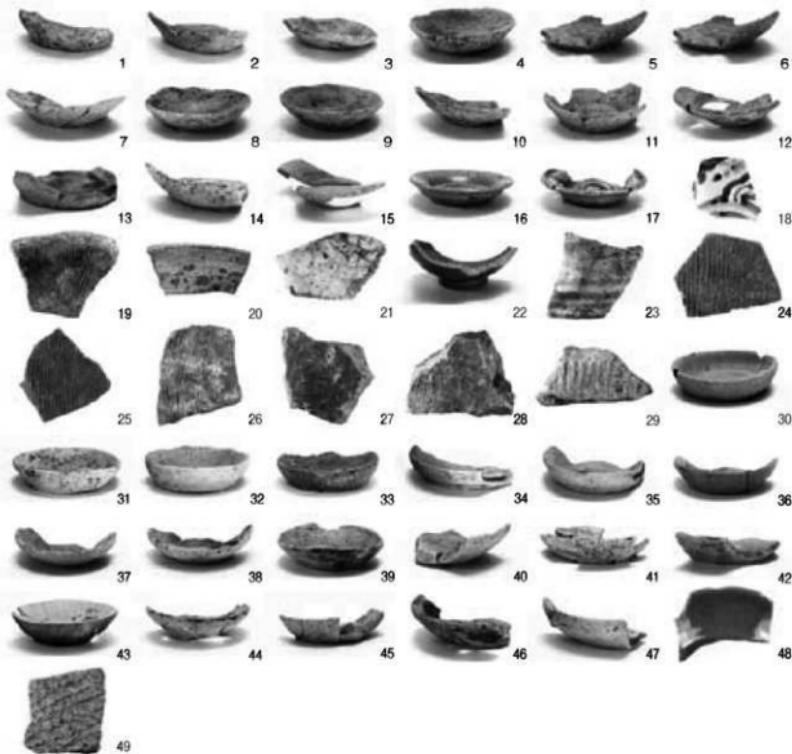


番号	遺構名	器形	形状	断面	成形	口幅	底幅	底厚	底部特徴	参考文献(年代)
1	S D01	陶器	盆?	—	灰黄色	施釉	3.2	—	—	日本古文書
2	S D01	陶器	盆	—	灰褐色	施釉	—	—	—	日本古文書
3	S D01	陶器	浅形	—	灰褐色	施釉	—	—	—	日本古文書
4	S D01	土器	罐	—	褐色	施釉	—	—	—	日本古文書
5	S D01	土器	罐	—	黑褐色	施釉	—	—	—	日本古文書
6	S D01	土器	罐	—	当色	施釉	2.9	—	—	日本古文書
7	S D01	土器	小瓶	透明白	—	—	13.1	3.2	6.2	回転赤切
8	S D01	土器	—	—	表褐色	施釉	—	—	—	—
9	S D01	土器	小瓶	透明白	—	—	—	—	—	—
10	S D01	土器	小瓶	透明白	—	—	—	—	—	—
11	S P01	土器	—	—	表褐色	施釉	—	—	—	—
12	S P01	土器	小瓶	透明白	—	—	6.8	2.0	3.8	回転赤切
13	S P01	陶器	手拂	—	暗褐色	施釉	—	—	—	日本古文書(13-15C)
14	S P01	土器	小瓶	透明白	—	—	—	—	—	—
15	S P01	土器	小瓶	透明白	—	—	6.6	5.2	1.7	回転赤切
16	S B01	土器	小瓶	透明白	—	—	8.4	2.0	5.0	回転赤切
17	S B01	土器	小瓶	透明白	—	—	5.5	2.3	5.2	回転赤切
18	S B01	土器	小瓶	透明白	—	—	6.3	2.1	5.5	回転赤切
19	S B01	土器	透明白	—	黄褐色	施釉	8.8	2.2	4.8	回転赤切
20	S B01	土器	丸形	—	黄褐色	施釉	4.6	1.9	5.1	回転赤切
21	S B01	土器	透明白	—	黄褐色	施釉	8.8	2.4	5.8	回転赤切
22	S B01	土器	透明白	—	黄褐色	施釉	8.7	1.9	6.0	回転赤切
23	S B01	土器	小瓶	透明白	—	—	—	—	—	—
24	S B01	土器	小瓶	丸形	黄褐色	施釉	9.0	2.3	5.0	回転赤切
25	S B01	土器	小瓶	透明白	—	—	12.0	3.1	6.7	回転赤切
26	S B01	土器	小瓶	透明白	—	—	—	—	—	—
27	18世紀出	土器	小瓶	透明白	—	—	6.9	1.9	4.7	回転赤切
28	18世紀出	土器	小瓶	透明白	—	—	7.4	1.8	5.2	回転赤切
29	18世紀出	土器	小瓶	透明白	—	—	8.0	1.9	5.2	回転赤切
30	18世紀出	土器	小瓶	透明白	—	—	8.0	1.9	5.1	回転赤切
31	18世紀出	土器	小瓶	透明白	—	—	8.4	2.2	4.8	回転赤切
32	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	7.7	1.8	5.4	回転赤切
33	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	—	—	—	机部片・瓦有
34	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	—	—	—	—
35	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	7.9	2.1	5.7	回転赤切
36	18世紀出	土器	小瓶	透明白	—	—	—	—	—	—
37	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	8.8	2.2	5.0	回転赤切
38	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	8.2	2.2	4.8	回転赤切
39	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	8.4	2.2	5.6	回転赤切
40	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	8.3	2.0	4.5	回転赤切
41	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	8.7	2.3	5.0	回転赤切
42	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	6.6	2.1	5.8	回転赤切
43	18世紀出	土器	小瓶	丸形	—	—	8.6	2.3	5.3	回転赤切
44	18世紀出	土器	小瓶	透明白	—	—	9.0	1.8	4.9	回転赤切
45	18世紀出	土器	小瓶	透明白	—	—	8.8	2.3	4.9	回転赤切
46	18世紀出	土器	小瓶	透明白	—	—	9.6	2.2	5.2	回転赤切

番号	遺構名	種類	縦横	色調	焼成	断面	横幅(cm)	厚さ(cm)	凹面	凸面	備考・特徴
7	S D01	瓦	平瓦	N41灰	良	—	—	2.1	幕甘灰	米子?	—
8	S D01	瓦	平瓦	7.5YR6/1灰	良	—	—	1.5	日暮灰	磯崎弓	—
9	S D01	瓦	丸瓦	10R5/1灰	良	—	—	1.6	日暮灰	割り(ナダ?)	—



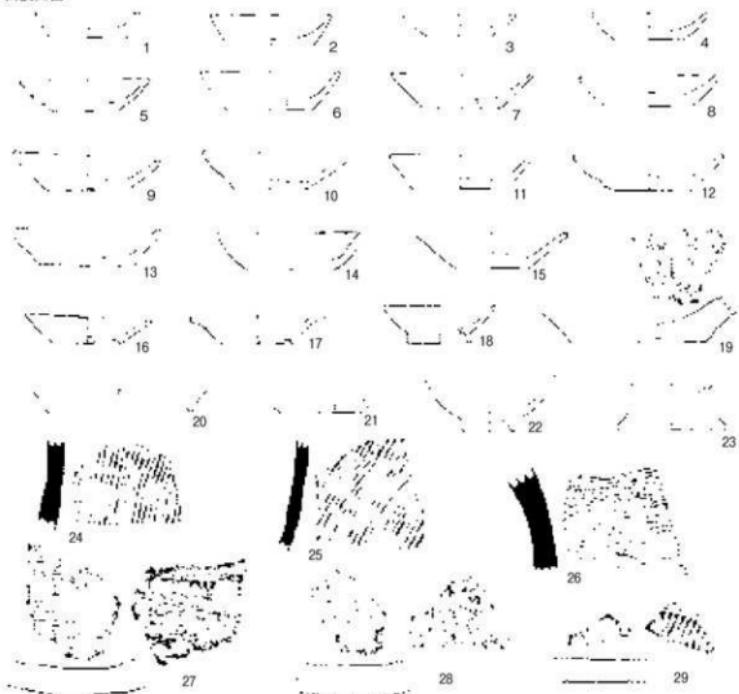
第49図 八幡屋礪五郎大門町店地点 出土遺物 (SD01・SP1~5・SR1~5・遺構外)



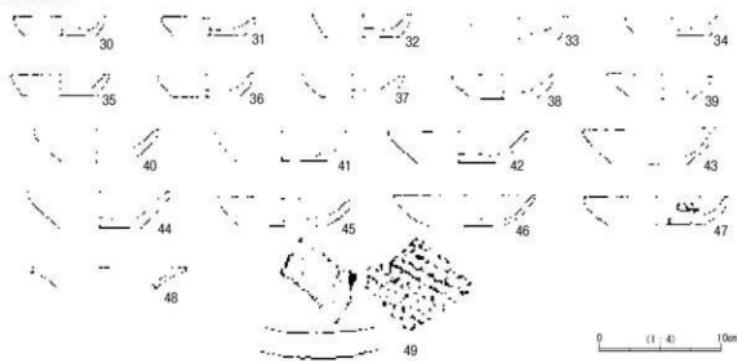
番号	遺物名	国別	種類	形状	地土色	成形	口径	最高	底径	底部形状	備考
番号	遺物名	類別	器形	形状	地土色	成形	口径	最高	底径	底部形状	備考
1	瓦瓶の裏面	小系	追合形	从黄色、褐色	褐色	手打	6.1	6.3	4.0	切	
2	瓦瓶の裏面	小系	追合形	壁厚	褐色	手打	5.9	2.5	7.2	切	
3	瓦瓶の裏面	小系	追合形	从黄色、褐色	褐色	手打	9.2	1.9	—	切	
4	瓦瓶の裏面	小系	丸形	从黄色、褐色	褐色	手打	5.5	2.2	5.8	切	
5	瓦瓶の裏面	小系	斜折形	褐色	褐色	手打	10.6	2.6	5.8	切	
6	瓦瓶の裏面	小系	追合形	从黄色、褐色	褐色	手打	11.4	3.1	7.0	切	
7	瓦瓶の裏面	小系	追合形	从黄色、褐色	褐色	手打	11.4	2.8	6.5	切	
8	瓦瓶の裏面	中系	丸形	从黄色、褐色	褐色	手打	11.4	2.6	6.9	切	
9	瓦瓶の裏面	中系	丸形	从黄色、褐色	褐色	手打	11.1	2.8	6.8	切	
10	瓦瓶の裏面	中系	丸形	从黄色、褐色	褐色	手打	11.2	2.9	6.2	切	
11	瓦瓶の裏面	中系	追合形	从黄色、褐色	褐色	手打	11.5	2.8	7.9	切	
12	瓦瓶の裏面	中系	追合形	从黄色、褐色	褐色	手打	12.2	2.9	7.2	切	
13	瓦瓶の裏面	中系	追合形	褐色	褐色	手打	12.0	3.1	7.0	切	
14	瓦瓶の裏面	中系	丸形	从黄色、褐色	褐色	手打	12.0	3.1	7.0	切	
15	瓦瓶の裏面	中系	追合形	从黄色、褐色	褐色	手打	12.4	3.0	6.1	切	
16	瓦瓶の裏面	小系	斜折形	从黄色、褐色	褐色	手打	10.4	2.2	5.6	追合面の幅	縦口(東京系)
17	瓦瓶の裏面	小系	追合形	从黄色、褐色	褐色	手打	11.2	2.4	6.0	追合面の幅	縦口(東京系)
18	瓦瓶の裏面	小系	丸形	从黄色、褐色	褐色	—	—	—	—	—	中国遺物系(14-15C)
19	瓦瓶の裏面	中系	追合形	从黄色、褐色	褐色	—	11.0	—	—	—	縦口(13-15C)
20	瓦瓶の裏面	中系	追合形	从黄色、褐色	褐色	—	14.0	—	—	—	山本編?
21	瓦瓶の裏面	中系	丸形	从黄色、褐色	褐色	手打	6.6	—	—	—	日本遺物系
22	瓦瓶の裏面	中系	追合形	从黄色、褐色	褐色	手打	6.6	—	—	—	日本遺物系
23	瓦瓶の裏面	瓦合部	从黄色、褐色	褐色	—	9.0	—	—	—	—	—
24	次焼追面	瓦	平瓦	25YR4/1赤灰	良	—	—	2.3	毎日灰	ナダ	
25	次焼追面	瓦	平瓦	57YR6-6褐	やや良	—	—	2.6	毎日灰	磯田型	
26	次焼追面	瓦	平瓦	7.5YR6-6褐	やや良	—	—	1.9	毎日灰	並行明弓	
27	次焼追面	瓦	平瓦	10YR7.3黄灰	良	—	—	2.0	毎日灰	格子印叩き	
28	次焼追面	瓦	平瓦	25YR4/1赤灰	良	—	—	—	—	—	—
29	次焼追面	瓦	平瓦	57YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—
30	次焼追面	瓦	平瓦	7.5YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—
31	次焼追面	瓦	平瓦	10YR7.3黄灰	良	—	—	—	—	—	—
32	次焼追面	瓦	平瓦	25YR4/1赤灰	良	—	—	—	—	—	—
33	次焼追面	瓦	平瓦	57YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—
34	次焼追面	瓦	平瓦	7.5YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—
35	次焼追面	瓦	平瓦	10YR7.3黄灰	良	—	—	—	—	—	—
36	次焼追面	瓦	平瓦	25YR4/1赤灰	良	—	—	—	—	—	—
37	次焼追面	瓦	平瓦	57YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—
38	次焼追面	瓦	平瓦	7.5YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—
39	次焼追面	瓦	平瓦	10YR7.3黄灰	良	—	—	—	—	—	—
40	次焼追面	瓦	平瓦	25YR4/1赤灰	良	—	—	—	—	—	—
41	次焼追面	瓦	平瓦	57YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—
42	次焼追面	瓦	平瓦	7.5YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—
43	次焼追面	瓦	平瓦	10YR7.3黄灰	良	—	—	—	—	—	—
44	次焼追面	瓦	平瓦	25YR4/1赤灰	良	—	—	—	—	—	—
45	次焼追面	瓦	平瓦	57YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—
46	次焼追面	瓦	平瓦	7.5YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—
47	次焼追面	瓦	平瓦	10YR7.3黄灰	良	—	—	—	—	—	—
48	次焼追面	瓦	平瓦	25YR4/1赤灰	良	—	—	—	—	—	—
49	次焼追面	瓦	平瓦	57YR6-6褐	やや良	—	—	—	—	—	—

番号	遺物名	類別	種類	色調	焼成	底幅	横幅	厚さ	凹面	凸面	備考・特徴
1	次焼追面	瓦	平瓦	25YR4/1赤灰	良	—	—	2.3	毎日灰	ナダ	
2	次焼追面	瓦	平瓦	57YR6-6褐	やや良	—	—	2.6	毎日灰	磯田型	
3	次焼追面	瓦	平瓦	7.5YR6-6褐	やや良	—	—	1.9	毎日灰	並行明弓	
4	次焼追面	瓦	平瓦	10YR7.3黄灰	良	—	—	2.0	毎日灰	格子印叩き	
5	次焼追面	瓦	平瓦	25YR4/1赤灰	良	—	—	—	—	—	中国遺物系(14-15C)

1次検出面



2次検出面

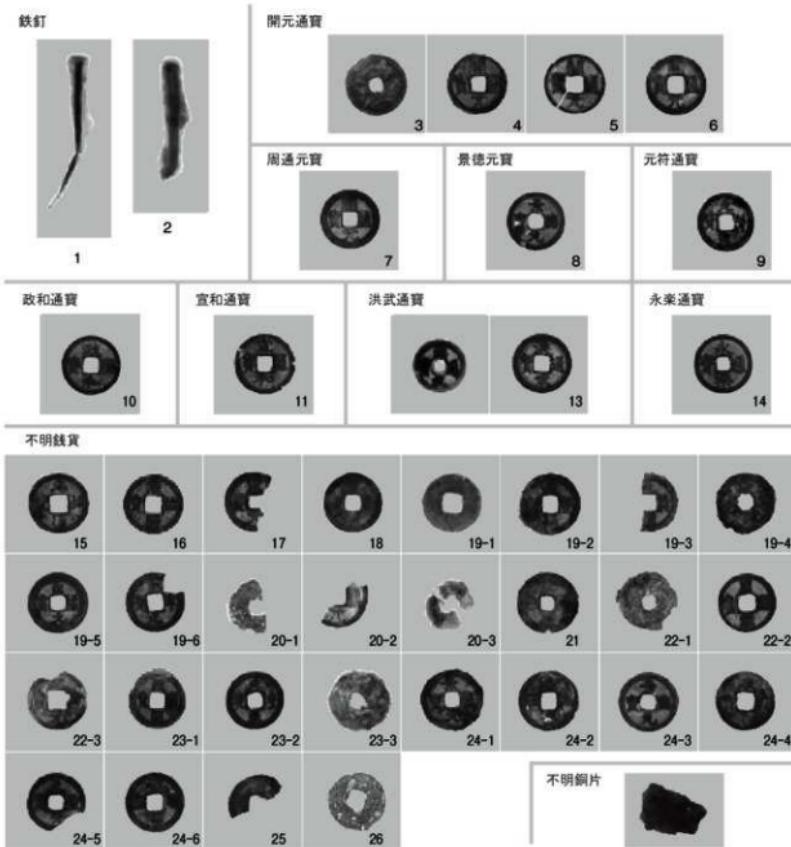


第50図 八幡屋礎五郎大門町店地点 造構外出土遺物（1次面・2次面）

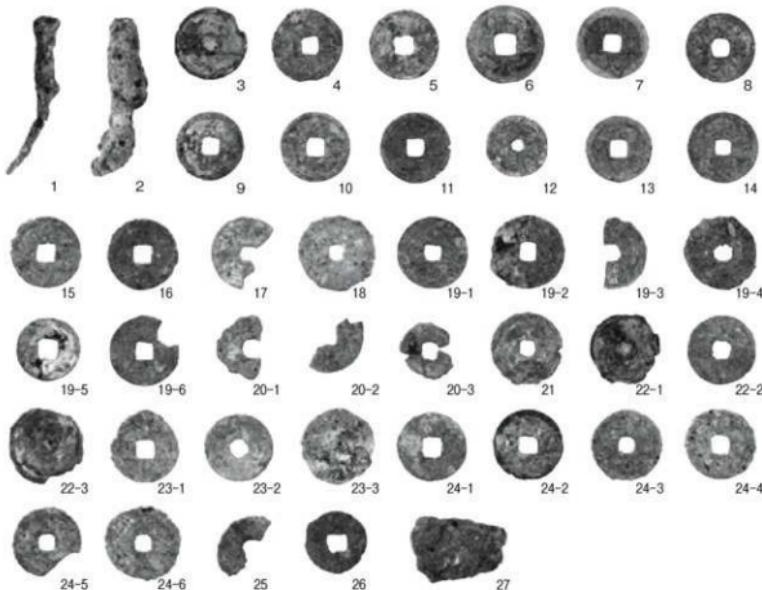
(4) 出土金属製品

出土金属製品の概要 本調査区では、42点の銭貨と2点の釘が出土している。出土地点はSP02やSP10などの小穴からも数点出土しているが、多数は検出面及びトレンチからの出土である。確認された他の遺物と同様に講跡に近い調査区西側において集中して出土する傾向を示す。

出土銭貨 出土した銭貨のうち、判読可能なものは12点である。鋳造年代順に列記すると、唐錢の開元通寶4枚、後周錢の開元元寶1枚、北宋錢の景德元寶1枚・元符通寶1枚・政和通寶1枚・宣和通寶1枚、明錢の洪武通寶2枚・永樂通寶1枚となり、江戸期に鋳造された銭貨は出土していない。その他判読できない銅錢が多数出土しており、30m²の小調査区において極めて高い密度で銭貨が出土している状況が、本調査地点の特徴の一つとして挙げられる。



第51図 八幡屋五郎大門町店地点出土銭貨 (S=1/2)



○八幡屋礪五郎大門町店地点出土金銅製品

遺物 No.	遺物名	材質	出土位置	法量 (mm)			重量 (g)	鋤造			整理 No.	備考
				全長 (直径)	最大厚	最大幅		国	年	西暦		
1	鉄釘	鉄	Tr 1	74.0	9.0	11.0	8.01				13	
2	鉄釘	鉄	SP10	58.0	18.0	8.0	12.66				28	
3	銅錢〔開元通寶〕	銅	1次検出面	26.5	0.7	2.67		唐	武徳4年	621	10	
4	銅錢〔開元通寶〕	銅	2次検出面	25.0	1.5	3.95		唐	武徳4年	621	16	
5	銅錢〔開元通寶〕	銅	2次検出面	24.5	1.5	2.92		唐	武徳4年	621	18	
6	銅錢〔開元通寶〕	銅	Tr 1	25.0	1.0	2.81		唐	武徳4年	621	5	
7	銅錢〔周道元寶〕	銅	1次検出面	25.0	1.5	2.51		後周	顯徳2年	955	24	
8	銅錢〔景徳元寶〕	銅	1次検出面	24.0	1.0	3.02		北宋	景德元年	1004	1	
9	銅錢〔元符通寶〕(真)	銅	1次検出面	24.0	1.5	3.72		北宋	元符元年	1098	9	
10	銅錢〔政和通寶〕(真)	銅	1次検出面	25.0	1.5	4.01		北宋	政和元年	1111	25	
11	銅錢〔宣和通寶〕(真)	銅	Tr 1	25.0	1.5	3.37		北宋	宣和元年	1119	4	
12	銅錢〔洪武通寶〕	銅	SP10	22.0	1.3	4.36		明	洪武元年	1368	27	
13	銅錢〔洪武通寶〕	銅	Tr 1	23.0	1.5	3.30		明	洪武元年	1368	3	
14	銅錢〔永樂通寶〕	銅	Tr 1	25.0	1.5	4.06		永樂6年	1408	6		
15	銅錢〔元〕(通寶)	銅	Tr 1	25.0	1.5	3.39					7	
16	銅錢〔元〕(□□□□)	銅	SP02	25.0	1.7	3.51					14	
17	銅錢〔不明〕	銅	SP02	25.0	1.5	6.02					15	
18	銅錢〔不明〕	銅	Tr 1	26.0	2.5	4.52					12	
19	銅錢〔不明〕6点	銅	Tr 1			18.35					8	
20	銅錢片〔不明〕4点	銅	Tr 1	22.0	1.5	2.36					21	
21	銅錢〔不明〕	銅	Tr 2	25.0	1.5	2.96					22	
22	銅錢〔不明〕3点	銅	1次検出面	24.0	1.0	9.75					11	
23	銅錢〔不明〕3点	銅	1次検出面	25.0	1.0	17.27					26	
24	銅錢〔不明〕6点	銅	2次検出面	25.0	1.0	19.29					17	
25	銅錢片〔不明〕	銅	2次検出面	24.0	1.0	1.27					19	
26	銅錢〔不明〕	銅		22.0	1.0	1.21					2	
27	銅片〔不明〕	銅	SP17	27.0	5.0	20.0	6.00				20	

第Ⅳ章 自然化学分析

株式会社パリノ・サーヴェイ

第1節 はじめに

元善町遺跡を含む長野遺跡群は、裾花川の旧扇状地に相当する段丘面（第2段丘面）上に形成された湯福川扇状地（中村・小林、1974）上に立地している。これまでの長野遺跡群の発掘調査では、縄文時代から近現代に至る各時期の遺構・遺物が確認されており、同扇状地上では古くから人間活動の場であったことが明らかとされている（長野市教育委員会、2006）。

今回発掘調査が実施された元善町遺跡仁王門東地点は、善光寺仁王門の東、仁王門以北の平坦面南西隅に相当し、平安時代後期から鎌倉時代の大規模な地盤造成、建物跡等が確認されている。元善町は、1707年（宝永7年）に現在の位置に善光寺本堂が造営されるまで本堂が位置していた場所とされ、今回確認された遺構は中世善光寺と直接的に関連する可能性が示唆されている。

本報告では、上記した地盤造成の痕跡とみられる堆積物（盛土）より出土した炭化材や焼土塊に付着した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を実施し、地盤造成に伴う盛土の形成年代について検討する。

第2節 試料

試料は、地盤造成によって形成された盛土内より出土した炭化材2点である。調査所見では、黒～暗灰色を呈する旧地表面とみられる堆積物上位に、石積（石積3）および炭化物や壁土、瓦、等が多量に混じる焼土を主体とする盛土（盛土3）、礫が混じる明灰～明褐色土からなる盛土（盛土2）、盛土2上部に礫石が据えられる状況が確認されている。上記した試料は、焼土を主体とする盛土3の中層（資料1）および下層（資料2）より出土した炭化材である。

試料の観察では、資料1は被熱を受けた土塊状を呈し、表面には炭化物の細片が多く観察された。資料2は、炭化材が5個確認された。資料1は、現状の形状を保存を優先したため表面に認められた炭化材の小片1点を抽出出し、分析試料としている。資料2については、それぞれに仮名（1～5）を付し、比較的保存状態の良好な炭化材1点（資料No2-1）を選択し、分析試料としている。各試料の詳細は、結果と共に表1に示す。



試料採取位置（資料1）

第3節 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

炭化材を分析対象とした。根等の目的物と異なる年代を持つと思われるものが付着、あるいは混入している場合は、これらをビンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1 g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空中にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて CO₂ を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO₂ と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1 mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3 MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9 SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C / 12C の測定も行うため、この値を用いて δ¹³C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma, 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986–2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位での表記が通常とされるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正時の再計算、再検討に対応するため、本報告では 1 年単位で表記している。暦年較正結果は、測定誤差 σ、2 σ 双方の値を示す。σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、σ、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

表1. 放射性炭素年代測定結果

資料No.	試料	種類	暦年年代 BP ^a	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) ^b	測定年代 BP	Code No.	Measurement No.
1	NGMY 2 次検所面 透上 2 - 中層	炭化材（薪葉樹）	1,510 ± 30	-25.8 ± 0.67	1,530 ± 30	9837-2	IAAA-71965
2-1	NGMY 2 次検所面 透上 2 - 下層	炭化材（サワラ）	950 ± 30	-27.06 ± 0.58	980 ± 30	9837-1	IAAA-71964

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年後であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ（測定値の 68% が入る範囲）を年代値に換算した値。

表2. 暦年較正結果

試料	暦年年代 BP ^a	暦年較正年代 (cal)						相対比	Code No.			
		σ	cal AD	538	-	cal AD	598	cal BP	1,412	-	1,352	1.000
資料No. 1 (炭化材 (薪葉樹))	1,512 ± 29	2 σ	cal AD	434	-	cal AD	492	cal BP	1,516	-	1,458	0.165
		cal AD	508	-	cal AD	518	cal BP	1,442	-	1,432	0.016	
		cal AD	528	-	cal AD	620	cal BP	1,422	-	1,330	0.819	
		cal AD	1,031	-	cal AD	1,051	cal BP	919	-	899	0.242	
資料No. 2-1 (炭化材 (サワラ))	945 ± 28	σ	cal AD	1,081	-	cal AD	1,126	cal BP	869	-	824	0.561
		cal AD	1,135	-	cal AD	1,152	cal BP	815	-	798	0.196	
		2 σ	cal AD	1,026	-	cal AD	1,156	cal BP	924	-	794	1.000

1) 暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986–2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用いている。

2) 暦年較正は、表中に示した丸める前の値を使用している。

3) 統計的に真の値が入る確率は σ は 68%、2 σ は 95% である。

4) 相対比は、σ、2 σ のそれぞれ 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 炭化材同定

炭化材の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）について割断面を作製し、断面が水平になるよう剃刀等で調整し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列などを観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。同定根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）および Richter 他（2006）を参考にする。

第4節 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表1、2に示す。同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は、資料1（No79）は $1,510 \pm 30$ BP、資料2（No60）は 950 ± 30 BPを示す。この補正年代に基づく曆年較正結果（ σ ）は、資料1（No79）はcalAD538–598、資料2（No60）はcalAD1,031–1,152である。

(2) 炭化材同定

放射性炭素年代測定試料に供した資料2の炭化材（2-1）とこの他の炭化材4点（2-2～4）は、全て針葉樹のサワラに同定された。一方、資料1の炭化材は、実体顕微鏡による観察では針葉樹と判断されたが、放射性炭素年代測定試料とすることを優先したことから、種類の特定には至らない。以下に解剖学的特徴を示す。

・サワラ (*Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行はやや急で、晚材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

第5節 考察

地盤造成時の盛土（焼土層）から出土した炭化材の曆年較正年代は、盛土3下部の炭化材（資料2）は11世紀前半～12世紀中頃、同中部の炭化材（資料1）は6世紀前半～末と異なる年代を示した。なお、焼土層は人為的に形成された堆積物であり、壁土や瓦、漆喰壁等の何らかの要因によって生じた塵芥物等が多量混じる状況から、炭化材は塵芥物と共に伴し、同時期性の高いことが推測される。これらの点や今回の調査結果を参考とすると、焼土層は炭化材（資料2）が示した11～12世紀頃、あるいは、それ以降に形成された可能性がある。

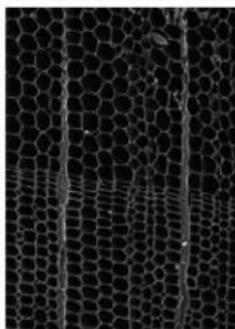
また、資料2の分析試料とした炭化材とこの他の炭化材（No2～4）の5点は、いずれも針葉樹のサワラであった。サワラの木材は、木理が直通で割裂性・耐水性が高く、加工用は容易といった特徴を有する。炭化材が出土した焼土層からは、建築材料に由来するとみられる遺物が多量出土していることから、同層から出土した炭化材には建築材として利用された木材も含まれている可能性もある。

ところで、長野県内における当該期の建築部材等の調査事例は、大部分が堅穴住居跡から出土した炭化材を対象としたものである。これらの結果をみると、落葉広葉樹のクヌギ節やコナラ節を中心とする種類組成であり、サワラを含む針葉樹の利用は少ない（森、1988；パリノ・サーヴェイ株式会社、1992a, 1992b, 1995, 2005；鈴木・能城、1993）といった特徴が指摘される。なお、古代の寺院では、法隆寺がヒノキを中心としているなど、針葉樹の利用が多いことが知られている。長野県内では、明らかに寺院の建築部材と判断される木材の樹種を明らかとした事例がなく、詳細は不明である。

(引用文献)

- 森 義直. 1988. 岩化物(炭化材)について、「長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 来見原遺跡Ⅱ」. 大町市埋蔵文化財調査報告書第14集, 大町市教育委員会, 118.
- 長野市教育委員会. 2006. 長野遺跡群 善光寺門前町跡 - 竹風堂善光寺大門店地点-. 長野市の埋蔵文化財第115集, 44p.
- 中村三郎・小林 謙. 1974. 長野 地形、地形各論 長野 5万分の1. 土地基本分類調査簿(国土調査) 第157号. 経済企画庁, 8-10.
- パリノ・サーヴェイ株式会社. 1992a. 下芝宮遺跡・下聖端道路炭化材同定報告. 「国道141号線関係道路長野県佐久市長土呂国道141号線関係道路発掘調査報告書(本文編) 芝宮遺跡群下芝宮遺跡I・II・III・IV、芝宮遺跡群上高山遺跡、周防畠遺跡群下北原遺跡、近津遺跡群上宮原遺跡、下蟹沢遺跡、長土呂遺跡群上大林遺跡、長土呂遺跡群下聖端遺跡I・II」. 佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集, 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター, 355-391.
- パリノ・サーヴェイ株式会社. 1992b. 女性原遺跡出土炭化物樹種同定. 「久保在家遺跡」. 長野県小県郡東部町教育委員会, 252-253.
- パリノ・サーヴェイ株式会社. 1995. 勝負沢遺跡 住居構築材の木材利用. 「寄山湖畔に営まれた縄文中期集落の調査 寄山・寄山古墳」. 長野県土地開発公社・佐久市教育委員会, 857-859.
- パリノ・サーヴェイ株式会社. 2005. 型原遺跡の自然科学分析報告. 「長土呂遺跡群 型原 長野県佐久市浅間山麓田切台地上における巨大古代集落遺跡の調査 第5分冊」. 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第126集, 佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会, 140-206.
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編). 2006. 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫. 1982. 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 鈴木三男・能城修一. 1993. 向六工遺跡出土炭化材の樹種. 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12 - 東筑摩郡坂北村・麻績村内 - 向六区遺跡・十二遺跡・野口遺跡・古司遺跡・子尾入遺跡」. 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・財團法人長野県埋蔵文化財センター, 224-225.

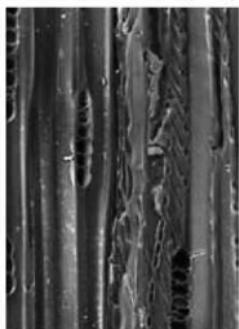
炭化材写真(資料2:サワラ)



a:木口



b:桿目



c:板目

200 μm:a
100 μm:b,c

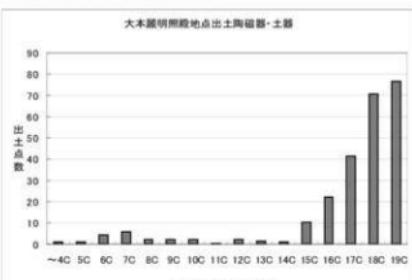
第V章 結語

第1節 大本願明照殿地点出土の陶磁器・土器

(1) 出土陶磁器・土器の様相

元善町遺跡善光寺大本願明照殿地点の発掘調査では、古墳時代から明治に至る幅広い年代の陶磁器・土器が出土しており、中でも江戸時代中期から末期にかけて生産された製品が主体を占める。出土陶磁器・土器のうち、検出遺構に伴うもの及び比較的の残存状態が良好で生産時期・产地等を推定できる資料を選出し、株式会社アルカに観察表の作成等整理分類業務を委託した。以下業務委託報告における要旨を記す。

出土の陶磁器・土器は、4次にわたる遺構検出時および検出遺構覆土より出土したものであるが、1次遺構検出面の近代建物跡や3次遺構検出面の古墳時代住居跡など遺構の具体的性格を想定できるものは一部に限られており、大多数は用途不明の土坑・小穴であった。本調査地点では、中世遺跡において一般的によく見られる中国景德鎮系の青花製品や江戸時代初期から前期に見られる初期伊万里製品が全く確認されておらず、中世後期から近世初期にかけて生産された製品組成に著しい片寄りがあることが注目される。



※推定年代が2期以上にまたがる場合は、出土点数を按分している。

(2) 中世後期から近世初期に比定される製品について

中世後期の遺物としては、中国系青磁と珠洲系甕、越前系擂鉢、瀬戸美濃系陶器などが出土している。青磁は龍泉窯系青磁であり、南宋から元にかけての製品と明代の製品がある。越前焼は擂鉢の口縁部破片が3次遺構検出面北西から1点出土している。胎土は淡い橙色で釉薬ではなく、輪積み成形である。内面に間隔を開けた柳描き摺目がみられる。瀬戸美濃製品は、大窯期から連房式登窯初期に比定される製品が合計12点出土している。うち4点が大窯期の灰釉小皿で、すべてが2次面SD04からの出土である。大窯後期と見られる長石釉(志野)製品が碗2点と菊花小皿1点の計3点が確認される。碗2点はSK07とSK38からの出土で、菊花皿は灰釉皿と同じくSD04からの出土である。絵志野は碗1点でSK04から出土した。連房式登窯初期の製品と見られる。鉄釉製品は大窯後期から連房式登窯初期にかけての製品とみられるものが4点認められる。器種は天目茶碗2点、他に碗底部破片1点とやや大きめの皿破片が1点ある。SK38から天目茶碗と碗底部破片の2点が、天目茶碗1点がSD04から出土した。皿破片は3次検出面北東部から検出されている。

近世初期の肥前系陶器では大橋編年1期(1580~1610年代)に比定される製品が6点出土している。出土状況はやや散逸的で、前出の2次遺構検出面SK15出土灰釉陶器碗、SD04北列出土灰釉小皿の他に、3次遺構検出面SK45出土陶器縁灰釉碗、1次遺構検出面SD01出土蓋灰釉碗、2次遺構検出面南東出土土灰釉碗、2次遺構面南西検出面出土土灰釉小皿である。6点に共通する特徴として、見込みに目跡がなく、また高台周辺は露胎で中央に兜巾状の削り残しが見られ、目跡は認められず、重ね積みの痕跡がない製品である。近世初期製品の中では全

体的にも多くの確認される種類である。

一方、大橋編年II期（1600～1650年代）肥前系陶器は、SK38から出土した砂目積皿1点のみである。SK38は近世初期の瀬戸・美濃系陶器と大橋編年III期（1650～1690年代）肥前系陶器2点と供出していることから、ある程度年代を経た段階で廃棄された可能性が高い。また、ほぼ同時期に比定される肥前系磁器（初期伊万里）製品は、本遺跡からは1点も出土していない。長野市内では近世初期から近世・近代まで至る遺跡として松代城下町跡（2005 長野市教育委員会）があるが、そちらでは景徳鎮系青花製品や呉須系製品、初期伊万里製品が出土している。この差異は単純に時期別差があるとはいえないが、注目すべき事象であろう。

（3）元善町遺跡出土遺物の傾向

以上、元善町遺跡大本願明照殿地点の出土陶磁器・土器について概要と中世後期から近世前期にかけての特色を記述したが、全体的な様相としてまとめると、以下のような点が挙げられる。

- ① 古墳時代に比定される土師器が遺構に伴う形で確認された。
- ② 第4次遺構検出面瓦の瓦包含層から古代に比定される須恵器・土師器破片が確認された。
- ③ 中世に比定される遺物が第3次遺構検出面SD02・03から確認された。
- ④ 近世初期に比定される製品で、瀬戸美濃系陶器と肥前系陶器が第2次遺構検出面SK15・SD04からまとまった形で検出された。
- ⑤ 近世初期に比定される製品において、大橋編年I期（1580～1610年代）陶器が6点確認される一方、大橋編年II期（1600～1650年代）肥前系陶器は1点のみで、大橋編年II期（1610～1650年代）肥前系磁器は確認されなかった。
- ⑥ 全体的には、検出面出土から遺構・土坑出土品を含め、江戸時代中期から後期にかけての製品が主であることが確認された。

今回の発掘では、古墳時代の堅穴住居跡などの遺構が確認される一方で、奈良・平安時代の遺構は検出できなかった。しかし、第4次遺構検出面の瓦包含層から出土する須恵器・土師器の破片や、第2次遺構検出面SK04出土の頸部に凸帯が回る平安期の尾張系広口長頸壺破片など、古代に比定される遺物は少量ながらも出土している。これは古代の遺構が、調査地周辺に存在したことを示すものであり、中世以降の大規模な造成に伴って消失した可能性が考えられる。今後、周辺での発掘調査を積み重ねることにより、部分的にでも現存する古代遺構を確認できる可能性はある。慎重かつ丁寧に調査資料を蓄積する必要がある。

また、出土遺物の傾向全体をみると、古代から中世までの陶磁器・土器製品が極端に少ない傾向を示している。この傾向は、大本願明照殿地点だけではなく、仁王門東地点についても同様であり、瓦や壁土など建物に関する構造材は多量に出土するものの、生活に密接に関連する陶磁器・土器は小破片が僅かに確認されるに留まっている。このことは、元善町遺跡が一般的な集落とは異なり、古代・中世において多種の生活用具を必要としない寺域であったことを示している可能性も考えられる。

第2節 出土瓦の検討

一大本願明照殿地点出土單弁六弁蓮華文軒丸瓦について一

元善町遺跡（大本願明照殿地点・仁王門東地点）において出土した古代瓦は、合計で2,200点を超え、長野市内での古代瓦出土最大数となった。出土点数もさることながら、新たに確認された文様瓦・文字瓦は、古代信濃の仏教文化を考える上で、貴重な発見であった。中でも、大本願明照殿地点（以下大本願）出土の軒丸瓦は、文様構成が近江国（現滋賀県）の一部で確認されている湖東式軒丸瓦の文様と酷似していることが判明した。本節では、大本願より出土した軒丸瓦と湖東式軒丸瓦との比較・検討を行い、今後の課題を明らかにしたい。

まず、「湖東式軒丸瓦」について述べることとする。湖東式軒丸瓦とは、文字通り琵琶湖の東岸地域に分布する瓦を指し、近江国愛知郡（現滋賀県愛荘町）を中心としている（※1）。湖東式軒丸瓦が出土する代表的な遺跡は、軒野塔ノ塚廃寺・野々目廃寺・小八木廃寺などが挙げられ、出土した軒丸瓦を比較した結果、以下の特徴が判明している。①蓮弁は單弁と重弁の二種類②蓮弁数は六弁と八弁の二種類③蓮弁の中央には稜線がある（主に八弁形式に見られる）④中房中央蓮子は大きなもの一つ、もしくは小さな蓮子の周間に環線を巡らす⑤外区内縁に珠文帯、などである。特に、①・③・⑤については、確認されている軒丸瓦に共通する特徴で、逆に言えば、單弁・重弁の蓮弁に稜線を持ち、外区内縁に珠文を巡らす文様の軒丸瓦は「湖東式軒丸瓦」と定義できる。しかし、重岡卓氏はこの定義について、「かなり漠然としたグルーピングになってしまう。（中略）広い範囲で包括する概念のある「系」を用いて「湖東系軒丸瓦」と称するのが適当。」としている（※2）。また、湖東式軒丸瓦には、重張文の下端に指頭圧痕を加えて波状にする軒平瓦が組合わさるものと考えられている。

湖東式軒丸瓦は、近江以外でも出土していることが知られており、美濃国・尾張国（現岐阜県・愛知県）と越前国（現福井県）で確認されている。美濃・尾張で確認された湖東式軒丸瓦は、ほとんどが六弁形式のもので、蓮弁に稜線を有しているものはごく一部である。中房の蓮子は、規則的に間弁の延長線上に配されているが、外区内縁の珠文が欠落している個体も見受けられ、文様の退化。あるいは独自の文様構成に変化したものとみられる（※3）。越前で確認された湖東式軒丸瓦は1点のみである。こちらも六弁形式のものであるが、美濃・尾張出土の資料に比べると造りは端正であるように見受けられ、中房の蓮子は間弁と蓮弁の延長線上に規則的に配されている（※4）。近江以外で確認されている湖東式軒丸瓦は、六弁形式のものが主体であり、源流と考えられる湖東地域で六弁形式が確認されているのは、軒野塔ノ塚廃寺・野々目廃寺のみである。

ここで、再度大本願出土の軒丸瓦の特徴を確認する。①單弁の蓮弁が六弁②蓮弁中央に稜線③中房は環線によって形成される④中房中央に大きな蓮子一つ、もしくは環線の内側に小さな蓮子⑤中央蓮子の周間に環状の蓮子⑥外区内縁に珠文帯⑦外区外縁には一条の環線を巡らす⑧外区環線の外側は平坦。以上の事が挙げられる。これらの特徴の中で、①・②・⑥は上記の湖東式軒丸瓦の定義に当てはまり、本軒丸瓦が「湖東式軒丸瓦」と呼称するのに充分な要素を有していることが確認できた。

大本願出土の軒丸瓦が、湖東式軒丸瓦と確認できた時点で問題となるのは、近江で確認されている湖東式軒丸瓦が、信濃に流入したルートとその背景である。湖東地域で出現したとされる湖東式軒丸瓦は、軒野塔ノ塚廃寺出土八弁形式のものがその初現とみられ、後に六弁形式が派生したと考えられている。八弁形式から派生した六弁形式の湖東式軒丸瓦は、東山道と北陸道を経由して美濃・尾張と越前に持ちこまれたものと思われ、各地域で展開をする。美濃・尾張出土の湖東式軒丸瓦は、蓮弁稜線が欠落し、外区内縁珠文の数が少なく、大本願出土の軒丸瓦と比較すると、直接的につながる要素は見出せない。一方、越前小柏窯跡出土の湖東式軒丸瓦は、中房蓮

子の規則的配置や、外区内縁の珠文数の多さなど、大本願出土の軒丸瓦との共通点が見出せる。そのため、軒丸瓦の類似性という観点からは、湖東式軒丸瓦が北陸道ルートで信濃に持ちこまれた可能性が考えられる。しかし、小柏窯跡出土の軒丸瓦との相違点（中房圓線がない・外区に二重圓線）もわずかに看取できる。また大本願出土の軒丸瓦にみられる蓮弁表現や、中房径が小さいことなどの要素は、近江出土の八弁形式の湖東式軒丸瓦と似ており、近江からの直接流入というのも選択肢の一つであると思われる。

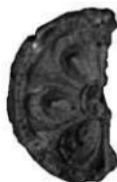
湖東式軒丸瓦の成立背景として、近江では渡来系氏族の関与も示唆されているが、現時点で北信濃における渡来系氏族の動向や、古代善光寺造営に関する郡の体制がどのようなものであったかが不明瞭である。今後、瓦の文様だけではなく、地域の特色を明らかにするなどの多角的な研究を行う必要がある。

（※1）滋賀県内では、湖東地域以外の湖北地域でも一部確認されている。

（※2）名称としては「式」の方が広く使われているため、本報告書では「式」を踏襲させていただく。

（※3）美濃国で湖東式軒丸瓦が出土した遺跡は、平蔵寺跡・弥勒寺跡・輪形古窯跡・元薬師寺跡である。尾張国で出土した遺跡は、東流庵寺・薬師堂庵寺である。薬師堂庵寺は現在の愛知県に所在している。

（※4）福井県で湖東式軒丸瓦が出土した遺跡は小柏窯跡で、二基の窯が存在している。



元善町出土湖東式軒丸瓦



八弁形式



六弁形式

- 1 : 湖東地域 (輕野塔ノ塚廬寺・野々目廬寺・小八木廬寺
日加田遺跡・長寺遺跡・宮井廬寺
鶴田廬寺・雪野寺跡)
- 2 : 湖北地域 (浅寺廬寺・井口遺跡)
- 3 : 美濃地域 (平蔵寺跡・弥勒寺跡・元薬師寺跡
輪形古窯跡)
- 4 : 尾張地域 (東流庵寺・薬師堂庵寺)
- 5 : 越前地域 (小柏窯跡)
- 6 : 信濃地域 (元善町遺跡)

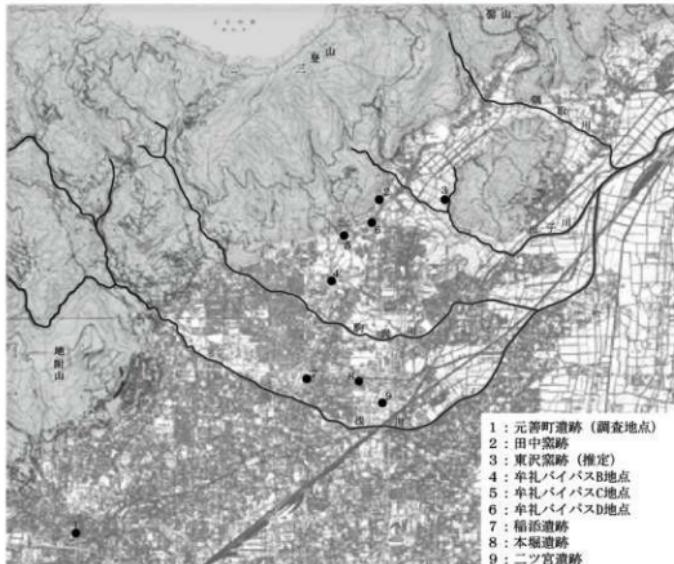


第52図 湖東式軒丸瓦出土分布図

第3節 北信濃における古代瓦の生産と流通

長野市内で現在までに確認されている古代瓦の大多数は、旧水内郡域（千曲川・犀川以北）出土であり、中でも善光寺境内周辺と浅川扇状地遺跡群に集中している。浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスB・C・D地点の調査では住居跡を中心に古代瓦を確認している。出土した軒丸・軒平瓦は、善光寺境内出土とされる複弁蓮華文軒丸瓦・偏行唐草文軒平瓦と同種の文様構成であり、古代善光寺との関連性を指摘できる。また、牟礼バイパス地点の南東にあたる二ツ宮遺跡・本掘遺跡・稻添遺跡の調査では、瓦や多数の瓦塔片が出土している。これらの遺跡は全て集落遺跡であり、寺院等の建物遺構を確認できないことから、瓦の生産・流通に関連する集落と考えられる。旧水内郡域の古代瓦の生産遺構としては、牟礼バイパス地点北方の山麓にて水道工事の際に瓦の堆積層が確認された田中窯跡と、その東方に存在したといわれる東沢窯跡がある。窯跡出土とされる瓦は現存するが、今までに発掘調査を実施していないため、窯跡の操業期間や正確な位置などは把握できていない状況である。

一方、善光寺境内は、古くから古代瓦が出土することで知られていたが、これまで境内城で発掘調査を実施したことではなく、工事等に伴う表探資料が数点現存するのみであった。今回の調査では、大本願明照殿地点および仁王門東地点にて多量の瓦が出土しており、仁王門東地点では大規模な造成とともに建物礎石と想定される遺構も確認されている。これにより少なくとも中世前期には善光寺に関連する建物が現仁王門付近に存在していたことが想像される。また、大本願明照殿地点では湖東式軒丸瓦や桶巻き作りの平瓦の出土によって、調査地周辺において8世紀代に瓦葺き建物が存在した可能性が高まった。今後は、これらの古代瓦がどのように生産され、流通したのかを検討することが必要である。そのためには窯跡の調査や瓦が出土する集落跡との関係、道路・河川の役割など古代社会全体の姿を多角的に検討することが重要となる。



第53図 古代瓦出土遺跡分布図

附章 参考文献

(出土陶磁器・土器に関する文献)

- 愛知県陶磁資料館 1984 「近世城跡出土の陶磁」 特別展
出光美術館 2004 「古唐津」 展覧会カタログ
井上喜久男 1992 「尾張陶磁」 ニュー・サイエンス社
大川清・鈴木公雄・工楽普通編 1996 「日本土器事典」 雄山閣
大橋 康二 2004 「世界をリードした磁器窯 肥前窯」 新泉社 シリーズ「遺跡を学ぶ」 005
小野正敏ほか 2001 「図解・日本の中世遺跡」
加藤唐九郎編 1972 「原色陶器大辞典」 洋文社
唐木田又三 1993 「信州 松代焼」 信姫書籍出版センター
北九州市立考古博物館 1988 「北九州の中国陶磁—出土品にみる古代の日中交流」 特別展
九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」 九州近世陶磁学会10周年記念
九州近世陶磁学会 2001 「国内出土の肥前陶磁—東日本の流通をさぐる」 第11回 九州近世陶磁学会資料
古泉 弘 2002 「地下からあらわれた江戸」 教育出版 江戸東京ライブラリー19
沢田 由治 1974 「日本のやきもの13 常滑」 洋文社
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 「江戸時代の瀬戸窯」 企画展団録
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2003 「江戸時代の美濃窯」 企画展団録
上越市専門委員会考古部会 2004 「考古一中・近世資料一」
新宿区内藤町遺跡調査会他 1992 「内藤町遺跡」
新宿区南山伏町遺跡調査団 1997 「南山伏町遺跡」
杉原莊介・大塚初重編 1971-1974 「土師式土器集成 本編 1~4」 東京堂出版
土岐市美濃陶磁歴史館 2001 「三条界隈のやきもの屋」 企画展団録
土岐市美濃陶磁歴史館 2003 「織部の流通圏を探る 東日本」 企画展団録
土岐市美濃陶磁歴史館 2004 「織部の流通圏を探る 西日本」 企画展団録
土岐市美濃陶磁歴史館 2004 「土岐市収藏品団録II—収藏品にみる美濃窯の歴史」
長野市教育委員会 2005 「松代城下町跡—中木町・西木町・朝日町」 長野市の埋蔵文化財第109集
柄崎彰一・林屋晴三・長谷部泰爾ほか 2006 「増補 やきもの辞典」 平凡社
日本福祉大学知多半島融合研究所 1994 全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集
長谷部泰爾・今井敦 1995 「日本出土の中国陶磁」 平凡社版中国の陶磁12
矢部良明ほか 2002 「角川日本陶磁大辞典」 角川書店
山梨県教育委員会 2004 「甲府城下町遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第215集
横浜市歴史博物館 1999 「秀吉襲来—近世関東の幕開け」 特別展

(湖東式軒瓦に関する文献)

- 井上 満郎 2001 「近江と渡来人一穴太庵寺建立氏族をめぐってー」「西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史」 真陽社
上原 真人 1997 「瓦を読む」 歴史発掘II 講談社
大塚 章 1996 「美濃地方における湖東式軒瓦の展開～特に、各務原・加茂地区を中心として～」『岐阜県博物館研究報告』 第17号 岐阜県博物館
小笠原好彦 1989 「白鳳寺院と瓦窯一宮井庵寺、辻岡山瓦窯の発掘調査からー」「滋賀県埋蔵文化財センター紀要3」(第45回埋文センター研究発表要旨)
小笠原好彦 1989 「近江の古代寺院」 近江の古代寺院刊行会
小笠原好彦・大橋潔 1997 「渡来系氏族の古墳・寺院研究の現状」『季刊 考古学』 第60号 雄山閣
小笠原好彦 1997 「近江の渡来系氏族の古墳と軒瓦」『季刊 考古学』 第60号 雄山閣
小笠原好彦 2000 「近江の考古学」 サンライズ出版

- 小笠原好彦 2001 「湖東式軒丸瓦の成立年代と系譜」『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』真陽社
- 小笠原好彦 2005 「日本古代寺院造営氏族の研究」東京堂出版
- 堺山 勝 2002 「美濃と尾張の湖東系軒瓦」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』帝塚山大学考古学研究所
- 北村 主弘 1994 「近江の古代寺院研究の基礎資料Ⅳ」「滋賀文化財だより」193 （財）滋賀県文化財保護協会
- 北村 主弘 2007 「近江・犬上郡以北と越前の重弁蓮華紋軒丸瓦—湖東式を中心に—」「飛鳥白鳳の瓦づくりX—重弁蓮華文軒丸瓦の展開—」奈良文化財研究所
- 久保 智康 1994 「北陸南西部における軒瓦の受容と伝播—越前地域を中心に—」「古代」第97号 早稲田大学考古学会
- 重岡 卓 1997 「湖東系軒丸瓦」に関する基礎的考察」紀要第10号 （財）滋賀県文化財保護協会
- 仲川 靖 2007 「近江・愛知群以南の重弁蓮華文軒丸瓦—湖東式を中心に—」「飛鳥白鳳の瓦づくりX—重弁蓮華文軒丸瓦の展開—」奈良文化財研究所
- 西田 弘 1989 「近江の古代瓦の諸問題」「滋賀県埋蔵文化財センター紀要3」（第45回埋文センター研究発表要旨）
- 松浦 俊和 1995 「壬申の乱と造寺」「近江の歴史と文化」思文閣出版
- 宮崎 幹也 1989 「瓦の型式学的諸問題」「滋賀県埋蔵文化財センター紀要3」（第45回埋文センター研究発表要旨）

（善光寺に関する文献）

- 井原今朝雄 1988 「中世善光寺の一考察—長野県史誌園遺構調査報告5—」「信濃」40~3
- 井原今朝雄・福島正樹・牛山佳幸ほか2000 「長野市誌」（第2巻歴史編 原始・古代・中世）長野市誌編さん委員会
- 井原今朝雄 2002 「中世善光寺平の灾害と開発—開発勢力としての伊勢平氏と越後平氏」
- 上田市立信濃国分寺資料館 2005 「信濃の古代・中世の仏教文化と関係道路」
- 牛山 佳幸 1991 「信濃善光寺史関係文献目録」「寺院史研究」2
- 牛山 佳幸 1991 「善光寺創建と善光寺信仰の発展」「善光寺 心とかたち」第一法規出版
- 牛山 佳幸 1996 「信濃善光寺史関係文献目録補遺（その1）」「寺院史研究」5
- 牛山 佳幸 1996 「中世律宗の地域的展開—信濃國の場合—」「信濃」48~9
- 牛山 佳幸 1997 「「善光寺縁起」の成長」「古代・中世人の祈り—善光寺信仰と北信濃—」長野市立博物館
- 牛山 佳幸 1999 「中世武士社会と善光寺信仰」「鎌倉時代の社会と文化」東京堂出版
- 風間 栄一 2000 「科野・善光寺平における渡米系集団とその動向」「月刊考古学ジャーナル」459
- 川瀬 博美 1972 「善光寺平における条里制の歴史地理学的研究」「地理学報告」39愛知教育大学 地理学会
- 倉澤 正幸 2004 「上田地方における古代仏教関係資料の考察」「信濃」56~9
- 小林計一郎 2000 「善光寺史研究」「信濃毎日新聞社
- 小林 敏男 1999 「善光寺と若麻積氏」「信濃」51~8
- 鎌田 宜之 2003 「研究の窓 栗田氏と善光寺に関する一考察」「信濃」55~11
- 坂井 衡平 1969 「善光寺史」東京美術
- 榎本 正治 1999 「中世末から近世初頭の善光寺門前町」「国立歴史民俗博物館研究報告」78
- 清水 保 1950 「善光寺研究における二、三の問題」「信濃」2~12
- 塙田一夫ほか 1980 「長野市元善町誌 善光寺門前町百年の歩み」元善町誌編集委員会
- 長野市立博物館 1985 「善光寺信仰」
- 原田 和彦 1994 「千曲川流域における古代寺院—研究の前提として—」「長野市立博物館紀要」2
- 原田 和彦 1997 「古代善光寺をめぐって」「長野」191
- 原田 和彦 2001 「善光寺平の官衙研究をめぐる諸問題」「信濃」53~11
- 福島 正樹 2002 「古代における善光寺平の開発について—旧長野市街地の条里遺構を中心に」「国立歴史民俗博物館研究報告」96
- 古川貞雄・福島正樹・井原今朝男・青木歳幸・小平千文 1997 「長野県の歴史」山川出版社
- 湯本翠一・井原今朝男・小林計一郎ほか 1986 「長野県史」（通史編2中世1）長野県史刊行会
- 大和 岩雄 1990 「信濃古代史考」名著出版
- 米山 一政 1971 「信濃の古瓦」「一志茂樹博士喜寿記念論集」一志茂樹博士喜寿記念会
- 米山 一政 1978 「信濃出土の古瓦再論」「中部高地の考古学」長野県考古学会
- 米山 一政 1996 「信濃史の諸問題と善光寺・戸隠」「信濃毎日新聞社

報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん もとよしちょういせき・ぜんこうじもんぜんまちあと							
書名	長野遺跡群 元善町遺跡・善光寺門前町跡（2）							
副書名								
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第121集							
編著者名	宿野隆史・柴田洋孝・山野井智子・佐々木麻由子							
編集機関	長野市教育委員会 文化財課埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004							
発行年月日	2008（平成20）年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
元善町遺跡 (大本願明照殿地点)	長野県長野市大学 長野字元善町 500	20201	C-003	36° 39° 27°	138° 11° 13°	20070215 ～ 20070405	500m ²	社寺改築
元善町遺跡 (仁王門東地点)	長野県長野市大学 長野字元善町 468-1	20201	C-003	36° 39° 30°	138° 11° 16°	20070925 ～ 20071012	60m ²	住宅建設
善光寺 門前町跡（2）	長野県長野市大学 長野字元善町 82-3	20201		36° 39° 25°	138° 11° 15°	20070704 ～ 20070714	30m ²	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
元善町遺跡 (大本願明照殿地点)	集落 社寺	古墳時代 ～ 近世	古墳時代住居跡 中世溝跡 近世土坑など	軒丸瓦（卑弃六弁蓮草文）、 軒平瓦（重弧文）、 陶磁器、土器、 板碑、五輪塔など			湖東式軒丸瓦の出土	
元善町遺跡 (仁王門東地点)	社寺	古代 ～ 近世	盛土造成跡 礎石状遺構 石積など	軒丸瓦（巴文）、 軒平瓦（均整唐草文）、 陶磁器、土器など			中世善光寺の造成跡	
善光寺門前町跡（2）	集落	中世	溝跡、石積 土坑、小穴	陶器（古瀬戸・珠洲）、 土器（かわらけ）など			中世善光寺門前町	

長野市埋蔵文化財 発掘調査報告書一覧

1968年 第1集	『信濃原古墳群』	第70集	『八幡田沖道跡』
1976年 第2集	『浅川古墳羣』	第71集	『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡(2)・吉田町東遺跡』
1978年 第3集	『中村古墳羣』	第72集	『扇町遺跡群(8)・石川安里遺跡(9)』
第4集	『扇崎古墳群』	第73集	『松代城跡』
1979年 第5集	『扇崎古墳群(2)』	第74集	『松代城跡(2)』
1980年 第6集	『三輪山遺跡・付木水内堂・元神社遺跡』	1996年 第75集	『浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・二輪遺跡(6)・扇河原遺跡』
第7集	『田中冲道跡』	第76集	『浅川扇状地遺跡群 脇沢城跡・小島柳原遺跡群 中伝道跡(1)』
第8集	『扇ノ井遺跡群』	第77集	『浅川扇状地遺跡群 桜ノ木田遺跡(2)』
第9集	『四ツ屋道跡(1~3次)・惣門遺跡・扇崎古墳群(3)』	第78集	『扇塚塚(2)古墳・2号古墳』
1981年 第10集	『湯谷古墳群・長礼山谷古墳群・附木新町遺跡』	第79集	『扇尾尾南遺跡』
第11集	『扇古墳遺跡群・長礼道跡・大浦水道跡』	第80集	『小島・柳原遺跡群 水内堂・元神社遺跡(2)』
1982年 第12集	『浅川扇状地遺跡群・牛乳バババスA・E地点』	第81集	『新花川扇状地遺跡群 村山遺跡』
1983年 第13集	『浅川扇状地遺跡群・羅田田遺跡』	第82集	『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡(2)』
	川田山里的遺跡、石川山里的遺跡	第83集	『下見ヶ谷遺跡』
1984年 第14集	『石川山里的遺跡(2)・上胸川道跡』	第84集	『浅川扇状地遺跡群 吉田古壁敷道跡』
第15集	『扇清水道跡(2)』	第85集	『十九反遺跡』
1985年 第16集	『石川山里的遺跡(3)・付木胸川道跡』	第86集	『新花川扇状地遺跡群 寺村道跡』
1986年 第17集	『浅川扇状地遺跡群(2)・市道松富・小川田神社地点道跡』	第87集	『野路遺跡・西町水道跡』
第18集	『扇崎古墳群(2)・市道松富・小川田神社地点道跡』	第88集	『小島柳原遺跡群 水内堂・元神社遺跡(2)』
1987年 第19集	『土上田扇塚古墳・荒井遺跡確認緊急調査-』	第89集	『新花川扇状地遺跡群 尾張城跡』
第20集	『三輪山遺跡(2)』	第90集	『西前山古墳』
第21集	『芦田小学校遺跡』	第91集	『新花川扇状地遺跡群 西方道跡・中沢城跡』
第22集	『長野市立高校ランジ道跡』	第92集	『扇原遺跡(2)』
1988年 第22集	『横田扇塚古墳群・官本宮跡』	第93集	『葉河原遺跡(2)・田中冲道跡(2)』
第24集	『扇崎古墳群(2)・扇屋敷跡』	第94集	『浅川扇状地遺跡群 小板屋道跡』
第25集	『小島柳原道跡群・扇屋敷跡』	1999年 第95集	『扇内遺跡・高野原跡』
第26集	『東扇原遺跡』	2000年 第96集	『南宮遺跡(1) (第1分幕・遺構編)』
第27集	『小室扇原跡』	2001年 第96集	『南宮遺跡(2) (第2分幕・遺物編)』
第28集	『宮崎扇原跡』	第97集	『長野吉田分校グランド道跡(2)』
第29集	『浅川扇状地遺跡群 浅川扇道跡』	第98集	『田川氏道跡・宍倉道跡(2)』
第30集	『地附村古墳群』	第99集	『浅川扇状地遺跡群 鶴間根川道跡』
第31集	『町川道跡』	2002年 第96集	『南宮遺跡(3) (第3分幕・写真編)』
1989年 第32集	『中赤坂道跡』	第100集	『四ツ屋道跡(2)』
第33集	『鶴鳴道跡』	第101集	『扇ノ井道跡群(5)』
第34集	『石川山里的遺跡(4)』	2003年 第102集	『浅川扇状地遺跡群(2)・荒井遺跡・三合坂西古墳・石川安里遺跡(10)』
第35集	『扇ノ井道跡群(2)』	2004年 第103集	『扇ノ井道跡群(2)・南条遺跡・浅川扇状地遺跡群辰巳池遺跡・本郷道跡』
1990年 第36集	『星地区道跡』	第104集	『浅川扇状地遺跡群 天神木道跡・猪爪道跡・椎原扇道跡』
第37集	『扇ノ井道跡群(2)』	第105集	『浅川扇状地遺跡群 植田道跡(2)』
1991年 第38集	『扇山道跡・下木道跡・三輪道跡(3)』	2005年 第106集	『扇内遺跡群 南条遺跡』
第39集	『扇崎古墳群(4)・石川安里道跡(5)』	第107集	『新花川扇状地遺跡群 西方道跡(2)』
第40集	『扇原道跡』	第108集	『浅川扇状地遺跡群 植原宮西遺跡・椎原扇道跡(2)・吉原古戸遺跡(2)・遠江道跡』
第41集	『小島柳原道跡群 中伝道跡・浅川扇状地遺跡群 植田道跡』	第109集	『松代城下町跡(2)・遠江道跡』
1992年 第42集	『田中冲道跡(2)』	第110集	『松代城下町跡(2)』
第43集	『南宮道跡』	第111集	『石川山里的遺跡(11)・浅川扇状地遺跡群 本村東沖道跡(3)・上三郎道跡』
第44集	『扇崎古墳群(7)』	2006年 第112集	『浅川扇状地遺跡群 吉田町東遺跡(2)』
第45集	『石川山里的遺跡(6)』	第113集	『小島・柳原遺跡群 水内堂・元神社遺跡(4)』
第46集	『扇ノ井道跡群(4)』	第114集	『松代城下町跡(3)』
第47集	『浅川扇状地遺跡群 二ツ宮遺跡・本郷道跡(2)』	第115集	『前光寺門前町跡』
第48集	『扇原道跡・柳原道跡・扇道跡(2)分岐』	2007年 第116集	『平林井沖道跡』
1993年 第49集	『小島柳原道跡群 中伝道跡』	第117集	『扇ノ井道跡群(6)』
第50集	『浅川扇状地遺跡群 二輪道跡(4)』	第118集	『吉田古戸遺跡(3)』
第51集	『松原道跡(2)』	第119集	『吉田古戸遺跡(4)・田牧居縁道跡(2)』
第52集	『田牧居縁道跡』	2008年 第120集	『吉田古戸遺跡(5)』
第53集	『岩崎道跡』		
第54集	『古町道跡・流入塚』		
第55集	『浅川扇状地遺跡群 脇沢新町道跡(2)』		
第56集	『上見日道跡』		
第57集	『石川山里的遺跡(7)』		
第58集	『松原道跡(2)』		
第59集	『史跡松代藩主直田家墓所』		
1994年 第60集	『猪手道跡・宮ノ下道跡』		
第61集	『扇田道跡(2)』		
第62集	『浅川扇状地遺跡群 三輪道跡(5)・小島柳原道跡』		
第63集	『松原道跡(2)』		
第64集	『扇原道跡群(2)』		
第65集	『小島柳原道跡群 宮西道跡』		
第66集	『浅川扇状地遺跡群 半札バババスB地点道跡(2)』		
第67集	『浅川扇状地遺跡群 本村東沖道跡(2)』		
第68集	『扇田道跡(3)』		
第69集	『浅川扇状地遺跡群 御開本草原道跡』		

長野市の埋蔵文化財第121集

長野遺跡群
元善町遺跡
善光寺門前町跡(2)

平成20年3月24日 印刷
平成20年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 長野市埋蔵文化財センター
印刷 ほおづき印刷株式会社